愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第204集

寄　島　遺　跡

2017

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛　知　県　埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第204集

寄島遺跡
よせじまいせき

2017

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

広大な西三河平野を望む安城市の碧海台地東縁には、鹿乗川が流れています。その流域では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡が数多く知られており、その一部は、鹿乗川流域遺跡群と呼ばれる一大遺跡群を形成しています。

寄島遺跡は、この鹿乗川流域遺跡群の南に位置する集落遺跡です。このたび鹿乗川の改修工事に伴って当財団が発掘調査を行い、多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出しました。また、集落の端を区切る「いにしえの鹿乗川」とでも呼べる旧河道の存在を確認し、そこからは多数の木製品が出土しました。さらには集落の南部には方墳や方形周溝墓からなる墓域の存在も明らかになり、当時の集落景観がより具体的にすることができました。

本書では、これら発掘調査の成果について、遺構と遺物を中心にまとめました。本書が地域の歴史にとどまらず、広く弥生時代や古墳時代の文化を学ぶための基礎資料として長く活用されることを願っております。

さいごになりましたが、発掘調査から報告書刊行まで、多大なご理解とご協力をいただきました安城市小川町の皆さんをはじめ、関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げまして、序とさせていただきたいと思います。

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　中野幹也

例　言

(1)　本書は、愛知県安城市小川町に所在する寄鳥遺跡（県遺跡番号 760282、県埋文遺跡記号 3SYJ）の発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は、愛知県建設部河川課による中小河川改良事業に伴う事前調査で、愛知県教育委員会を通じた委託事業として財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（平成 19 年度）、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（平成 23 ～ 25 年度）が実施した。

(3)　発掘調査期間は、平成 19 年度は平成 19 年 10 月 22 日～平成 20 年 3 月 21 日、平成 23 年度は平成 23 年 5 月 9 日～ 9 月 26 日、平成 24 年度は平成 24 年 9 月 10 日～平成 25 年 3 月 1 日、平成 25 年度は平成 25 年 11 月 1 日～平成 26 年 3 月 19 日である。

(4)　発掘調査面積は、平成 19 年度は 3,465㎡、平成 23 年度は 2,135㎡、平成 24 年度は 3,000㎡、平成 25 年度は 2,110㎡で、総面積は 10,710㎡である。

(5)　発掘調査は、平成 19 年度は、宮腰健司（主査、現:センター長兼調査課長）、松田訓（主任、現:調査研究専門員）、岡久雅浩（主任、現：愛知県立岡崎北高等学校教諭）、平成 23 年度は、松田訓（調査研究専門員）、永井邦仁（調査研究主任）、平成 24 年度は酒井俊彦（主任専門員）、平成 25 年度は酒井俊彦（同）が担当した。

(6)　発掘調査にあたり、平成 19 年度は加藤建設株式会社（調査補助員：田村大器、測量士：豊島成信）、
平成 23 年度は株式会社ユニオン（現場代理人：大野哲也、調査補助員：石川郁、測量士：高橋政伸）、
平成 24 年度は国際文化財株式会社（現場代理人：星野賢一、調査補助員：西野順二、測量士：内田恭司）、
平成 25 年度は日本海航測株式会社（現場代理人：徳田光政、調査補助員：村上裕也、測量士：橋本崇史）に調査支援を受けた。

(7)　発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県建設部河川課・愛知県埋蔵文化財調査センター・安城市小川町内会・安城市教育委員会・安城市埋蔵文化財センター・安城市歴史博物館・浅田博造・石原奈緒子・伊藤秋男・伊藤基之・岡安雅彦・神谷友和・神谷真紀子・川崎みどり・斉藤弘之・西島庸介・矢作川沿岸水質保全対策協議会（敬称略、五十音順）

(8)　本書作成のための整理作業は永井が担当し、遺構図面整理・地籍図編集作業で国際文化財株式会社、遺物実測・デジタルトレースでシン技術コンサル株式会社、株式会社フジヤマ、遺物写真撮影で有限会社写真工房・遊、科学分析で株式会社パレオ・ラボの協力を得た。なお、石製品の石材鑑定は堀木真美子（調査研究専門員）による。

(9)　整理作業期間は平成 26 ～ 27 年度である。

(10)　本書の編集および主要項目の執筆は永井邦仁がおこなったが、宮腰健司、樋上昇（調査研究専門員）、鬼頭剛（同）、川添和暁（同）の執筆もある。また藤根久（パレオ・ラボ）、小林克也（同）ほかにより提出された分析結果報告も編集の上掲載した。執筆者名は目次および文末に記載した。

(11)　本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第Ⅶ系（以下、国土座標Ⅶ系と呼ぶ）に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

(12)　本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

(13)　その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。

(14)　遺構一覧および遺物一覧のデータは添付 CD-ROM に収録されている。

(15)　写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

(16)　〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161 / E-mail: doki@maibun.com）
出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

目　次

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と調査の工程　（永井）　1
第２節　遺跡の地理的・歴史的環境　（永井）　2

第２章　遺構

第１節　概要と基本土層　（永井）　5
第２節　13B・A 区の遺構　（永井）　8
第３節　12B 区の遺構　（永井）　20
第４節　12A 区の遺構　（永井）　52
第５節　07A 区の遺構　（永井）　86
第６節　07B 区の遺構　（永井）　106
第７節　07C 区の遺構　（永井）　136
第８節　11A 区の遺構　（永井）　145
第９節　11B 区の遺構　（永井）　155
第 10 節　11C 区の遺構　（永井）　157

第３章　遺物

第１節　土器・陶磁器　（永井）　177
第２節　石器・石製品など　（永井）　232
第３節　木製品　（樋上）　235

第４章　自然科学分析

第１節　岡崎平野中央部、寄島遺跡における堆積環境　（鬼頭）　271
第２節　寄島遺跡出土木材の樹種同定　（小林）　282
第３節　寄島遺跡07B区出土炭化材の放射性炭素年代測定（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）　292
第４節　寄島遺跡出土の弥生～古墳時代土器の胎土材料（藤根・米田）　294
第５節　寄島遺跡 12A・B 区出土炭化種実　（スダルシャン・佐々木）　301
第６節　土器の種実圧痕および貝類圧痕について　（川添ほか）　304
第７節　土器付着物の放射性炭素年代測定　（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）　310

第５章　考察と総括

第１節　旭乗川流域遺跡群の弥生時代後期から古墳時代初頭の「平底甕」について（宮腰）　312
第２節　総括　（永井）　320

遺構基本図
写真図版

挿図表目次

図 1　遺跡位置図　1
図 2　潟海台地東縁の地形概要図　2
図 3　寄島遺跡と周辺の旧地割　3
図 4　鹿乗川流域の遺跡分布図　4
図 5　寄島遺跡の調査区　5
図 6　寄島遺跡の基盤層位の高低差　6
図 7　12A・12B・07B 区北壁と 11C 区南壁の断面図　7
図 8　13B 区 001SD 遺構図　8
図 9　13B 区 001SD・004SD 断面図　9
図 10　13B 区 002・003SD 平面図　10
図 11　13B 区 002・003SD 断面図　11
図 12　13B 区 001SD の完掘状況　11
図 13　13B 区 048SE 遺構図　12
図 14　13B 区小溝群遺構図　13
図 15　13B 区 SD・SK・SP 遺構図　14
図 16　13B 区 SD・SP 遺構図　15
図 17　13B 区旧河道断面図 (南ベルト)　16
図 18　13B 区旧河道断面図 (中央ベルト)　17
図 19　13A 区 001SD・012SK 遺構図　18
図 20　13A 区 010SD 遺構図　19
図 21　12B 区建物遺構分布図　20
図 22　12B 区 001SK・002SD・015SK 遺構図　21
図 23　12B 区 024SI 遺構図　22
図 24　12B 区 040SL・041・043・044・045SP(024SI 関連) 断面図　23
図 25　12B 区 025SI 遺構図　24
図 26　12B 区 025SI・047SP・048SP・049SP・050SP 断面図　25
図 27　12B 区 026SI・027SI 遺構図　26
図 28　12B 区 028SI ～ 032SI 遺構図　27
図 29　12B 区 028SI ～ 032SI 断面図　28
図 30　12B 区 028SI ～ 032SI 断面図　29
図 31　12B 区 029SI・030SI 柱穴断面図　30
図 32　12B 区 031SI・032SI 柱穴断面図　31
図 33　12B 区 034SI・035SI 遺構図　32
図 34　12B 区 034SI・035SI・146SP・147SP・148SP・149SP・218SP 断面図　33
図 35　12B 区 220SP・221SP・231SP 断面図　34
図 36　12B 区 036SI 遺構図　35
図 37　12B 区 037SI 遺構図　36
図 38　12B 区 090SD 遺構図　37
図 39　12B 区 110SI・111SI 遺構図　38
図 40　12B 区 110SI・111SI 断面図　39
図 41　12B 区 110SI・111SI 主柱穴断面図　40
図 42　12B 区 165SX・166SI 遺構図　41
図 43　12B 区 178SI・180SI・258SL 遺構図　42
図 44　12B 区 200SI 遺構図　43
図 45　12B 区 291SB 遺構図　44
図 46　12B 区 291SB 柱穴断面図　45
図 47　12B 区 033SD 平面図　46
図 48　12B 区全景 (北から)　47
図 49　12B 区 033SD・039SD・062SD・091SD・092SD 断面図　47
図 50　12B 区 085SD・133SD・136SD・156SK・141SD 遺構図　48
図 51　12B 区 153SD・163SD・164SD・234SD 遺構図　49
図 52　12B 区 196SD・211SD 遺構図　50
図 53　12B 区 SK・SP 遺構図　51
図 54　12A 区建物遺構分布図　52
図 55　12A 区第 1 遺構面全体図　53
図 56　12A 区 001SD・003SD・006SD・022SD・024SX 断面図　54
図 57　12A 区 016SB 遺構図　55
図 58　12A 区 020SI 遺構図　56
図 59　12A 区 025SP・028SK・030SP・033SP・055SP・056SP 遺構図　57
図 60　12A 区 060SI 遺構図　58
図 61　12A 区 061SI ～ 065SI 平面図　59
図 62　12A 区 061SI ～ 063SI 断面図　60
図 63　12A 区 064SI・065SI 主柱穴断面図　61
図 64　12A 区 062SI ～ 064SI 主柱穴断面図　62
図 65　12A 区 066SI 遺構図　63
図 66　12A 区 067SX・317SK 遺構図　64
図 67　12A 区 069SI 遺構図　65
図 68　12A 区 069SI 主柱穴等断面図　66
図 69　12A 区 070SX・258SU 遺構図　67
図 70　12A 区 071SX 遺構図　68
図 71　12A 区 347SB 遺構図　69
図 72　12A 区 347SB 主柱穴断面図　70
図 73　12A 区 348SB 遺構図　71
図 74　12A 区 349SB 遺構図　72
図 75　12A 区 352SB 遺構図　73
図 76　12A 区小溝群平面図　74
図 77　12A 区小溝群平面図　75
図 78　12A 区小溝群遺構図　76
図 79　12A 区ピット群遺構図　77
図 80　12A 区土坑・ピット群遺構図　78
図 81　12A 区土坑・ピット遺構図　79
図 82　12A 区ピット遺構図　80
図 83　12A 区ピット遺構図　81
図 84　12A 区ピット遺構図　82
図 85　12A 区ピット遺構図　83
図 86　12A 区ピット遺構図　84
図 87　12A 区土坑・ピット遺構図　85
図 88　07A 区建物遺構分布図　86
図 89　07A 区 1006SD 遺構図　86
図 90　07A 区 1056SB 遺構図　87
図 91　07A 区 1066SB 遺構図　88
図 92　07A 区 1113SB 遺構図　89
図 93　07A 区 1330SB 遺構図　90
図 94　07A 区 1331SB 遺構図　91
図 95　07A 区 1019SD・1110SD 遺構図　92
図 96　07A 区 1328SD・1329SD・1332SD 遺構図　93
図 97　07A 区 1219SK・1270SK・1324SK 遺構図　94
図 98　07A 区 1040SX・1070SX 遺構図　95
図 99　07A 区 1098SX・1099SX・1150SX・1170SX 遺構図　96
図 100　07A 区 1105SX 遺構図　97
図 101　07A 区 1146SX・1147SX 遺構図　98
図 102　07A 区 1206SX 遺構図　99
図 103　07A 区 1207SX・1217SX 遺構図　100
図 104　07A 区 1253SX・1254SX 遺構図　101
図 105　07A 区 1376SX・1394SX 遺構図　102

図 106　07A 区 1473SB 遺構図　103
図 107　07A 区 1545SB 遺構図　104
図 108　07A 区 1526SX・1562SB 遺構図　105
図 109　07B 区建物遺構分布図　106
図 110　07B 区 2006SD 遺構図　106
図 111　07B 区 2034SB 遺構図　107
図 112　07B 区 2116SB 遺構図　108
図 113　07B 区 2133SB 遺構図　109
図 114　07B 区 2157SB 遺構図　110
図 115　07B 区 2164SB 遺構図　111
図 116　07B 区小溝群遺構図　112
図 117　07B 区小溝群遺構図　113
図 118　07B 区小溝群遺構図　114
図 119　07B 区土抗・ピット遺構図　115
図 120　07B 区小溝群遺構図　116
図 121　07B 区小溝群遺構図　117
図 122　07B 区小溝群遺構図　118
図 123　07B 区土抗遺構図　119
図 124　07B 区 2020SX・2041SX 遺構図　120
図 125　07B 区 2067SX 遺構図　121
図 126　07B 区 2100SX 遺構図　122
図 127　07B 区 2103SX 遺構図　123
図 128　07B 区 2108SX 遺構図　124
図 129　07B 区 2132SX 遺構図　125
図 130　07B 区 2135SX 遺構図　126
図 131　07B 区 2165SX 遺構図　127
図 132　07B 区 2187SX・2212SB 遺構図　128
図 133　07B 区 2211SB・2220SB 遺構図　129
図 134　07B 区 2213SB 遺構図　130
図 135　07B 区 2214SB 遺構図　131
図 136　07B 区 2215SB 遺構図　132
図 137　07B 区 2216SX 遺構図　133
図 138　07B 区 2217SB 遺構図　134
図 139　07B 区 2246SD・2306SK 遺構図　135
図 140　07C 区建物遺構分布図　136
図 141　07C 区 3001SD 平面図　137
図 142　07C 区 3001SD 断面図　138
図 143　07C 区 3003SD 遺構図　139
図 144　07C 区 3004SD 遺構図　140
図 145　07C 区 3063SD・3070SD 遺構図　141
図 146　07C 区 3018SX・3019SX・3020SX 遺構図　142
図 147　07C 区 3073SX 遺構図　143
図 148　07C 区 3088SB・3103SK 遺構図　144
図 149　11A 区建物遺構分布図　145
図 150　11A 区 024SK・008NR 遺構図　146
図 151　11A 区土抗・ピット平面図　147
図 152　11A 区土抗・ピット断面図　148
図 153　11A 区 018NR と小溝群平面図　149
図 154　11A 区 018NR と小溝群断面図　150
図 155　11A 区 021SI 遺構図　151
図 156　11A 区 029SZ 遺構図　152
図 157　11A 区 029SZ 断面図　153
図 158　11A 区 071SI・074SZ 遺構図　154
図 159　11B 区 003NR 平面図　155
図 160　11B 区 003NR 断面図　156
図 161　11C 区建物遺構分布図　157
図 162　11C 区 011SP・018SK 遺構図　158
図 163　11C 区 037SI 遺構図　159
図 164　11C 区 038SI・041SI・043SI・049SI 遺構図　160
図 165　11C 区 042SI 遺構図　161
図 166　11C 区 044SI・045SI 遺構図　162
図 167　11C 区トレンチ (T13) 断面図　163
図 168　11C 区土抗・ピット遺構図　164
図 169　11C 区 063SI 遺構図　165
図 170　11C 区 125SI 遺構図　166
図 171　11C 区 064SI・132SI 遺構図　167
図 172　11C 区 067SI 遺構図　168
図 173　11C 区 069SI・77SI 遺構図　169
図 174　11C 区 074SI・075SP 遺構図　170
図 175　11C 区土抗遺構図　171
図 176　11C 区トレンチ (T32) 断面図　172
図 177　11C 区トレンチ (T24・T30) 断面図　173
図 178　11C 区トレンチ (T28・T29・T33) 断面図　174
図 179　11C 区トレンチ (T31) 断面図　175
図 180　11C 区 127SI 遺構図　176
図 181　12B 区出土土器実測図　182
図 182　12B 区出土土器実測図　183
図 183　12B 区出土土器実測図　184
図 184　12B 区出土土器実測図　185
図 185　12A 区出土土器実測図　186
図 186　12A 区出土土器実測図　187
図 187　12A 区出土土器実測図　188
図 188　07A 区出土土器実測図　189
図 189　07A 区出土土器実測図　190
図 190　07A・B 区出土土器実測図　191
図 191　07B 区出土土器実測図　192
図 192　07B 区出土土器実測図　193
図 193　07B 区出土土器実測図　194
図 194　07B 区出土土器実測図　195
図 195　07C 区出土土器実測図　196
図 196　11A 区出土土器実測図　197
図 197　13B 区出土土器実測図　198
図 198　13B 区出土土器実測図　199
図 199　13B 区出土土器実測図　200
図 200　13B 区出土土器実測図　201
図 201　13B 区出土土器実測図　202
図 202　13B 区出土土器実測図　203
図 203　13B 区出土土器実測図　204
図 204　13B 区出土土器実測図　205
図 205　13B 区出土土器実測図　206
図 206　13B 区出土土器実測図　207
図 207　13B 区出土土器実測図　208
図 208　13B・11B 区出土土器実測図　209
図 209　11B 区出土土器実測図　210
図 210　11B 区出土土器実測図　211
図 211　11B 区出土土器実測図　212
図 212　11B 区出土土器実測図　213
図 213　11B 区出土土器実測図　214

図214　11B区出土土器実測図
図215　11B区出土土器実測図
図216　11B区出土土器実測図
図217　11B区出土土器実測図
図218　11B区出土土器実測図
図219　11B区出土土器実測図
図220　11B区出土土器実測図
図221　11B区出土土器実測図
図222　11B区出土土器実測図
図223　11B区出土土器実測図
図224　11B区出土土器実測図
図225　11B・11C区出土土器実測図
図226　11C区出土土器実測図
図227　11C区出土土器実測図
図228　11C区出土土器実測図
図229　11C区出土土器実測図
図230　11C区出土土器実測図
図231　石製品実測図
図232　石製品実測図
図233　木製品実測図
図234　木製品実測図
図235　木製品実測図
図236　木製品実測図
図237　木製品実測図
図238　木製品実測図
図239　木製品実測図
図240　木製品実測図
図241　木製品実測図
図242　木製品実測図
図243　木製品実測図
図244　木製品実測図
図245　木製品実測図
図246　木製品実測図
図247　木製品実測図
図248　木製品実測図
図249　木製品実測図
図250　木製品実測図
図251　木製品実測図
図252　木製品実測図
図253　木製品実測図
図254　木製品実測図
図255　木製品実測図
図256　木製品実測図
図257　木製品実測図
図258　木製品実測図
図259　木製品実測図
図260　木製品実測図
図261　木製品実測図
図262　木製品実測図
図263　木製品実測図
図264　木製品実測図
図265　木製品実測図
図266　木製品実測図
図267　木製品実測図
図268　寄島遺跡における地層解析および試錐調査地点　271
図269　寄島遺跡における試錐調査地点の層序　272
図270　13B区北壁における東西地層断面　274
図271　13B区東壁における南北地層断面　275
図272　13B区西壁における南北地層断面　279
図273　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(1)　287
図274　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(2)　288
図275　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(3)　289
図276　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(4)　290
図277　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(5)　291
図278　寄島遺跡とその周辺の地質図　300
図279　寄島遺跡から出土した炭化種実　303
図280　422の土器胎土内で見つかった貝殻圧痕の想定状態　304
図281　寄島遺跡の土器圧痕写真　305
図282　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真(1)　308
図283　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真(2)　309
図284　伊勢湾岸域の平底甕　(1)　314
図285　伊勢湾岸域の平底甕　(2)　315
図286　整作型甕　317
図287　姫下遺跡における姫下型土器群と在来系土器群　318
図288　寄島遺跡第1遺構面全体図　321
図289　寄島遺跡第2遺構面全体図　321
図290　寄島遺跡の弥生～古墳時代集落　322
表1　竪穴建物跡等出土土器の重量　178
表2　石器・石製品等一覧　232
表3　試錐調査試料における火山灰の粒子組成分析結果　276
表4　試錐調査試料における放射性炭素年代測定結果　277
表5　13B区北壁の放射性炭素年代測定結果　278
表6　13B区東壁の放射性炭素年代測定結果　278
表7　13B区西壁の放射性炭素年代測定結果　278
表8　寄島遺跡出土木材の樹種同定結果　282
表9　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果(1)　286
表10　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果(2)　286
表11　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果(3)　286
表12　測定試料及び処理　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果　293
表13　胎土分析を行った試料とその詳細　294
表14　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴　296
表15　土器胎土中の粘土および砂粒の一覧表　297
表16　岩石片の起源と組み合わせ　298
表17　遺跡・器種毎の粘土の種類・砂粒組成　299
表18　寄島遺跡から出土した炭化種実(1)　(括弧内は破片数)　302
表19　寄島遺跡から出土した炭化種実(2)　(括弧内は破片数)　302
表20　寄島遺跡の土器圧痕資料一覧（登録番号太字のものが、レプリカ法による確認資料）　306
表21　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの同定結果（法量の括弧は破片数を示す、単位mm）　307
表22　測定試料及び処理　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果　313

第 1 章　調査の概要

第 1 節　調査に至る経緯と調査の工程

(1) 遺跡の位置と調査に至る経緯

遺跡の位置　寄島遺跡は、愛知県安城市小川町地内に位置する。安城市は愛知県のほぼ中央部にあり、旧国では三河国碧海郡に相当し、西三河地域の一部である。その地形は、市域の東端が矢作川で、東半部が沖積平野、西半部が碧海台地とよばれる中位段丘面で構成されている。市街地は碧海台地の東縁を中心に展開し、東海道新幹線や国道 1 号などの主要交通路に沿って市街地が広がっている。台地と沖積低地の境界はほぼ南北方向に直線状に延びる段丘崖となっており、その崖線下を鹿乗川が流れている。寄島遺跡（県遺跡番号 760282）はこの鹿乗川流域の沖積低地に立地する。

調査に至る経緯　鹿乗川は後述するように、河道の幅が 10 ～ 15m 規模の中小規模河川である。川は本流部分の東接して昭和 40 年代に構築されたほぼ同規模の排水路があり、周辺の耕作地からの排水が流れ込む構造となっている。一方で本流は上流からの多量の流水によって、古くから大雨に伴う洪水が頻繁に発生してきた。そのため本流部分の拡幅が計画され、愛知県建設部によって、鹿乗川改修工事として進められてきた。

鹿乗川改修工事は、それまでの排水路を本流部分に組み込み、新たな排水路と市道を東側に施工するというものである。したがって、現状の排水路東側の市道と耕作地の一部がその対象地となった。対象地の幅は 20 ～ 30m であり、南北に帯状となる用地で、平成 10 年度から始められた当センター（当時は（財）愛知県埋蔵文化財センター）による範囲確認調査によってその大半が遺跡の範囲に該当することが明らかになっている。寄島遺跡は北の姫下遺跡、南の下懸遺跡に接し、現在の地潮を遺跡の境界としている。事業はこの地潮単位で進められ、それに対応するかたちで発掘調査も進められている。

図 1　遺跡位置図

(2) 発掘調査と整理作業の工程

発掘調査　寄島遺跡の発掘調査は平成 19 年度に開始された。その後数年間の空白をおいて平成 23 年度から連続して発掘調査が行われた。調査は平成 28 年度も継続しているが、本報告では平成 25 年度の調査分までを収録している。調査区の配置は第 2 章冒頭を参照。

発掘調査は、民間業者による支援を受けながら、重機を使った表土掘削と埋め戻し、調査員と発掘作業員による遺構検出および掘削から写真撮影を行い、測量士によって遺構の測量を行った。遺構測量図・遺構計測値・遺構写真などの調査記録は全て電子化されたものが情報センターに格納され、報告書作成の基礎データとなっている。出土遺物は、現場事務所で一次整理（洗浄など）が実施され、多量に出土した木製品は水漬け状態でセンターに運び込まれた。

室内整理　平成 25 年度までの調査記録と出土遺物を、平成 26・27 年度にセンター内において整理作業を行った。遺物の大半を占める土器の接合と同時に実測図などの資料化が必要なものを抽出し、接合・復元が完了したものから遺物実測図を作成した。実測作業とトレースは、永井邦仁（調査研究主任）の指導と校正のもと外部委託により実施された。また平行して遺構図版の作成と遺物写真の撮影を行い、DTP による編集を経て報告書の刊行に至った。

第 2 節　遺跡の地理的・歴史的環境

(1)　遺跡の地理的環境

碧海台地　第 1 節でも述べたように、寄島遺跡は碧海台地と沖積低地との境界に位置している。碧海台地は矢作川右岸の中位段丘に位置付けられているが、安城市域ではこれ以外段丘面が存在しないことから、段丘というより碧海台地という呼称の方が一般的である。その標高は約 12m で南北方向にもほとんど差がない。

ただし碧海台地を詳細にみると、縁辺部を中心に小河川によって開析された谷地形が無数に入り込んでおり、さらにその一部は台地の奥深くまで複雑に延びている。例えば堀内貝塚は鹿乗川流域の沖積低地に直接面していないが、縁辺から入り込んだ谷地形に面している。このように台地奥深くに立地する遺跡の場合、開析谷に面していることが多く、遺跡の立地と地形の関係の深さが示されている。

鹿乗川　鹿乗川は、碧海台地の東縁を南北に流れる中規模河川である。その源流は岡崎市矢作町にあり、古代寺院である北野廃寺跡西側の開析谷あたりに相当する。

図 2　碧海台地東縁の地形概要図（永井邦仁 2011「碧海台地東縁の古代集落」『研究紀要』第 11 号 愛知県埋文センターを改変）

したがって現在はそのすぐ東側を流れる矢作川とは堤防によって隔てられているが、これは矢作川が河道がコントロール・固定されるようになった中・近世以降の状況である。したがって、本報告における寄島遺跡の弥生〜古墳時代の集落と同じ頃には、矢作川が複数の河道に分かれていたと推測され、鹿乗川もそのうちの 1 つであったと可能性がある。ともあれ台地東縁に河道の中心があることは変わらない。また鹿乗川の河道は、現状ではほぼ直線になっているが、これは比較的最近のことで、近代に続けられた改修工事によって蛇行していたものが矯正された結果である。この改修工事前の河道は、地籍図(公図) を基に昭和 10 年代に作成された『桜井村土地宝典』(以下『土地宝典』) にみえる現河道脇の一部土地区画に残存していることから判明する。

以上のような経緯から、近世以前の鹿乗川については、不明な点が多い。これに関して、寄島遺跡のみならず、後述するように姫下遺跡から惣作遺跡に至る各調査地点では概ね弥生時代後期まで機能していた河道の埋没が進行し、その上層で弥生時代末期〜古墳時代前期の遺物が多量が出土することが確認されている。またこれらの旧河道はいずれも、ほぼ南北方向に配置されている調査区に対して、大きく斜めに振れている点が共通している。このことから、発掘調査で検出されたこれらの旧河道について、ほぼ 1 条のものである可能性が高まっている。本報告においては、鬼頭の報告〔第 4 章〕に基づき、これを鹿乗川の旧河道として認識している。しかし、それならば古墳時代前期までにほぼ埋没した旧河道に替わる河道が存在するはずである。最も下流に位置する惣作遺跡の旧河道では奈良時代に至っても砂の堆積が続いており〔鈴木 2011〕、水流があったと考えられることから、この地点の上流で古代〜中世に機能していた河道が合流していたものと推測される。おそらく複数ある河道のうちのいずれかがの本流として機能することで、それ以外ののものが埋没することが交互に発生していたものと考えられる。可能性としてはより東方に古代〜中世の河道があったものと推測される。

沖積低地の景観　鹿乗川流域における発掘調査の進展により先述のような鹿乗川の旧河道については少しずつ明らかになってきたが、近世から近代にかけて進んだ耕

作地の整備によって、遺跡周辺の沖積低地はきわめて高低差に乏しい景観となっている。しかし古い地割図【図3】にみるように、その複雑な地割から、河川に沿った沖積低地では、大小の自然堤防や後背湿地などの微地形が複雑に絡み合っていたことが想像される。残念ながらこの地域の詳細な標高は昭和 30 年代以降の都市計画図にしか残されていないが、発掘調査では河道部分や後背湿地の凹みは遺構として検出され、微高地は削平によって遺構が希薄になっていることから判明する。

図 3　寄島遺跡と周辺の旧地割

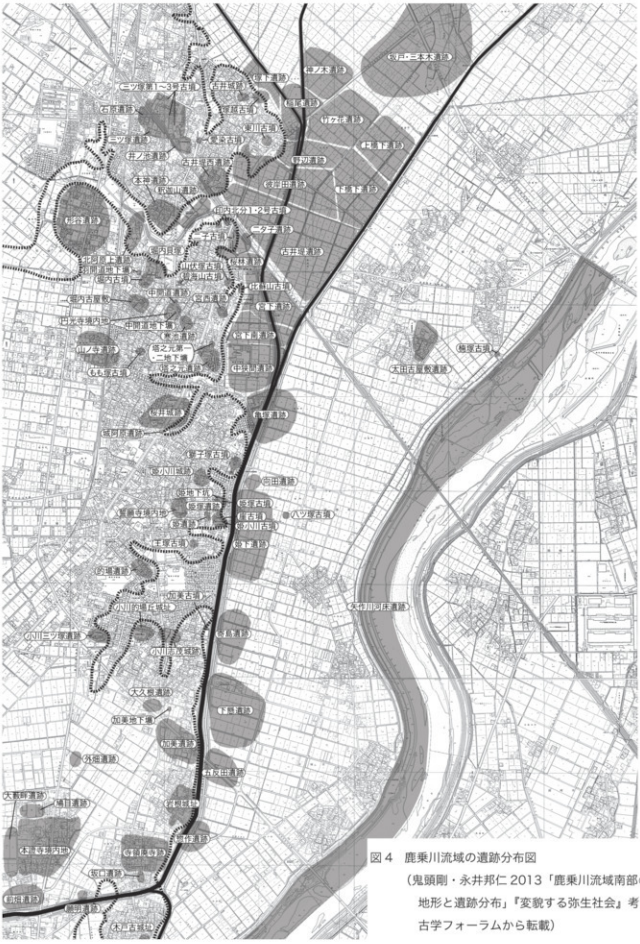
(2)　遺跡の歴史的環境

鹿乗川流域遺跡群　寄島遺跡を始めとして、鹿乗川流域には南北にいくつもの遺跡が連なるようにして立地している。特に安城市桜井町の東鹿乗川と西鹿乗川の合流点付近は遺跡が最も集中しており、東西約約 0.6km、南北約 1.3km の範囲にわたる遺跡群を形成している。安城市教育員会ではこれを鹿乗川流域遺跡群と呼んでいる。一方、寄島遺跡は鹿乗川流域遺跡群の範囲ではないが、鹿乗川に沿った沖積低地に立地している点や、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が最も多く分布している点などからして、きわめて深い関わりがあるといえる。近年では姫下遺跡以南に展開する当該期の遺跡についても遺跡群に含めて考察される機会が増えてきた〔考古学フォーラム編集部 2013『変貌する弥生社会 安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム〕。

姫下遺跡　次に、寄島遺跡に隣接する諸遺跡について紹介する。まず、寄島遺跡北側には姫下遺跡が所在する。当該遺跡は平成 17・18 年度に当センターによる発掘調査が行われ、鹿乗川の旧河道からは多数の木製品が出土し、その川岸では古墳時代前期の土師器が多量に出土し、人面文土器 2 点も含まれている。またその両岸の自然堤防上では 9 世紀後半～ 10 世紀前半の竪穴建物跡が検出されている〔愛知県埋蔵文化財センター 2012『姫下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集〕。

下懸遺跡　一方、寄島遺跡の南側は下懸橋から南に下懸遺跡が所在する。当該遺跡は、寄島遺跡南端で台地側へ近づいた鹿乗川の旧河道が南東方向へ延びるところが検出されている。土器は弥生時代後期～古墳時代初頭を中心としていることから、寄島遺跡や姫下遺跡に先行する時期であると考えられる。また旧河道からは古代の木簡が 2 点出土しており、埋没した旧河道を再掘削して大溝としていたことなどが確認されている。

この他、寄島遺跡西側の段丘崖には、加美古墳という時期不詳の古墳の存在が知られている。現在小堂のある地点と推定されているが、顕著な遺構や遺物は確認されていらず、その所在についても明らかではない。なお当該地点は弓なりに段丘崖が後退しており、地籍図からも河道とみられる地割をうかがうことができる。ここには船着場があったともされ、近世段階の鹿乗川の河道は、台地の際を流れていたと考えられる。


ニツ屋第1～3中古墳
石井遺跡
ニツ屋遺跡
荷ノ元遺跡
本宮遺跡
中井矛古墳
ニツ屋古墳
古井城跡
中井矛第1～3古墳
中井矛遺跡
中井矛第4～6古墳
中井矛第7～9古墳
中井矛第10～12古墳
中井矛第13～15古墳
中井矛第16～18古墳
中井矛第19～21古墳
中井矛第22～24古墳
中井矛第25～27古墳
中井矛第28～30古墳
中井矛第31～33古墳
中井矛第34～36古墳
中井矛第37～39古墳
中井矛第40～42古墳
中井矛第43～45古墳
中井矛第46～48古墳
中井矛第49～51古墳
中井矛第52～54古墳
中井矛第55～57古墳
中井矛第58～60古墳
中井矛第61～63古墳
中井矛第64～66古墳
中井矛第67～69古墳
中井矛第70～72古墳
中井矛第73～75古墳
中井矛第76～78古墳
中井矛第79～81古墳
中井矛第82～84古墳
中井矛第85～87古墳
中井矛第88～90古墳
中井矛第91～93古墳
中井矛第94～96古墳
中井矛第97～99古墳
中井矛第100～102古墳
中井矛第103～105古墳
中井矛第106～108古墳
中井矛第109～111古墳
中井矛第112～114古墳
中井矛第115～117古墳
中井矛第118～120古墳
中井矛第121～123古墳

第２章　遺構

第１節　概要と基本土層

(1) 調査区配置と遺構の種別

調査区配置　調査区本章では寄島遺跡の発掘調査で検出された遺構について記述する。その対象は平成 19・23 ～ 25 年度の発掘調査で検出されたものである。第１章でも述べたように、当該遺跡では平成 26・26 年度にも発掘調査が行われており、今後も継続される予定である。その調査区は本報告の対象調査区とほぼ平行する細長い形状となっている【図５、14A ～ E 区】。特に 07C・12A 区で検出された古墳の周溝については、平成 26 年度の調査区でも検出されており、方墳という評価で定まりつつある。しかしながらこれらの年度の調査成果については、遺物について整理が行われていない現状からすると、拙速な引用はさし控えておくこととする。

主な遺構　遺構の種別は、竪穴建物跡（SI・一部 SX）、掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）、溝（SD）、SZ(（周溝墓、古墳）を主体としている。これ以外に寄島遺跡で特徴的な遺構としては、鹿乗川の旧河道（NR）や、12A 区で検出された弥生土器の集積（SU）がある。センターの発掘調査においては、遺構番号は各調査区単位で 001 から始めて、番号の後ろに遺構種別の記号を付している。そのため発掘調査時点から遺構番号は不変であるが、種別についてはその後の検討の中で変更されているものがある。しかし本報告においては、大半の調査区に関して調査担当者と報告者が異なっている。報告者は調査担当者の考えを最大限尊重する立場から、付された遺構種別についてもほぼ踏襲している。ただし報告文の中でその評価について種別と異なる可能性があることも随所で触れることとする。

(2) 調査区ごとの概要

本項では、遺構各説に入る前に調査区単位で概要を述べる。調査区は現在の地割などに規制されて設定されたものであり、遺跡が生活域として機能していた時代のそれとは大きく異なっていることが多い。しかしながらいくつかの調査区では特徴的な状況をみることができた。

13B 区　本報告で最北端の調査区である。ここでは調査区を北西から南東方向に抜ける鹿乗川の旧河道が検出されている。その上層はさらに洪水性の堆積によって粗粒砂が覆っている。旧河道の両岸の状況が判明しており、右岸では中世以降に掘り込まれた溝などがある。一方左岸では

図５　寄島遺跡の調査区（安城市都市計画図に加筆）

井戸が検出されており、くり抜きによる井戸側が設置された状態で出土している。考察でも述べるように、旧河道から北側は姫下遺跡の集落範囲に相当すると考えれられるので、この井戸の位置付けも姫下遺跡の中で考えらえるべきものである。なお旧河道では多数の木製品が出土している。

13A 区　13B 区から農道を挟んで南側に位置する。当該調査区は、近世以降の鹿乗川もしくは段丘開析谷から流出した小河川の氾濫によって、ほぼ全面で基盤層を抉りこんで粗粒砂が堆積しているため、調査不能部分が多かった。かろうじて調査区南端で溝を検出している。このような状況であるため、巻末の遺構基本図に含めていない。

12B 区・12A 区　後述するように自然堤防の頂部に相当する調査区である。遺構の残存状況は良好で、竪穴建物跡の他にも掘立柱建物跡も検出されている。また 12 B 区では竪穴建物に先行する屈曲する区画溝も検出されている。なお建物群に先行する遺構として多数の小溝群もある。

07A 区・07B 区　寄島遺跡で最初に発掘調査が行われた調査区である。平成 19・23 年度は、北から A・B・C の順に調査区が設定されている。07A・B 区は最も多くの竪穴建物跡が検出されている。また直径 30 ～ 60cm のピットも多数検出されているが、掘立柱建物を想定できるものはなかった。

07C 区　本調査区で検出された竪穴建物跡はわずか 2 基である。これに対して、調査区ほぼ全域で斜方位の小溝が検出され、さらに方形周溝墓 2 基と調査区南部で方墳の周溝（3001SD）が検出されている。当該調査区は遺物も少ないのが特徴である。

11A 区　07C 区と農道を挟んだ南側に位置する調査区である。07C 区で検出された方墳の周溝 3001SD の続きが確認され（11A 区 029SZ）、西方向へ屈曲していることが判明し、方墳もしくは前方後方墳の周溝と想定された。また当該調査区でも方形周溝墓 1 基が検出された程度で、調査区南東隅で鹿乗川の旧河道（008NR）が確認された。このすぐ右岸の自然堤防上には竪穴建物跡 021SI が検出されている。

11B 区　11A 区の南に位置し、ほぼ全面で旧河道（11B 区 003NR）が検出されている。調査区南端に河道の左岸があり、ここでは旧河道に向かって廃棄されたとみられる多量の土器群が検出されている。またそれとほぼ同層あるいは下層からは木製品が出土している。

11C 区　調査区北端では、旧河道に沿う方向の溝（139SD）などがあり、集落の端を限っていたものと考えらえる。しかしそこから基盤層の標高は上昇し、調査区南東隅では、削平によって遺構の多くは滅失していた。竪穴建物跡は南西隅などで検出されている。遺構には弥生・古墳時代のものだけでなく平安時代以降のものも含まれており、これまでの寄島遺跡の各調査区とは様相を異にしている。

(3)　基本土層

基盤層の高低差　寄島遺跡の基盤層は灰色細粒砂～極細粒砂である。尤も同層は表層の 30 ～ 80cm ほどでしかみられず、深掘りをかけると、その下位には灰白色の粗粒砂層があわれて遺構検出面から 1m も下げると湧水が発生する。これは遺跡の立地する自然堤防が鹿乗川の旧河道によって形成されているためである。この層の遺構検出面を全調査区を通してみると【図 6】、13B 区と 11B 区に旧河道によって標高 6.0m 以下も低い地点が存在し、逆に 12B 区から 07B 区では標高 0.7m 以上の高い地点となっている。後者は建物遺構が多数検出されている調査区で、そこから 07C・11A 区へ下降するとそこは墓域に相当する。このように自然堤防の頂部と縁辺で、高低差に対応して集落の土地利用の仕方が異なっている点に注目される。

黒褐色シルト層　この基盤層直上には黒褐色シルト層が広がっている。当該層は弥生土器～灰釉陶器や炭化物なども多く含んでいるのが特徴である。おそらく含有される遺物の時期から、弥生時代中頃から平安時代末までの約 1000 年間にわたって形成された表層土壌であると考えらえる。また当該層は姫下遺跡や下懸遺跡などの周辺遺跡でも認められ、遺跡の所在を示す鍵層である。具体的にはその上面で平安時代後期～中世前半の遺構、下面（基盤層上面）で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が検出可能である。なお、本報告では当該層を K 層と仮称している。

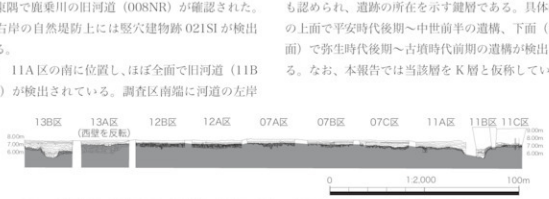


図 6　寄島遺跡の基盤層位の高低差（調査区東壁の土層を連続させ、垂直方向に強調したもの）

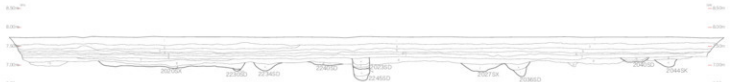
12A区北壁

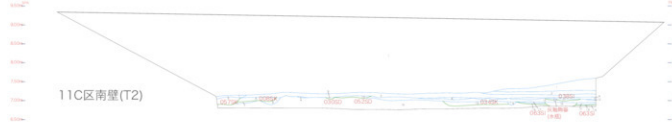
12A区北壁

12B区北壁

12B区北壁

07B区北壁





11C区南壁(T2)

図 7　12A・12B・07B 区北壁と 11C 区南壁の断面図

第２節　13B・A 区の遺構

001SD　第１遺構面で検出された溝遺構である。調査区の南半部を中心にほぼ全面を占めており、調査区南端からやや北に振れる方向で延びて 8F1o グリッド杭の付近で北東方向へ緩く屈曲している。幅は約 4.0m ～ 5.0m で一定な印象があるが、所々で凹凸がみられる。一方その断面は皿状を呈しており、最深部で深さは 0.5m である。底面は砂層のため顕著な凹凸は遺されていないが、屈曲部付近に約 20cm ほど浅くなってテラス状の部分がある。

埋土は粘土とシルトを主体とし、砂がシミ状に含まれていることかｒあ、水性堆積を基本として時折洪水を受けていたものと思われる。埋土の状況からみて、農業用の水路が想定され、規模が大きいことから地籍図もしくは村絵図に記載されているものに対応する可能性がある。

出土遺物は少なく、土師器は旧河道から巻き込まれたもので、小鉢（497）は口縁に「ハ」上の連続施文がなされている、また高杯（499 ～ 501）や二重口縁壺（502）がある。これに対して須恵器杯（496）は角高台であることから折戸 10 号窯式～黒笹 14 号窯式とみられ 9 世紀初頭の時期が考えられる。当該遺物が 001SD において最も新しい時代になるが、周辺が生活域でなくなった時期に掘削された農業用であることを考えると、さほど古い時期を想定することは難しいとみられる。

002SD・003SD　001SD の北西側に位置する溝である。001SD を避けるようにその方向とは逆方向に反って延びている。002SD が 003SD の北端から西側を切り込んでいるので 002SD の方が後と考えられる。幅は 002SD が 1.7 ～ 2.5m、003SD が約 3.5m である。断面形は浅い皿状で 003SD が最深部で深さ約 0.8m である。出土遺物は少なく、旧河道から巻き込まれた土師器がいくつかみられるが、時期を示すものではない。

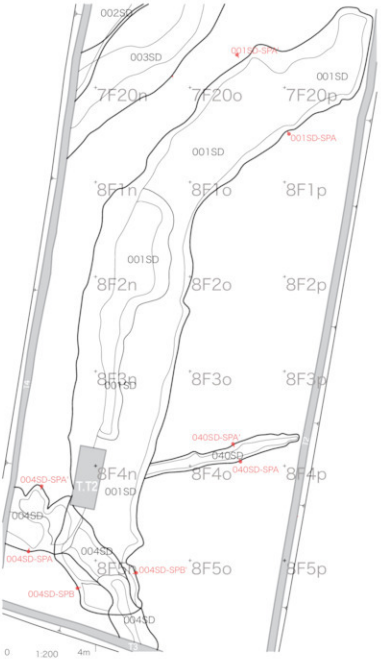
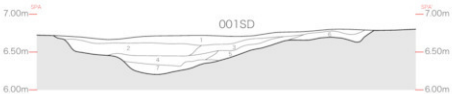
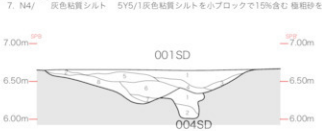


図８　13B 区 001SD 遺構図

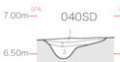


001SD
1. 10YR6/2　灰黄褐色粘土　　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分を多く含む
2. 7.5YR6/1 褐灰色粘土　　10YR8/2灰白色微粒砂を小ブロックで1%含む 10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に1%含む 炭化物を少量含む 鉄分を多く含む
3. 10YR6/1　褐灰色粘質シルト　10YR6/2灰黄褐色微粒砂をしみ状に20%含む 10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に5%含む 炭化物を少量含む 鉄分を多く含む
4. 5Y5/1　灰色粘質シルト　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に1%含む 植砂をやや多く含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
5. 7.5Y5/1　灰色粘土　　微粒砂を少量含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
6. 10YR6/1　褐灰色シルト　　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
7. N4/　　灰色粘質シルト　5Y5/1灰色粘質シルトを小ブロックで15%含む 植粒砂を多く含む 木片を少量含む



001SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　　10YR8/2灰白色微粒砂を小ブロックで2%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む 木片を少量含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　10YR8/2灰白色微粒砂と10YR8/2灰白色微粒砂のウミナ植種
3. 10YR4/1 褐灰色シルト　　炭化物を微量含む 鉄分を微量含む φ10mmの礫を1%含む 植粒砂を微量含む
4. 5Y4/1　灰色粘質シルト　　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に1%含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む 植物遺体を微量含む
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘土　　炭化物を微量含む 鉄分を少量含む 植物遺体を微量含む
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘土　　10YR4/1褐灰色粘質シルトをブロックで20%含む 10YR8/1灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む 植粒砂を少量含む
7. 2.5Y5/1 黄灰色シルト　　炭化物を微量含む 植粒砂を微量含む
8. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　10YR8/1灰白色微粒砂をしみ状に40%含む 7.5YR8/6浅黄橙色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
004SD
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　φ10～30mmの礫をやや多く含む 植粒砂を多く含む
2. 7.5Y4/1 灰色粘土　　2.5Y3/1黒褐色粘土を小ブロックで2%含む 炭化物を微量含む 植粒砂をやや多く含む

004SD
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　　10YR3/1黒褐色粘土をブロックで20%含む 10YR5/1褐灰色シルトをしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 鉄分を多く含む
2. 10YR8/2 灰白色粘細砂　　10YR7/6明黄褐色中砂をしみ状に30%含む 炭化物を微量含む φ1mmの礫を少量含む
3. 10YR7/1 灰白色シルト　　2.5Y4/1黄灰色粘土をしみ状に40%含む 7.5YR6/6橙色中砂をしみ状に30%含む
4. 7.5YR4/1 褐灰色粘土　　7.5YR6/6橙色中砂をブロックで2%含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
5. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト　炭化物を微量含む 鉄分をやや多く含む 細砂を少量含む φ1mmの礫を微量含む
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　粗砂を多く含む 鉄分を少量含む
7. 7.5YR3/1 黒褐色粘土　　10YR7/1灰白色シルトをブロックで3%含む 炭化物を微量含む 鉄分を多く含む 中砂を少量含む
8. 10YR4/1　褐灰色粘土　　炭化物を微量含む 鉄分を少量含む 中砂を多く含む 粗砂を少量含む
9. N4/　　灰色粘土　　2.5Y7/1灰白色微粒砂をブロックで5%含む 炭化物を少量含む 鉄分を少量含む
10. 7.5YR4/1 褐灰色粘土　　7.5YR5/6明褐色極粗砂をブロックで5%含む 5Y7/1灰白色シルトを小ブロックで1%含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
11. 7.5Y4/1　灰色粘土　　10YR7/1灰白色シルトをブロックで2%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分を微量含む φ0.5～1mmの礫を少量含む



040SD
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト　炭化物をやや多く含む 鉄分を少量含む 極粗砂を多く含む φ1mmの礫を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　　炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　炭化物を微量含む 鉄分を微量含む 微粒砂を少量含む

図 9　13B 区 001SD・004SD 断面図

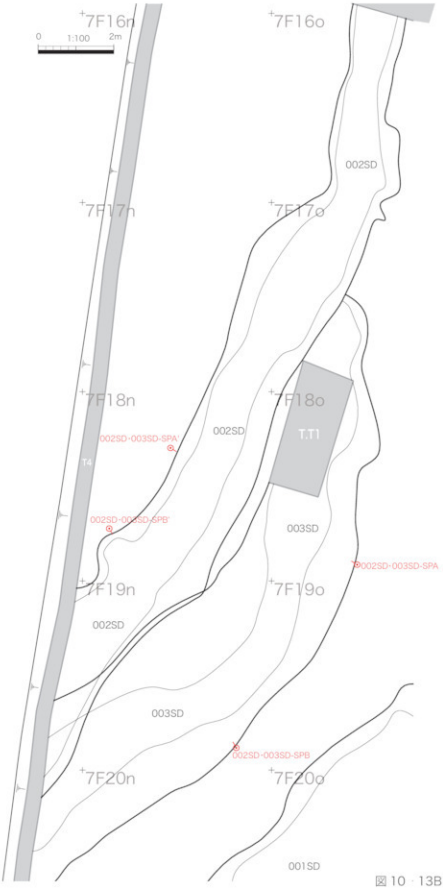
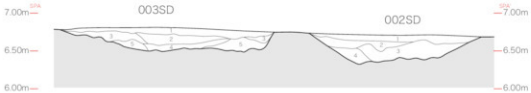


図 10　13B 区 002・003SD 平面図



002SD
1. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト　10YR8/1灰白色シルトをしみ状に5%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に20%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分をやや多く含む 細砂を少量含む
3. 5Y4/1　灰色粘質シルト　2.5Y8/2灰白色微粒砂をしみ状に20%含む 10YR8/1灰白色微粒砂をパッチで1%含む 炭化物を少量含む 鉄分を微量含む
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　2.5Y8/2灰白色微粒砂をしみ状に30%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
003SD
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に30%含む 炭化物を少量含む 鉄分を多く含む
2. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　10YR8/6黄橙色微粒砂をしみ状に10%含む 7.5YR7/6橙色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト　10YR8/6黄橙色微粒砂をしみ状に10%含む N6/灰色粘質シルトをしみ状に50%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
4. N3/　暗灰色粘土　炭化物を微量含む 鉄分を少量含む 微粒砂を多く含む
5. 5B4/1　暗青灰色粘土　鉄分を微量含む 微粒砂を少量含む

002SD
1. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト　10YR8/1灰白色シルトをしみ状に5%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に20%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分をやや多く含む 細砂を少量含む
3. 5Y4/1　灰色粘質シルト　2.5Y8/2灰白色微粒砂をしみ状に20%含む 10YR8/1灰白色微粒砂をパッチで1%含む 炭化物を少量含む 鉄分を微量含む
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　2.5Y8/2灰白色微粒砂をしみ状に30%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
003SD
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト　10YR8/2灰白色微粒砂をしみ状に30%含む 炭化物を少量含む 鉄分を多く含む
2. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　10YR8/6黄橙色微粒砂をしみ状に10%含む 7.5YR7/6橙色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト　10YR8/6黄橙色微粒砂をしみ状に10%含む N6/灰色粘質シルトをしみ状に50%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
4. 5B4/1　暗青灰色粘土　2.5Y2/1黒色粘質シルトをパッチで3%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む 微粒砂を少量含む 木片を少量含む
5. N4/1　灰色粘質シルト　炭化物を少量含む 鉄分を少量含む 微粒砂をやや多く含む
6. 5B6/1　青灰色粘質シルト　2.5Y7/1灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を微量含む

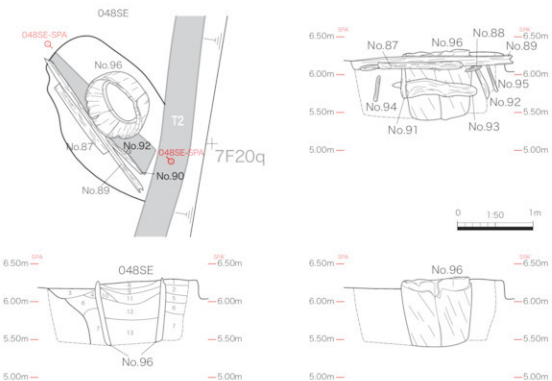
図 11　13B 区 002・003SD 断面図

図 12　13B 区 001SD の完掘状況（南西から）

048SE　調査区北東部にある井戸遺構である。その位置は旧河道の左岸斜面にあり、旧河道で遺物を多く含む黒色粘土層が堆積以前からその過程で構築されたものと考えらえれる。井戸の構築は河道に平行方向に長軸となる土坑（長径約 2.0m 以上、短径約 1.3m）を掘り方としてそこへクスノキの芯持ち材をくり抜いた底のない井戸側（井筒）を設置し、さらに河道側に細長い板材 2 点を渡して支えとしている。この板材の下位からは杭も出土しているので、支えをすこに当たって杭で固定していたものと考えられる。井戸側は河道と平行方向に長径となる楕円形となっている。これは素材の形状とも考えられるが、北東側からの土圧で変形した可能性もある。

井戸側（井筒）を設置した際の掘り方理土は灰白色シルトで微量の植物遺体を含む程度で比較的清浄な土を使用している。また井井戸側内部は、概ね 3 層に区分され、下から灰色砂質シルト（13 層）、中層は黒褐色シルト（12 層）、上層は黒褐色シルト～灰色シルト（8 ～ 11 層）となっており、上層から植物遺体や木片が出土している。おそらく下層が井戸機能段階で湧水とともに底などから噴き出したものと考えられ、中層は上方から落下して堆積したものであろう。そして上層は井戸が廃棄された段階と考えられる。

出土遺物はほとんどなく、井戸が清浄に保たれていたことが想定される。周辺は旧河道の堆積であるが、井戸に直接的な関わりがわかる遺物の出土はなかった。また井戸から北側の微高地は全面が削平されており、井戸を使用した主体があった場所と推定されるが、この地点の状況は不明である。井戸の位置や旧河道の堆積層との関わりから古墳時代初頭を中心に機能していたものと推測される。



1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　10YR8/1灰白色シルトをしみ状に3%含む 10YR3/2黒褐色腐植土を帯状に1%含む 炭化物を少量含む 鉄分を微量含む 植物遺体を少量含む
2. 5Y5/1 灰色シルト　2.5Y3/2黒褐色粘質シルトをしみ状に5%含む 2.5Y4/1黄灰色シルトを小ブロックで2%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を少量含む
3. 7.5Y5/1 灰色シルト　2.5Y8/1灰白色シルトをしみ状に20%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を微量含む
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　5Y7/1灰白色シルトをしみ状に30%含む 炭化物を微量含む
5. 7.5Y4/1 灰色シルト　2.5Y3/2黒褐色粘質シルトをしみ状に10%含む 2.5Y8/1灰白色シルトをブロックで2%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を微量含む
6. 2.5Y7/1 灰白色シルト　2.5Y8/1灰白色シルトをしみ状に70%含む 炭化物を微量含む
7. 5Y5/1　灰色シルト　2.5Y3/1黒褐色シルトをしみ状に1%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を微量含む
8. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト　2.5Y7/1灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を少量含む 植物遺体を多く含む 木片を含む
9. 10YR6/1 褐灰色シルト　2.5Y7/1灰白色微粒砂をしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を微量含む
10. 7.5Y4/1 灰色シルト　2.5Y4/1黄灰色シルトを小ブロックで10%含む 炭化物を微量含む
11. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　5Y7/1灰白色シルトをしみ状に30%含む 炭化物を微量含む
12. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　2.5Y8/1灰白色シルトをしみ状に20%含む 炭化物を少量含む 植物遺体をやや多く含む 木片を含む
13. 5Y6/1　灰色砂質シルト　2.5Y3/1黒褐色シルトを小ブロックで1%含む

図 13　13B 区 048SE 遺構図

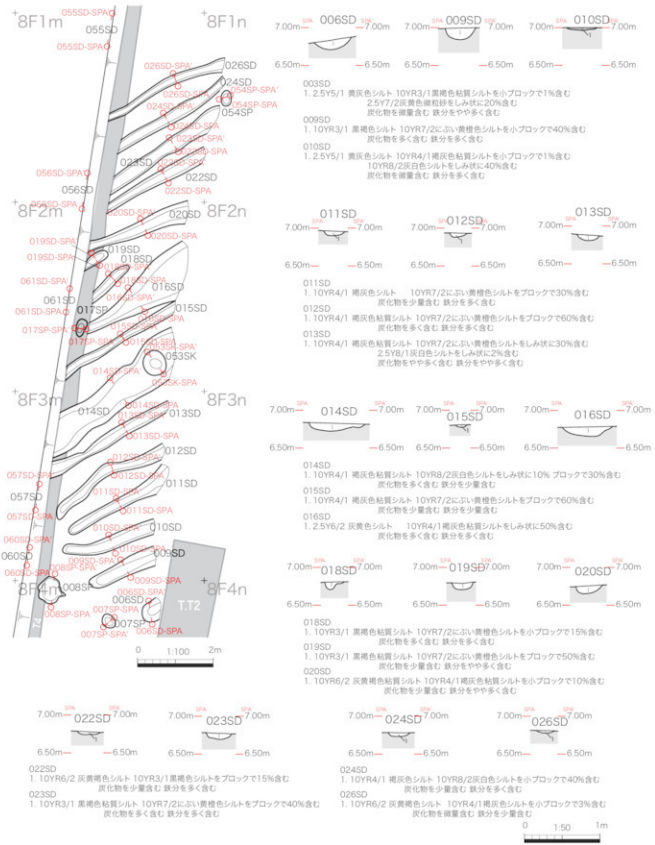
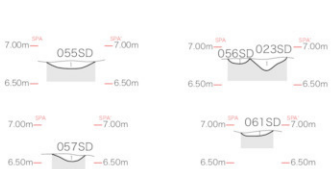


図 14　13B 区小溝群遺構図



055SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y8/2灰白色シルトをしみ状に40%含む
炭化物を多く含む 鉄分を少量含む

056SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y5/1黄灰色シルトを斑状に30%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む

023SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで40%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む

057SD
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2.5Y8/2灰白色シルトを斑状に40%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む

061SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y8/2灰白色シルトを小ブロックで3%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む

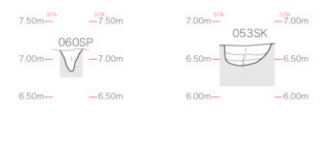
007SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで30%含む
炭化物を少量含む 鉄分を多く含む

008SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘土 10YR8/1灰白色シルトをブロックで1%含む
10YR7/2にぶい黄橙色シルトをしみ状に40%含む
炭化物を少量含む 鉄分をやや少く含む

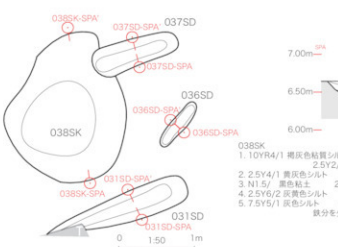
017SP
1. 5Y4/1 灰色粘質シルト 鉄分を微量含む 微粒砂を少量含む

054SP
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト N2/黒色粘質シルトを小ブロックで5%含む
2.5Y6/2灰黄色シルトをしみ状に3%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む

060SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y8/2灰白色シルトをブロックで30%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む



053SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘土　2.5Y8/1灰白色シルトをしみ状に10%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
2. 5Y6/1　灰色シルト　10YR4/1褐灰色粘土をしみ状に5%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む
3. 5B6/1　青灰色シルト 2.5Y7/2灰黄色シルトをしみ状に5%含む
炭化物を微量含む 鉄分を少量含む



038SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで40%含む
2.5Y2/1黒色シルトを小ブロックで10%含む 炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　7.5Y5/1灰色シルトを小ブロックで10%含む 炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
3. N1.5/　黒色粘土　2.5Y5/2暗灰黄色粘土をしみ状に1%含む 鉄分を少量含む 炭屑
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト　5Y4/1灰色粘質シルトをブロックで30%含む 炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
5. 7.5Y5/1 灰色シルト　2.5Y6/2灰黄色シルトをしみ状に1%含む 炭化物をやや多く含む
鉄分を少量含む 植物遺体を微量含む

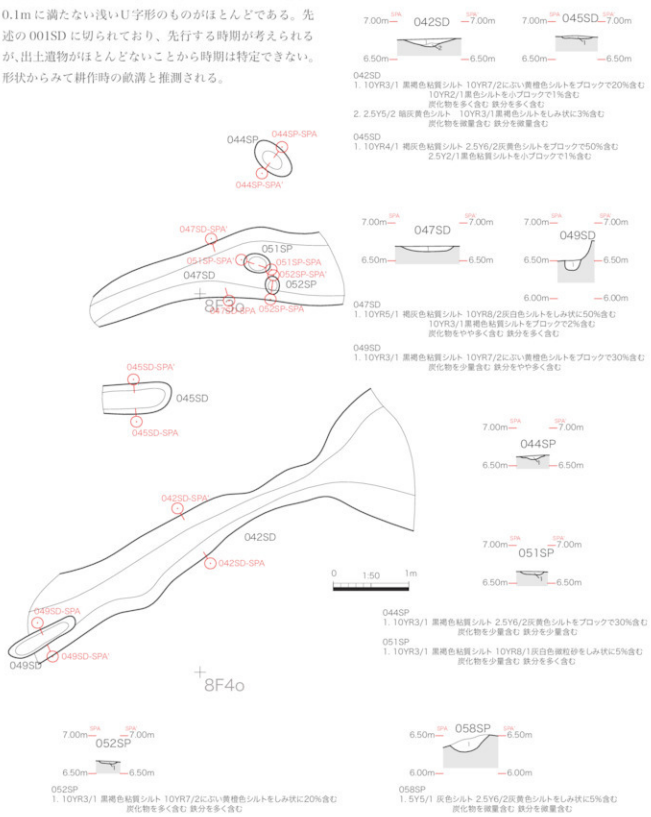
031SD
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト 2.5Y7/2灰黄色シルトをブロックで50%含む
炭化物をやや多く含む 鉄分を多く含む

036SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y6/2灰黄色シルトをブロックで40%含む
炭化物を少量含む 鉄分を多く含む

037SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで40%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む

図 15　13B 区 SD・SK・SP 遺構図

13B 区の小溝群　調査区西壁付近で 16 条の平行する小溝群が検出されている。溝の幅は 0.2 ～ 0.3m で断面は 0.1m に満たない浅い U 字形のものがほとんどである。先述の 001SD に切られており、先行する時期が考えられるが、出土遺物がほとんどないことから時期は特定できない。形状からみて耕作時の畝溝と推測される。



042SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで20%含む
10YR2/1黒色シルトを小ブロックで1%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR3/1黒褐色シルトをしみ状に3%含む
炭化物を微量含む 鉄分を微量含む

045SD
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2.5Y6/2灰黄色シルトをブロックで50%含む
2.5Y2/1黒色粘質シルトを小ブロックで1%含む

047SD
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 10YR8/2灰白色シルトをしみ状に50%含む
10YR3/1黒褐色粘質シルトをブロックで2%含む
炭化物をやや多く含む 鉄分を多く含む

049SD
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで30%含む
炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む

044SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 2.5Y6/2灰黄色シルトをブロックで30%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む

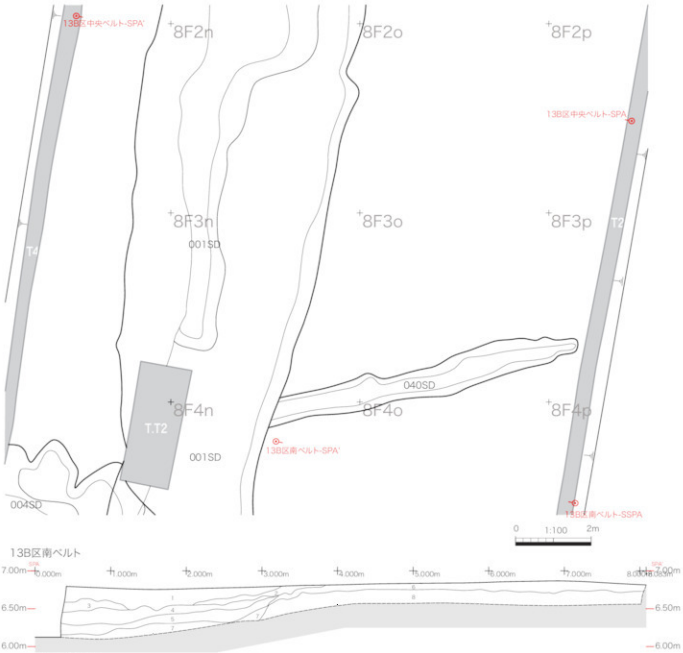
051SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR8/1灰白色微粒砂をしみ状に5%含む
炭化物を少量含む 鉄分を多く含む

052SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR7/2にぶい黄橙色シルトをしみ状に20%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む

058SP
1. 5Y5/1 灰色シルト 2.5Y6/2灰黄色シルトをしみ状に5%含む
炭化物を微量含む 鉄分を微量含む

図 16　13B 区 SD・SP 遺構図

13B 区旧河道　13B 区では南ベルトと中央ベルトでの土層観察で遺構間関係を調査している。第 1 遺構面において 001 ～ 004SD を検出した後、調査区東半部を中心に広がる黒色粘土層の下部状況について検討すべく、各ベルトに沿ってトレンチ掘削を行い、001SD とは別の堆積であることが明らかとなった（001SD は中央ベルトのほぼ最上層にあたる 11 層を切り込んでいる）。中央ベルトによれば、肩部付近では灰白色シルトが若干みられるが大半は植物質を含む黒色粘土であり、これは旧河道の最上部に相当する。旧河道の堆積はほぼ水平方向で水流がほとんど

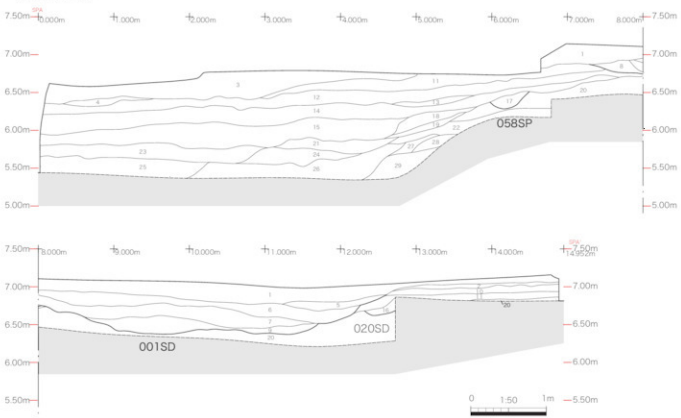


13B区南ベルト
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土　10YR3/1黒褐色粘質シルトを小ブロックで40%含む 2.5Y8/1灰白色微粒砂を斑状に20%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
2. 5Y2/1　黒色粘質シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルトをしみ状に20%含む 炭化物を少量含む 鉄分を微量含む
3. N1.5/　黒色粘土　炭化物をやや多く含む 植物遺体を多く含む 微粒砂を少量含む
4. 10YR2/2 黒褐色高植土　炭化物を多く含む 植物遺体を多く含む 微粒砂をやや多く含む
5. 10YR3/1 黒褐色粘土　10YR5/1褐灰色粘質シルトをしみ状に20%含む 10YR2/1黒色粘質シルトをしみ状に20%含む 炭化物をやや多く含む 植物遺体を少量含む
6. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで20%含む 2.5Y8/2灰白色シルトをしみ状に20%含む 炭化物を多く含む 鉄分を少量含む
7. 10Y5/1　灰色シルト　2.5Y2/1黒色粘質シルトを小ブロックで3%含む 2.5Y8/1灰白色シルトをしみ状に5%含む 炭化物を微量含む
8. 2.5Y8/2 灰白色シルト　2.5Y3/1黒褐色粘質シルトをしみ状に20%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む

図 17　13B 区旧河道断面図（南ベルト）

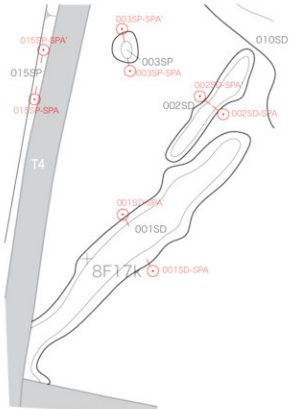
なくなった段階に進行したものと考えられる。木製品は中央ベルトの 15 層以下で増加する傾向にあり、他の地点の状況からここが弥生時代末期～古墳時代初頭に相当すると考えられる。なお遺物は調査区東壁の分層で取り上げているが（18・25・29 層など）、25・29 層が主体で、大きな時期差はない。

13B区中央ベルト

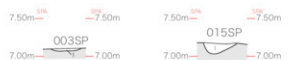


13B区中央ベルト
1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト　2.5Y2/1黒色粘質シルトを小ブロックで40%含む 10YR8/1灰白色シルトをしみ状に10%含む 炭化物を多く含む
鉄分を多く含む 極粗砂を少量含む 粗砂を少量含む 中砂を多く含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　2.5Y2/1黒色シルトを小ブロックで30%含む 炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
3. 10YR3/1 黒褐色粘土　2.5Y4/1黄灰色粘質シルトをしみ状に50%含む 炭化物を少量含む 鉄分を多く含む 植物遺体を少量含む
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　2.5Y2/1黒色シルトをしみ状に1%含む N1.5/黒色粘土をブロックで3%含む 炭化物を少量含む
鉄分を微量含む 植物遺体を少量含む
5. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土　2.5Y2/1黒色粘質シルトを小ブロックで10%含む 炭化物を少量含む 鉄分を少量含む
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘土　2.5Y2/1黒色粘質シルトを小ブロックで10%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分を多く含む
植物遺体を微量含む 粗砂を少量含む
7. 10YR8/1 灰白色極粗砂　7.5YR7/6橙色極粗砂をしみ状に40%含む 7.5YR8/1灰白色微粒砂をしみ状に20%含む
10YR5/1褐灰色シルトをしみ状に60%含む 炭化物をやや多く含む 鉄分を少量含む
8. 10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR3/1黒褐色粘質シルトをいブロックで3%含む 炭化物を少量含む 鉄分を少量含む 細砂を少量含む
9. 7.5Y6/1 灰色シルト　5Y8/1灰白色シルトをしみ状に30%含む 7.5YR7/6橙色シルトをしみ状に10%含む 炭化物を微量含む 鉄分を多く含む
10. 2.5Y2/1 黒色シルト　2.5Y5/2暗灰黄色シルトをブロックで50%含む 炭化物を少量含む 鉄分少量含む
11. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで40%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
12. N1.5/　黒色粘土　炭化物をやや多く含む 植物遺体を多く含む 微粒砂を微量含む 木質を寒状に堆積
13. 2.5Y3/1 黒褐色粘土　炭化物を少量含む 植物遺体を多く含む
14. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　炭化物を少量含む 植物遺体をやや多く含む 微粒砂を少量含む
15. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　2.5Y8/1灰白色微粒砂をブロックで10%含む 7.5Y7/1灰白色微粒砂をブロックで3%含む
炭化物を多く含む 植物遺体を多く含む
16. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　10YR4/1褐灰色粘質シルトを小ブロックで10%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
17. 5Y5/1　灰色シルト　2.5Y6/2灰黄色シルトをしみ状に5%含む 炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
18. 2.5Y4/1 黄灰色粘土　炭化物を微量含む 植物遺体を多く含む 微粒砂を少量含む
19. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　2.5Y7/2にぶい黄色シルトをしみ状に10%含む 炭化物を少量含む 鉄分を微量含む 植物遺体を少量含む
20. 2.5YR2/2 灰白色シルト　2.5Y3/1黒褐色粘質シルトをしみ状に20%含む 炭化物を少量含む 鉄分をやや多く含む
21. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　5Y7/1灰白色微粒砂をしみ状に30%含む 炭化物を少量含む 植物遺体をやや多く含む
22. 7.5Y5/1 灰色シルト　5Y8/1灰白色微粒砂を寒状に40%含む 炭化物を微量含む 植物遺体を少量含む
23. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト　2.5Y8/1灰白色粗砂をしみ状に30%含む 10Y6/1灰色粘質シルトをブロックで5%含む
炭化物をやや多く含む 植物遺体をやや多く含む 木片を含む
24. 5Y4/1　灰色シルト　2.5Y8/1灰白色粗砂をうミナ状に50%含む 2.5Y3/1黒褐色粘土をパブロックで1%含む
25. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　2.5Y7/1灰白色微粒砂をしみ状に40%含む 炭化物を少量含む 植物遺体を多く含む 木片を含む
26. 10YR2/2 黒褐色シルト　2.5Y6/1黄灰色粘質シルトをしみ状に40%含む 炭化物を少量含む 植物遺体を少量含む
27. 5Y4/1　灰色シルト　炭化物を微量含む
28. 7.5Y5/1 灰色シルト　5Y8/1灰白色微粒砂をしみ状に70%含む
29. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　2.5Y7/1灰白色微粒砂のラミナ堆積 炭化物を少量含む 植物遺体を多く含む

図 18　13B 区旧河道断面図（中央ベルト）



001SD
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR3/1黒褐色シルトを小ブロックで2%含む
炭化物を多く含む 鉄分を微量含む
002SD
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR3/1黒褐色シルトを小ブロックで3%含む
炭化物を多く含む 鉄分を微量含む



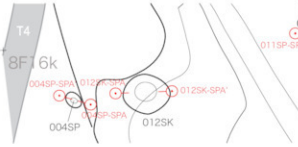
003SP
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト　2.5YR2/1黒色シルトを小ブロックで2%含む
炭化物を微量含む 鉄分を多く含む
015SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　2.5Y4/2暗灰黄色シルトをしみ状に15%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む

005SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　10YR6/2灰黄褐色シルトを小ブロックで3%含む
炭化物を微量含む 鉄分をやや多く含む
006SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　10YR6/2灰黄褐色シルトを小ブロックで3%含む
炭化物を微量含む 鉄分をやや多く含む

007SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　10YR6/2灰黄褐色シルトを小ブロックで20%含む
炭化物を微量含む 鉄分をやや多く含む
008SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト　炭化物を微量含む 鉄分を微量含む 中砂含む

004SP
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　炭化物を微量含む 鉄分をやや多く含む

011SP
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　10YR8/2灰白色シルトを小ブロックで1%含む
炭化物を微量含む 鉄分をややを多く含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR3/1黒褐色粘質シルトをしみ状に3%含む
炭化物を微量含む



012SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR8/2灰白色シルトをしみ状に5%含む
炭化物を微量含む 鉄分を多く含む

図 19　13A 区 001SD・012SK 遺構図

13A 区 001SD・010SD　前節で述べたように 13A 区ではほとんど遺構は滅失していたが、調査区南西隅で溝やピットが検出されている。001SD は北西隅から北東方向へ延びる幅約 0.7m の溝で長さは 3.7m 以上である。010SD とは直交方向にあるが、重複もしくは接続関係にはない。

010SD は調査区西壁から南壁へ延びる不定形な溝である。幅は 2.5 ～ 3.0m と一定せず、底面形状も小段をもつ緩い V 字形をしている。出土遺物はほとんどなく、周辺が耕作地だった近世後半～近代に機能していたものと考えられる。またその方向が洪水性の堆積（図中の擬乱部分）と平行である点は、洪水の時期が比較的近時であることをうかがわせる。

010SD
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土　10YR4/1褐灰色粘質シルトブロックで10%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む 植物遺体を多く含む φ5mmの小礫含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR4/1褐灰色粘質シルトブロックで1%含む
炭化物を多く含む 鉄分を多く含む
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/1褐灰色粘質シルト小ブロックで1%含む
2.5Y5/2暗灰黄色シルトをしみ状に2%含む
炭化物を多く含む 鉄分をやや多く含む
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土　10YR3/1黒褐色粘土ブロックで2%含む
炭化物を微量含む 鉄分を微量含む
5. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルトをしみ状に3%含む
炭化物を少量含む 鉄分を少量含む
6. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルトをブロックで20%含む
炭化物をやや多く含む 鉄分を少量含む
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト 10YR8/1灰白色シルトをラミナ状に30%含む
2.5Y3/1黒褐色シルトをブロックで1%含む
炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　10YR8/1灰白色シルトをラミナ状に10%含む
10YR4/1褐灰色シルトをブロックで5%含む
炭化物を微量含む 鉄分を少量含む
9. 2.5Y6/2 灰黄色シルト　10YR3/1黒褐色粘質シルトブロックで5%含む
鉄分を少量含む
10.2.5Y3/2 黒褐色粘土　10YR7/1灰白色シルトをしみ状に10%含む
炭化物を微量含む 植物を少量含む

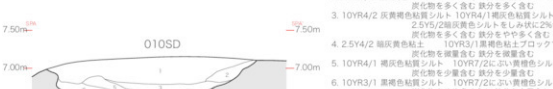


図 20　13A 区 010SD 遺構図

第 3 節　12B 区の遺構

001SK　第 1 遺構面で検出された、調査区北端に位置する土坑である。直径約 1.0m で平らな底面が特徴である。深さは 0.25m である。時期は不明である。

002SD　第 1 遺構面で検出された溝である。調査区北端付近に位置し、やや北西に振れているものの概ね皮西から東へ直線で延びている。幅は 0.9 ～ 1.3m で断面はきわめて浅い皿状を呈している。深さは 0.15m で、埋土は中粒砂えが主体となっている。当該溝の南側には平行してピットが 7 基（003 ～ 009SK）が並んでいる。おそらく両者は関係あるものと思われ、溝が比較的近時の耕作地の区画であると推定されることから、これらのピット群も耕作に関わるものと推測される。

015SK　第 1 遺構面で検出された小判形の土坑である。長径は約 2.0m、短径は約 1.2m を測る。底面形状は浅い皿形を呈しており、やや凹凸もみられる。深さは 0.15m である。埋土は上層（1 層）下層（2 層）に区分され、下層は炭化物や焼土が含まれている。また下層からは、土師器の屈折脚高杯（103･104）や　S 字状口縁台付甕（106･107）が出土している。高杯は横ミガキがなされており、これらは一括資料として位置付けられる。寄島遺跡ではこのような土坑から土器がまとまって出土する事例が少なく、きちょうな事例である。ただし土坑の用途については明らかでない。

024SI　本遺構から後の遺構番号は、第 2 遺構面で検出されたものである。当該遺構は、調査区北壁に一部がかかるかたちで検出された竪穴建物跡である。建物の方位はグリッド北から西へ約 45° 振れている。平面形は一辺約 5.3m の隅丸正方形である。床面までの深さは 5cm 以下と浅く、上部の大半が削平されていることが明らかである。また明瞭な壁溝は存在していない。一方、主柱穴は 4 か所にある（041・043・044・045SP）。それぞれの断面図によれば、柱根を抜き取ったことによって上部が大きく変形しており、建築部分は解体されたと推測される。これに関連して、床面の広範囲で炭化物の散布がみられ、廃棄時に燃やした可能性も考えられる。

床面下では、壁に沿って幅 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.3 ～ 0.4m の断面が台形を呈する周溝状の床下施設が確認された。竪穴建物の掘り方は、土層断面の 8 層が相当し、ほぼ平らに掘られたものにごく細粒砂とシルトの混合土で貼り床としている。周溝状床下施設は、その貼り床に対して掘り込まれて、またその形状から竪穴掘削時に偶発的にできたものではなく、意図的に周溝を掘ったものと考えられる。また埋土も床面から上ではシルト主体であるのに対し、周溝状掘り方の埋土は細粒砂が主体となっている点に特徴がある。床下の湿気対策などの目的で施工されたものと考えられる。

出土遺物は少ないが、床面から土師器の高杯（1・2）、小鉢（3・4）や甕（5）が出土している。また柱穴 043SP からも土師器小鉢（6）と甕（7）が出土している。高杯は松河戸式前半段階と推定され、建物の機能した時期は、廻間式の終わりから松河戸式の併行期と考えられる。

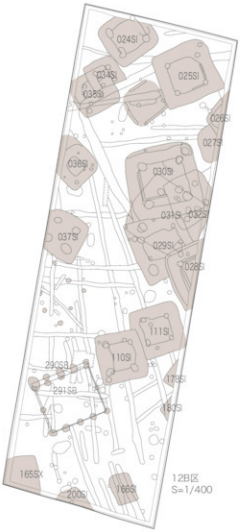
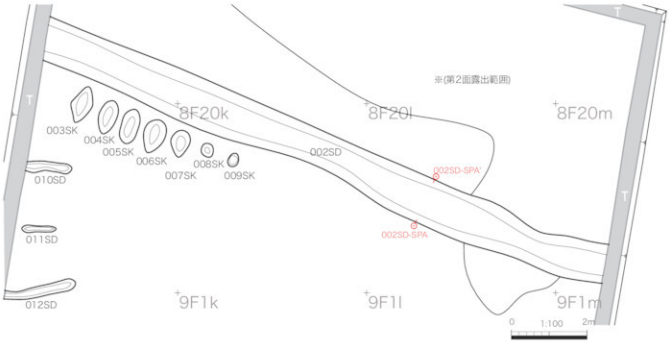
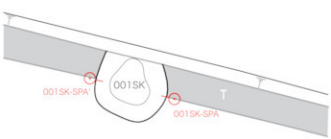


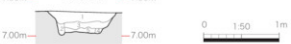
図 21　12B 区建物遺構分布図



002SD
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂 しまり弱い 粘性少ない
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色粗粒砂　しまり弱い 粘性少ない

8F19m

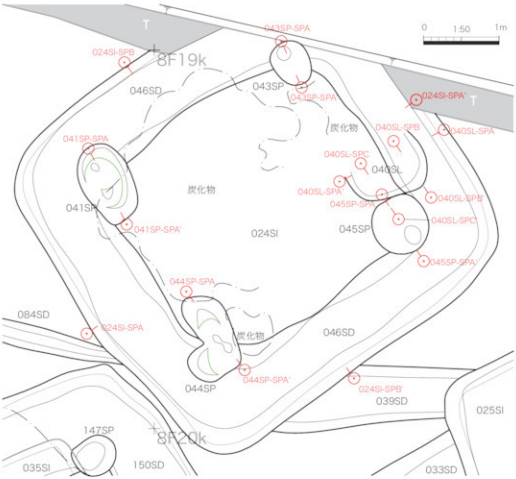




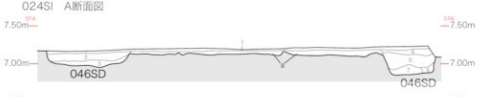
001SK
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
φ3～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
3. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない
2.5Y3/1黒褐色砂質シルトが少量混じる

015SK
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが混じる
炭化物を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが微量混じる
炭化物・焼土を含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　　しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが微量混じる
炭化物を微量含む

図 22　12B 区 001SK・002SD・015SK 遺構図

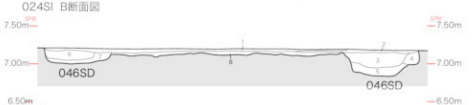


024SI　A断面図



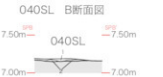
024SI A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる 底面に炭化物が薄く堆積する
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあい 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる (046SD)
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (046SD)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあい 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる (046SD)
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあい 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を多く含む (046SD)
6. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあい 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (046SD)
7. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (046SD)
8. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む

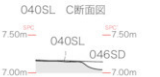
024SI　B断面図



024SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる 底面に炭化物が薄く堆積する
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあい 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる (046SD)
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあい 粘性ややあい φ1～3mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を多く含む (046SD)
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあい 粘性ややあい 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
5. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色シルトが少量混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあい 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる (046SD)
7. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (046SD)
8. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む

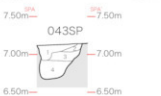
図 23　12B 区 024SI 遺構図





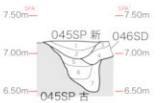
040SL
1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性やや少ない 焼土及び炭化物を多く含む
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性やややあり 炭化物を微量含む
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性少ない 焼土を含む 炭化物を微量含む

041SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 10YR4/4 褐色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物・焼土を多く含む
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりやや弱い 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる



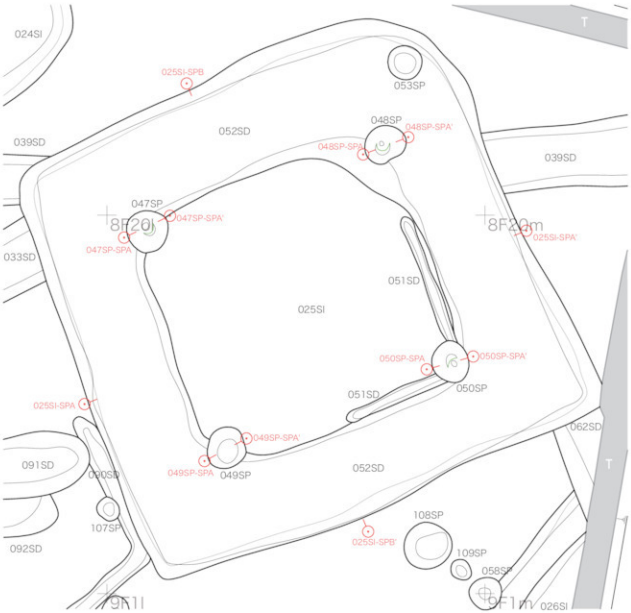
043SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややかない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

044SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・焼土を含む
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ2～3mmの2.5Y8/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
炭化物を微量含む
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりやや弱い 粘性やや少ない φ3～6mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を含む
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
5. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性少ない φ2～3mmの2.5Y4/2暗灰黄色さ質シルト粒を微量含む
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる



045SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む (045SP新)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y8/1灰白色極細粒砂が少量混じる (045SP新)
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性ややかない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (046SD)
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり (046SD)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む (045SP古)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる (045SP古)
7. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる (045SP古)

図 24　12B 区 040SL・041・043・044・045SP（024SI 関連）断面図



025SI　A　断面図

025SI A-A'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質砂が少量混じる
　φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒が少量含む 底面に炭化物が薄く堆積する
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂　しまりやや強い 粘性やや少ない φ1～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む (052SD)
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない φ3～5mmの2.5Y3/2黒褐色シルト粒を少量含む (052SD)
5. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない φ3～5mmの2.5Y3/2黒褐色シルト粒を微量含む (052SD)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが混じる (052SD)
7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質砂が多く混じる (052SD)
8. 7.5YR3/3 暗褐色極細粒砂　しまりやや強い 粘性なし (051SD)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が混じる

図 25　12B 区 025SI 遺構図

025SI　調査区北東隅に位置する。ほぼ全形が検出されている。方位は 024SI などと類似するがややグリッド北に近い。西壁で小型の竪穴建物跡の壁溝と考えられる 090SD を切っている。平面形は北東隅が丸い正方形で一辺約 6.3m を測る。床面までの深さは約 0.1m である。主柱穴は 4 か所（047 ～ 050SP）で確認されているが、024SI とは異なり当該遺構での柱根の抜き取りはなかったと考えられる。明確な壁溝はない。ただし主柱穴 050SP からそれぞれ周溝状床下施設の上端に沿って小溝（051SD）が延びている点が注目される。間仕切りであろうか。床面上では薄く炭化物の散布がみられる。床面下には周溝状床下施設が四周を巡っている。その幅や約 1.2m、深さ 0.3 の断面方形の丁寧な掘り込みである。この施設は、建物の平面規模に比例して大型化していると考えられる。

出土遺物は古墳時代前期の土師器高杯（8）、くの字口縁の台付甕（14）がなどがある。建物の時期は松河戸 I 式併行期と推測される。

026SI・027SI　調査区東壁でにかかって一部が検出された小型の竪穴建物跡である。両者は重複関係にあり 026SI が 027SI より後になる。026SI は隅丸方形であるが、027SI は隅部のカーブが強い。ともに主柱穴は検出されていない。026SI は土層断面によれば壁溝とみられるくぼみ

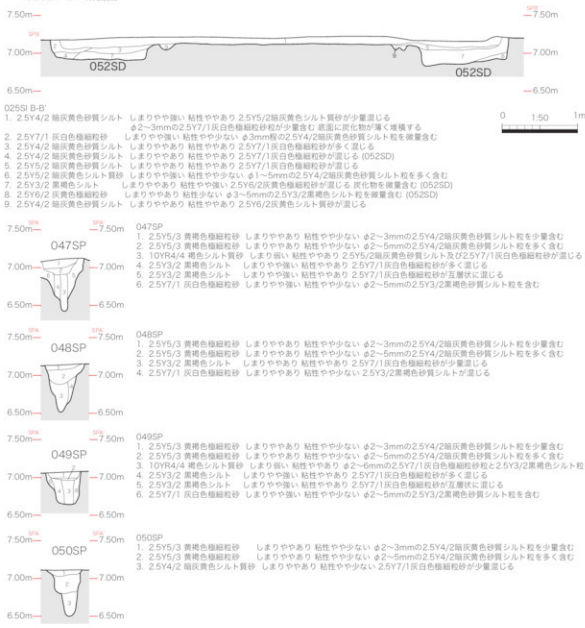
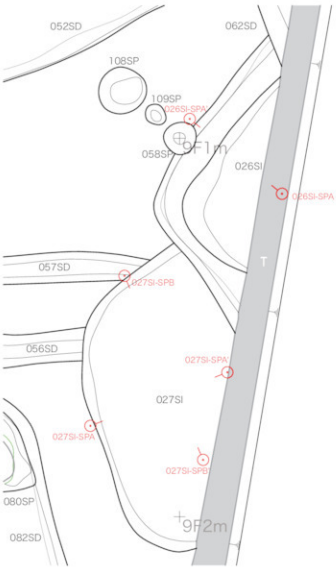


図 26　12B 区 025SI・047SP・048SP・049SP・050SP 断面図

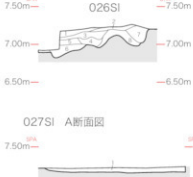


がみられ（7・8 層）、さらにその南東側で埋土（1・2 層）に先行する掘り込みがみられる。これが床下施設なのか先行する別の竪穴建物跡であるかどうかは判然としない。出土遺物は 026SI から加飾壺の胴部が出土している。概ね古墳時代前期に位置づけられよう。

028SI　調査区東壁にかかって一部が検出された竪穴建物跡である。方位は他の建物と同じくグリッド北から西へ約 45° 振れている。平面形は隅丸正方形で南西辺長は約 6.2m を測る。主柱穴 063SP には 025SI と同様の小溝が取り付いている。ここでも周溝状床下施設が検出されており、その幅 0.9m で断面は逆台形である。出土遺物は S 字状口縁台付甕の口縁部と周溝状床下施設から出土した小鉢があるのみで床面までの深さ 0.25m が残存していたにもかかわらず遺物量は少ない。

029SI　028SI に南東隅が重複して検出されている。先後関係は 029SI → 028SI である。また北辺で 030SI と重複しているが、こちらは 030SI → 029SI である。南西辺長は約 7.0m の隅丸正方形である。主柱穴は 4 基確認されており、周溝状床下施設もある。床面中央部で炭化物の散布がみられる。出土遺物は小鉢 2 点（21・22）がある程度で、全体に遺物量は少ないといえる。

030SI　029SI・031SI・032SI と重複関係にある竪穴建物跡である。建物方位は他のものよりややグリッド北に近い。建物の変遷は、土層断面の観察から 031SI → 032SI → 030SI となる。平面形は北西と北東隅が丸みの強い隅丸正方形で南辺長は 7.8m を測る。なお北辺には壁溝（055SD）が認められる。床面中央部で炭化物の散布が認められる。主柱穴（076 ～ 079SP）は 4 か



026SI
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの2.5Y6/1黄灰色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
4. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 10YR4/3にぶい黄褐色シルトが混じる
φ2～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色さ質シルトが多く混じる
7. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む

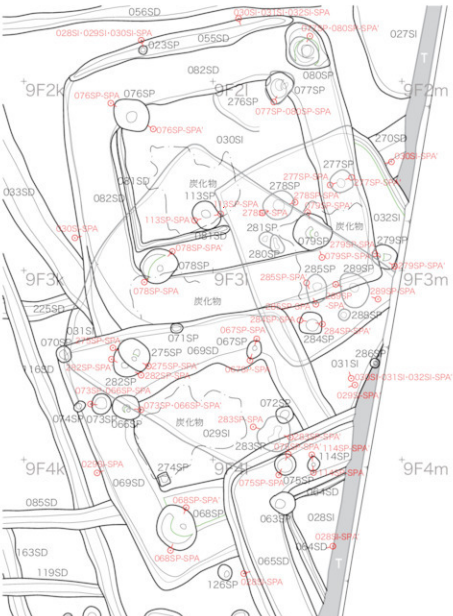
027SI　A断面図

027SI　B断面図

027SI
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物を少量含む

0　1:50　1m

図 27　12B 区 026SI・027SI 遺構図

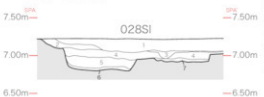


所にあり、上部が大きく広がっていることから柱根の抜き取りがなされたものと考えられる。また周溝状床下施設（082SD）も検出されている。ここからは顕著な出土遺物はなかった。当該遺構では北東隅にもピットがあり貯蔵穴のようでもあるが、形状から柱穴の一種と考えられる。

当該遺構から小片ではあるが古墳時代前期の土師器が多数出土している。概ね姫下遺跡の前期段階に併行するものである。

031SI　030SI や 032SI に先行する竪穴建物跡である。当該建物跡だけグリッド北から大きく西へ振れており、寄島遺跡では時期を遡ることがわかる。他の竪穴建物跡の下層に位置するので残存状況は良くない。しかし北西辺約 6.9m ので主柱穴の 4 か所（113SP・289SP・275（282）SP・283SP）で確認されている。出土遺物は少なく、ミニチュアの小鉢（48）が見られる程度である。しかし重複関係の最後に位置する 028SI と大きく隔たるものではなく、寄島遺跡における古墳時代前期における集落消長の一端を示すものとして注目されよう。

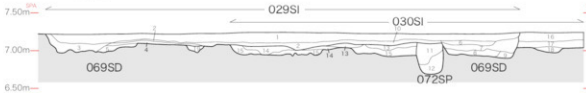
028SI　A断面図



028SI
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物生産量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/1黒褐色シルトと2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物生産量含む
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色極粗粒砂　しまりやや強い 粘性やややない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (065SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややない 粘性やややない 2.5Y4/1灰黄色砂質シルトが少量混じる (065SD)
7. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややない 粘性やややない 2.5Y4/1灰黄色砂質シルトが混じる (065SD)

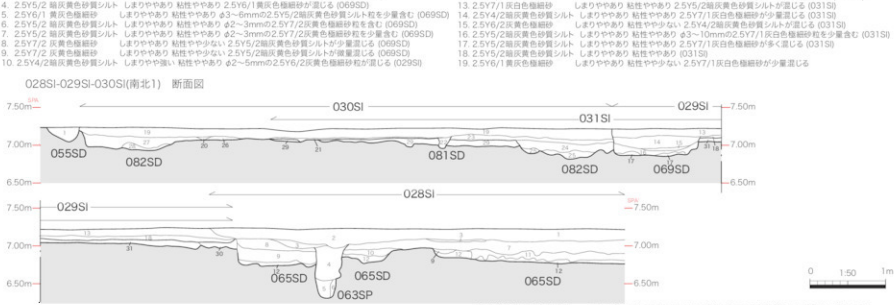
図 28　12B 区 028SI ～ 032SI 遺構図

029SI　A断面図



029SI-031SI
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒及び炭化物を微量含む (029SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや少ない 炭化物を多量に含む 白色粘土を少量含む (029SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が多く混じる (069SD)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が混じる (069SD)
5. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり φ3～6mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む (069SD)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を含む (069SD)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を少量含む (069SD)
8. 2.5Y7/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (069SD)
9. 2.5Y7/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (069SD)
10. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (029SI)
11. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (072SP)
12. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (072SP)
13. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (031SI)
14. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (031SI)
15. 2.5Y6/2灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (031SI)
16. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～10mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (031SI)
17. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (031SI)
18. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やあり (031SI)
19. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる

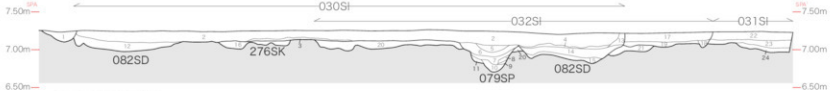
028SI-029SI-030SI(南北1)　断面図



028SI-029SI-030SI-031SI(南北1)
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (055SD)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる 炭化物を微量含む (028SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～10mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (028SI)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を微量含む (063SP)
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (063SP)
6. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる (063SP)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (028SI)
8. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い φ3～4mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を微量含む (065SD)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (065SD)
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が多く混じる (065SD)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が微量混じる (065SD)
12. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/1灰黄色砂質シルトが少量混じる (065SD)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒及び炭化物を微量含む (029SI)
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を少量含む (069SD)
15. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を微量含む (069SD)
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや強い 炭化物を微量含む (069SD)
17. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (069SD)
18. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y6/2灰黄色極細砂粒を含む (029SI)
19. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む 炭化物を微量含む (030SI)
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (030SI)
21. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの小礫と炭化物を多く含む (030SI)
22. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (081SD)
23. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (082SD)
24. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が微量混じる (082SD)
25. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (082SD)
26. 2.5Y7/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり φ2～10mmの2.5Y3/2黒褐色シルト粒を多く含む (082SD)
27. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる (082SD)
28. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が微量混じる (082SD)
29. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる (031SI)
30. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y6/2灰黄色極細砂粒を少量含む (031SI)
31. 2.5Y 6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (031SI)

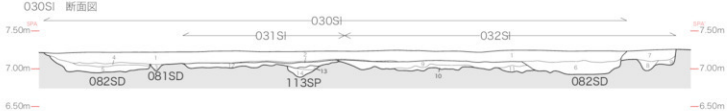
図 29　12B 区 028SI ～ 032SI 断面図

030SI-031SI-032SI(南北2)　断面図



030SI-031SI-032SI(南北2)
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (055SD)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む 炭化物を微量含む (030SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの小礫と炭化物を多く含む (030SI)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・焼土を含む (030SI)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1mm程の2.5Y7/1灰白色極細砂粒を微量含む 炭化物を少量含む (079SP)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (079SP)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 炭化物・焼土を多く含む (079SP)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (079SP)
9. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い (079SP)
10. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる (079SP)
11. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ2～3mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を含む (079SP)
12. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が少量混じる (030SI)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒と炭化物を微量含む (030SI)
14. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が微量混じる (030SI)
15. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (030SI)
16. 2.5Y7/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ2～5mmの2.5Y4/2砂質暗灰黄色シルト粒を少量含む (276SK)
17. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる　032SI
18. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (032SI)
19. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ5～10mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を含む (032SI)
20. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/1黄灰色極細砂が少量混じる (032SI)
21. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が混じる (285SP)
22. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (031SI)
23. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ5～10mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を含む (031SI)
24. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (031SI)

030SI　断面図

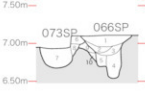


030SI-032SI
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む 炭化物を微量含む (030SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やあり φ1～2mmの小礫と炭化物を多く含む (030SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (081SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (082SD)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が混じる (082SD)
6. 2.5Y4/2 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (082SD)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (032SI)
8. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (032SI)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が少量混じる (032SI)
10. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (032SI)
11. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (032SI)
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる (031SI)
13. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性やあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる 炭化物を微量含む (113SP)
14. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y4/1砂質シルトが混じる (113SP)

0　1:50　1m

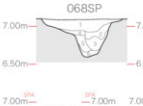
図 30　12B 区 028SI ～ 032SI 断面図

029SI内遺構　断面図　(S=1/50)



066SP,073SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む(066SP)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる 炭化物を微量含む(066SP)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり(066SP)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる(066SP)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる(066SP)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂を微量含む
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる(073SP)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂を多く含む
10. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりや強い 粘性やや少ない φ1～5mmの2.5Y4/1黄灰色砂質シルト粒を微量含む

067SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりや強い 粘性少ない φ1mm粒の2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を微量含む



068SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒と炭化物を微量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～6mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 炭化物・焼土を多く含む
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が少量混じる 炭化物を微量含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

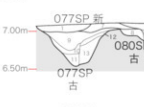
075SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

114SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

0　1:50　1m

030SI内遺構　断面図　(S=1/50)

076SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を多く含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物を微量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる



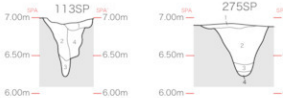
077SP-080SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む(077SP 新)
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む(080SP 新)
3. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
炭化物を微量含む(080SP 新)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが微量混じる(080SP 新)
5. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる(080SP 新)
6. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや強い 粘性少ない
φ1mm粒の2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を微量含む(080SP 新)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる(082SD)
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる(080SP 古)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ5～6mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を少量含 (077SP 古)
10. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
炭化物を含む(077SP 古)
11. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない
φ2～3mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を微量含む(077SP 古)
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる(077SP 古)

078SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒と炭化物を微量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～6mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 炭化物・焼土を多く含む
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が少量混じる 炭化物を微量含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

079SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1mm粒の2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む 炭化物を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややかない 炭化物・焼土を多く含む
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
5. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかない φ2～3mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を含む
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
8. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い
9. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる

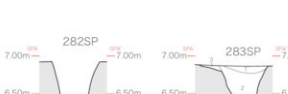
図 31　12B 区 029SI・030SI 柱穴断面図

031SI内遺構　断面図　(S=1/50)



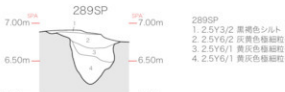
113SP
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y4/1黄灰色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/1黄灰色砂質シルトが混じる

275SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂を少量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色シルトと2.5Y7/1極細粒砂が混じる
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い
2.5Y6/2極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる



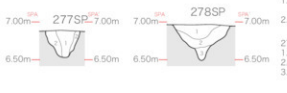
282SP
1. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが多く混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが混じる

283SP
1. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが少量混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
φ2～5mmの2.5Y3/2黒褐色シルト粒を微量含む



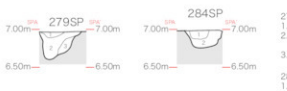
289SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない φ3～5mmの2.5Y3/2黒褐色砂質シルト粒を多く含む
4. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂 しまりやや強い 粘性やや少ない φ3～5mmの2.5Y3/2黒褐色シルト粒を微量含む

032SI内遺構　断面図　(S=1/50)



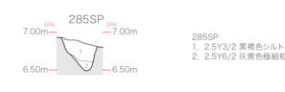
277SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂と2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる

278SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが少量混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる



279SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂と2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが少量混じる

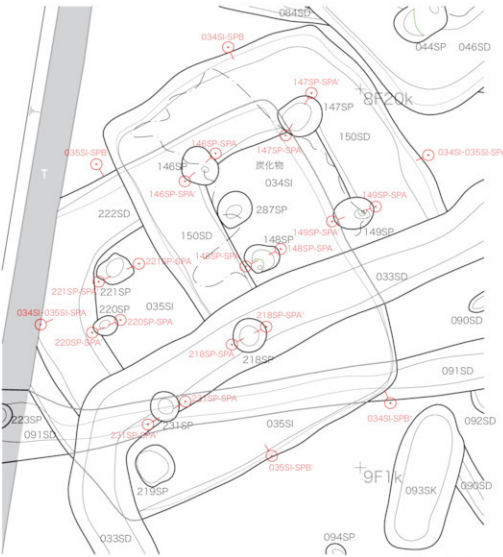
284SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 炭化物を微量含む
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる



285SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる

図 32　12B 区 031SI・032SI 柱穴断面図

034SI・035SI　調査区北西部に位置する。北東側に024SI が存在するが重複関係にない。両者が重複関係にあり、土層断面により035SI→034SI の順に構築されている。方位はほぼ同一でグリッド北から西へ約 30°振れている。平面形はともに隅丸正方形で、034SI の北辺長が約 3.6m、035SI は南辺長が約 4.9m を測る。深さは034SI が約 0.2m、035SI が約 0.1m である。いずれも壁溝は検出されていない。034SI は、主柱穴が 4 基（146SP ～ 149SP）検出さ



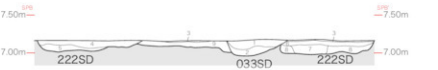
034SI・035SI A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる 炭化物を微量含む (034SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる φ1～3mmの小礫と炭化物を多く含む (034SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる 炭化物を微量含む (150SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる (150SD)
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (150SD)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (034SI)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を多く含む (035SI)
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが微量混じる 炭化物を多く含む (222SD)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる (222SD)
10. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる (222SD)
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (035SI)

図 33　12B 区 034SI・035SI 遺構図

034SI　B断面図

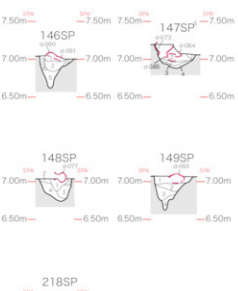
034SI B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　(033SD)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (033SD)
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり　粘性や強い 2.5Y6/2灰黄色砂質シルトが少量混じる (033SD)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる 炭化物を微量含む (034SI)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる φ1～3mmの小礫と炭化物を多く含む (034SI)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる (150SD)
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり　粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (150SD)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (034SI)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (034SI)
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる (034SI)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる 炭化物を微量含む (035SI)
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y6/2灰黄色極細砂粒を含む (222SD)
13. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (091SD)
14. 2.5Y7/2 灰黄色極細砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが少量混じる (091SD)

035SI　B断面図



035SI B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり (033SD)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (033SD)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 炭化物を多く含む (035SI)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (222SD)
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり　粘性やや強い 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (222SD)
6. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり　粘性やや強い 2.5Y7/2灰黄色極細砂が微量混じる (222SD)
7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり　粘性やや強い (222SD)
8. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり　粘性やや強い 2.5Y7/2灰黄色極細砂が多く混じる (222SD)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (035SI)

034SI内遺構　断面図　(S=1/50)



146SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y6/3にぶい黄色シルト粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性やや強い
2.5Y6/1黄灰色極細粒砂と2.5Y8/1灰白色粘土が混じる
炭化物を微量含む
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い　粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y6/1黄灰色極細粒砂粒を含む
炭化物を微量含む
5. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや弱い　粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y3/2黒褐色砂質シルト粒を少量含む

147SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり　粘性やや少ない
φ2～3mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 炭化物を多く含む
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる

148SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり弱い　粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる
炭化物・焼土を多く含む
2. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
炭化物を含む
4. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

149SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を含む
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
炭化物を含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

218SP
1. 2.5Y5/3 黄褐色粗粒砂　しまりややあり　粘性少ない 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが微量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり　粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

0　1:50　1m

図 34　12B 区 034SI・035SI・146SP・147SP・148SP・149SP・218SP 断面図

れており、それぞれの断面によれば柱を抜き取ったものと推測される。特に 147SP では土器（63 ～ 68）が多量に出土しており、抜き取り時に埋め込まれたものと考えられる。同様に 146SP や 148SP でも多量の土器が出土している。その他床面では炭化物の散布がみられ（2 層）。床面下では周溝状床下施設が全周している（150SD）。この掘り方は幅 0.5m の明瞭な掘り込みである。

一方、035SI は主柱穴 4 基（218SP・221SP・231SP・287SP）が検出されている。134SI の主柱穴に比べて浅く U 字形の断面を呈している。床面下では周溝状床下施設（222SD）がある。この幅は 0.8m 前後あり、掘り方は皿状である。

当該遺構の時期は、035SI の出土遺物が少ないことから、特定しがたいが、先述のように 134SI の主柱穴からは多量の土師器が出土しており、それとほぼ同時期の屈折脚高杯（53）や小型丸底壺（54・55）が床面上から出土してうｒので、古墳時代前期と考えられる。特に姫下遺跡の前半期と併行するとみられる。

036SI　調査区北西部に位置する。一部が調査区西壁にかかって検出されている。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は隅丸正方形で、長径 5.3m、短径 4.1m である。深さは約 0.2m で、基盤層まで掘り込まれた床面上の堆積（2 層）は、炭化物が多く含まれており、床面に広く散布している。床面では主柱穴や壁溝は検出されていない。ただし周溝状床下施設の底部でピット（202SP ～ 207SP）で検出されているが、主柱穴との関係は不明である。その床下施設（201SD）であるが、幅 0.8 ～ 1.0m の傾斜の緩い皿状の断面を呈しており、基盤層由来のブロックが多く含まれている。出土遺物は少ないが、器台（72）がある。これにより当該遺構の時期も古墳時代前期と推定される。

037SI　調査区半ばに位置する。調査区西壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から東へ約 10° 振れている。平面形は隅丸正方形で長径約 4.7m、短径 4.4m を測る。検出面からの深さは約 0.3m である。埋土は上層（1・2 層と B-B' の 3 層）が床面から上の堆積で、微量の炭化物を含んでいる。床面では壁溝が検出されていないが、断面図によれば A-A' の 3・5 層、B-B' の 5 層は壁溝に相当するとみられる。床面下の堆積（4 層）は基盤層由来のブロックが含まれている。これは掘り方に相当しており、床面下全面となっている。主柱穴は 4 基（142SP ～ 145SP）が検出されている。いずれも上端で大きく広がる断面となっていることから、柱を抜き取ったものと考えられる。出土遺物は土師器高杯（73）、甕（74）があり、当該遺構の時期が古墳時代前期と想定される。

035SI内遺構　断面図　(S=1/50)

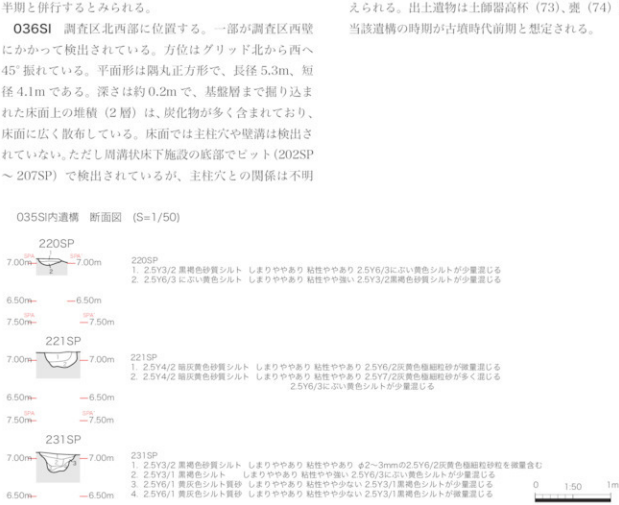
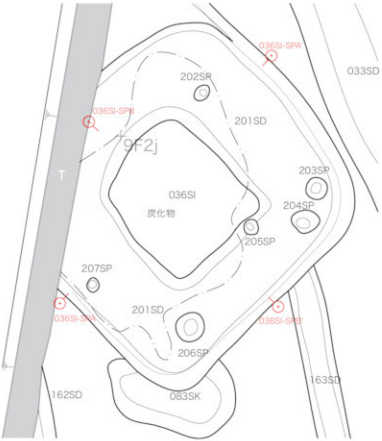


図 35　12B 区 220SP・221SP・231SP 断面図



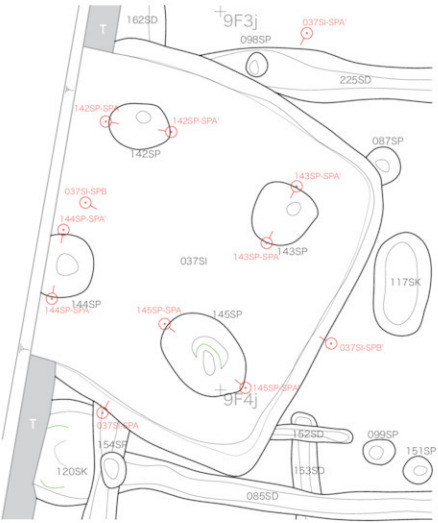
036SI　A断面図

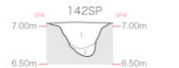
036SI A-A'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を含む 炭化物を微量含む (036SI)
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を多く含む 比較的形の残った炭化材及び焼土を多く含む (036SI)
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (201SD)
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが少量混じる (201SD)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる (木の根撹乱)

036SI　B断面図

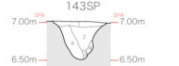
036SI B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を含む 炭化物を微量含む (036SI)
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を多く含む 比較的形の残った炭化材及び焼土を多く含む (036SI)
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (201SI)
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (201SI)
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (201SI)

図 36　12B 区 036SI 遺構図

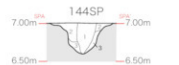




142SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
φ4～10mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を含む
炭化物を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
φ4～10mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を
少量含む
炭化物を微量含む



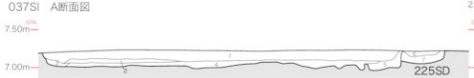
143SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり
粘性やや強い
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり
粘性やや少ない
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる



144SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
φ5～10mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり
粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

145SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
φ5～10mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり
φ5～10mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を多く含む
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり
粘性やや少ない
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが互層状に混じる
4. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや強い
粘性ややかない
φ2～3mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む
5. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや強い
粘性ややかない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
6. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや強い
粘性ややかない
φ2～3mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を微量含む

037SI　A断面図



037SI A-A'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (037SI)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む
炭化物を微量含む (037SI)
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる (037SI)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (037SI)
5. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (037SI)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (225SD)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (225SD)

037SI　B断面図

037SI B-B'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (014SD)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (037SI)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む
炭化物を微量含む (037SI)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (037SI)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる (037SI)

図 37　12B 区 037SI 遺構図

090SD　調査区北部に位置する。方形にめぐる 3 条の小溝の総体を示す。小溝の幅は約 0.3m で、深さ 0.2m である。隅部で途切れている部分が数か所あるが、もとは一連のものであった可能性が高い。方位はグリッド北から西へ約 20° 振れている。これらはその形状から竪穴建物の壁溝と考えられ、竪穴建物跡の上部が削平されてこれらが残存したものと思われる。推定される規模は、一辺が 4.0 ～ 4.2m の正方形である。ただし主柱穴に相当するピットは検出されていない。

寄島遺跡では、本報告で取り上げているように、弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡について明確な壁溝のあるものはむしろ少数派である。したがって当該遺構のような時期不詳の壁溝のみが検出された場合、奈良時代や平安時代の竪穴建物跡である可能性もあるので注意が必要である。

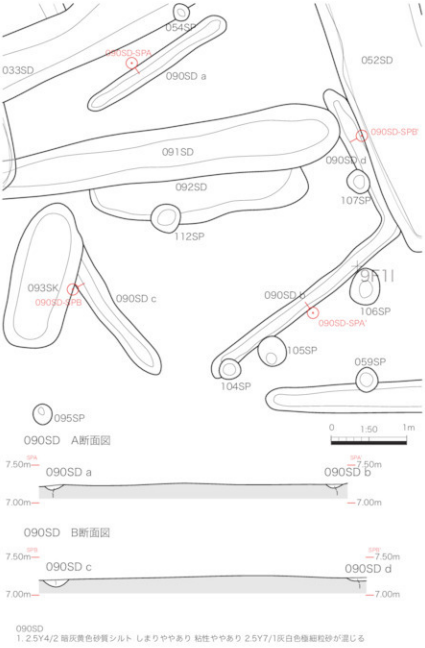
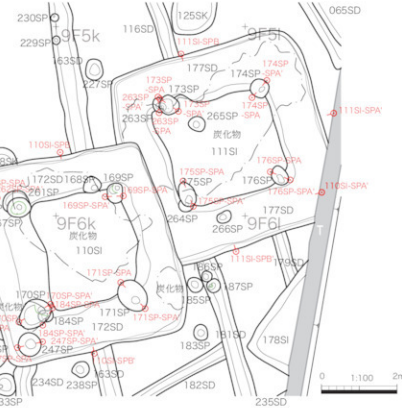


図 38　12B 区 090SD 遺構図



110SI　B断面図

110SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む
炭化物を微量含む (110SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない 炭化物を多く含む (110SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (172SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (172SD)
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い (172SD)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (172SD)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (172SD)
8. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりやや少ない 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (172SD)
9. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (110SI)

111SI　B断面図

111SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (111SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの小礫を多く含む 炭化物を微量含む (111SI)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの小礫を含む (111SI)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・焼土を少量含む (265SP)
5. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2砂質シルトが微量混じる 炭化物を多く含む (265SP)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (177SD)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (177SD)
8. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ3～5mmの2.5Y4/1黄灰色砂質シルト粒を含む (177SD)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (266SP)
10. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる (266SP)
11. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (266SP)
12. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/1黒褐色シルトが混じる (266SP)
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (177SD)
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (177SD)
15. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (111SI)

図 39　12B 区 110SI・111SI 遺構図

110SI・111SI　調査区中部やや南よりに位置する。2 基が重複関係にあり、土層断面により 111SI → 110SI の順に構築されたことが判明する。方位はともにグリッド北から約 10° 西へ振れている。平面形は隅丸正方形で、110SI は一辺約 5.4m、111SI は短径 5.0m、長径 5.2m である。壁溝はなく、それぞれ主柱穴 4 基ずつが検出されている。その断面によれば、明瞭な柱痕跡のあるものは少なく（247SP にその可能性があるものがみえる）、柱抜き取りの解体を伴っているものと考えられる。また床面で炭化物の散布がみられる。床面下では周溝状床下施設が全周しており（172SD・177SD）、いずれも幅約 1.0m の浅い皿状の断面となっている。

出土遺物は、床面上では土師器の小片が主体であるが、トレンチ掘削の際に古墳時代前期の壺（75）や鉢（79・81）などが出土している。このことから当該遺構は古墳時代前期のものと推定される。

111SI(東西1)　A断面図

111SI(東西1)A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む
炭化物を微量含む (110SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を多く含む (110SI)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を微量含む (167SP)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が多く混じる (167SP)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 2.5Y8/1灰白色極細砂が多く混じる (167SP)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が少量混じる (168SP)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が混じる (168SP)
8. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (168SP)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を含む (172SD)
10.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が混じる (172SD)
11.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (172SD)
12.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が少量混じる (172SD)
13.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が少量混じる (172SD)
14.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (172SD)
15.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が混じる (172SD)
16.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が微量混じる (172SD)
17.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (111SI)
18.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの小礫を多く含む 炭化物を微量含む (111SI)
19.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が多く混じる (177SD)
20.2.5Y7/1 灰白色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (177SD)
21.2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が少量混じる (111SI)
22.2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が微量混じる (177SD)
23.2.5Y7/1 灰白色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる (177SD)
24.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が微量混じる (111SI)
25.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (111SI)
26.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
27.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が多く混じる

111SI(東西2)A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む
炭化物を微量含む (110SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を多く含む (110SI)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細砂粒を含む (172SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が混じる (172SD)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (172SD)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が少量混じる (172SD)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細砂が少量混じる (110SI)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細砂が微量混じる (110SI)
9. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる (110SI)
10.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (110SI)
11.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む (111SI)
12.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～3mmの2.5Y7/1灰白色極細砂粒を少量含む (266SP)
13.2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる (266SP)
14.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/1黒褐色シルトが混じる (266SP)
15.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの小礫を多く含む 炭化物を微量含む (111SI)
16.2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細砂が多く混じる (177SI)
17.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂が多く混じる (177SI)
18.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂が少量混じる (177SI)
19.2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細砂が微量混じる (177SI)
20.2.5Y7/1 灰白色極細砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる (177SI)
21.2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細砂が微量混じる (111SI)
22.2.5Y6/2 灰黄色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (111SI)
23.2.5Y7/1 灰白色極細砂　　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (111SI)

110SI(東西2)　A断面図

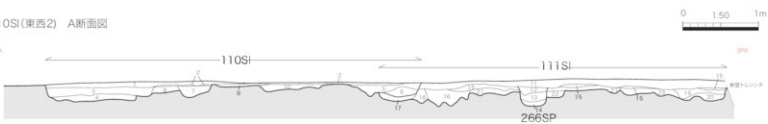


図 40　12B 区 110SI・111SI 断面図

165SX　調査区南西隅に位置する竪穴状遺構である。長径約 3.8m 以上の規模である。深さは約 0.2m である。断面では壁溝に相当する窪みがあるので竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構に位置付けられる。ただし、顕著な出土遺物もなく、時期を特定しがたい。

166SI　調査区南東隅に位置する。長径約 3.3m、短径約 2.3m の隅丸長方形である。小溝群の後に構築されている。主柱穴などは検出されておらず、小型の竪穴状遺構と位置付けられる。しかし二重口縁壺（86）などの出土遺物があるのが注目される。時期は古墳時代前期である。

169SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～4mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

170SP-172SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる (170SD)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が互層状に混じる (170SD)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～4mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む (172SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる (172SD)

171SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～4mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる

184SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が互層状に混じる

247SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ5～12mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる

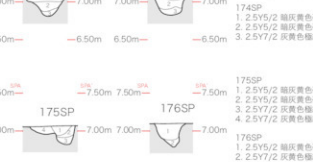
262SP
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる 炭化粒を含む
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やややすらない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

173SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

174SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる 炭化粒を含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

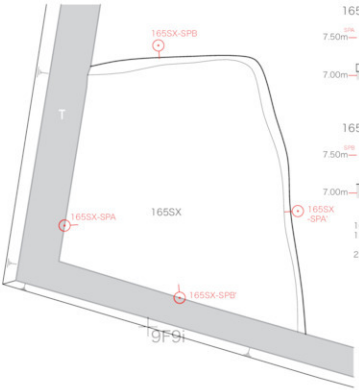
175SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～8mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
4. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やややすらない
φ3～10mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む

176SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～8mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる



263SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの小礫を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

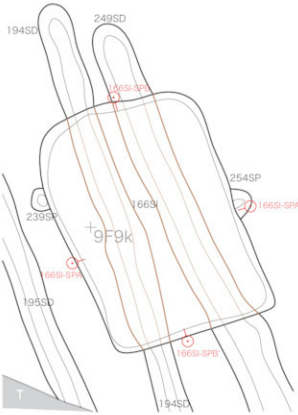
図 41　12B 区 110SI・111SI 主柱穴断面図



165SX　A断面図

165SX　B断面図

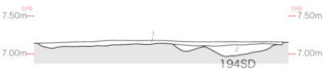
165SX
1. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる



166SI　A断面図

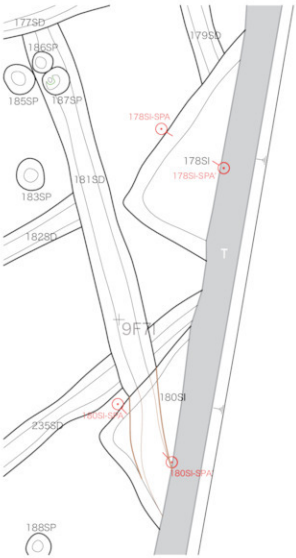
166SI
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる (166SI)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (194SD)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (249SD)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (254SP)

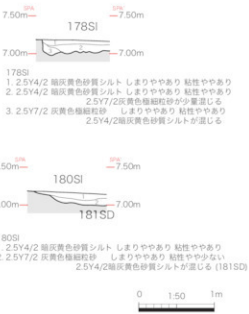
166SI　B断面図



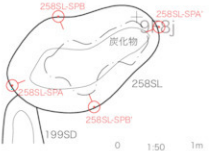
166SI B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる (166SI)
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (194SD)

図 42　12B 区 165SX・166SI 遺構図

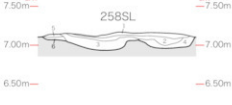




258SL　調査区南西部、掘立柱建物跡 290SB・291SB に南接する。炭化物や焼土の多い埋土で、何らかの燃焼がなされた炉跡と考えられる。隣接する掘立柱建物との関連が考えられるが、出土遺物が少なく詳細不明である。



258SL　A断面図



258SL　B断面図

258SL A-A'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・焼土を含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる
炭化物を微量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が混じる
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が多く混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

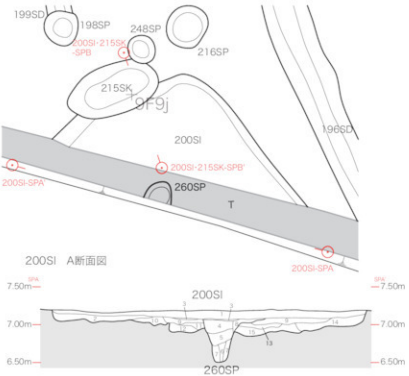
258SL B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・焼土を含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる
炭化物を微量含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y4/3暗オリーブ色シルト質砂が混じる
炭化物を微量含む
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性やや少ない
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が混じる

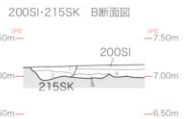
図 43　12B 区 178SI・180SI・258SL 遺構図

178SI・180SI　調査区南東部に位置する。調査区東壁にかかってごく一部が検出されている。いずれも方位はグリッド北から西へ振れている。平面形は隅丸方形である。土層断面によれば、178SI では掘り方の上に基盤層由来の砂が混じる貼り床がなされているので、竪穴建物跡とみることができる。ただし顕著な出土遺物はない。一方、180SI は掘り方が立ち上がりの緩い皿状を呈しており、竪穴建物跡と特定するにはやや難しいかもしれない。しかし下層（2 層）は基盤層由来の砂が混じる土であり、周溝状床下施設とも考えられる。出土遺物がないので時期が特定しがたいが、方位などから古墳時代前期とみられる。

200SI　調査区南壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は隅丸方形と推測される。土層断面では 1 層が床面上の堆積で、それ以下は周溝状床下施設や主柱穴（260SP）である。特に主柱穴は下部で柱痕跡の上（6 層 9 があり、その上位は除去されたものと推測される。顕著な出土遺物はないが、古墳時代前期の竪穴建物跡である。

290SB・291SB　調査区南部に位置する掘立柱建物跡である。2 時期あり、南辺の柱筋を共有し北辺で若干ずれた柱穴の関係から 291SB → 290SB の変遷が判明する。ともに 4 間 ×2 間で長径 6.3m 短径 5.7m（210SB）、長径 6.0m 短径 5.1m（211SB）である。柱間間隔は桁行（長径方向）で 1.5 ～ 1.6m、梁行（短径）で 2.6 ～ 2.8m を測る。柱根相当の上層が一部でみられるが大方の柱は抜き取られて解体されたものとみられる。顕著な出土遺物がないが、竪穴建物跡と重複していないことから同時並存したとみられ、古墳時代前期に位置付けられる。



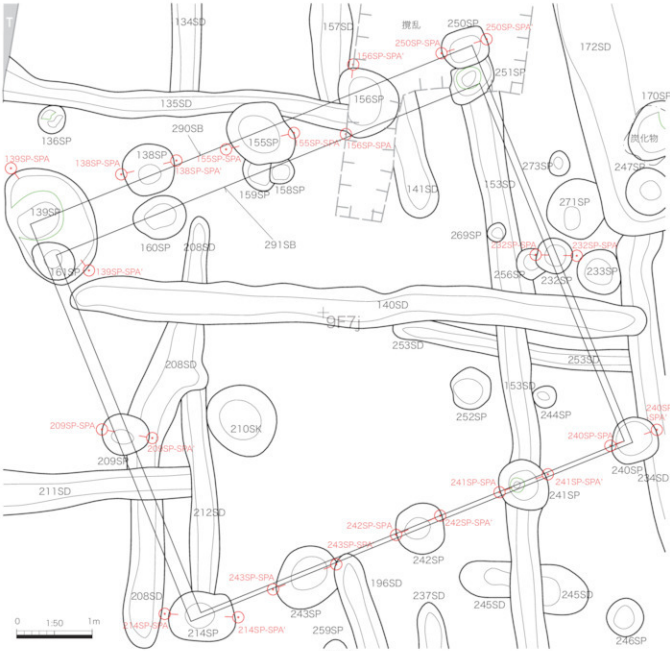


200SI-215SK B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
　粘性ややあり (215SK)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
　粘性ややあり
　2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂が多く混じる (215SK)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり
　粘性ややあり (200SI)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり
　粘性ややあり
　2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる (200SI)
5. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり
　粘性やや少ない
　2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが微量混じる (200SI)

0　1:50　1m

200SI A-A'
a. 5YR6/1 褐灰色シルト質砂　しまり弱い 粘性少ない φ2～5mmの小礫を含む
b. 5YR6/3 にぶい橙色粗粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ2～5mmの小礫を多く含む
c. 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない φ1mm程の小礫を含む
d. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの小礫を含む
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (260SP)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (260SP)
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる (260SP)
7. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる (260SP)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (260SP)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ3～7mmの2.5Y6/2灰黄色極細粒砂粒を微量含む (200SI)
10. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる (200SI)
11. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色が混じる (200SI)
12. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる (200SI)
13. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる (200SI)
14. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる (200SI)
15. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (200SI)

図 44　12B 区 200SI 遺構図



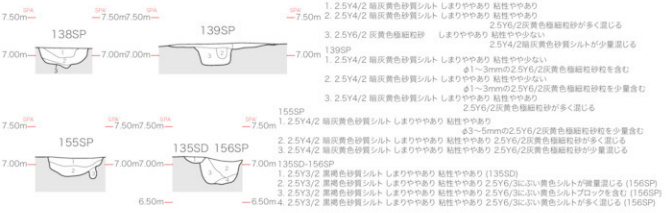
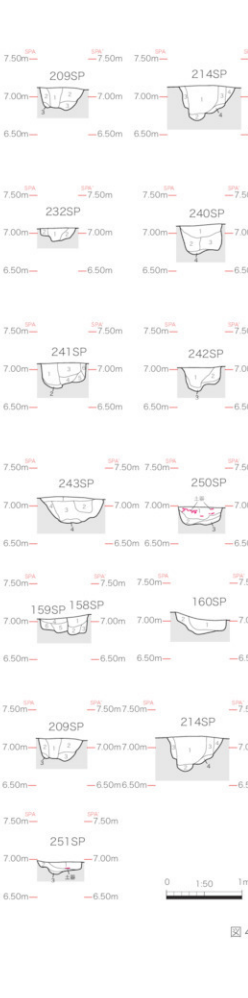


図 45　12B 区 291SB 遺構図



209SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

214SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/2灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

232SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

240SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ3～4mm0.2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる

241SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を微量含む
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる

242SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ3～4mm0.2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる

243SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ3～4mm0.2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる

250SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色シルトが混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない
φ2～3mm0.2.5Y3/2黒褐色砂質シルト粒を微量含む

158SP-159SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (158SP)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (158SP)
3. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる (158SP)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が微量混じる (159SP)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (159SP)
6. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (159SP)

160SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
炭化物を微量含む

209SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

214SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mm0.2.5Y7/2灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

251SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ3～7mm0.2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる

図 46　12B 区 291SB 柱穴断面図

033SD　調査区北部に位置する区画溝である。方位はグリッド北から約 20° 西へ振れている。その南西部分が約 12m、直角に折れた北西部分が約 9m 検出されており、全長 21m 以上を測る。幅約 1.1m、深さ約 0.4m でほぼ一定している。溝の断面形は皿状を呈している。土層は概ね上・下 2 層に区分されともに砂質シルトの堆積となっているが、一部（南西部分）に底部付近で黒褐色シルトの堆積がみられる。当該遺構の埋土からは比較的多数の土師器が出土しており、その器種も高杯（88・89）、ミニチュア鉢・鉢（91 ～ 93）、二重口縁壺（94）、壺（99 ～ 101）、甕（95・102）などが出土している。ただし高杯がやや少ない印象を受け、その時期も屈折脚高杯が登場以前に限定されるよ

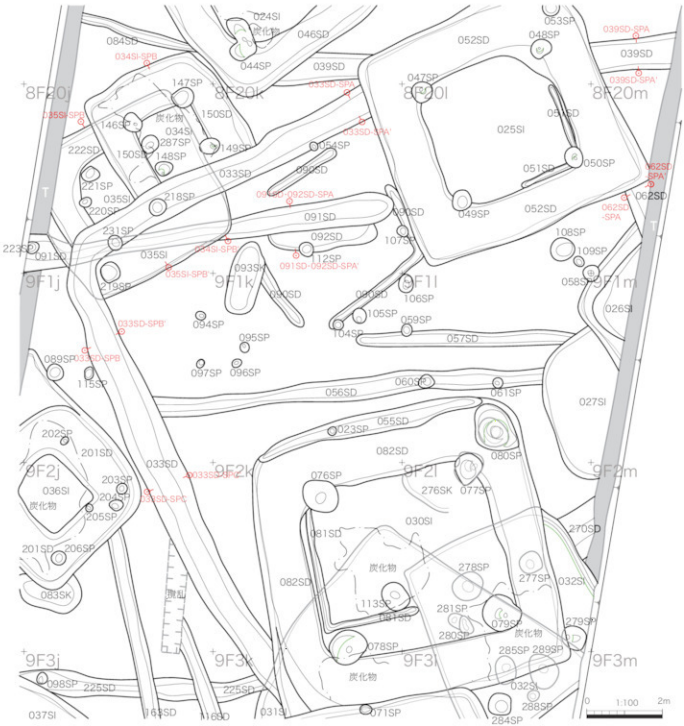


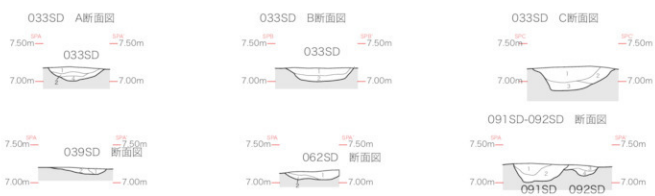
図 47　12B 区 033SD 平面図

うである。

033SD は他の遺構と各所で重複関係にあるが、北西隅部で竪穴建物跡 035SI →同 034SI → 033SD という変遷が確認され、その東では 033SD →竪穴建物跡 025SI、南部で竪穴建物 031SI → 033SD →竪穴建物跡 030SI →竪穴建物跡 029SI という変遷がみられる。少なくともこれらの建物との同時並存はありえないので除外すると、033SD が区画溝として機能していた時期には、031SI を切り込む 032SI が 033SD から北東へ約 3m 離れているいることから同時期に存在していた可能性が考えられる。

以上、出土遺物からは古墳時代前期の時期が考えられ、遺構の重複関係では姫下遺跡前半期に併行する（屈折脚高杯が出土）竪穴建物跡 034SI に後続し、かつほぼ同時期の土器が出土する 030SI に先行していることが確認される。したがって 003SD が機能していたのは姫下遺跡前半期の中に収まるが、もともと竪穴建物が建てられていた場所を一時的に区画し、再び竪穴建物を建てている変遷について は、集落全体あるいは姫下遺跡や姫小川古墳などとの関連で注意したおかねばならないと考える。

図 48　12B 区全景（北から）



039SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない φ3～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む

062SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

091SD-092SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (091SD)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (091SD)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる (092SD)
4. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる (092SD)

0　1:50　1m

図 49　12B 区 033SD・039SD・062SD・091SD・092SD 断面図

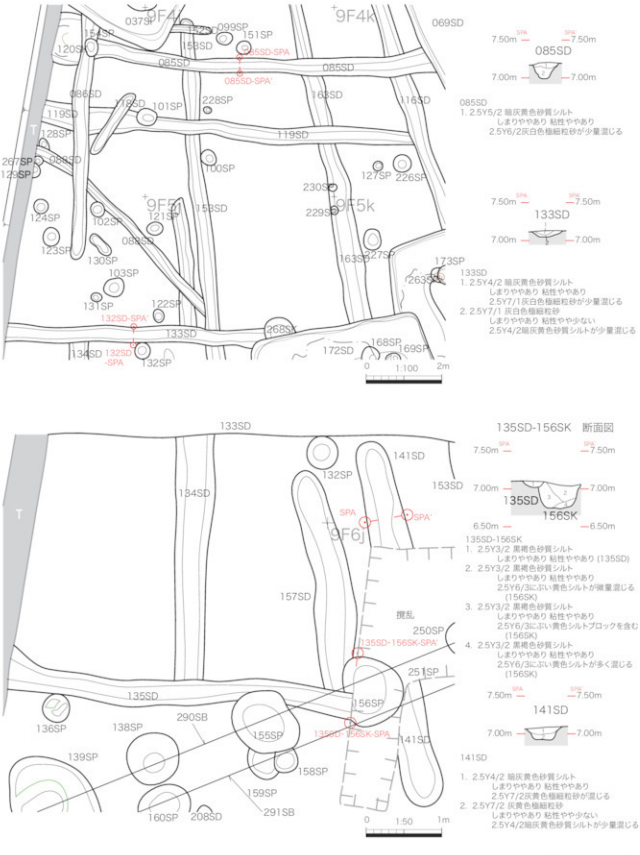


図 50　12B 区 085SD・133SD・136SD・156SK・141SD 遺構図

12B 区の小溝群　12B 区で検出された小溝群はほとんどが竪穴建物跡が先行している。調査区北西隅付近を起点として放射状に延びる長い一群（153SD・163SD・181SD など）がある一方、それに直交する 133SD などの短い一群がある。顕著な出土遺物がないものの 163SD などは複数回の掘り返しが想定され、小溝の機能については参考になろう。またこれらの先後関係は編み物のように複雑になっており、この整理が必要であるが、他の調査区の含めて再検討が必要である。

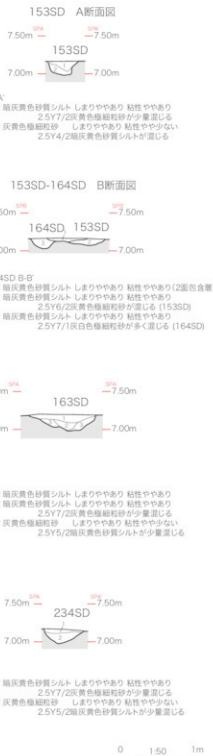


図 51　12B 区 153SD・163SD・164SD・234SD 遺構図

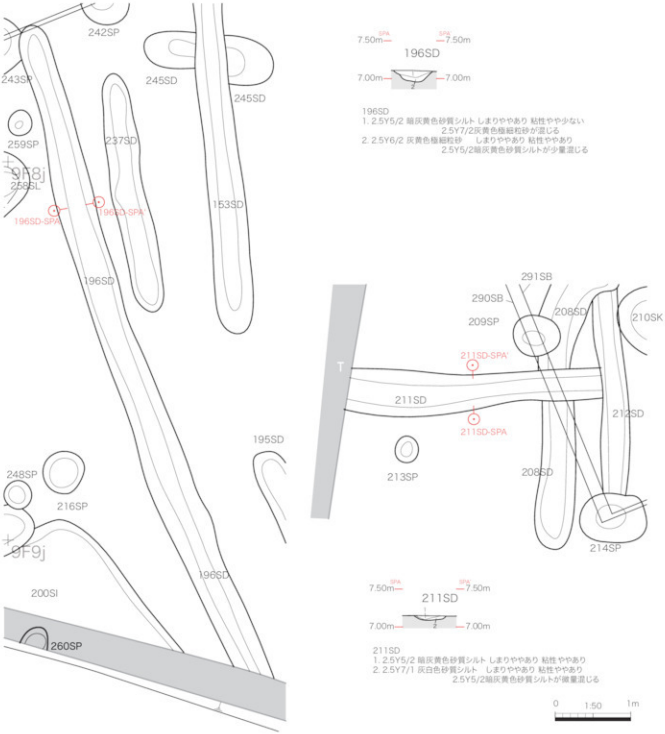
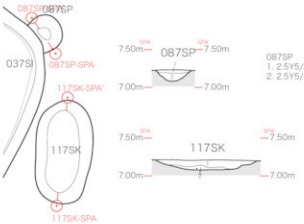


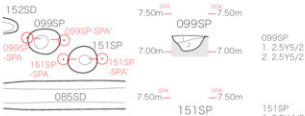
図 52　12B 区 196SD・211SD 遺構図



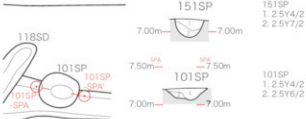
087SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

117SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ3～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

280SP-281SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる(280SP)
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y3/2黒褐色シルトが微量混じる(280SP)
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる(281SP)

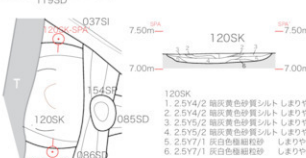


099SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる



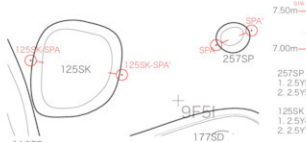
151SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

101SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量含む
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる



120SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない 7.5YR5/6明褐色焼土と炭化物を多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～6mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

0　1:50　1m



257SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3～5mmの2.5Y7/2灰黄色極細粒砂粒を少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる

125SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

図 53　12B 区 SK・SP 遺構図

第 4 節　12A 区の遺構

概要　遺構検出面は 2 面で、第 1 遺構面では調査区南部で竪穴建物跡 1 基が検出されている（020SI）。これは基盤層が北から南へ上昇しているために、030SI 付近は表土掘削した時点ですでに基盤層上面が露出していた。

第 1 遺構面では、調査区西壁にそって落ち込み 024SX と南北に長い小溝 3 条が検出されている。上述したように調査区南部では第 2 遺構面との区分ができない状態であり、竪穴建物跡 020SI はその過程で調査したものであったが、それ以外の遺構については基本的に古墳時代前期の集落より新しい時期の遺構であると考えられる。一方、第 2 遺構面は基本的に基盤層の灰色砂層の上面を検出面としている。

024SX　024SX は調査区西壁から約 5m の幅で南北に長く検出された落ち込みである。埋土は黒褐色シルトで、基盤層を覆っている弥生時代～平安時代の遺物包含層（K 層）とみられる。このことは調査区西方へ向かって下る地形が存在していることを示している。しかしその一方で 013B 区で確認されている鹿乗川旧河道が、本遺跡の東側へ回り込んでおり、西側には段丘崖との間に別の河道があった可能性をうかがわせる。現時点ではそれが鹿乗川旧河道の分流したものか段丘の開析谷から流出した別の河川に関係しているのかは明らかではない。

001SD　調査区北端付近に端部のあるほぼ南北方向に延びる小溝である。調査区南壁からさらに南へ延びている。検出された全長は約 50m で、幅は約 0.6m、深さ約 0.2m である。顕著な出土遺物はないが重複関係にある 022SD が平安時代以降とみられるので、当該以降もそれより新しい時期と推定される。

022SD　調査区北端から南西部へ延びる小溝である。調査区北壁からさらに北へ延びている。北端付近で 001SD と重複し、これに先行する。また南端は竪穴建物跡 020SI 付近である。検出された全長は約 39m、幅約 0.6m、深さ約 0.1m である。当該遺構からは灰釉陶器皿（177）が出土しており、9 世紀代とみられる。溝が機能した時期はそれ以降と推定される。

016SB　調査区南西隅で検出された掘立柱建物跡である。長径を桁行と仮定するとその方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。規模は桁行 4.1m、梁行 2.1m の 1 間×2 間である。柱間間隔が約 2.0m である。柱穴は 010SP ～ 015SP の 6 基が検出されているが、いずれも深さ 0.2m 以下と浅い。基盤層までも大きく削平されているためとみられ、柱根などの詳細状況や出土遺物に関しては十分な情報が得られていない。ただし、建物方位や第 2 遺構面で重複する地点に古墳時代前期の掘立柱建物跡 347SB が検出されていることなどから、当該遺構も古墳時代の集落に属するものと考えることができる。

020SI　調査区南部に位置する。方位はグリッド北から西へ 45° 以上振れている。平面形は隅丸正方形で一辺の長さが約 4.2m を測る。検出面からの深さは約 0.4m あり、付近が基盤層まで削平を受けているわりには、比較的残存状況が良好であった。床面では主柱穴が検出されなかったが、壁溝はほぼ全周しているのが確認されている。また床面ほぼ全面で炭化物の散布が認められる。貼り床は断面図

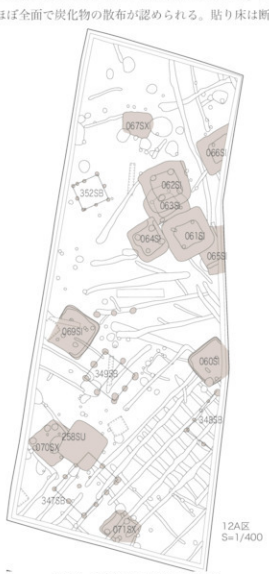


図 54　12A 区建物遺構分布図

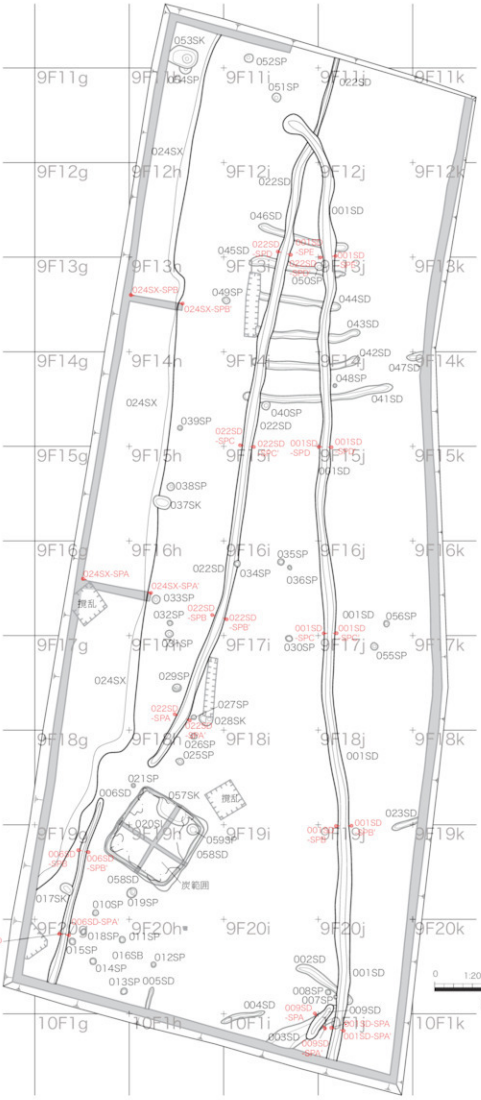
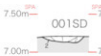


図 55　12A 区第 1 遺構面全体図

001SD A断面図



001SD B断面図

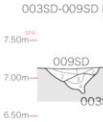
001SD C断面図

001SD D断面図

001SD E断面図

001SD
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/2 灰黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない 2.5Y3/3オリーブ褐色砂質シルトが混じる

003SD-009SD 断面図



003SD-009SD
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり（003SD）
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない
2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂を多く混じる（003SD）
3. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト しまりややあり
粘性ややあり（009SK）
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない
2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂を多く混じる（009SK）

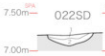
006SD A断面図

006SD B断面図

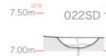
006SD A-A'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない
2.5Y6/3にぶい黄色極粗砂ブロックを少量含む

006SD B-B'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり（Aの1層と同層）

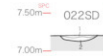
022SD A断面図



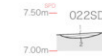
022SD B断面図



022SD C断面図



022SD D断面図



022SD
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない 炭化物を少量含む

024SX A断面図

024SX A-A'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
5. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が多く混じる（259SK）
6. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

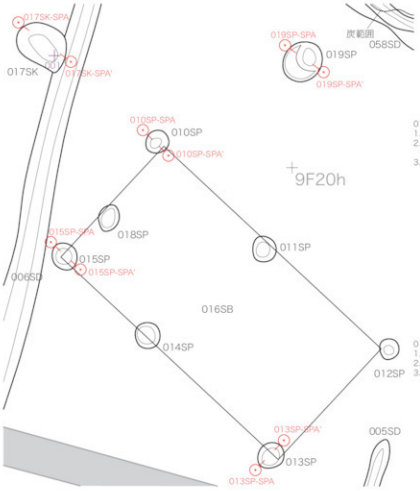
024SX B断面図

024SX B-B'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y4/2 暗黄灰色砂質シルト　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる
5. 2.5Y4/2 暗黄灰色極細粒砂　　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂　　しまりややあり 粘性ややあり
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂　　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂が混じる
8. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂　　しまりやや強い 粘性やや弱い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図 56　12A 区 001SD・003SD・006SD・022SD・024SX 断面図

の 6 層以下が相当し、基盤層由来のブロックが含まれている。また北壁に沿ったごく一部で周溝状床下施設が検出されてい（057SK）。057SK の底面は平らで立ち上がりも明瞭である。埋土は基盤層由来の砂が混じっているので、すぐに埋め戻されていると考えられ、このような状況から床下施設と想定される。またその東隣の床面北東隅には円形の土坑 059SP がある。直径が約 0.6m、深さ約 0.3m の碗形の断面形をしている。特段埋土に特徴はみられないが、その位置や断面形状からすると貯蔵穴の可能性が考えられる。

020SI は埋土の残存状況が良好であるため、遺物も比較的多く出土している。土師器の屈折脚高杯（114）、小型壺（116）、二重口縁壺（117）、甕（119）がある。これらは姫下遺跡と併行期にあるもので、このことから 020SI も古墳時代前期でも後半段階と想定される。また石製品では摺石（S6）があり、先端に微量の赤色顔料が付着している。



017SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂を多く混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性少ない
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる（124SK）

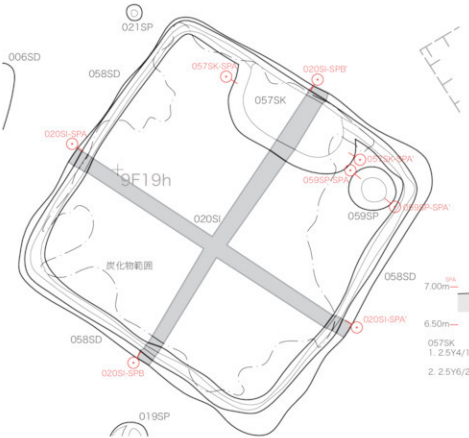
019SP
1. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 しまりややあり 粘性少ない
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる

010SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 しまり弱い 粘性少ない
φ2mm程度の2.5Y5/3黄褐色極細粒砂が混じる

013SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 しまり弱い 粘性少ない
φ2mm程度の2.5Y5/3黄褐色極細粒砂が混じる

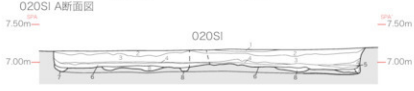
015SP
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ色砂シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色粘砂が混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 しまい弱い 粘性少ない
φ2mm程の2.5Y5/3黄褐色極細粒砂が混じる

図 57　12A 区 016SB 遺構図



057SK
1. 2.5Y4/1 褐灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/2灰黄色極細粒砂を少量含む
2. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性少ない
　　2.5Y4/1褐灰色砂質シルトがまじる

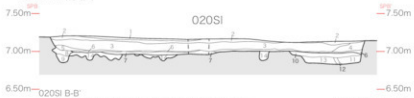
020SI A断面図



020SI A-A'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を多く含む (B の1層と同層)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
4. 10YR2/1 黒色砂質シルト　しまりなし 粘性なし 炭化物を非常に多く含む
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
6. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる
7. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (058SD)
8. 2.5Y7/1 灰白極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

059SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる
　　炭化物を含む
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性ややあり
　　2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる

020SI B断面図



020SI B-B'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
　　炭化物を多く含む(A の1層と同層)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
　　2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が混じる
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
　　2.5Y6/2灰黄色極細粒砂が少量混じる
5. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり
6. 10YR2/1 黒色砂質シルト　　しまりなし 粘性なし 炭化物が非常に多く含む
7. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない
　　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる
8. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり
　　2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる (058SD)
9. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性少ない
　　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (058SD)
10. 2.5Y4/1 褐灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/2灰黄色極細粒砂を少量含む (057SK)
11. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂 しまりやや弱い 粘性少ない
　　2.5Y4/1褐灰色砂質シルトが少量混じる (057SK)
12. 2.5Y4/1 褐灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物が少量混じる
13. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細粒砂 しまりやや弱い 粘性少ない
　　2.5Y4/1褐灰色砂質シルトが混じる
14. 2.5Y7/1 灰白極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
　　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図 58　12A 区 020SI 遺構図

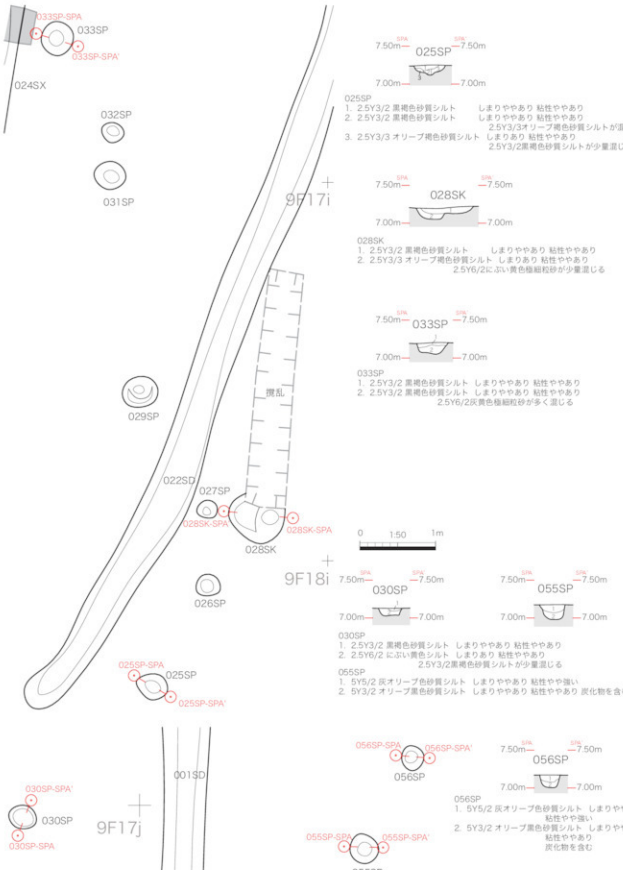
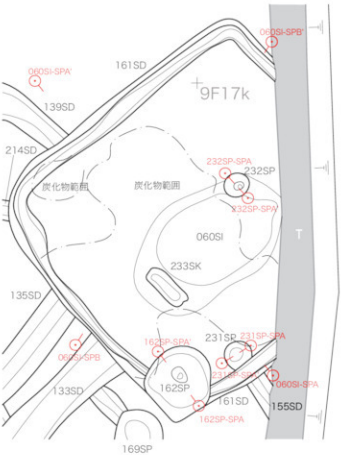
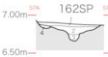


図 59　12A 区 025SP・028SK・030SP・033SP・055SP・056SP 遺構図



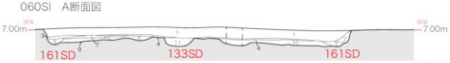


162SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y6/3に ぶい黄色シルトが多く混じる
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が多く混じる (161SD)

231SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y5/1黄灰色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
φ2mm程の2.5Y3/2黒褐色砂質シルト粒を微量含む

232SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
10YR4/3に ぶい黄褐色シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性やや強い
3. 2.5Y6/3 に ぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

060SI　A断面図



060SI A-A'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの2.5Y6/3に ぶい黄色シルトを少量含む 炭化物を微量含む
2. 2.5Y6/3 に ぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3に ぶい黄色シルトが少量混じる
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性やや少ない 炭化物を多く含む
5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる (161SD)
6. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が多く混じる (161SD)
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3に ぶい黄色シルトが少量混じる
8. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1極細粒砂を微量混じる 炭化物を微量含む
9. 2.5Y6/3 に ぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる
10. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性やや強い (133SD)

060SI　B断面図

0　1:50　1m

060SI B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり φ1～2mmの2.5Y6/3に ぶい黄色シルトを少量含む 炭化物を微量含む
2. 2.5Y6/3 に ぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3に ぶい黄色シルトが少量混じる
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性やや少ない 炭化物を多く含む (161SD)
5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂が少量混じる (161SD)
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト　しまりやや弱い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが多く混じる

図 60　12A 区 060SI 遺構図

060SI　調査区中部に位置する。第２遺構面で検出されている。調査区東壁にかかって検出されている。他の竪穴建物跡との重複関係はない。方位はグリッド北から 45°西へ振れている。平面形は隅丸正方形で、一辺約 4.1 ～ 4.2m を測る。深さは約 0.3m である。床面では主柱穴は検出されていない。一方で全周する壁溝が確認されている。また床面の南西半部では炭化物の散布が認められる。

床面南西隅では直径 0.9 ～ 1.0m、最深部の深さ 0.3m の円形土坑（162SP）。全体に深さ約 0.2m の皿状を呈しているが、その中央部に小ピットの最深部がある。埋土には特徴がなく、その位置や規模から貯蔵穴と推測されるが、最深部の存在も考慮すると柱穴の一つであるかもしれない。これに関連して床面中央部で検出された 232SP は中心に柱根の痕跡が認められるので、これも土屋構造を支える柱穴であった可能性がある。そして床面下には、周溝状床下施設がある。その幅は 1.5 ～ 2.0m あり浅い皿状の断面である。

出土遺物は比較的多く、土師器屈折脚高杯（124・125）や二重口縁壺（128・129）、甕（127 など）、S 字状口縁台付甕（133）がある。古墳時代前期でも前半段階の一まとまりと考えられ、060SI の時期もその頃が想定されよう。

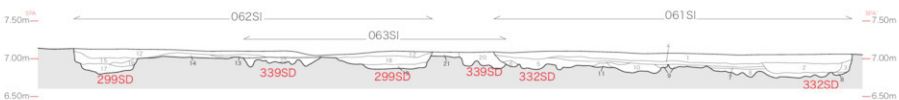
061SI ～ 065SI　調査区北東部に位置する。重複する竪穴建物跡５基で、063SI → 062SI・061SI → 064SI と、065SI → 061SI の順に構築されている。いずれも方位はグリッド北から西へ 30 ～ 40°振れている。平面形は隅丸正方形で、一辺の長さは 061SI で 4.7 ～ 4.8m、062SI で約 4.8m、063SI で約 4.4m、064SI は長径約 4.0m、短径約 3.4m を測る。いずれの床面でも主柱穴が４基ずつ検出されており、064SI の主柱穴の一部（306SP）以外では柱根が完全に抜き取られている。また 063SI の主柱穴の１つである 340SP では柱が抜き取られた後に台付甕（175）がほぼ完形で埋め込まれている。

床面下について、061SI ～ 064SI では周溝状床下施設が検出されており、061SI の断面によれば、一旦大雑把な掘り込みをした後に底面の地業を行い（9 層）、それに対して床下施設を掘り込んでいる（4 ～ 7 層）。その後貼り床を施工（3 層 9 しており、床面を作り出すのにいくつもの工程があることが判明する。065SI は薄い堆積しか残っていないので明瞭ではないが、壁溝とみられる掘り込み（065SI B 断面の２層）がある。

出土遺物は、先述した 063SI 主柱穴 340SP の台付甕を始めとし、061SI では S 字状口縁台付甕（137）や二重口縁壺（142）、062SI でも S 字状口縁台付甕（148）、064SI では小型の高杯（151・152）がある。最も先行する 063SI でも土師器甕（150）があるので、これらの遺構群全体の時期幅は古墳時代前期の間に収まるものと考えられる。

図 61　12A 区 061SI ～ 065SI 平面図

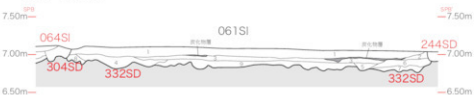
061SI-062SI-063SI　A断面図



061SI.062SI.063SI A-A'
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりやややり 粘性ややあり 炭化物を微量含む 底面に炭化物及び粗粒砂が堆積する(061SI)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが微量混じる(061SI)
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややや強い 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる(061SI)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物及び粗粒砂が互層状に堆積する(061SI)
5. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる(061SI)
6. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/1黄灰色砂質シルトが少量混じる(061SI)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる(061SI)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる(061SI)
9. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる(061SI)
10. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややや弱い 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる(061SI)
11. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトを微量含む(061SI)
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる(062SI)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂ブロックを含む 炭化物微量含む(062SI)
14. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる(062SI)
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる(062SI)
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり(062SI)
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトを含む(062SI)
18. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる(062SI)
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトを含む(062SI)
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる(063SI)
21. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる(063SI)
22. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる(063SI)

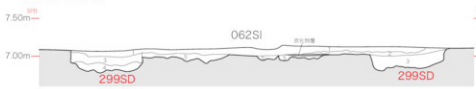
0　1:50　1m

061SI　B断面図



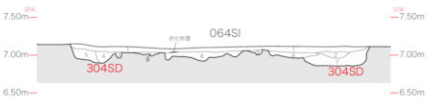
061SI B-B'
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややや 粘性ややあり
炭化物を微量含む 底面に炭化物及び粗粒砂が堆積する
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
炭化物及び粗粒砂が互層状に堆積する
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂を少量含む
5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂を少量含 炭化物を微量含む
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
9. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややや弱い 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

062SI　B断面図



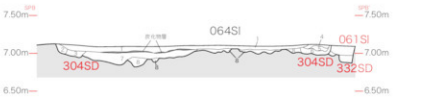
062SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
底面に炭化物及び粗粒砂が堆積する
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトを含む
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

図 62　12A 区 061SI ～ 063SI 断面図



064SI A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりや弱い 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりや弱い 粘性ややあり φ3～7mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を含む
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが少量混じる
9. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが微量混じる

065SI　B断面図



064SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりや弱い 粘性ややあり φ3～7mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を含む
4. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1極細粒砂が微量混じる
5. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1極細粒砂が多く混じる
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
7. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが少量混じる
8. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが微量混じる

065SI B
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりや弱い 粘性やや強い
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y5/2暗灰黄色シルトが多く混じる(242SK)

061SI内遺構　断面図

333SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物を微量含む
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる 炭化物を微量含む

334SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 層下面に炭化物が堆積する
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・小礫を微量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

335SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3mm程の2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒及び炭化物を微量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

336SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 層下面に炭化物が堆積する
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物・小礫を微量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

346SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～3mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

図 63　12A 区 064SI・065SI 主柱穴断面図

062SI内遺構　断面図

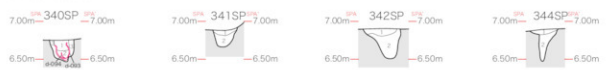
300SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる 炭化物を微量含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに φ3～5mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を含む

301SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

302SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや強い 粘性やや弱い　2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が微量混じる
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる
5. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに φ2～8mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を含む
6. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに φ2～8mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む
7. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに φ5mm程の2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を少量含む
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに φ5mm程の2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を微量含む

303SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる (229SD)
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性ややかすかに (地山)
7. 2.5Y8/1 灰白色細粒砂　しまりやや強い 粘性ややかすかに (地山)

063SI内遺構　断面図



340SP
1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

341SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

342SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂がややや多く混じる

344SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
炭化物を微量含む

0　1:50　1m

064SI内遺構　断面図

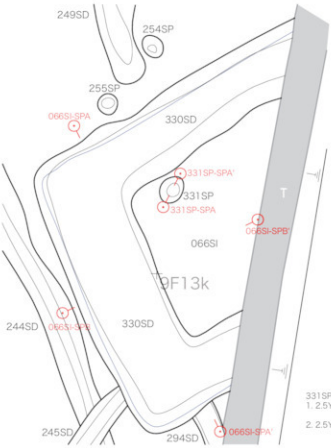
305SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり　2.5Y7/1極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性やや弱い 2.5Y7/1極細粒砂が混じる
4. 2.5Y8/1 灰白色細粒砂　しまりややあり 粘性少ない
φ3mm程の2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒が微量混じる
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性少ない (地山)
6. 2.5Y8/1 灰白色細粒砂　しまりやや強い 粘性少ない (地山)

306SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂ブロックを含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性やや弱い
2.5Y7/1極細粒砂が混じる

307SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性ややあり
φ3～8mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややかすかに
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

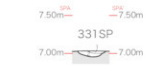
308SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を少量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

図 64　12A 区 062SI ～ 064SI 主柱穴断面図



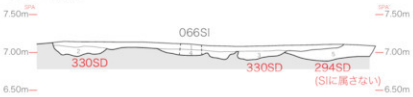
066SI　調査区北東部に位置する。調査区東壁にかかって検出されている。他の竪穴建物跡との重複関係はない。方位はグリッド北から西へ振れている。平面形は隅丸方形で長方形になる可能性もある。長径約 4.0m 以上、短径約 3.9m を測る。検出面からの深さは約 0.1m である。床面では主柱穴と特定できるピットは検出されていないが、浅い掘り込みである 331SP がある。また壁溝はない。床面下には周溝状床下施設が全周している。

出土遺物は、二重口縁壺 (158) や台付甕 (159) があり、古墳時代前期に位置付けられる。遺構の時期も同じに想定される。



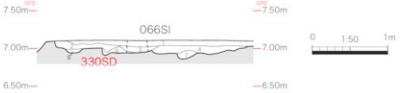
331SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

066SI A断面図



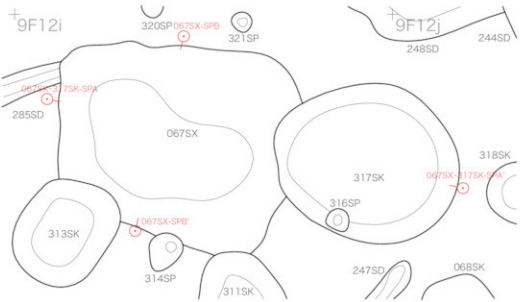
066SI A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる(330SD)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが微量混じる(330SD)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (294SD)

066SI B断面図



066SI B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂と2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
5. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややかなり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
6. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりやや弱い 粘性ややかなり 2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが少量混じる
7. 2.5Y5/2 暗黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

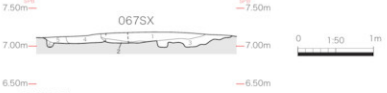
図 65　12A 区 066SI 遺構図



067SX A断面図

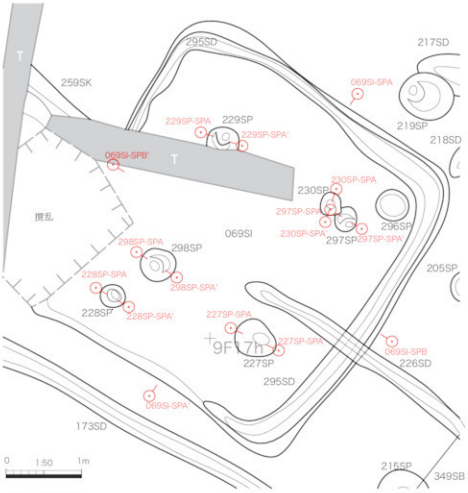
067SX-317SK A-A'
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる (317SK)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる (317SK)
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂ブロックを含む (317SK)
4. 2.5Y7/1 灰白色極細砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる (317SK)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が微量混じる 炭化物を少量含む (067SX)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む (067SX)
7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる (067SX)
8. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる (067SX)

067SX B断面図

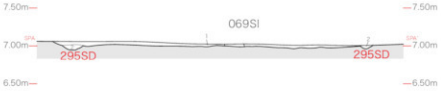


067SX B-B'
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が微量混じる 炭化物を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が微量混じる 焼土・炭化物を多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト及び2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
5. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる
6. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり 粘性ややあり φ4~6mmの2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト粒を多く含む

図 66　12A 区 067SX・317SK 遺構図

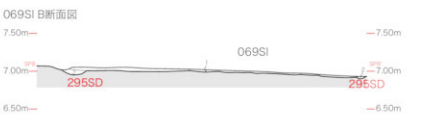


069SI A断面図



069SI A-A'
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる(295SD)

069SI B断面図

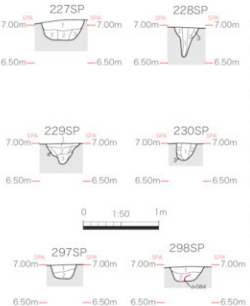


069SI B-B'
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる(295SD)

図 67　12A 区 069SI 遺構図

069SI　調査区中部の西よりに位置する。方位はグリッド北から西へ 60° 近くまで振れている。平面形は隅丸正方形で一辺の長さが約 4.3 ～ 4.6m を測る。遺構検出面からの深さは約 0.1m で、きわめて薄くしか残存していない。埋土（1 層）は壁溝（2 層）との関係から床面上の堆積とみられる。壁溝は全周していたとみられるが、全体に浅く南西部を中心に検出されなかった。主柱穴は 4 基が検出されている。一部（228SP・230SP）では土層で柱根が認められる。

当該遺構は顕著な出土遺物がなく時期の特定が難しいが、建物方位や規模から古墳時代前期に属すると想定される。



227SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が混じる

228SP
1. 2.5Y8/1 灰白色粗粒砂　しまりやや弱い 粘性少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が多く混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

229SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

230SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ10mmの2.5Y7/1灰白色シルト質砂及び炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ10mmの2.5Y7/1灰白色シルト質砂を少量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色シルト質砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

297SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる

298SP
1. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が少量混じる

図 68　12A 区 069SI 主柱穴等断面図

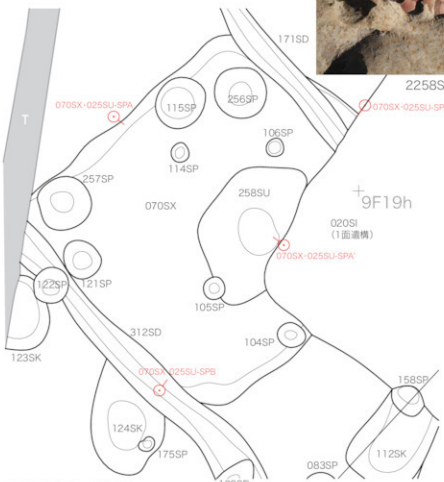
070SX・258SU　調査区南西隅に位置する。竪穴建物跡 020SI と重複しこれに先行する。方位は 020SI とほぼ同じで西へ大きく振れている。平面形は隅丸方形で長径 4.2m、短径 3.9m を測る。検出面からの深さ約 0.1m である。埋土は基本的に 1 層であるが、後述する土器集積（258SU）が後から掘り込まれている（2 層）。土層断面でも明らかにように底面が不安定であり、竪穴建物跡の可能性は低い。

258SU は当初 020SI の調査段階で明らかになった遺構である。当該遺構は 020SI の西側に位置し、020SI に切り込まれる形で、土器集積が断面で検出されている。その後、土器集積の周辺で竪穴建物跡の可能性を想定し 070SX に検出に至ったが、実質は土器集積部分に限定される。

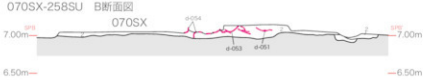
258SU の規模は長径約 2.0m、短径約 0.5m、、深さ約 0.3m の浅い皿状の土坑である。この範囲内から弥生時代中期前半の土器（179 ～ 183）が混在して出土している。この状況から土器群は廃棄されたものと推測される。いずれも壺で、179 ～ 181 では下半部がない点が共通している。底部の小片がみられないことから、廃棄段階ですでになかったものと推測される。したがって当該遺構が、後述する 124SK と同様の土器棺墓であったものが 020SI などの竪穴建物が構築されるにあたって削平され、その一部が破壊されて細片化したものが出土した可能性を提示しておく。すなわち 258SU 出土した完存の壺 2 点（182・183）に対して、壺上半部 179 ～ 181 が盆状に覆っていた状況が復元される。ただしこの場合、蓋とされた土器が 3 点となってしまう。しかし後述する 124SK では蓋に相当する土器がないので、179 ～ 181 のいずれかが 124SK から移動してきた可能性も考えられる。このような想定も踏まえると、258SU の土器集積は原位置に近いものの、片付けられた状態であったのかもしれない。

124SK　070SX・258SU の南側に位置する。楕円形の土坑で、長径約 1.6m、短径約 1.0m、深さ約 0.2m を測る。堆積状況の詳細は不明であるが、弥生時代中期前半の異形な壺（178）が出土している。この壺は肩部から上方の破片が全くないことから、もともと欠き取られていたものと考えられる。このような状況は通常のしまうでは考えにくく、258SU と同様に土器棺に使用されたものと考えられる。

2258SU 出土状況（南東から、手前が 020SI）

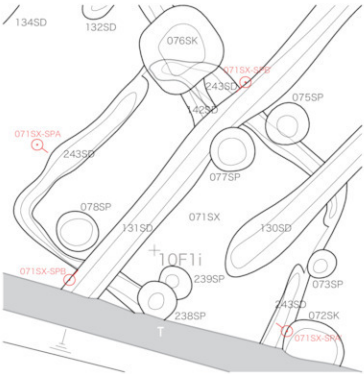


070SX-258SU A-A'
1. 2.5Y6/3 黄褐色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性少ない 2.5Y5/3黄褐色シルト質砂が少量混じる
　　2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロックを含む（258SU）
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる



070SX-258SU B-B'
1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性少ない 2.5Y5/3黄褐色シルト質砂が少量混じる
　　2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロックを含む
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

図 69　12A 区 070SX・258SU 遺構図



071SX　A断面図

071SX A-A'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2シルトが少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2シルトが多く混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色シルトが多く混じる (243SD)
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる (243SD)
5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
6. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
2.5Y7/1灰白色極細砂ブロックを含む
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまり強い 粘性やや強い 2.5Y5/2砂質シルトが少量含む

071SX　B断面図

071SX B-B'
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y6/2灰黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色シルトが多く混じる (243SD)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2灰黄色シルトが混じる (243SD)

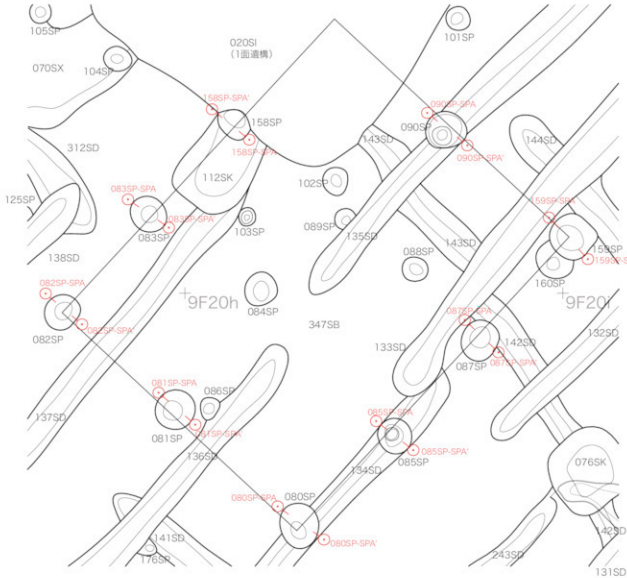
図 70　12A 区 071SX 遺構図

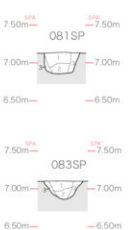
071SX　調査区南端に位置する。平面形はややくずれた隅丸方形で、長径約 3.7m、短径約 3.2m を測る。検出面からの深さ約 0.1m と浅い。床面で明確な主柱穴は検出されていないが、ほぼ全周する壁溝が検出されている。床面下の掘り方および床下施設はない。顕著な出土遺物はないが、古墳時代前期の竪穴建物跡と推定される。

347SB　調査区南端に位置する掘立柱建物跡である。方位はグリッド北から西へ 45° 以上振れている。長径を桁行とすると、桁行約 5.3m、梁行約 4.2m を測る。柱間は 2 間 ×3 間で、柱間間隔は桁行で 1.8m、梁行で 2.1m である。347Sb の北隅は竪穴建物跡 020SI に重複しており、これに先行する。また当該遺構の範囲内では 084SP、089SP が束柱に近い位置にみられる。これらを含めると総柱建物になる可能性もあるが、柱筋からはややずれているのでここでは側柱建物を想定しておく。

柱穴は直径 0.5m で、土層断面によれば 0.3 ～ 0.4m の柱根に相当する土層がみられる。柱の上方でも径 0.2 ～ 0.3m になると想定され、安定的な構造の建物であったと想定される。

柱穴 082SP と同 083SP からは S 字状口縁台付甕（164）や台付鉢（165）が出土しており、このことから当該遺構が古墳時代前期前半になると想定される。





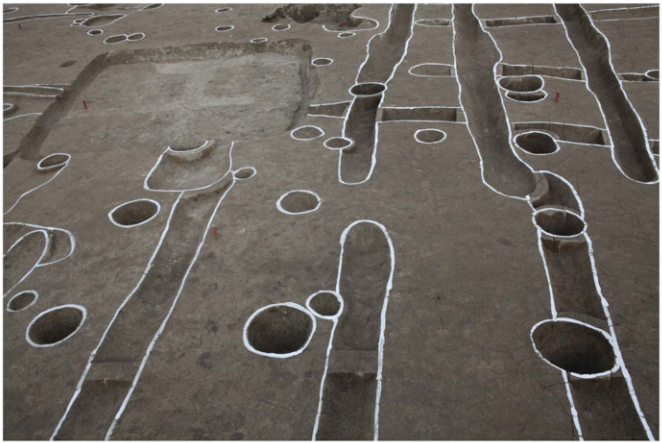
081SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色が多く混じる

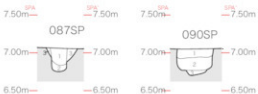
082SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる

083SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる

085SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/3極細粒砂が混じる 炭化物を微量含む
3. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性ややない 2.5Y6/3極細粒砂が多く混じる
4. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが少量混じる

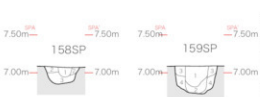
図 71　12A 区 347SB 遺構図





087SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

090SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる



158SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり φ2mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒が少量含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

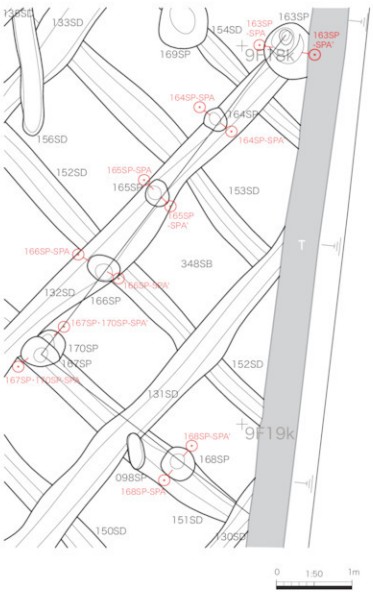
159SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる 炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ10mm程の2.5Y6/3にぶい黄色シルト粒を含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

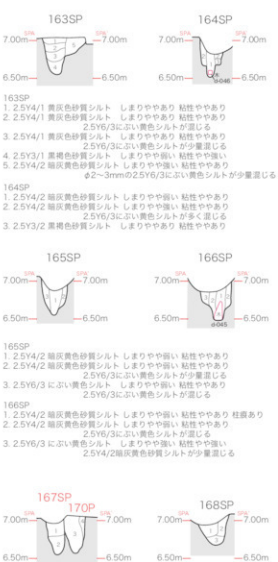
0　1:50　1m

図 72　12A 区 347SB 主柱穴断面図

348SB　調査区南東部に位置する掘立柱建物跡である。東壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。長径約 5.3m 以上、短径約 3.5m 以上が検出されている。柱穴の 1 つである 163SP は他に比べて大きく、北隅に位置するかもしれない。その場合、柱間は 4 間 ×2 間以上となる。柱間間隔は桁行と想定される長径方向で約 1,3m、短径（梁行）で約 2.3m である。いずれの柱穴でも土層が柱根で認められる。時期は古墳時代前期に想定される。

349SB　調査区中部やや南に位置する掘立柱建物跡である。方位はグリッド北から 45° 以上西へ振れている。1 間 ×2 間の棟持柱建物跡で、梁行が約 4.0m、桁行が約 3.5m である。棟持柱（140SP・199SP）は柱筋から約 0.3m 外側に位置している。上部が削平されているため柱根につい





163SP
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い 粘性やや強い
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりやや強い 粘性ややあり
φ2～3mmの2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる

164SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり

165SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

166SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 柱痕あり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

167SP-170SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる (167SP)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる (167SP)
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり (170SP)
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトが少量混じる (170SP)

168SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図 73　12A 区 348SB 遺構図

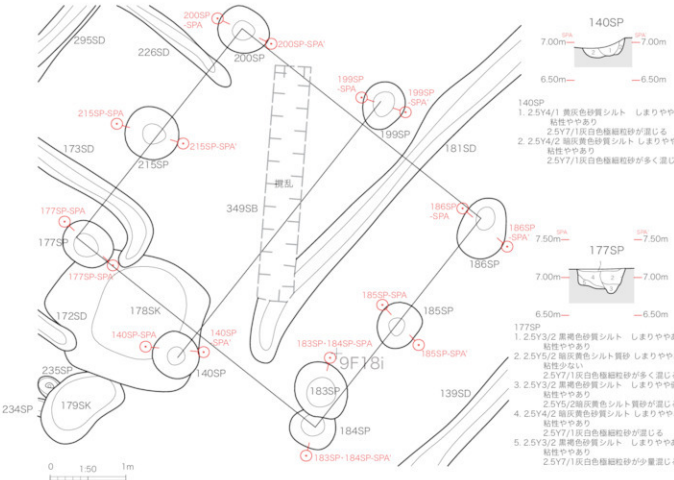


図 74　12A 区 349SB 遺構図

ては不明で、140SPや185SPなどで柱根と推測される土層が認められるが、抜き取り痕跡である可能性も考えられる。顕著な出土遺物はなく、他の建物遺構との重複関係もない。唯一土坑178SKの後に構築されていることが明らかで、178SKからは古墳時代初頭の有稜高杯が出土しているので、それ以降の時期を想定することができる。

建物の性格については、寄島遺跡の中で唯一の棟持柱建物であることや、間近に古墳時代初頭や前期前半の建物がないことから、集落域でも独立して所在していた可能性が高く、特殊な用途であったとみられる。

352SB　調査区北西部に位置する。方位はグリッド北から西へ約20°振れている。平面形はほぼ正方形で一辺2.8～2.9mである。柱間は2間×2間で柱間間隔は約1.4mである。束柱想定位置にピットはなく、側柱建物と想定される。柱穴径は約0.4mで273SPなどで径0.1mの柱根が土層で認められる。顕著な遺物がなく時期を特定しがたい。

12A区の小溝群　調査区南部を中心に小溝群が見られる。特に南東部の一群は直交関係にある小溝群の先後関係が明瞭である。この北西側に棟持柱建物が位置している点は興味深い。

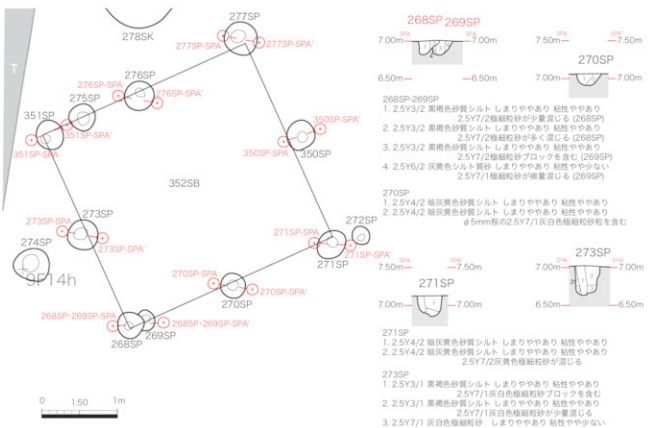


図75　12A区352SB遺構図

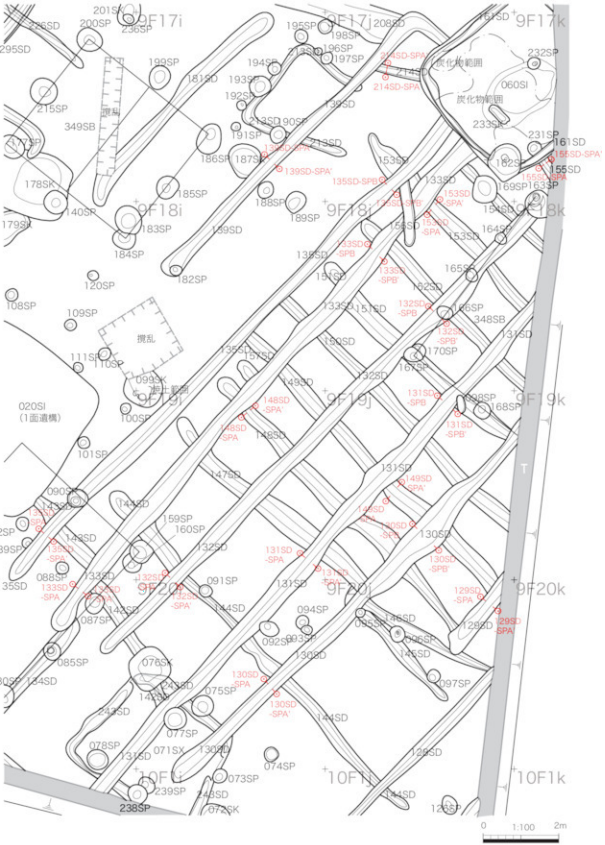


図 76　12A 区小溝群平面図

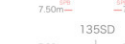
129SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる

130SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ1～2mmの2.5Y6/3にぶい黄色シルト粒を少量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～5mmの2.5Y6/3にぶい黄色シルト粒を含む
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが少量混じる

131SD
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる

132SD A断面図
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
132SD B断面図
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや強い
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

133SD A断面図
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
133SD B断面図
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　しまりやや弱い 粘性ややあり
2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが混じる



135SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

139SD
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる

148SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

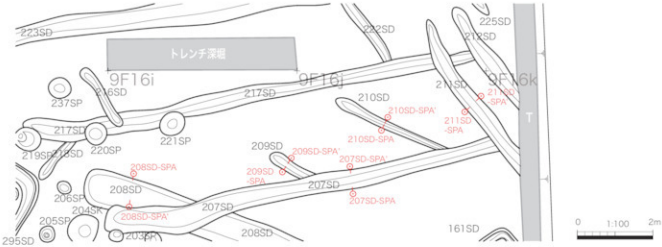
149SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

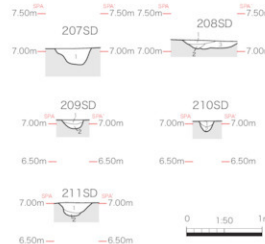
153SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる

155SD
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが微量混じる

214SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図 77　12A 区小溝群断面図





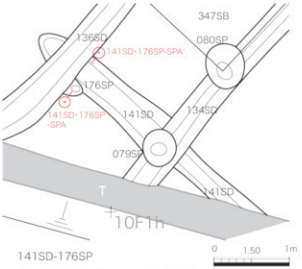
207SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる

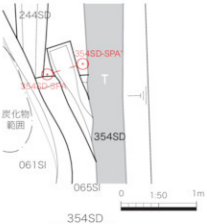
208SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

209SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

210SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

211SD
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

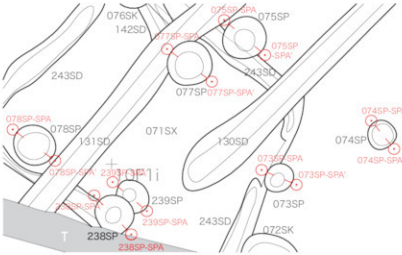




141SD-176SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (176SP)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1極細粒砂が多く混じる (176SP)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる (141SD)

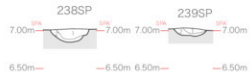
354SD
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロックを少量含む (354SD)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロックを含む (354SD)

図 78　12A 区小溝群遺構図



073SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりや強い 粘性やや強い
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

074SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりや強い 粘性やや強い
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる



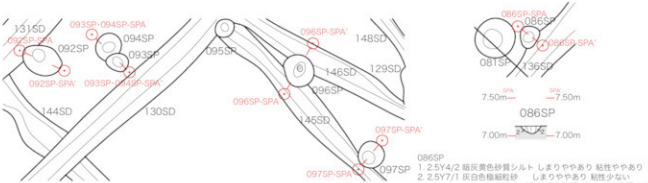
075SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性やややや強い 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる

077SP
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2mmの2.5Y6/2灰黄色シルトを含む

078SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性少ない 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる

238SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/1 黄灰色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

239SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/1 黄灰色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる



086SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

092SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い 粘性ややあり φ3mmの2.5Y6/3にぶい黄色シルト粒を少量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

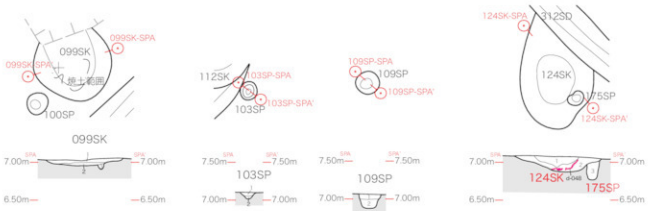
093SP-094SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる(094SP)

096SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる

097SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

0　1:50　1m

図 79　12A 区ピット群遺構図

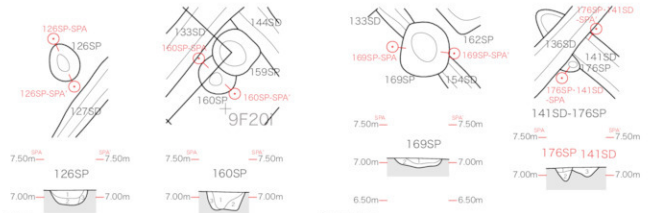


099SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を微量含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を多く含む
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり

103SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない
　　2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない
　　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

109SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる

124SK-175SP
1. 2.5Y5/3 黒褐色シルト質砂 しまりやや強い 粘性少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少く混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性少ない
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混



126SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

160SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/3に ぶい黄色シルトがブロック状に多く含む
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量

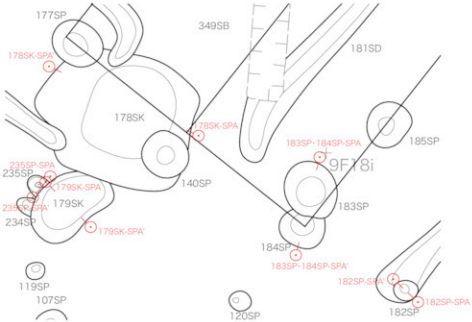
167SP-170SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が多く混じる

141SD-176SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり (176SP)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y7/1極細粒砂が多く混じる(176SP)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

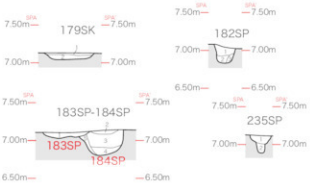
169SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
　　2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる

0　1:50　1m

図 80　12A 区土坑・ピット群遺構図



178SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂が混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が少量混じる
4. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　しまりやや強い 粘性やや少ない 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が少量混じる
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が混じる

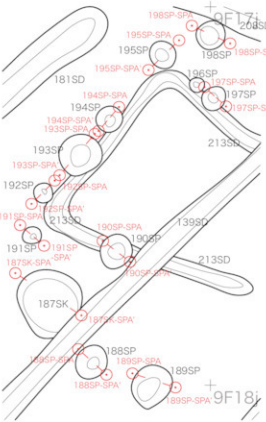


179SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

182SP
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり φ3~5mmの2.5Y7/1 灰白色極細粒砂を少量含む
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y4/1 暗灰黄色砂質シルトが少量混じ

183SP-184SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂が多く混じる (183SP)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり

図 81　12A 区土坑・ピット遺構図

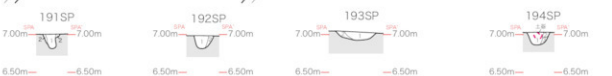


187SK
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが微量混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性ややあり φ2～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを少量含む

188SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる 炭化物を微量含む

189SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色が少量混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色が混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性強い 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

190SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y5/2砂質シルトが微量混じる

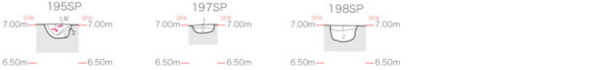


191SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

192SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

193SP
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

194SP
1. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y6/3　にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

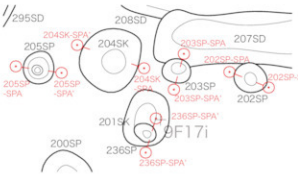


195SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

197SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが少量混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

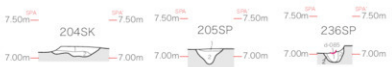
198SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや強い 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが多く混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト しまりやや強い 粘性やや強い 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

図 82　12A 区ピット遺構図



202SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりや強い 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

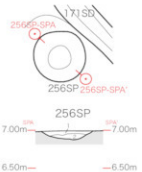
203SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　しまりやや強い 粘性ややあり



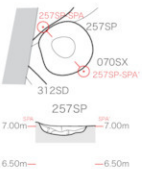
204SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

205SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

236SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる

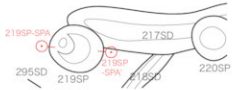


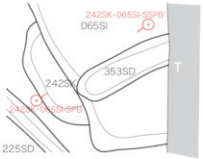
256SP
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

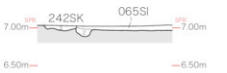


257SP
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが微量混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
φ3mm0.2.5Y7/2極細粒砂粒及び
マンガン粒を微量含む
3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂 しまりやや強い 粘性やや少ない
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

図 83　12A 区ピット遺構図



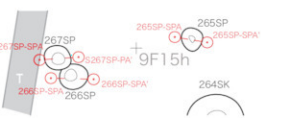


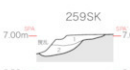


219SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまいややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや強い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまり強い 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

237SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり

065SI-2142SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/3にぶい黄色シルトが混じる
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　しまりやや強い 粘性やや強い
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y5/2暗灰黄色シルトが多く混じる(242SK)





259SK
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

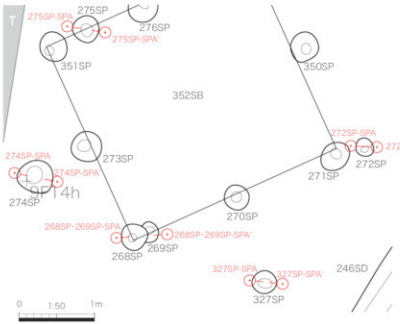
265SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや弱い 粘性やや少ない 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

266SP
1. 2.5Y3/2 暗褐色砂質シルト　しまりややあり 粘性ややあり
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性少ない φ2mm程の2.5Y4/2砂質シルトを微量含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

267SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる

261SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりやや強い 粘性少ない
2.5Y4/1暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図84　12A区ピット遺構図



278SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
3. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂　　しまりややあり 粘性少ない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

268SP-269SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2極細粒砂が少量混じる(268SP)
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2極細粒砂が多く混じる(268SP)
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/2極細粒砂ブロックを含む(269SP)
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり　粘性ややあり　2.5Y7/1極細粒砂が微量混じる(269SP)

272SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりややあり　粘性ややあり
3. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトが少量混じる微量混じる

274SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　　しまりややあり　粘性ややあり 2.5Y4/2砂質シルトが少量混じる

275SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

327SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y7/1　灰白色極細粒砂　　しまりややあり　粘性ややかない
2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が微量混じる
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

292SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　　しまりややあり　粘性ややかない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

293SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂が混じる
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　　しまりややあり　粘性ややかない
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる

図 85　12A 区ピット遺構図

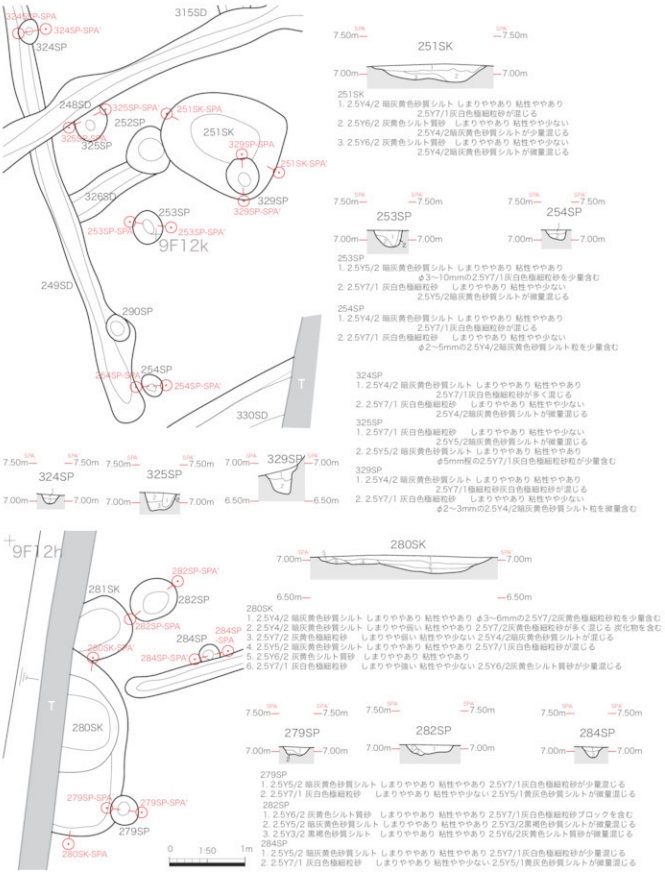
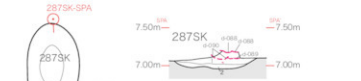
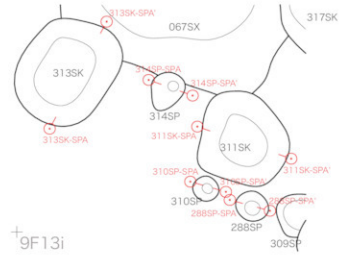


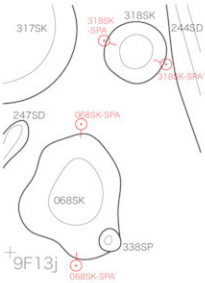
図 86　12A 区ピット遺構図

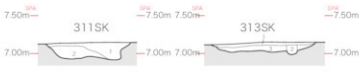


287SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

320SP
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y6/2灰黄色シルト質砂が多く混じる
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂 しまりややあり 粘性ややあり
φ2～5mmの2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを微量含む



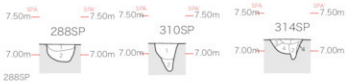




311SK
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3にぶいシルトが微量混じる
炭化物を微量含む
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性やや少ない 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる

313SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる

068SK
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
φ2～5mmの2.5Y7/1灰白色極細粒砂粒を含む 炭化物を微量含む
2. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが少量混じる



288SP
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる

310SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が多く混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりやや弱い 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

314SP
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりあやや 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が微量混じる
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト しまりあやや 粘性ややあり 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂　しまりやや 粘性やや少ない 2.5Y7/1灰白色極細粒砂が混じる

318SK
1. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂　しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2.5Y7/1灰白色極細粒砂が少量混じる

図 87　12A 区土坑・ピット遺構図

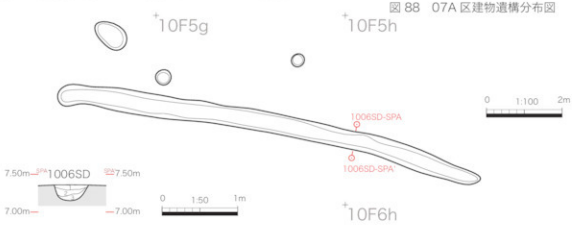
第５節　07A 区の遺構

概要　平成 19 年度の調査では調査区ごとに千の位の数字を変えており、07A 区は 1001 ～である。遺構面は第１遺構面・第２遺構面の２面調査を行っており、前者は若干の小溝が検出された程度で、建物遺構の大半は第２遺構面で検出されている。当該年度の調査では、竪穴建物跡は、現場で確実視されたものについては種別「SB」が付され、根拠にやや欠けるものについては種別「SX」が付されている。後者については、本報告内で評価を定めていくこととし、場合によっては建物遺構として評価することもあるが、種別「SX」はそのままとしている。

1006SD　調査区北部に位置する。第１遺構面で検出された小溝である。概ね東西方向に延びているがやや北西と南東へ振れている。全長は 11.4m で幅 0.5m である。検出面からの深さは約 0.2m で、埋土の上層では鉄分などの沈着が目立っている。掘削後もしくは埋没過程で水が流れて込んでいたのかもしれない。類似の遺構は 1012SD 程度である。顕著な出土遺物がないため時期は特定しがたいが、比較的近時の地割に対応するものと思われる。

1056SB　当該遺構から後は第２遺構面で検出されたものである。調査区北東部に位置する。方位はグリッド北から 45° 西へ振れている。平面形は隅丸正方形で、長径 4.6m、短径 4.2 m である。検出面からの深さは約 0.2m で、床面直上で炭化物を多く含む層が覆っている（2 層）。当該層では炭化材も出土しており、主だったものは対角線

図 88　07A 区建物遺構分布図



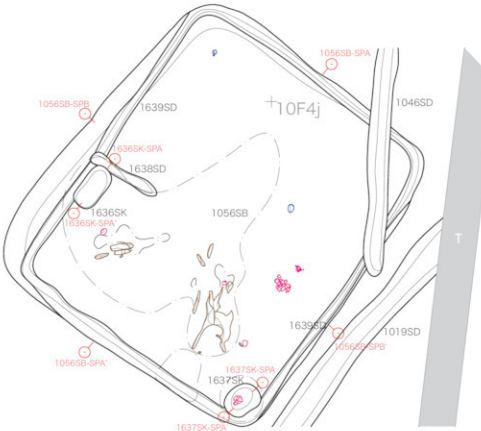
1006SD
1. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着が目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む

図 89　07A 区 1006SD 遺構図

上にみえる。おそらく屋根材の一部がそのまま焼け落ちた状態であると思われる。床面では主柱穴は検出されなかったが、壁溝が検出されている。ただしこの壁溝は土層断面では明瞭な掘り込みとしてみえないので、あくまで床面のくぼみとなっているものである。このような状況から、当該遺構は建物使用時に近い状態で埋没したものと推測される。また床面下の掘り方は一部でみられる（3層）。おそらく周溝状床下施設の一部であろう。

出土遺物は、埋土中から土師器が出土しており、屈折脚高杯（193・194）や小型壺（195～197）、直線的な長い口縁が特徴のハケ甕（201）がみられる。これらは尾張地域の松河戸式に併行する時期と考えられ、当該遺構が「焼失家屋」の状態でもあることから、この建物で使用されたひと揃えすなわち一括性の高い資料群として注目されよう。

なお、当該遺構で出土した炭化材をAMS法で年代測定を行ったところ、較正年代で3世紀後半代の確率が高いという結果が得られている。



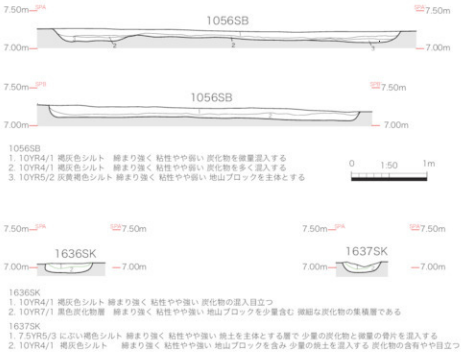


図90　07A区1056SB遺構図

1066SB　調査区北西部に位置する。調査区西壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から 15°程度西へ振れている。平面形は丸みの強い隅丸方形で、東辺長は約 3.7m である。検出面からの深さは約 0.3m で埋土は 2 層に区分される。うち下層（2 層）は基盤層由来のブロックを多く含んでおり、貼り床であると考えられる。ただし遺構全体が検出されていないので、これが床下全面に広がるのか、周溝状床下施設となるのかは判然としない。同様に主柱穴や壁溝も検出されていない。

出土遺物は少なく、甕類の底部（199・200）が出土したくらいである。これらは古墳時代前期に相当すると考えられる。

1113SB　調査区ほぼ中央に位置する。方位はグリッド北から若干東へ振れている。平面形は丸みの強い隅丸正方形である。その規模は調査区内でも大型に類するもので、長径約 6.3m、短径 5.9m である。ただし検出面からの深さが約 0.2m と浅い。その埋土をみると、上層（1 層）は炭化物が多いことから廃絶後の堆積と考えられる。これに対して下層（2 層）は基盤層に由来するブロックが多く含まれており、これは貼り床になるとみられる。平面図には記録されていないが、土層断面では壁近くで幅 0.8 ～ 1m の浅い皿状の掘り込みがみられ、おそらく周溝状床下施設であると考えられる。いずれの断面でもみられるのでほぼ全周していたものと思われる。以上から、周溝状床下施設の施工後に貼り床を行っていることが復元される。床面の東半部で炭化物の集積がみられるので建物廃絶時の痕跡であろう。なお壁溝は検出されていない。また主柱穴については該当位置に多数のピットがみられるので特定しにくいが、検出面 8 床面）では小さなピットにしかみえない 1454SK や 1463SK では柱根が残存しており、土層断面からその抜き取りがなされていない状況をうかがうことができる。おそらくこれが最終段階の主柱穴の一部を構成していると考えられる。

出土遺物は少ないが、当該遺構での特徴として小鉢が多数出土している点が挙げられる。中には内面に赤色顔料が付着しているものもある（212）。またキノコを逆さにしたような把手付の壺の蓋とみられる土器（206）もある。このような特殊遺物が主体となっているが、遺構の状況からみると竪穴建物廃絶時に使用したことが想定されるので、集落内の祭祀がどのような局面でなされるのか示されているといえる。これらの土器は尾張地域の廻間Ⅱ式の終わりから廻間Ⅲ式に相当するもので、古墳時代初頭に位置付けられる。

なお、当該遺構で出土した炭化材を AMS 法で年代測定したところ、較正年代で 2 世紀前半の確率が高いという結果が得られている。

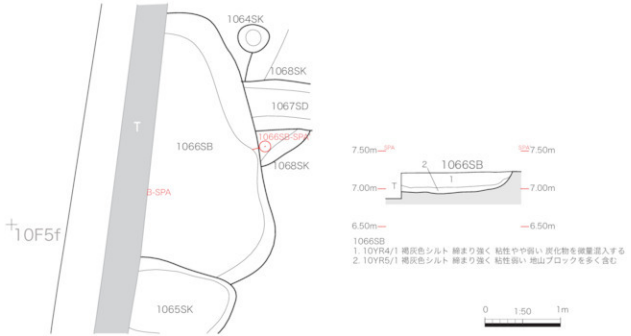
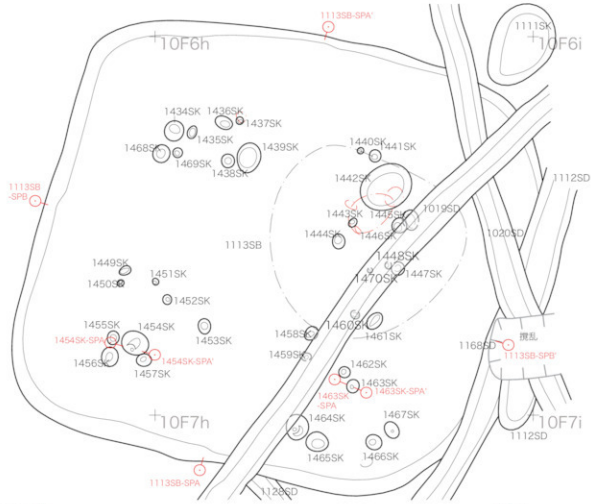
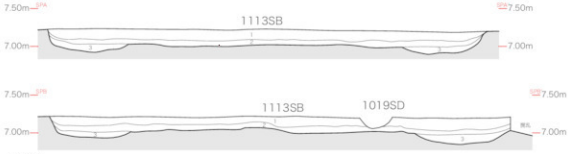


図 91　07A 区 1066SB 遺構図





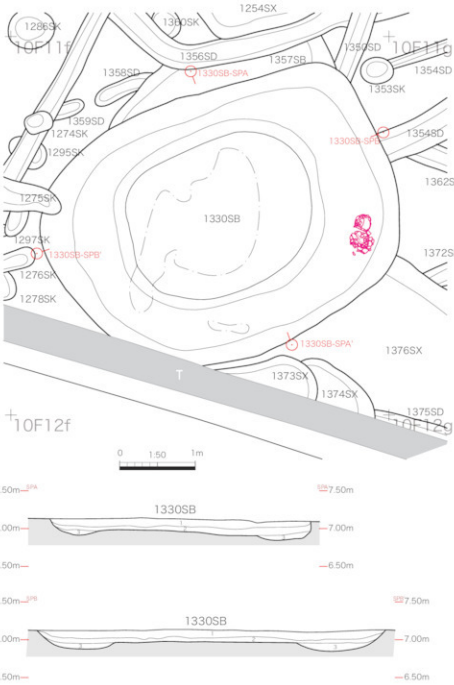
1113SB
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着が目立ち 炭化物をやや多く混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く含み 極細粒砂を混入する
3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト　締まり強く 粘性弱い 地山ブロックを主体とする層である

0　1:50　1m

1454SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 極細粒砂の小ブロックを多量に含む
2. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 締まりやや強く 粘性弱い シルト土の小ブロックを含む
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まりやや強く 粘性弱い 極細粒砂の小ブロックを含む
4. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 締まりやや強く 粘性弱い シルト土の小ブロック含む
5. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり弱く 粘性強い 極細粒砂を少量含む

1463SK
1. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 黒褐色土のブロックを少量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 極細粒砂の小ブロックと黒褐色土が混在する
3. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 褐灰色土のブロックを含む
4. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり弱く 粘性強い 極細粒砂を少量含む

図 92　07A 区 1113SB 遺構図



1330SB
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　締まり強く　粘性やや弱い 鉄分の沈着が目立ち　下位で炭化物を多く含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く　粘性やや弱い 地山ブロックを多く含み 炭化物を微量混入する
3. 10YR5/1 褐灰色シルト　締まり強く　粘性やや弱い 地山ブロック主体

図 93　07A 区 1330SB 遺構図

1330SB　調査区南端に位置する。方位はグリッド北から約 30° 西へ振れている。平面形は丸みの強い隅丸長方形で、楕円形に近いともいえるその形状は独特である。長径約 4.6m、短径約 3.5m である。検出面からの深さは約 0.3m である。上層断面をみると上層（1 層）は炭化物が多く廃絶後の堆積とみられるが下層（2・3 層）は基盤層由来のブロックが多く含まれているので、貼り床（2 層）、周溝状床下施設（3 層）0 に相当するものと考えられる。床面の状況は、主柱穴や壁溝は検出されず、幅 0.8 ～ 1.0m の周溝状床下施設が全周している。この床下施設からは土師器台付甕（223）などが出土している。台付甕は 1 個体分に復元される。この遺物をもって、当該遺構の時期が古墳時代前期であると推定される。

なお炭化材を AMS 法で年代測定をしたところ、較正年代で 2 世紀後半が最も高い確率と提示されている。

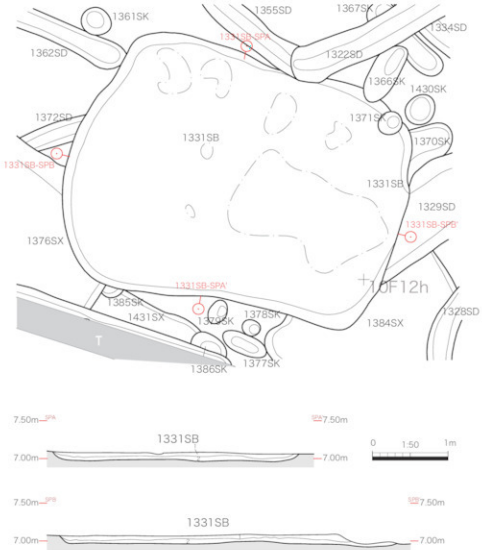


図94　07A区1331SB遺構図

1331SB　調査区南端に位置する。1330SBから2m東方にある。方位はグリッド北から東へ若干振れていて、竪穴建物跡1113SBに近い。平面形は丸みの強い隅丸長方形で、特に南西隅がの丸みが強い。長径約4.5m、短径約3.4mで遺構検出面からの深さは約0.1mと浅い。床面では炭化物の集積が所々にみられる。ただし主柱穴や壁溝は検出されていない。土層は上下2層に区分されており、上層（1層）は炭化物を多く含む機能時～廃絶時の堆積と考えられる。一方、下層（2層）は基盤層由来のブロックが多く含まれているので当該層は貼り床と考えられる。なお、当該遺構では周溝状床下施設は検出されておらず、床下全面が貼り床となっている。

出土遺物は少なく、土師器高杯の小片（221）などがみられる程度である。時期の特定をしにくいが、古墳時代前期と考えられる。

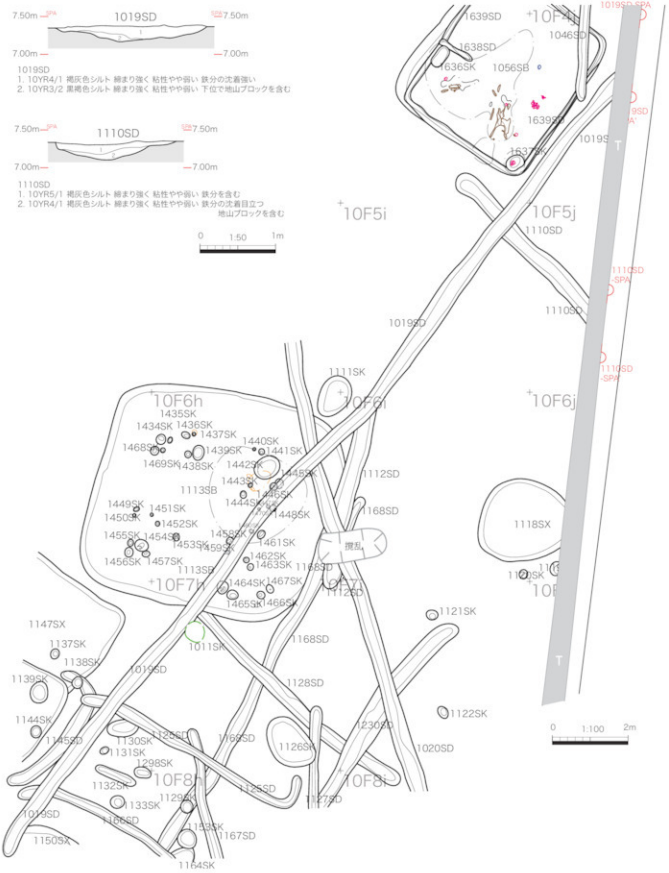
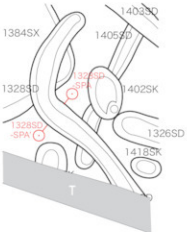
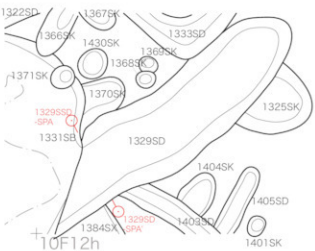


図 95　07A 区 1019SD・1110SD 遺構図

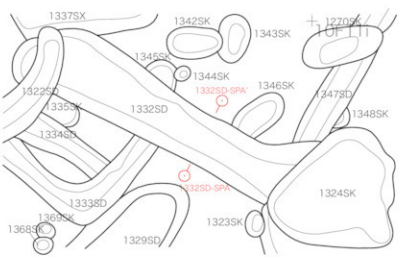
1019SD　調査区北東から中央部まで延びる小溝である。全長約 26m 以上、幅約 0.6m の直線を呈している。埋土は褐灰色シルトが主体で下層で基盤層ブロック混じりの黒褐色シルトとなっている。当該遺構は、1021SD や 1022SD とほぼ同一方向で約 6m の間隔で延びているのが特徴である。また竪穴建物跡 1113SB の後に掘削されている点も注意しておきたい。



1328SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック含む



1329SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含み
炭化物を微量混入する
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを主体とする



1332SD
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立ち
地山ブロックを含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含む

図 96　07A 区 1328SD・1329SD・1332SD 遺構図

07A 区の小溝群　先述の 1019SD なども含めて、07A 区では竪穴建物跡に重複して小溝群が検出されている。幅は 0.5 ～ 0.6m のものが主体である。またその方位は概ね北東から南西方向へ延びるもので、調査区北部では全長 10m 以上の長いものが間隔をおいているのが目立っている。一方調査区南部では、方位が同じながらも全長が 10m 以下の短いピッチでしかも端部の揃ったもの（1192SD ～ 1194SD など）がみられるのが特徴である。溝の空白地になっているところは何らかの地割に対応しているものと考えられる。これらの小溝については、竪穴建物跡と重複関係にあるため同時並存が想定できない場合もあるが、それぞれの存続時期を整理していけば、家屋である竪穴建物と耕作地と推測される小溝群の併行関係も示せるのではないかと考えられる。

1070SX　調査区北西部に位置する。一部が調査区西壁にかかっているがほぼ全形が判明する。方位はグリッド北から若干西へ振れている。平面形は東西方向に長い隅丸長方形で、長径約 5.7m、短径 4.0m を測る。検出面からの深さは約 0.1m と浅く、底面は平らな皿状を呈している。その埋土は 1 層で微量の炭化物が認められる。底面では主柱穴や壁溝などは検出されていない。したがって竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構と位置付けておく。また顕著な出土遺物もないことから、時期の特定も難しいが、小溝群（1021SD など）切り込まれていることから、さほど時期が下るものではないと考えられる。概ね古墳時代前期に該当する竪穴状遺構として捉えておく。

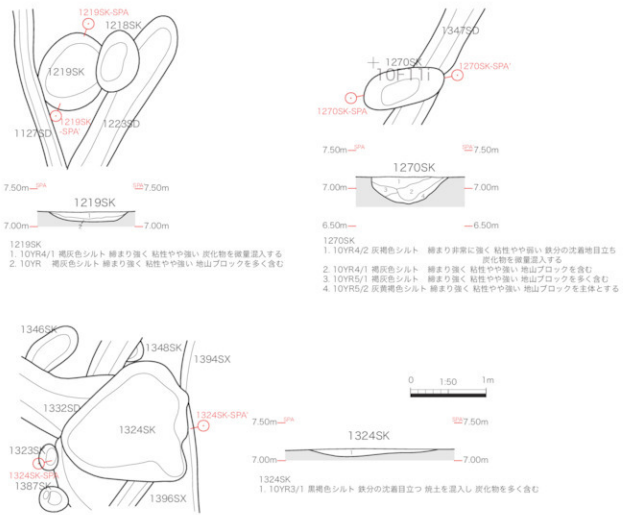


図 97　07A 区 1219SK・1270SK・1324SK 遺構図

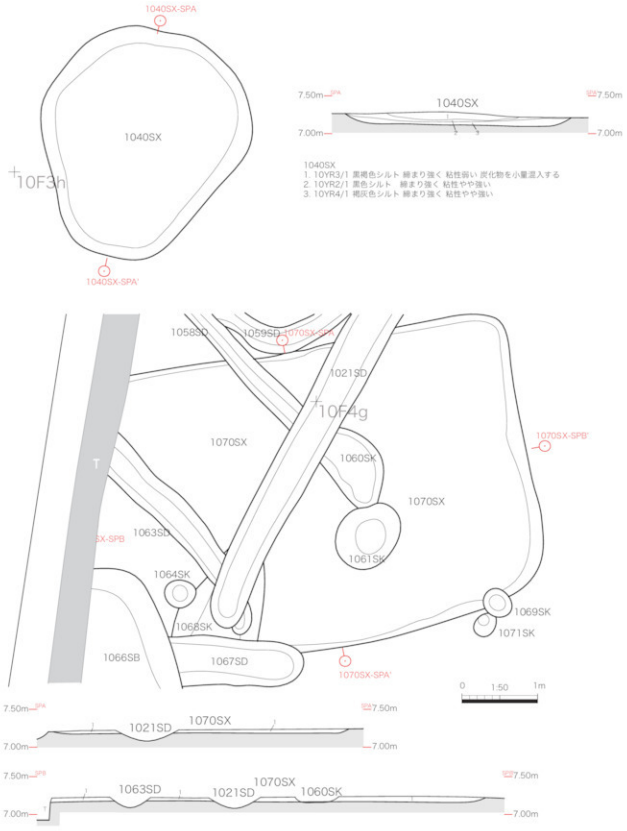
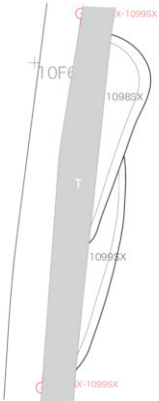
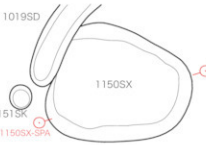


図 98　07A 区 1040SX・1070SX 遺構図

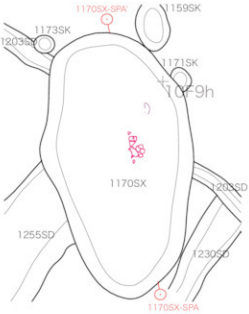




1150SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着が目立つ 炭化物を少量混入する
2. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物の混入やや目立つ
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを多く含み 炭化物の混入やや目立つ

1098SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 炭化物を微量混入する
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く混入する

1099SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を混入する
3. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 地山ブロック主体の層で極細粒砂を多く混入する



1170SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立ち 炭化物を微量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロック含む 炭化物を微量混入する

図 99　07A 区 1098SX・1099SX・1150SX・1170SX 遺構図

1105SX　調査区中部の西壁近くに位置する。方位あ h グリッド北にほぼ同一である。平面形はやや崩れた丸みの強い隅丸正方形である。長径 4.0m、短径 3.8m である。検出面からの深さは約 0.1m である。埋土は微量の炭化物が含まれている。底面で主柱穴や壁溝は検出されていない。当該遺構は竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構と位置付けておく。なお顕著な出土遺物もないことから時期は特定しがたいが、概ね古墳時代前期と推定される。

1146SX・1147SX　調査区中央部に位置する。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は隅丸方形で、1146SX は長径約 3.4m、短径約 2.9m、1147SX は長径約 3.7m 以上、短径約 3.7m である。検出面からの深さはいずれも 0.1m に満たない浅いもので、底面は平らでな皿状となっている。またいずれの埋土も基盤層由来のブロックが多く含まれていることから、竪穴建物跡の掘り方である可能性が考えられる。底面では主柱穴や壁溝が検出されていないので、竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構と位置付けられるが、遺構の方位や規模、ならびに埋土の状況からみて床下のみが検出された可能性も高いといえる。

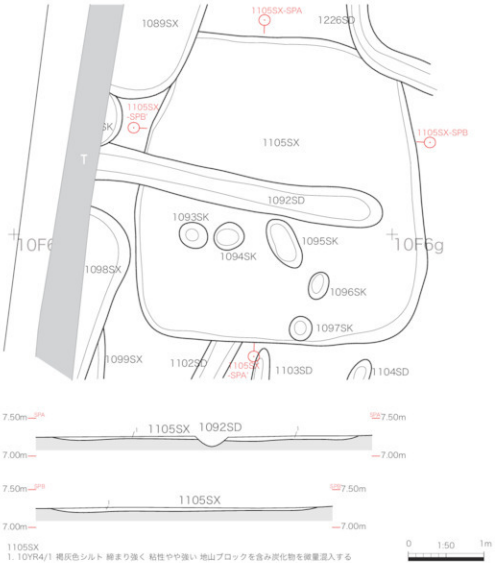
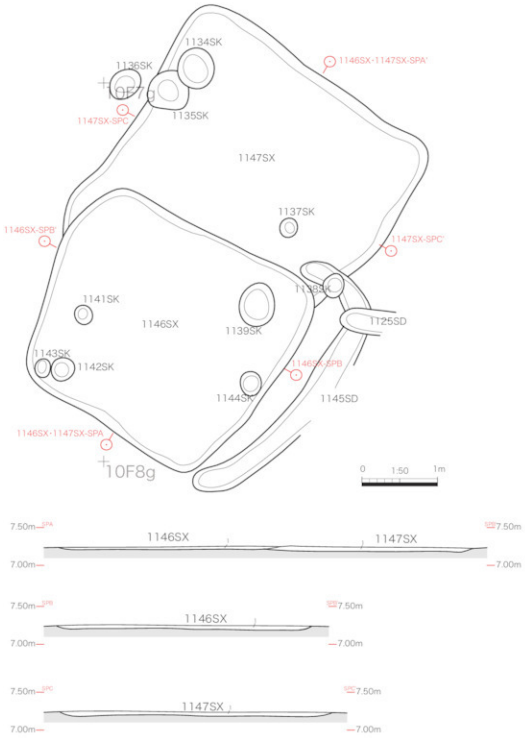


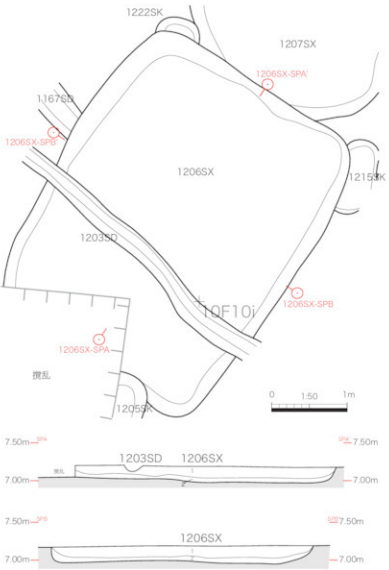
図 100　07A 区 1105SX 遺構図



1146SX A-A'B-B'
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立ち 地山ブロックを多く含む

1147SX A-A'C-C'
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含み 炭化物を微量混入する

図 101　07A 区 1146SX・1147SX 遺構図



1206SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立ち 炭化物を少量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く含む

図 102　07A 区 1206SX 遺構図

1206SX　調査区南東部に位置する。方位はグリッド北から西へ大きく振れている。平面形は隅丸長方形で、長径約 4.4m、短径 3.5m を測る。検出面からの深さは約 0.2m ある。埋土の上層（1 層）は炭化物を少量含んでおり、下層（2 層）は基盤層由来のブロックを多く含んでいる。このことから主柱穴や壁溝などの付属施設は検出されていないものの、竪穴建物跡の可能性が高い。出土遺物少なく、台付甕の台部（217）がみられる程度である。

1207SX　調査区南東部に位置し、1206SX の北辺と重複している。土層断面によれば 1207SX → 1206SX という変遷が確認されている。平面形は丸みの強い隅丸方形を呈しており、長径約 3.0m、短径 2.3m を測る。検出面からの深さは 0.1m に満たない浅いもので、立ち上がりがきわめて緩い皿状の断面となっている。埋土は上層で微量の炭化物が含まれ、下層は基盤層由来のブロックが含まれている。そのため人為的な掘り方によって形成されたものと考えられるが、底面で主柱穴や壁溝などが検出されていないことから、竪穴建物跡の可能性はやや低い竪穴状遺構と位置付けておく。顕著な出土遺物がなく時期が特定しがたいが、1206 SX に先行することから古墳時代前期以前の可能性が高い。

1217SX　調査区東壁にかかって一部が検出されている。平面形は隅丸方形と推測され、その西半部に相当する。西辺長約 3.4m、東西に 1.4m 以上の規模となる。検出面からの深さは約 0.1m で 1207SX 同様に立ち上がりのきわめて緩い皿状の断面となっている。埋土は 1・2 層ともに基盤層由来のブロックが多く含まれているので、人為的に埋め戻された遺構と判断される。底面で主柱穴や壁溝などが検出されていないので、竪穴建物跡の床面下掘り方部分が検出された可能性も考えられる。現状では竪穴建物跡と断定する根拠にやや欠けることから、竪穴状遺構として位置付けておく。なお顕著な出土遺物がないの

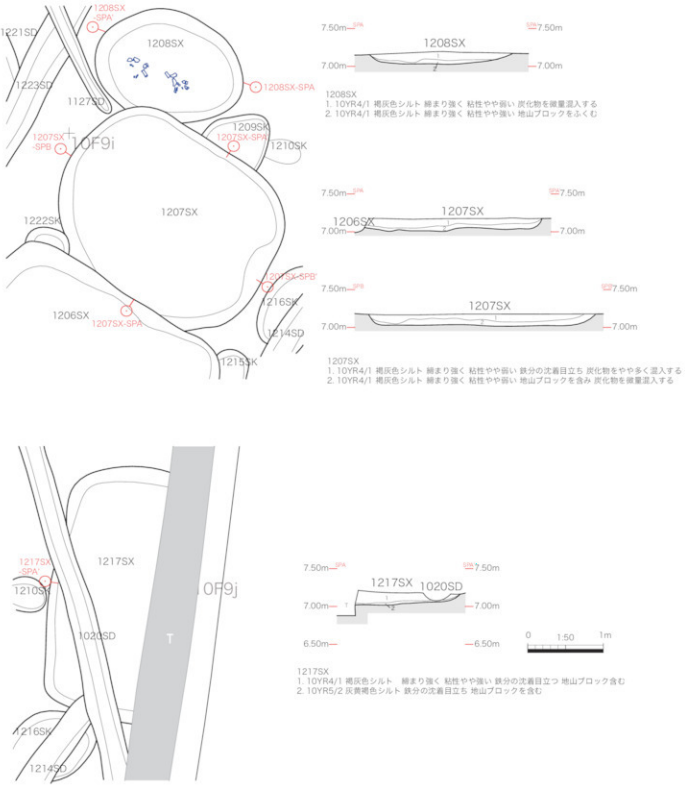
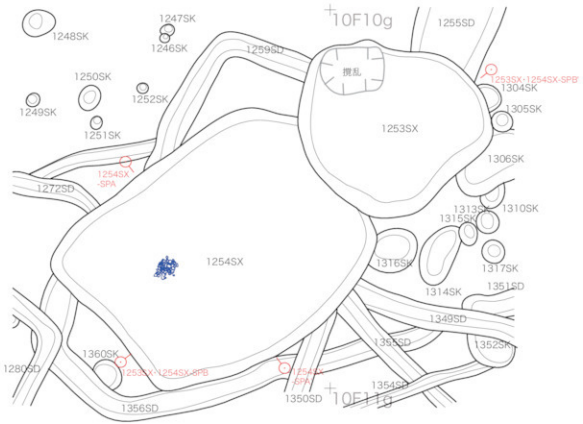


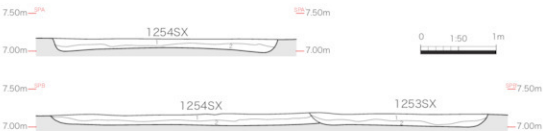
図 103　07A 区 1207SX・1217SX 遺構図

で時期の特定が難しいが、遺構の方位がほぼグリッド北に揃っていること（1545SB などと同一）などから、古墳時代前期に位置付けられる。

1253SX・1254SX　調査区南西部に位置する。1253SX と 1254SX が重複しており、土層断面の観察によれば、1254SX → 1253SX という変遷である。1253SX は不整な円形で直径 2.4m を測る。検出面からの深さは約 0.2m で浅い皿状を呈している。顕著な遺構がないので時期や性格が特定しがたいが、下位に位置する 1246SX 埋没の上部という可能性も考えられる。

1254SX は丸みの強い隅丸長方形である。長径約 3.8m、短径約 3.0m で深さは 0.15m である。埋土の上層が炭化物が多く、下層は基盤層由来のブロックが含まれている。ただし底面で主柱穴や壁溝は検出されていないので、竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構として位置付けられる。出土遺物は台付甕の台部（218）がある。

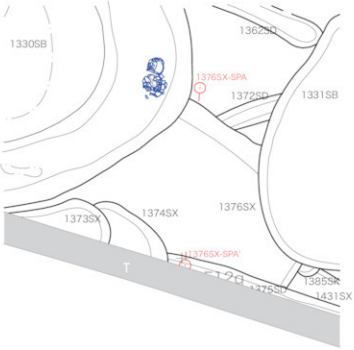


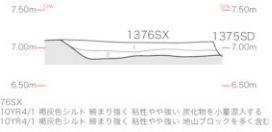


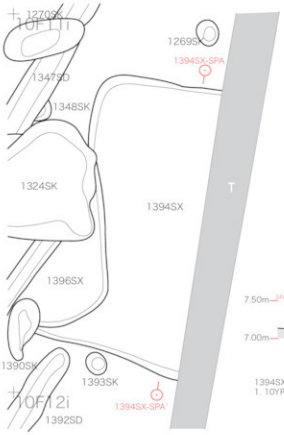
1253SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含み 炭化物を微量混入する
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを主体とする

1254SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を微量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 地山ブロックを多く含み 極細粒砂を混入する

図 104　07A 区 1253SX・1254SX 遺構図



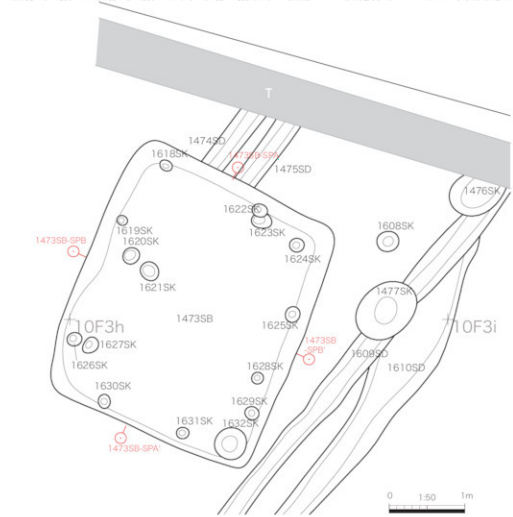




1394SX　調査区南東隅に位置する。方位はグリッド北からやや東へ振れている。平面形は隅丸方形で西辺長は約 3.8m である。検出面からの深さは 0.1m に満たない浅い立ち上がりの緩い皿状を呈している。底面で主柱穴や壁溝は検出されていない。このことから当該遺構は竪穴状遺構に位置付けられるが、埋土に基盤層由来のブロックを含むので、可能性として竪穴建物跡の掘り方である可能性がある。また調査区東壁近くでグリッド北に近い方位の竪穴建物跡が 3 基もみられ、これらが時期的に関連したものであったものとも推測される。

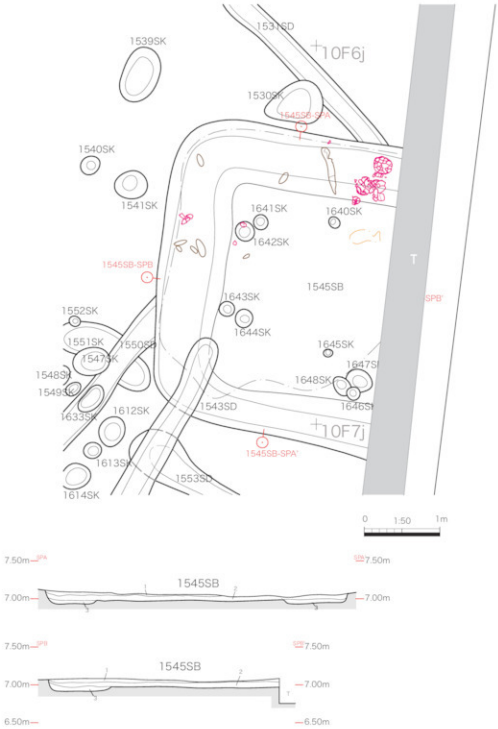
図 105　07A 区 1376SX・1394SX 遺構図

1473SB　調査区北端に位置する。上層に不整形なくぼみである 1040SX が重複しているがおそらく当該遺構の上層部分と考えられる。グリッド北から 45° 以上大きく振れている。平面形は隅丸長方形で長径約 3.6m、短径約 3.0m、深さ約 0.2m を測る。立ち上がりは明瞭で理土は上層（1 層）と下層（2 層）あり、下層は掘り方に相当する。床面で主柱穴や壁溝などは検出されていないが、小ピットが 15 基検出されている。出土遺物は屈折脚高杯の杯部（228）があり、尾張地域の松河戸式でも後半段階に位置付けられる。このことから当該遺構の時期も古墳時代前期末になると考えられる。なお、当該遺構から出土した炭化材を AMS 法で年代測定したところ、3 世紀後半～4 世紀前半の年代値が得られている。



1473SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性弱い 炭化物を微量混入する
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを主体とする層で 炭化物を微量混入する

図 106　07A 区 1473SB 遺構図



1545SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を微量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを混入する
3. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロック主体

図 107　07A 区 1545SB 遺構図

1545SB　調査区東壁にかかって西半部が検出されている。方位はほぼグリッド北である。平面形は、隅丸正方形と想定される。西辺長約 4.0m を測る。上層部分には 1118SX が重複しており、ここから出土した遺物も 1545SB に含めている。遺構検出面からの深さは約 0.2m である。埋土は上層（1 層）は微量の炭化物が含まれている。床面ではピットが 9 基検出されているが、主柱穴と特定するのはやや難しい。なお壁溝は検出されていない。床面直上では炭化物や北辺付近で土器がまとまって出土している。床下については、2・3 層は基盤層由来のブロックが多く含まれているので、貼り床などに相当する。特に 3 層は幅約 0.5 ～ 0.6m の皿状を呈しており、周溝状床下施設と考えられる。周溝状床下施設は全周している。

出土遺物は、他の竪穴建物跡より多く、土師器の屈折脚高杯（233）や壺（234）、大型の壺（237）、くの字口縁の甕（238・239）などが出土している。これらは姫下遺跡の土器と併行期にあり、このことから当該遺構の年代が古墳時代前期と推定される。

なお、当該遺構出土の炭化材を AMS 法によって年代測定した結果、較正年代で 4 世紀前半が最も確率が高いというデータが得られた。

1526SX　竪穴建物跡 1113SB の北東側に位置する土坑である。長径約 2.0m、短径約 1.3m で深さは約 0.4m である。炭化物はさほど多くないので焼土坑ではないようである。市出土遺物は土師器屈折脚高杯（269）、や小型壺（271）などが出土していることかｒあ、古墳時代前期の松河戸式併行期と考えられる。

1562SB　調査区東壁にかかって一部が検出されている。グリッド北から東へ振れている。隅丸方形と推測されている。深さは約 0.2m である。竪穴建物跡の一部と考えられ、古墳時代前期と推定される。

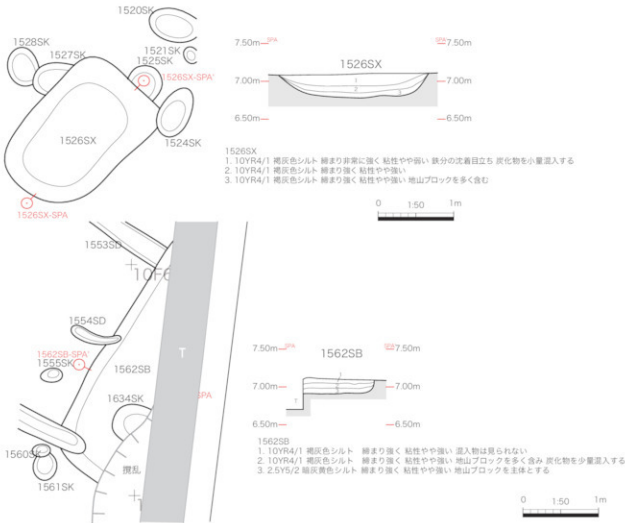


図 108　07A 区 1526SX・1562SB 遺構図

第 6 節　07B 区の遺構

概要　遺構番号は 2001 ～で、竪穴建物跡は第 2 遺構面と補足で部分的に行った第 3 遺構面で検出されている。

2006SD　第 1 遺構面で検出されている。調査区半ばで検出された幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.2m の浅い皿状を呈する直線の溝である。調査区西壁から延びてグリッド東よりやや南に振れており、この方位は調査区の方位に近い。すなわち現況の地割にほぼ同一ということになる。出土遺物は近世後半の陶磁器（388・389）が出土していることから遺物からも比較的近時のものであることが示される。

2034SB　当該遺構から後は第 2 遺構面で検出されたものである。2034SB は調査区北部で検出された竪穴建物跡である。方位はほぼグリッド北である。平面形は隅丸正方形で北辺長 4.3m、西辺長 4.5m を測る。明確な壁溝はなく、中央よりに主柱穴 4 基（2196・2198・2199・2203SK）が検出されている。またこの主柱穴付近の床面で炭化物が多くみられる範囲がある。埋土は水平堆積の 3 層で、いずれも褐灰色シルトがベースとなっているが、下の 2・3 層では基盤層のブロックが多く含まれているので、これが貼り床で上位の 1 層が埋土に相当する。また周溝状床下施設はないとみられる。 出土遺物は多くはないが、古墳時代前期の土師器が出土している（283 ～ 294）。小鉢（234・285）や口縁部に線刻のある鉢が出土している。古墳時代前期と考えられる。なお炭化材を AMS 法で年代測定した結果、較正年代で 3 世紀初頭が最も高い確率となった。

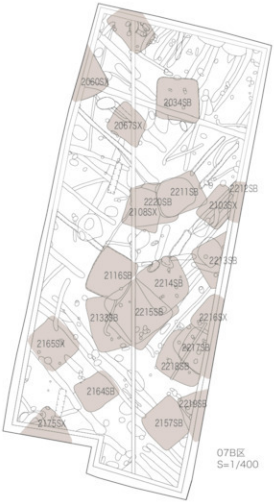


図 109　07B 区建物遺構分布図

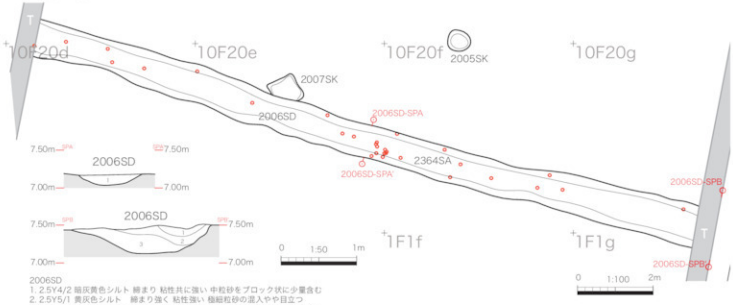
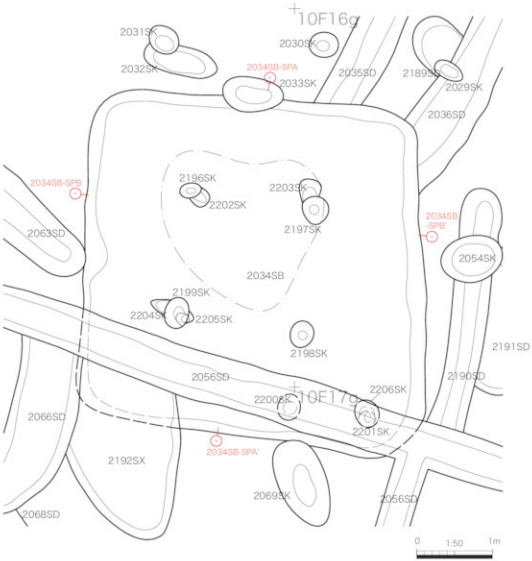
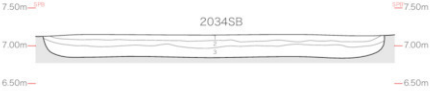


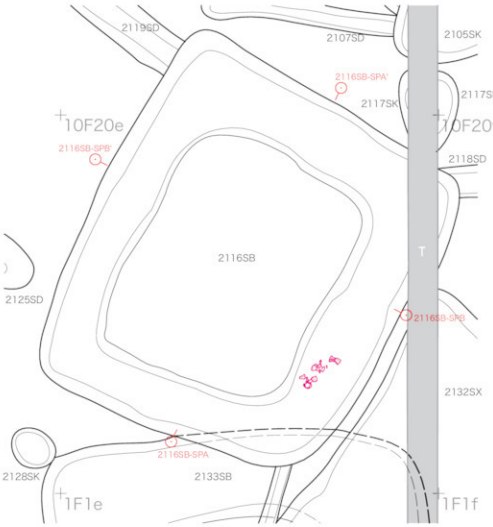
図 110　07B 区 2006SD 遺構図

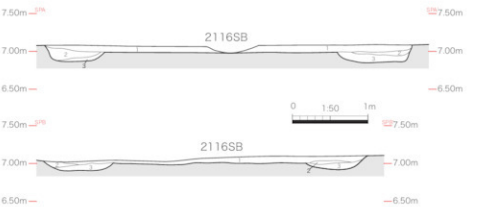




2034SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックの混入目立つ 炭化物を少量含む
3. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 極細粒～細粒砂のブロックをマーブル状に含む 下端部では炭化物主体

図 111　07B 区 2034SB 遺構図





2116SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 炭化物をやや多く含む 色調は2-3層より暗い
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立つ
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含み 極細粒砂を多く含む 炭化物を微量混入

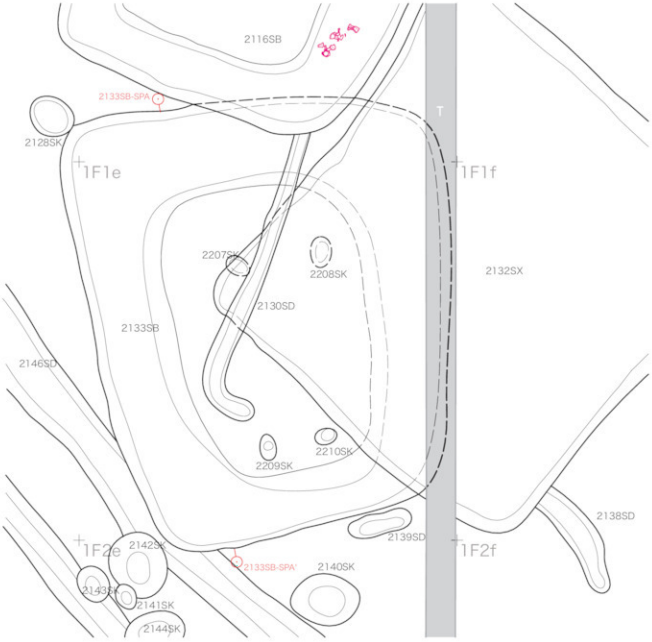
図 112　07B 区 2116SB 遺構図

2116SB　調査区中央部で検出された竪穴建物跡である。方位はグリッド北から西へ 45° 以上振れている。平面形は隅丸正方形で長さは北東辺で 4.3m、北西辺で 4.9m である。検出面から床面までの深さは約 10cm である。明瞭な壁溝はないが、周溝状床下施設が全周している。その幅は 0.3 ～ 0.4m で深さ 0.15m の逆台形の掘り方である。この埋土は基盤層のブロックを多く含んでおり、掘削後すぐ埋め戻されたものであると考えられる。なお、当該遺構では主柱穴が検出されていない。

遺物は南東部で集中しているが、全体に量は少ない。土師器高杯や壺の小片がみられる程度である。時期は古墳時代前期と推定される。

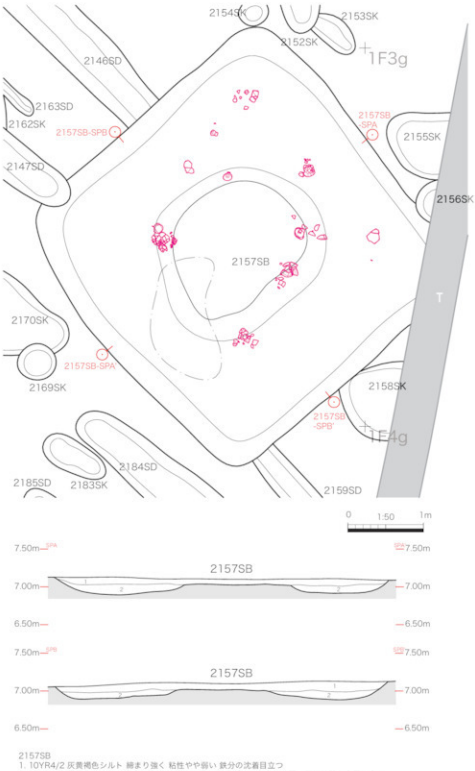
2133SB　2116SB と一部が重複してその南側に位置する竪穴建物跡である。方位はグリッド北から若干西へ振れており、平面形は南北に長い長方形である。その長径は 5.8m で短径は 3.2m 以上と推測される。当該遺構では主柱穴・壁溝ともに検出されず、周溝状床下施設が全周している。この埋土も基盤層のブロックを多く含んでおり、すぐに埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は高杯（304）が出土している程度で少ない。時期は重複関係から 2116SB・2132SX に先行することが判明する。



2133SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く含む 炭化物を少量混入する

図 113　07B 区 2133SB 遺構図

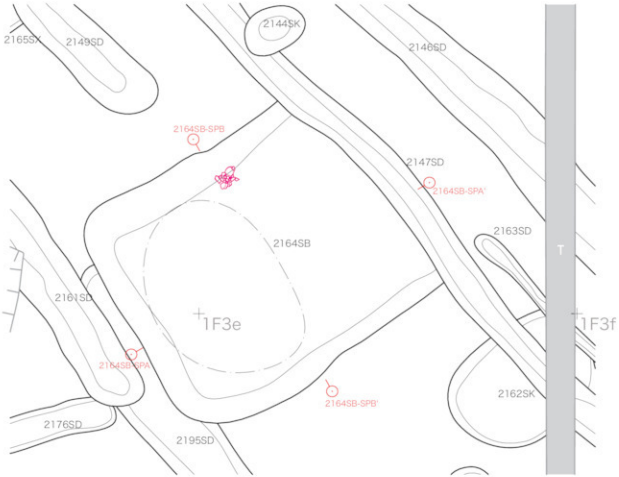


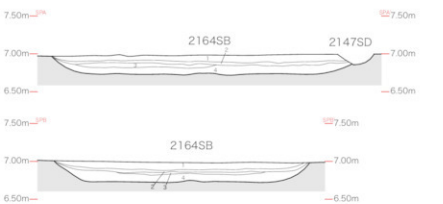
2157SB
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロック主体の層で極細粒砂を多量に含む

図 114　07B 区 2157SB 遺構図

2157SB　調査区南東隅で検出された竪穴建物跡である。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は隅丸正方形で一辺が 4.4m を測る。主柱穴・壁溝ともに検出されず、きわめて幅広な周溝状床下施設が検出されている。その幅は 1.5m ある。ただし深さは 0.1 ～ 0.15m と浅い皿状を呈しているのが特徴である。床面の中央部で炭化物の広がりが認められる。また床面の各所では土器の集積がいくつかみられる。土師器の高杯・壺・甕の一部が出土している。尾張地域の廻間式の終わりから松河戸式にかけてのものであり、古墳時代前期と位置付けられる。

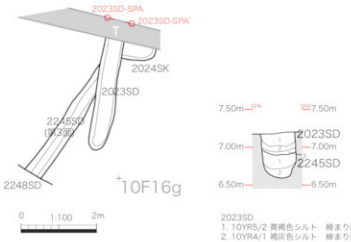
2164SB　調査区南部で検出された竪穴建物跡である。方位はグリッド北から 45° 西へ振れており、2157SB と同一である。平面形は隅丸長方形で短径は 3.4m、を測り、長径は 3.7m 以上と推測される。床面までの深さは 10cm ほどと浅い（1・2 層）。床面は広く炭化物の集積が広がっており（2 層）、建物解体時に焼かれた可能性がある。その下は全面が掘り込まれて掘り方となっており（3・4 層）、基盤層に由来するブロックが多く含まれる。当該遺構では主柱穴・壁溝ともに検出されていない。また出土遺物も少ないが、土師器ハケ甕（324・325）などがみられる。おそらく古墳時代前期であろう。



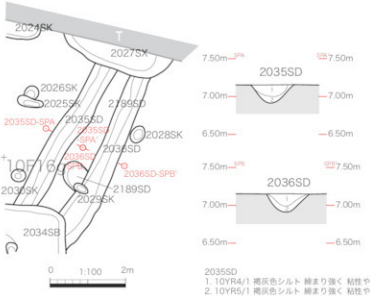


2164SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を少量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 炭化物を多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを多く含む 鉄分の沈着目立つ 炭化物を微量混入する
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック主体の層で極細粒砂を含む

図 115　07B 区 2164SB 遺構図



2023SD
1. 10YR5/2 黄褐色シルト　締まり強く 粘性弱い 炭化物を微量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 微量の炭化物を混入する
3. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立つ
2245SD(第3面)
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立つ 微量の炭化物含む
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を微量混入する



2035SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を微量含む
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い

2036SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を含む

図 116　07B 区小溝群遺構図

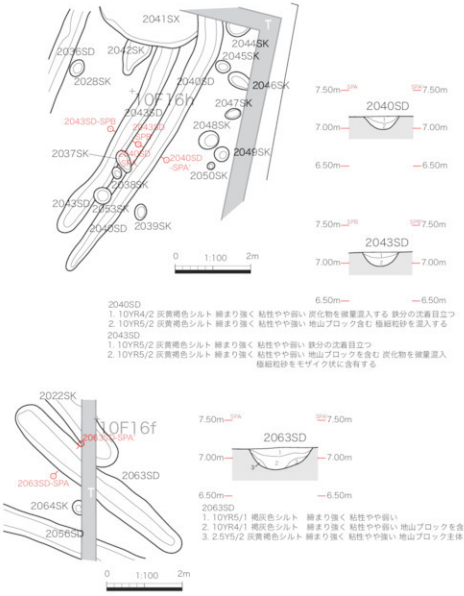
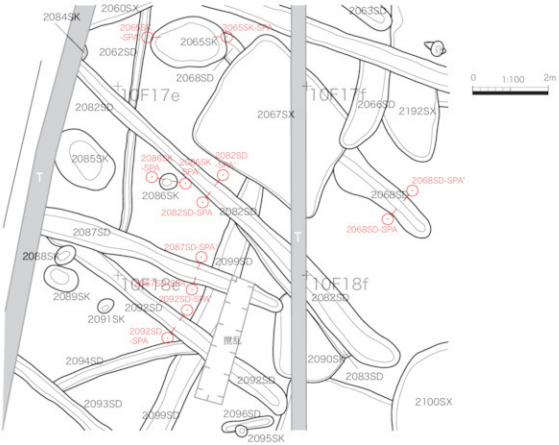


図 117　07B 区小溝群遺構図



2068SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり非常に強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む

2082SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 炭化物を微量混入する
2. 10YR5/2 暗灰黄色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック主体の層である

2087SD
1. 10YR4/2 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立つ 炭化物を微量混入する
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを主体とする層である

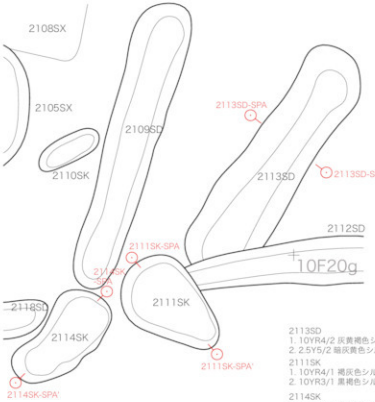
2092SD
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR5/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを主体とする

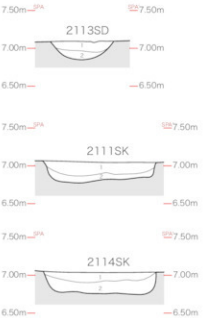
0 1:50 1m

2065SK
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックの混入やや目立つ
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む 極細粒砂を混入する

2086SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物の混入やや目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含む 炭化物を微量混入
3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 極細粒砂を含む 炭化物を微量混入する

図 118　07B 区小溝群遺構図

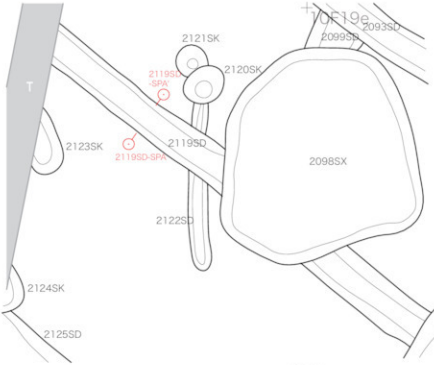


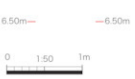


2113SD
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性やや強い
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックの層である

2111SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を微量混入する
2. 10YR3/1 黒褐色シルト 地山ブロック含む 炭化物を少量混入する

2114SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立 炭化物を微量混入
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含み 炭化物を微量混入する
色調は1層よりやや暗い





2119SD
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック主体の層で 極細粒砂を含む

図 119　07B 区土坑・ピット遺構図

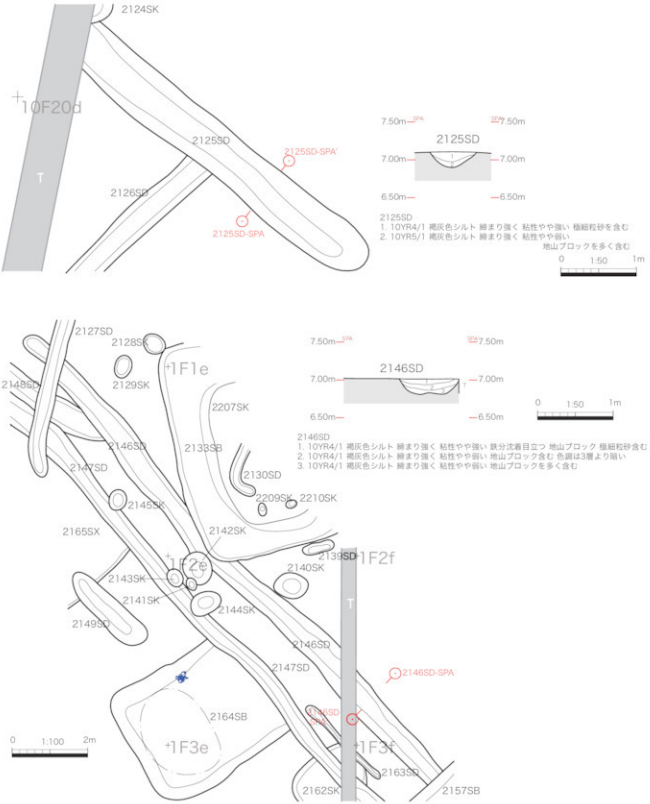
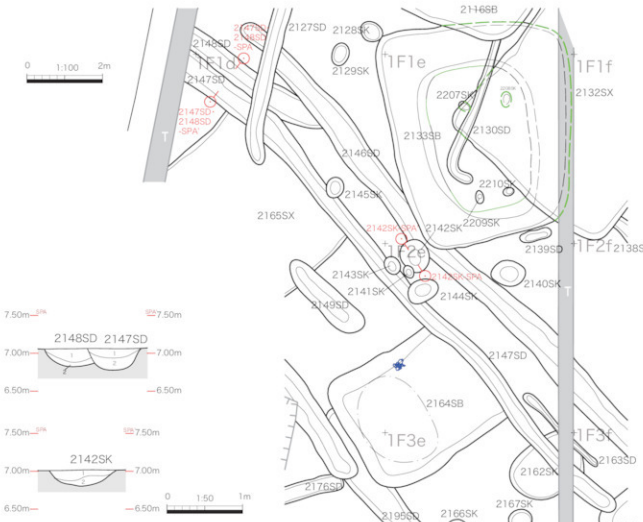


図 120　07B 区小溝群遺構図

07B 区小溝群　07B 区で検出される小溝群には大別してＡとＢの２つのパターンがある。Ａ群は調査区北端の一群（2040SD・2059SD など）で、北東から南西方向へ延び、2034SB 付近（一部は当該遺構に重複）で終わるものである。この一群は溝間間隔が狭い２本で一組になっている可能性がある。なお、調査区中央部の 2214SB から東側で竪穴建物跡の間でかろうじて検出されている小溝も全長が６～7m 程度の短いものであり、おそらくこの一群に含まれるであろう。一方Ｂ群は、調査区北西隅から西壁にかけて、そして調査区南部でみられる一群で北西から南東方向へ延びている。この小溝群は溝間間隔が３～4m あり、先に示した一群に比べて小溝どうしの平行もよく保たれている。また１条の長さが調査区を横断するほどのもの（2147SD、下図）もあり、施行時期も目的もかなり違うのではないだろうか。

これらの小溝の時期は、Ａ群は竪穴建物跡に先行していると考えられるが、Ｂ群では 2147SD や 2263SD などが竪穴建物跡埋土を切り込んでいる。したがって古墳時代中期以降の可能性が高いと考えられる。ただし両者が重複する地点が少なく（調査区中部の 2099SD など）、建物も含めた集落域の土地利用を考える上で重要な鍵になるものと思われる。



2147SD
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 締まり非常に強く 粘性やや弱い 炭化物を微量混入する
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 締まり非常に強く 粘性やや強い 地山ブロックを含み 炭化物を微量混入する

2148SD
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含む

2142SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト層 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く含む 鉄分の沈着目立つ
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 締まりが強く 粘性やや強い 地山ブロック主体の層である

図 121　07B 区小溝群遺構図

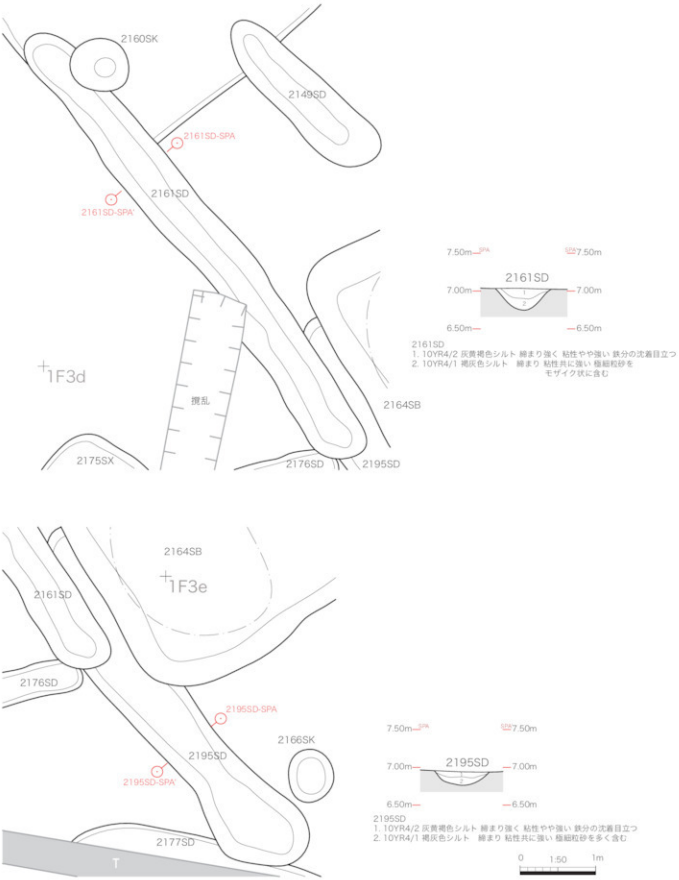
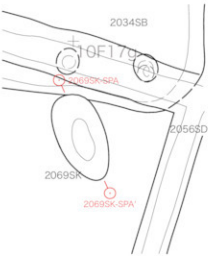
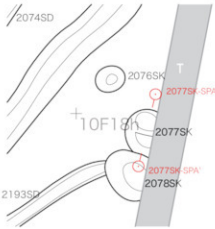
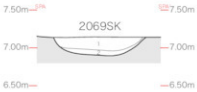


図 122　07B 区小溝群遺構図

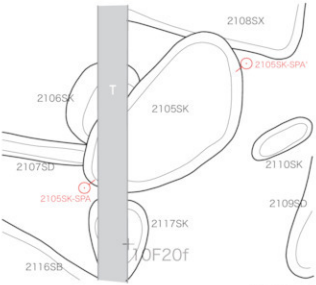


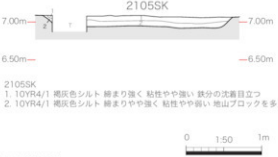




2069SK
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック含む 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　地山ブロック含む 極細粒砂を混入する

2077SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立つ
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 締まり強く 粘性弱い 地山ブロック主体
3. 10YR5/1 褐灰色シルト　地山ブロック含む 炭化物を微量混入





2105SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 鉄分の沈着目立つ
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まりやや強く 粘性やや弱い 地山ブロックを多く含む

図 123　07B 区土坑遺構図

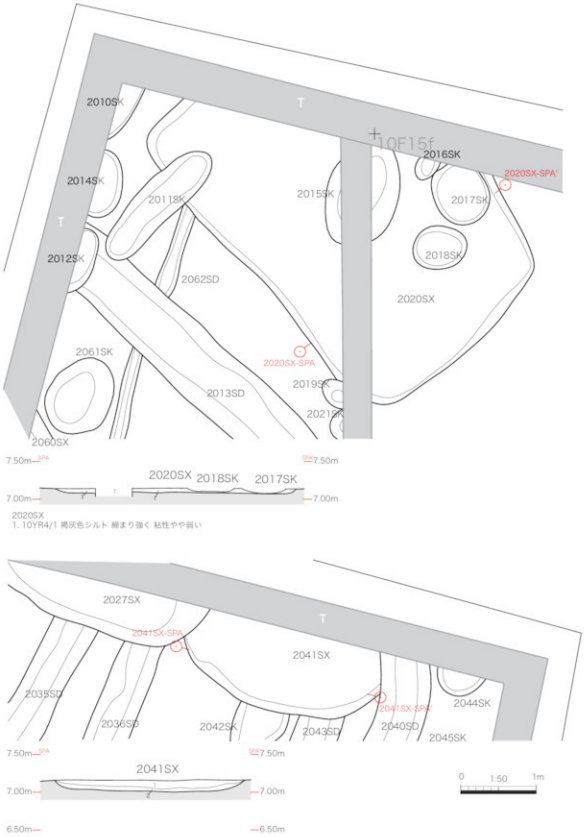


図 124　07B 区 2020SX・2041SX 遺構図

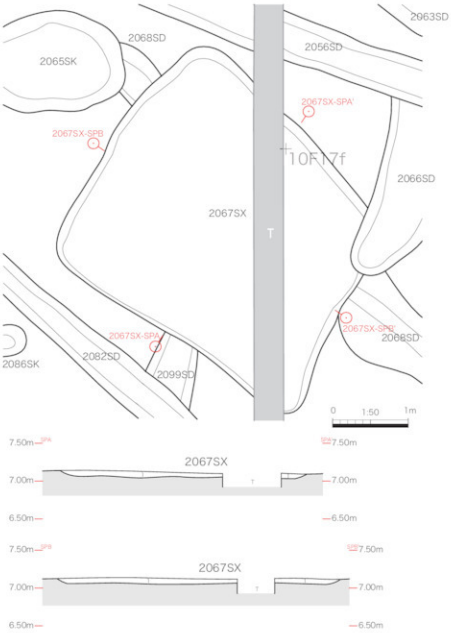


図 125　07B 区 2067SX 遺構図

2067SX　調査区南北部に位置する。やや不整形な方形で、南西辺を基準に考えると、その方位はグリッド北から西へ 45° 以上振れている。長径が約 3.8m、短径が約 3.2m で他の竪穴建物跡よりひとまわり小さいのが特徴である。またその埋土は 1 層で、浅い皿状の断面形をした床面の下には特段の遺構がない、また主柱穴や壁溝も検出されていない。以上の状況から竪穴建物と特定する根拠は少なく、竪穴状遺構として提示しておく。

当該遺構については出土遺物も少なく、時期は特定しがたいが、他の竪穴建物跡と同一方位であることから、古墳時代前期である可能性を考えておく。

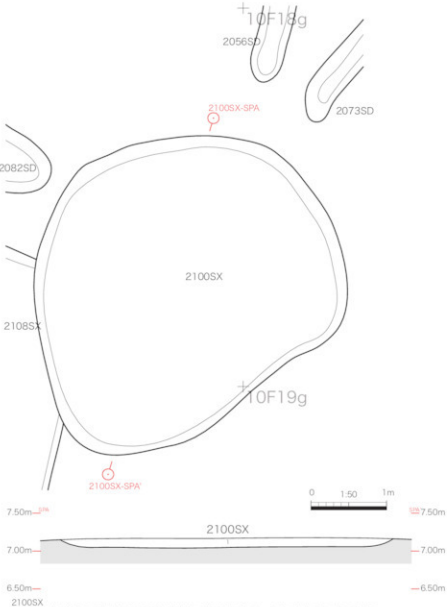
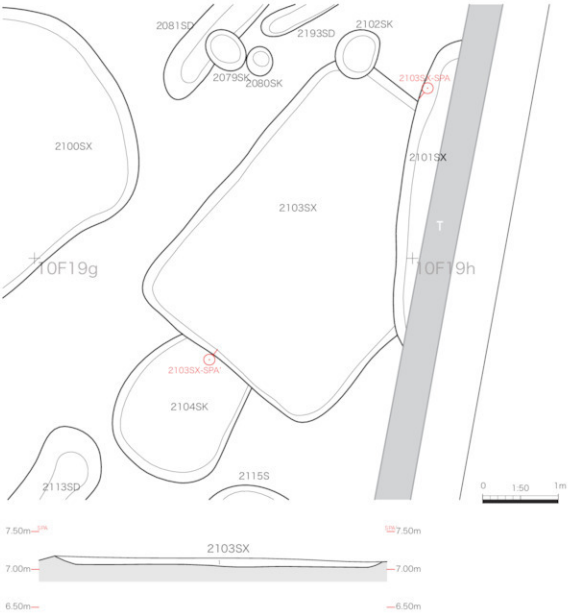


図 126　07B 区 2100SX 遺構図

2100SX　調査区中部に位置する。平面形は崩れた円形を呈している。西辺で 2108SX を切っている。長径約 4.6m、短径約 4.0m、検出面からの深さは約 0.2m である。当該遺構は第 2 遺構面で検出され、竪穴建物跡の可能性が考えられたが、第 3 遺構検出面（補足調査）において、当該遺構の真下で竪穴建物跡 2211SB が検出されており、2211SB が埋没した最上部の窪地であると考えられる。

当該遺構からは S 字状口縁台付甕の口縁（338）や直口壺（336）が出土しているが、実質 2211SB に含まれるものとする。

2103SX　調査区中部に位置する。一部は東壁にかかっている。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は長方形で長径が約 4.3m、短径約 3.0m である。平らな底面までの深さは約 0.15m と浅い。底面では主柱穴・壁溝ともに検出されていない。また底面より下に掘り方は存在しない。顕著な出土遺物がなく時期を特定しにくい。以上の要素から当該遺構を竪穴建物跡とするにはやや足りないことから竪穴状遺構として考えておくが、遺構の方位や平面規模が他の竪穴建物跡に近似しているので、小型の竪穴建物跡の可能性もある。



2103SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む 炭化物を微量混入

図 127　07B 区 2103SX 遺構図

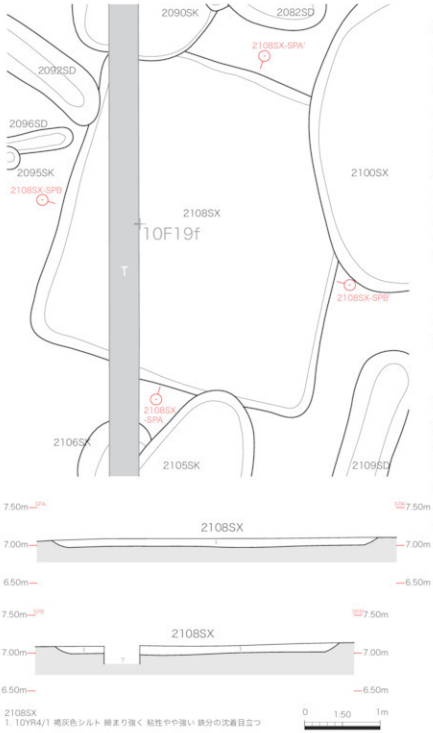


図 128　07B 区 2108SX 遺構図

2108SX　調査区中央に位置する。第 2 遺構面で検出され、2100SX と重複しこれに先行する。長径約 4.3m、短径約 3.8m の長方形で、遺構検出面からの深さ約 0.15m の浅い皿状を呈している。埋土は 1 層のみで主柱穴や壁溝などが検出されていない。また顕著な出土遺物もなかった。当該遺構とほぼ同じ位置の第 3 遺構面（補足調査面）で竪穴建物跡 2220SB が検出されており、2011SX と 2211SB の関係と同様に埋没した 2220SB の窪地の可能性が考えられる。したがって竪穴状遺構とし、実質 2220Sb と同一であると考えておく。

2132SX（2215SB）　調査区中部やや南に位置する。第 2 遺構面で検出された隅丸正方形の竪穴状遺構である。長径約 5.8m、短径約 5.1m である。検出面からの深さ約 0,.2m で浅い皿状の断面形をしている。平らな底面では主柱穴などは検出されていない。出土遺物は土師器（357・358）がある。当該遺構については第 3 遺構面で 2215SB が存在しており、その埋土は貼り床の状況であったことから、床面から上の部分と考えられる。したがって、これらの出土遺物は実質 2215SB に含めて考えておきたい。

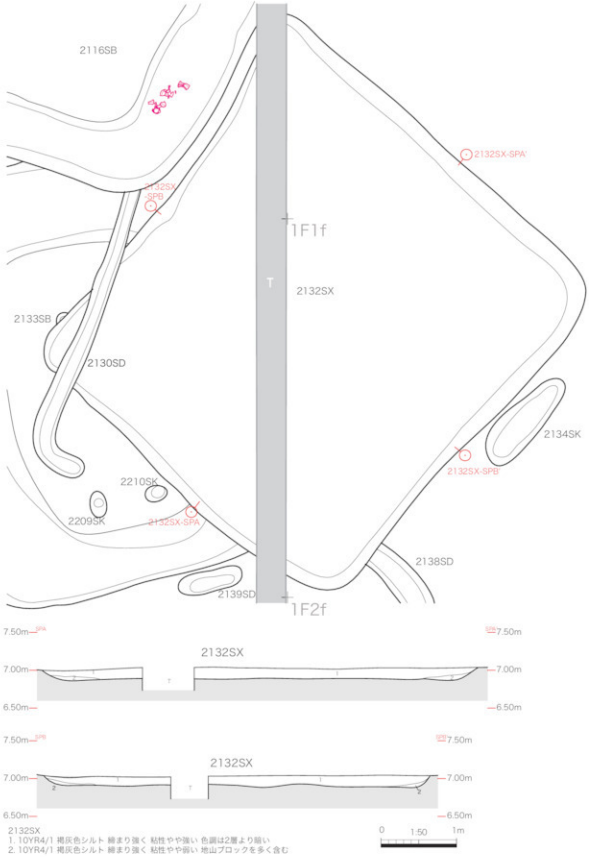


図 129　07B 区 2132SX 遺構図

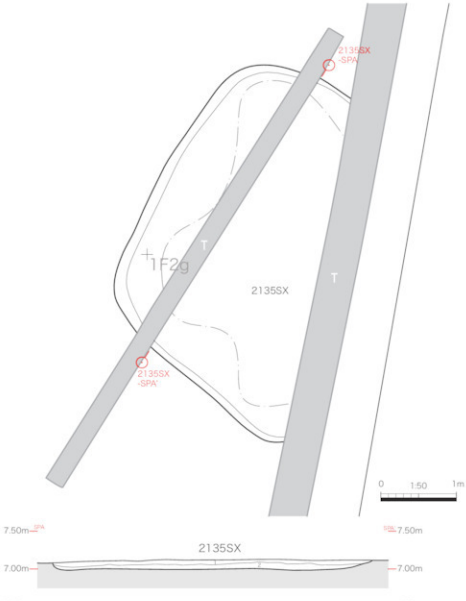


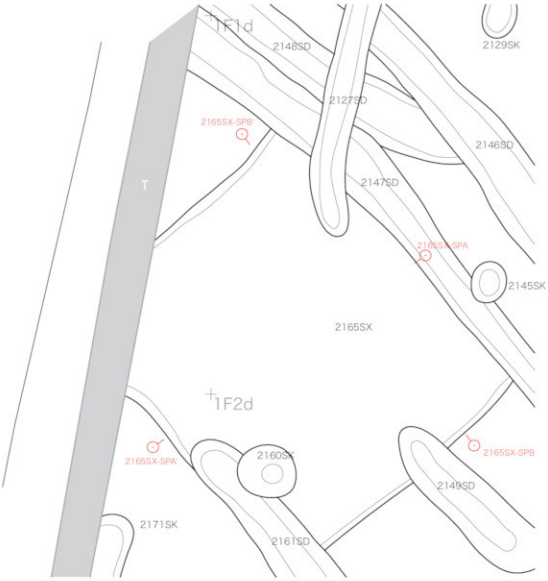
図 130　07B 区 2135SX 遺構図

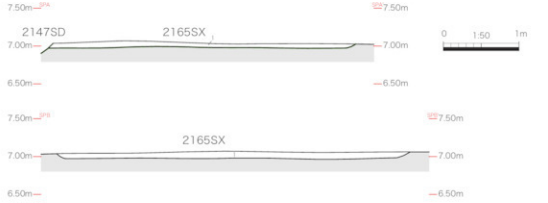
2135SX　調査区東壁にかかって検出された竪穴状遺構である。平面形は隅丸方形で長径は約 4.3m ある。平らな底面では主柱穴などが検出されていなが、炭化物の散布がほぼ全面でみられる。出土遺物もほとんどない。

当該遺構については、第 3 遺構面においてほぼ同一地点で竪穴建物跡 2217SB が検出されており、2217SB の埋没した最上部に相当するものと考えられる。

2165SX　調査区南西部に位置する。平面形は隅丸正方形と推定され長径約 4.7m である。検出面からの深さは 0.1m に満たないひじょうに浅い皿状を呈している。平らな底面で主柱穴や壁溝などは検出されていない。また底面下に掘り方などは存在していない。

顕著な出土遺物がなく時期を特定しがたいが、その方位がグリッド北から西へ 45° 振れている点や平面規模から竪穴建物跡の可能性が考えられる竪穴状遺構とする。ただし当該遺構の場合、第 3 遺構面で下部（本体）に相当する竪穴建物跡が検出されていないので、可能性は他のものに比べてやや低い。





2165SX
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを含む

図 131　07B 区 2165SX 遺構図

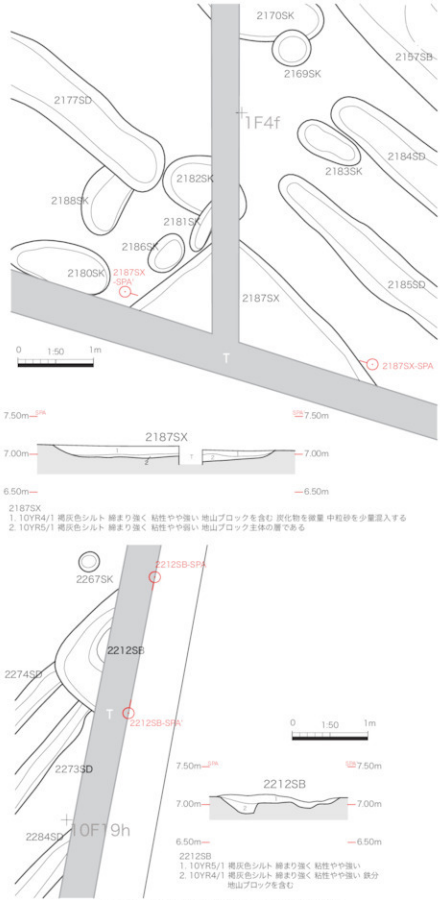
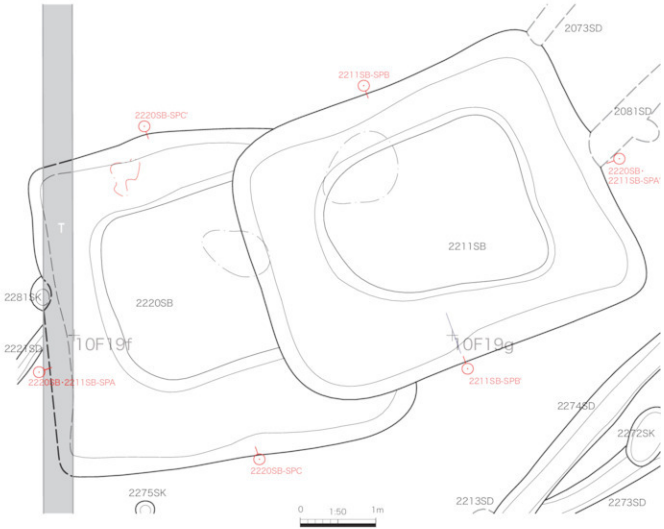


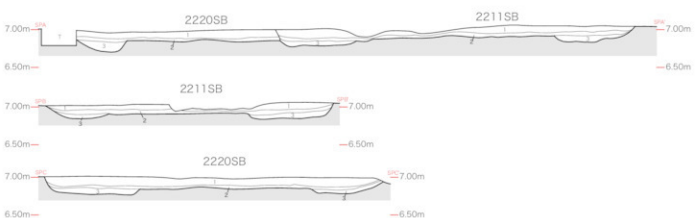
図 132　07B 区 2187SX・2212SB 遺構図

2187SX　調査区南端に位置する。調査区南壁にかかって一部が検出されている。平面形は方形と推定され、長径が 2.6m 以上の規模である。検出面から底面までの深さは 0.11m で浅い皿状を呈している。埋土は 2 層に区分されているが、全体に基盤層由来のブロックが多く含まれている。可能性としては竪穴建物跡の床面下の掘り方が検出された可能性が考えられる。出土遺物はほとんどなく、時期を特定しがたいが、その方位から古墳時代前期と推測する。

2212SB　調査区東壁にかかってごく一部が検出されている。遺構の縁に沿って幅 0.4m ほどの周溝状床下施設もしくは壁溝が検出されているので、検出範囲は少ないが竪穴建物跡と考えられる。なお主柱穴については不明である。出土遺物もほとんどなく時期を特定しがたいが、その方位から古墳時代前期の一群に含まれると推測される。

2211SB・2220SB　調査区中部に位置する。第 3 遺構面 8 補足調査面）で検出されている。ともに東西方向に長径となる長方形の平面形を呈している。2211SB は長径約 4.8m、短径 3.8m、2220SB は長径 4.8m、短径 4.4m で、平面規模は後者の方がやや大きい。また主柱穴や壁溝は検出されていない。床面で炭化物の散布もみられる。周溝状床下施設は最大幅で 1m を超えるもので、その埋土は基盤層の砂がブロック状に含まれているのですぐに埋め戻されたことを示している。出土遺物が少なく 2220SB で壺の口縁（368）があるくらいである。やや時期を特定できる要素に乏しいが、古墳時代前期に含めてよいと考えられる。

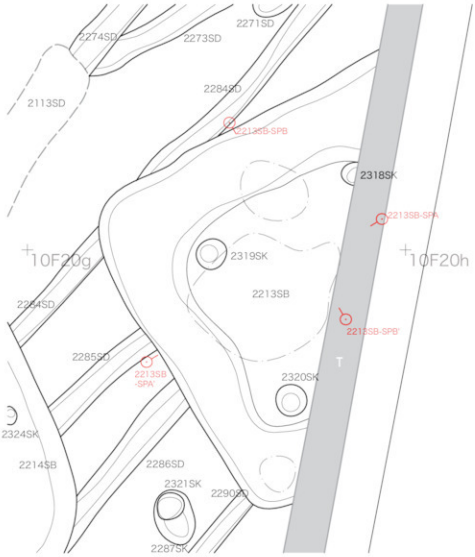


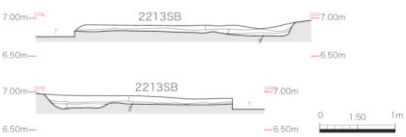


2211SB
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　締まり強く　粘性弱い　鉄分の沈着目立つ　炭化物を小量混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く　粘性やや弱い　地山ブロックを含み　炭化物を微量混入する
3. 10YR5/1 褐灰色シルト　締まり強く　粘性弱い　地山ブロック主体の層で　極細粒砂を含む

2220SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く　粘性やや弱い　地山ブロックを含み　炭化物を微量混入する
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　地山ブロックを含む
3. 10YR5/1 褐灰色シルト　地山ブロックを多く含み　炭化物を微量混入する

図 133　07B 区 2211SB・2220SB 遺構図





2213SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 下底面では炭化物を極めて多く含む
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物を少量混入する
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック主体の層である

図 134　07B 区 2213SB 遺構図

2213SB　調査区中部の東壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から 45° 振れている。同じ方位の建物跡は 2157SB・2164SB などがある。平面形は隅丸正方形になると考えられる。北西辺は約 4.7m 以上、南西辺は約 4.3m である。主柱穴は e3 基（2318 ～ 2320SK）が検出されている。これらの囲まれた中央部は炭化物の堆積がみられる（2 層）。壁溝はない。幅約 0.6m の周溝状床下施設があり、その埋土（3 層）は基盤層のブロックを多く含んでいる。出土遺物は少なく、土師器のハケが施された壺（348）ミニチュア土器（347）がある。時期は古墳時代前期と考えられる。

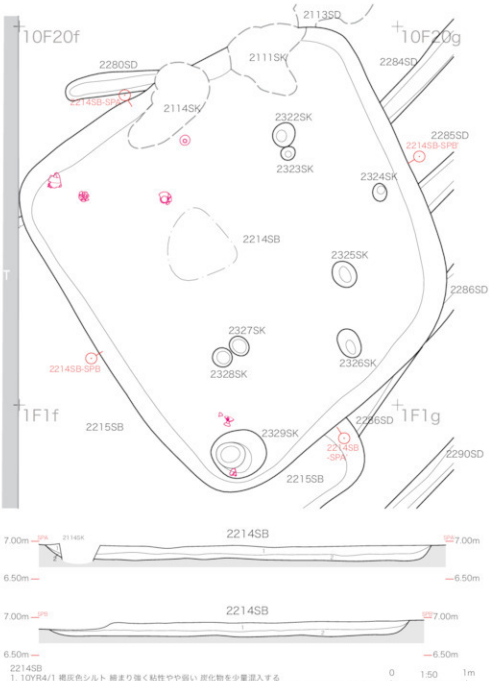
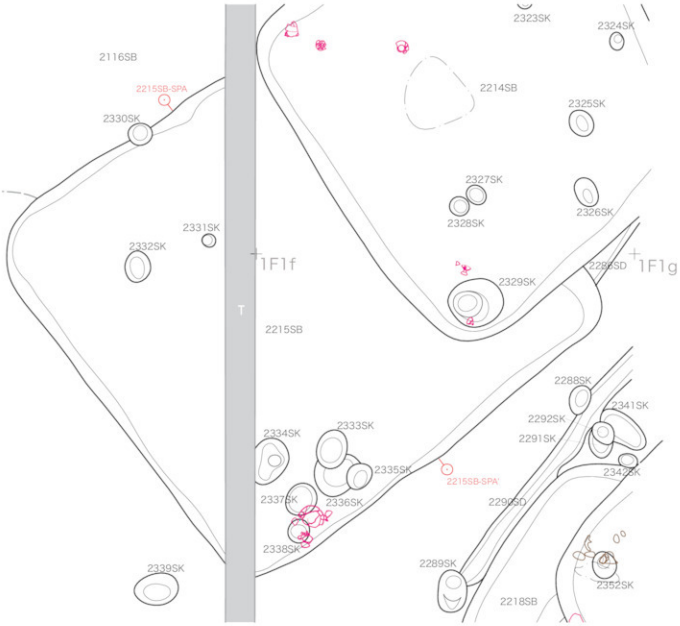


図 135　07B 区 2214SB 遺構図

2114SB　調査区中央部に位置する。2113SB の南西側に位置し、さらに南西側は 2115SB と重複しており、その後に造られている。方位はグリッド北から 45° 西へ振れている。平面形は隅丸正方形で、南西辺長は約 5.2m、北西辺長約 4.9m で検出面からの深さは 0.1 ～ 0.15m である。壁溝は検出されていない。また主柱穴は 3 基が検出され、西隅柱の相当位置付近に炭化物の散布がみられる。また南隅にやや大きい（直径約 0.7m）の土坑（2329SK）があるがこれは 2215SB の主柱穴とみられる。

周溝状床下施設は検出されていないが、床面下ほぼ全面が掘り方となっていて、貼り床としている。貼り床の土は基盤層由来の地山ブロックを多く含んでいる。

出土遺物は少なく、床面上で土器片が各所に散布している。高杯（350）、器台（353）丸胴形の甕（355）、壺（356）があり、姫下遺跡の前半期と併行期にあるとみられる。古墳時代前期に位置づけられる。



2215SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロックを多く含む 炭化物を微量混入する

図 136　07B 区 2215SB 遺構図

2215SB（2132SX）　調査区中部やや南よりに位置する。方位はグリッド北から約 40° 西に振れている。平面形は隅丸正方形で長径約 6.1m、短径約 5.8m である。検出面からの深さは約 0.2m である。当該遺構は先述の 2132SX の床下掘り方部分に相当し、埋土は基盤層由来のブロックが多く含まれている。2132SX は床面から上に相当することになる。

底面では壁溝や周溝状床下施設などは検出されていない。しかし主柱穴のうち 3 基（2329SK・2332SK・2334SK）が検出されている。

出土遺物は土師器壺（360・361）や西濃地域に系譜があると考えられる高杯の杯部（359）がある。時期は姫下遺跡の前半期に併行する。なお、出土位置からするとこれらは貼り床内に存在した可能性も考えられるが、そこまで限定せずに 2215SB 出土という範疇で認識しておく。

2216SX　調査区東壁にかかって一部が検出された竪穴状遺構である。方位はグリッド北から大きく西へ振れている。平面形は隅丸方形で長径約 4.0m と推測される。検出面からの深さは 0.15m である。主柱穴（2344 ～ 2346SK）があることや、埋土が上下層に区分され、下層は基盤層由来のブロックが多く含まれている点などを考え合わせると、竪穴建物跡である可能性が高い。出土遺物は少なく、壺（362）がある程度である。古墳時代前期と考えられる。

2217SB　調査区南東部に位置する。調査区東壁にかかって一部が検出された。方位はグリッド北から西へ 45° 以上振れている。平面形は丸みの強い隅丸方形で、全形は不明ながら長径約 4.4m 以上、短径約 3.8m 以上である。床面で主柱穴 4 基（2357SK など）が検出されているが、壁溝は検出されていない。また炭化材も出土している。

床面下には周溝状床下施設があり、全周しているとみられる。

なお炭化材は AMS 法で年代測定の結果、3 世紀半ばの暦年代が最も高い確率となった。

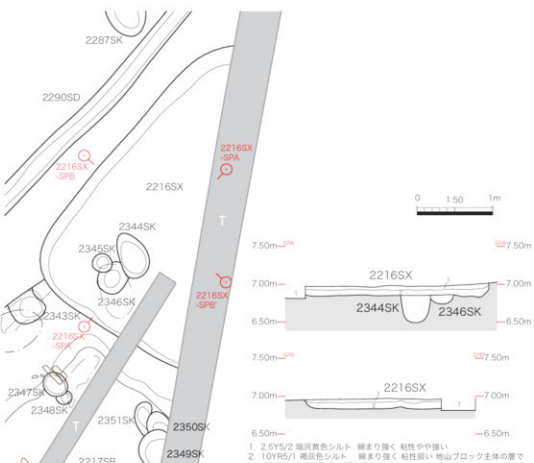
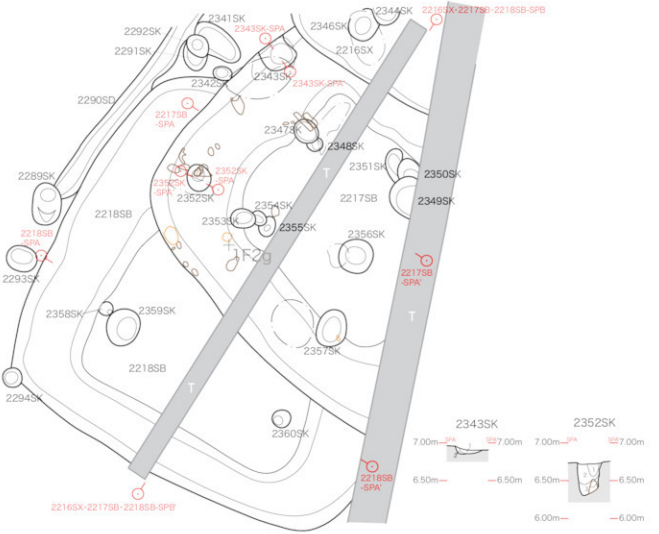
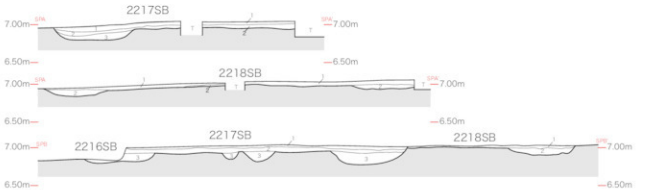


図 137　07B 区 2216SX 遺構図



2343SK
1. 10YR1.7/1 黒色シルト　締まり強く 粘性弱い 炭化物を主体とする層で地山ブロックを含む
2. 10YR4/1　褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを多く含み炭化物の混入やや目立つ

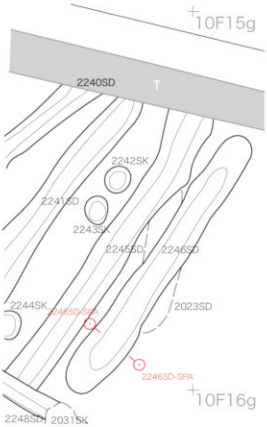
2352SK
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まりやや強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含み炭化物の混入やや目立つ
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 締まりやや弱く 粘性やや強い 地山ブロックを主体とする層で極細粒砂を混入する
3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 締まり 粘性共にやや強い 地山ブロックを主体とし炭化物を微量混入する



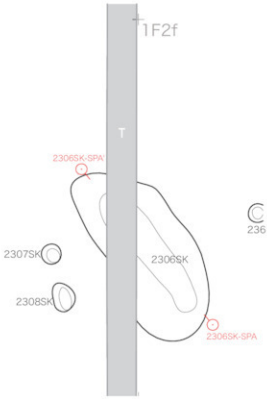
2217SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性弱い 鉄分の沈着が目立ち炭化物を多く混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを含み炭化物を微量混入する
3. 10YR5/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを多く含み炭化物を少量混入する

2216SB
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強く 粘性弱い 鉄分の沈着が目立ち炭化物を微量混入する
2. 10YR5/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を多く含み炭化物を微量混入する

図 138　07B 区 2217SB 遺構図



2246SD　調査区北端に位置する。先述（07B 区の小溝群）の A 群に含まれる。全長約 4.1m、幅 0.5m を測る。深さは yaku 4.0m あり、埋土はブロック状の土が含まれているので、掘削してすぐ埋め戻されたものと考えられる。このよう埋土の状況や小溝群が平行関係にあることから畑の畝溝である可能性が高い。



2306SK　調査区南部に位置する。楕円形の土坑で長径約 2.6、短径約 1.3m を測る。深さは約 0.4m である。埋土は下層で炭化物の混入が目立つ。出土遺物は土師器高杯など（405 ～ 413）があり、台付甕の台部が多い点が注目される。また甕には頸部に有段羽状文というべき施文のあるもの（407）もある。いずれにせよ古墳時代前期に相当し、廃棄土坑であったと考えられる。

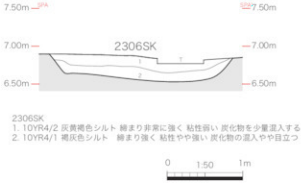


図 139　07B 区 2246SD・2306SK 遺構図

第 7 節　07C 区の遺構

概要　本調査区は 07B 区の南側に位置する。07B 区の遺構検出面（第 2 遺構面）の標高は平均した 7.5m であるが、本調査区では 7.0m で低くなっている。と等高線では北西から南東方向に向かうきわめて緩い傾斜地形となっており、11A 区南東隅の旧河道右岸までこの状況が続く。3001SD や 11A 区 029SZ でも述べるように、遺構埋土は視湿地堆積そのものであり、全体に沼沢地のような景観になっていたと想像される。

本調査区最大の遺構は古墳（方墳）の周溝である。その北側には方形周溝墓群が展開しており、墓域と位置づけられる。

3001SD　調査区南半部を占める、古墳の周溝である。幅約 12m、検出面からの深さ約 0.5m の断面が皿形を呈する溝が東西方向に約 16.0m 延び、調査区南東隅で南へ直角に折れて、さらに約 7.0m 延びている。ここでは東西方向部分を北辺溝、南北方向部分を東辺溝とする。北辺溝西端近くの土層断面（A-A'）によると、南側の立ち上がり付近にさらに深さ 0.2m のくぼみ（3085SK）があり、その上に基盤層由来のブロックが多く含まれる堆積（4 層）が覆っている。この層は周溝掘削および墳丘構築時に発生した土とみられる。そして同層上面の一部を覆う層（3 層）は褐灰色シルトがあり、自然堆積とみられる。なおこの層は上部からの掘り返しを受けたとみられる（2 層）。最上層（1 層）は再び褐灰色シルトで、3 層同様の自然堆積と考えられる。この層は 11A 区 029SZ の上層に相当し、微細にみるとラミナ堆積となっていることから、周溝全体が池のような状態になっていたものと考えられる。この状況は北辺溝東端（B-B'）でも同様で、墳丘近くにいったんくぼみがありそこから外縁へ向かって平坦面が続いている。

墳丘はその基盤層に掘り込まれた立ち上がり部分しか残されていないので、具体的な盛土の状況については不明である。しかし先述のようなブロック化した極細粒砂が周溝に流れ込んだような状況から、周溝を掘削して発生した土を盛り付ける構築方法が想定されよう。墳丘規模は 11A 区 029SZ で確認された南東隅の位置から、南北に約 20m と復元される。おそらく東西方向にも同様の長さであり一辺約 20m の方墳になると考えられる。そして周溝の外径長は一辺 44m が想定される。単純な計算に基づくが、それを掘削して発生した土を盛り付けても墳丘は 1.7m 程度にしかならず、古墳というよりは低墳丘墓となる。高塚を構築したとすれば、さらに外部から土を搬入する必要があったと思われる。

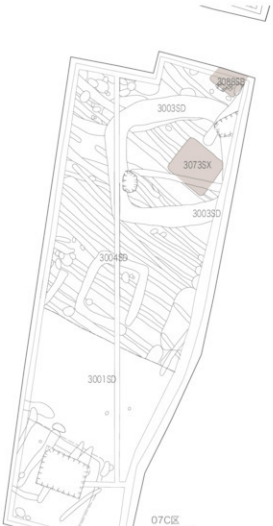


図 140　07C 区建物遺構分布図

出土遺物は少ないが、11A 区 029SZ よりは形状のわかるものがいくらかはある。おそらく 1 層に関係するのが灰釉陶器の鉢（441）で 9 世紀代であろう。古墳時代に遡るものは高杯（442）、廻間Ⅲ式の小型壺（443）、口縁に網状の施文がある遠江系の壺（446）がある。これだけでは特定しがたいが概ね古墳時代前期とみられる。

なお、当該遺構出土の炭化材を年代測定したところ、較正年代で 4 世紀後半の年代が最も高い確率である結果が示されている。

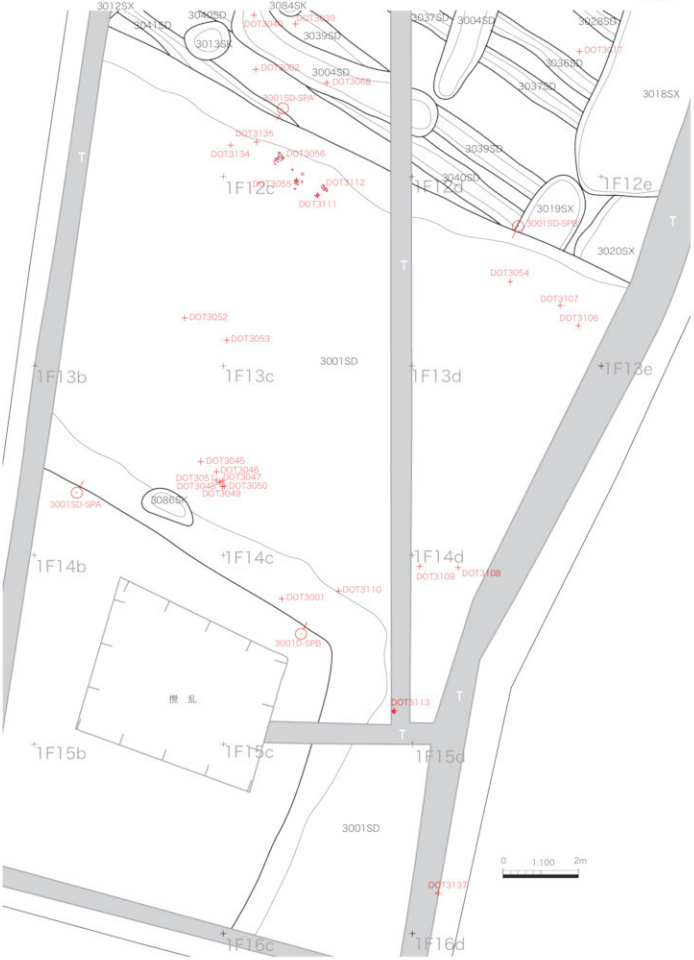
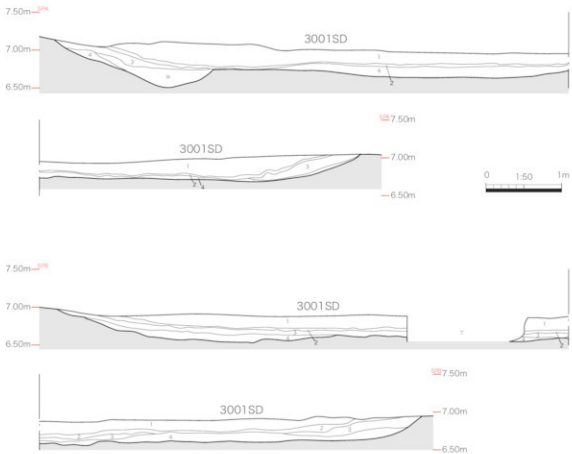


図 141　07C 区 3001SD 平面図

3003SD　調査区北部に位置する方形周溝墓である。幅 2.0 ～ 2.5m、深さ約 0.4m の皿状の断面となる溝が全周するとみられる。詳細には南東隅が検出しきれていないためここに陸橋が存在する可能性もある。いずれにせよ外径で一辺約 14.0m、内径で約 9.0m を測る。周溝の断面によれば、最下層（3 層）は基盤層由来の砂がブロック状に含まれており、掘削直後に流れ込んでいる状況が示される。その上層（2 層）は炭化物の集積がみられ、墓の完成後の状態である。その後堆積が進み（1 層）、3001SD と同様の状況になったと思われる。主体部については削平されており不明である。

出土遺物は、1 層に関わるものとして 8 世紀代の須恵器杯（449）がある。それ以外には高杯（451）や壺（452）がある。石製品では管玉（S22・S23）が出土しており、主体部にふくそうされたものであろう。

3004SD　調査区中部に位置する。方墳の周溝 3001SD の外縁から約 1.0m 離れてその南辺がある。周溝は、幅 0.8 ～ 1.0m、深さ約 0.2m で南東隅が切れており、陸橋になっている。外径で南北約 7.6m、東西約 6.6m を測り、内径で南北約 5.5m、東西約 4.6m を測る。周溝の堆積は上下 2 層に区分され、下層は基盤層由来のブロックが多く含まれている。上層（1 層）は褐灰色シルトで、3001SD や 3004SD と同一である。これら他の周溝との違いは墓完成後の炭化物を多く含む層を間に挟んでいないことで、時期差を示しているのか興味深い。また 3004SD の立地は 3001SD と方位を揃えつつその位置が規制されていると言ってよく、3001SD に服属的な地位をうかがわせる。出土遺物は土師器甕の口縁部があるのみで、古墳時代前期に位置付けられる。



3001SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を小量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト　締まり強く 粘性やや強い 微細な炭化物の集積層と思われる 上･下の層をブロック状に混入する
3. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 炭化物及び極細粒砂を各々少量混入する 色調は4層より暗い
4. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや強い 地山ブロック 極細粒砂含有を多く含み炭化物を微量混入する
※：3085SK埋土

図 142　07C 区 3001SD 断面図

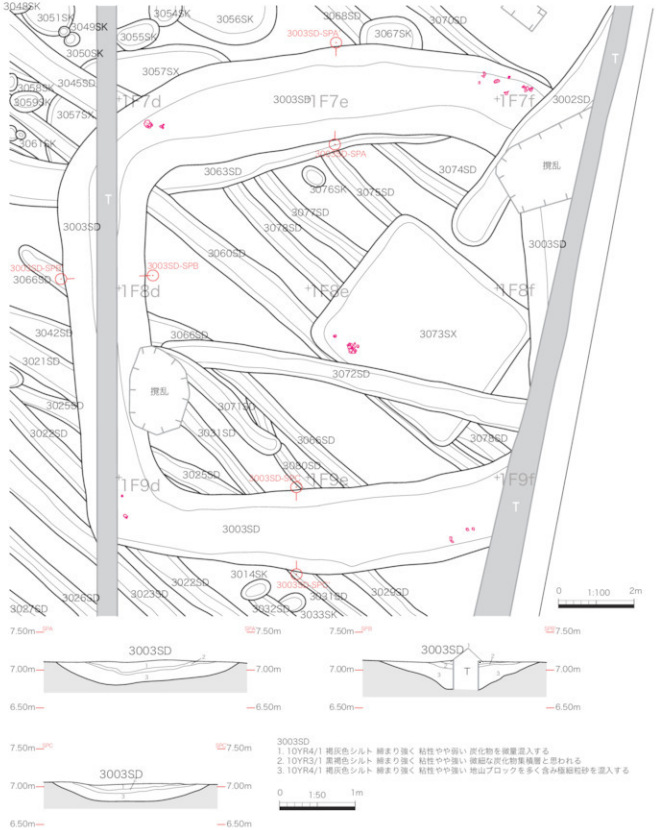


図 143　07C 区 3003SD 遺構図

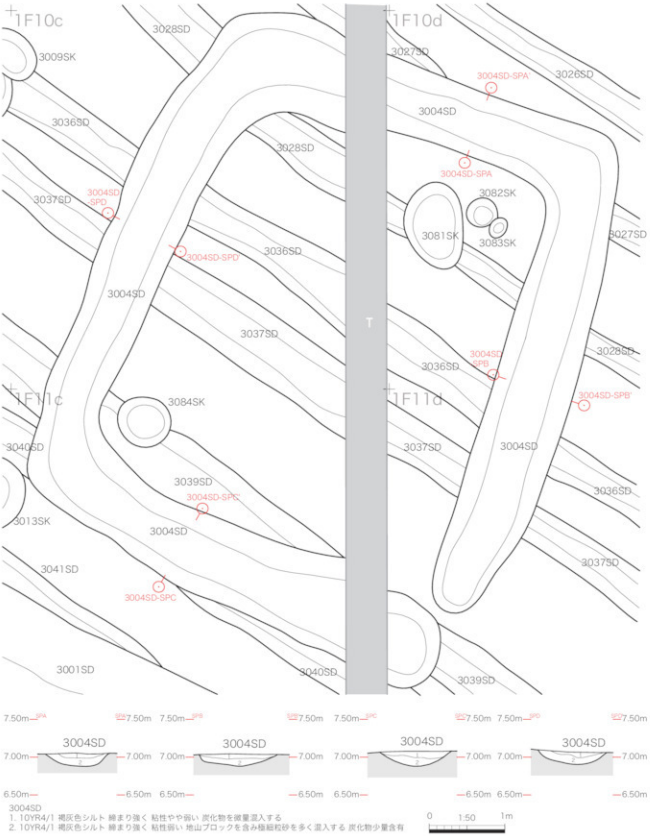
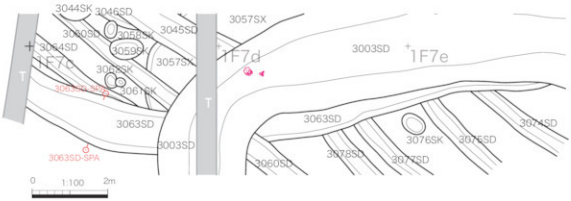
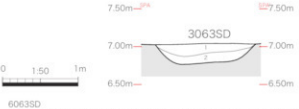


図 144　07C 区 3004SD 遺構図

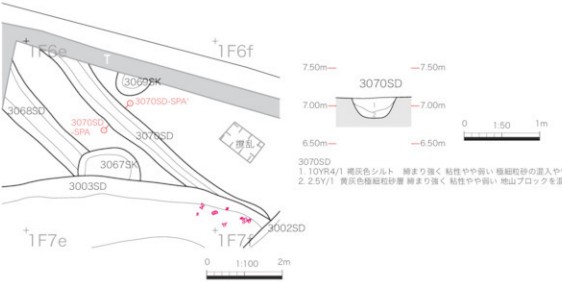




6063SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 鉄分の沈着目ち 炭化物を微量混入する
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 地山ブロック主体の層である

07C 区の小溝群　本調査区ではほぼ全体にわたって小溝群が検出されていい。3073SD を始めとする北西から南東方向へ抜ける長いものは、幅約 0.5 ～ 0.6m、深さ約 0.2m で隣の溝との間隔は 1m 以下と狭い。また所々で重複している点や 3001SD の北辺溝外縁までで終わっている点も注目される。周溝墓などの遺構は小溝群の後に構築されたものである。

また 3001SD の墳丘下層に相当する調査区南西隅でも検出されている（3094SD・3097SD ～ 3099SD など）が、こちらは北東から南西方向となっており、しかも 3001SD を切り込んでいることから、古墳築造後に掘られたものであることがわかる。墳丘盛土が削平されたのはこの小溝の時期とみることができよう。



3070SD
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂の混入やや目立つ
2. 2.5Y/1　黄灰色極細粒砂層 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロックを混入する

図 145　07C 区 3063SD・3070SD 遺構図

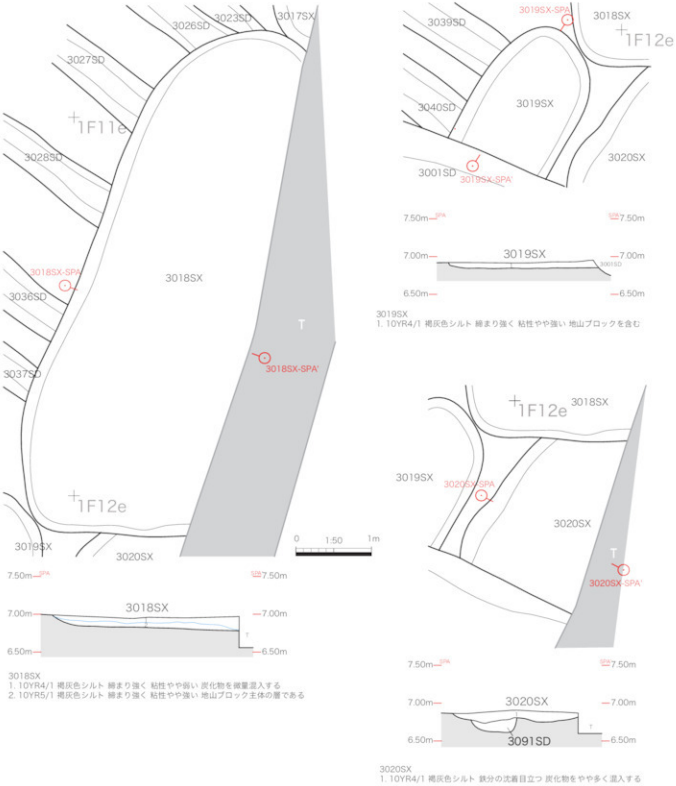


図 146　07C 区 3018SX・3019SX・3020SX 遺構図

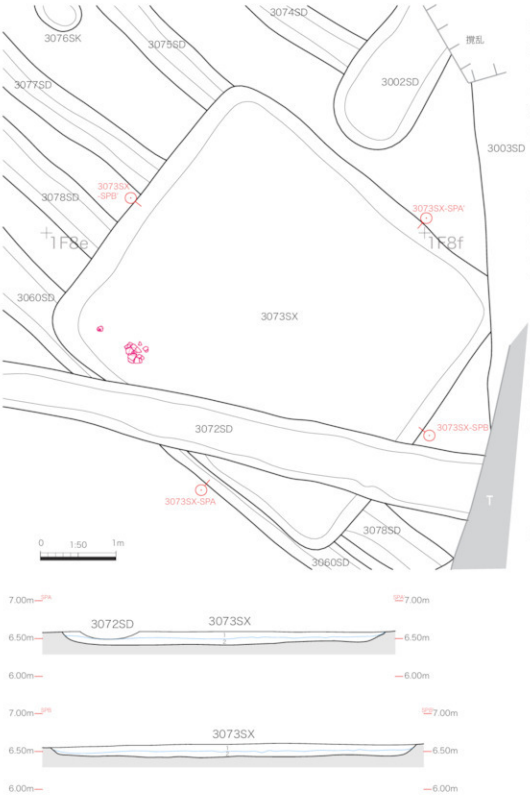
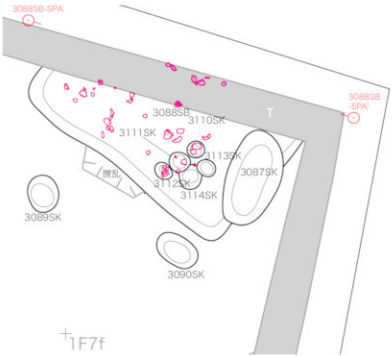


図147　07C区3073SX遺構図

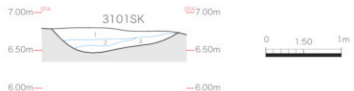
3073SK　調査区北東部に位置する。方形周溝墓3003SDと重複しており、その主体部の位置に相当し、東隅で3003SDの東辺溝に切られていることから、こちらが先行する。方位はグリッド北から約45°西へ振れている。平面形は隅丸方形で、長径約4.8m、短径約4.3mを測る。検出面からの深さ約0.2mである。

底面では主柱穴や壁溝が検出されておらず、このことから竪穴建物跡の可能性がある竪穴状遺構とする。埋土は上下2層に区分され、下層（2層）は基盤層由来のブロックが多く含まれているので、貼り床に相当すると考えられる。

出土遺物は西隅で土師器甕（435）が1個体分まとまって出土している。古墳時代前期と考えられ、方形周溝墓の時期もこの後に位置付けられることになる。



3088SB
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 土器片を多量に混入し炭化物を微量含有する
2. 10YR4/1 黄灰色シルト 締まり強く 粘性弱い 地山ブロック主体の層である
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり強く 粘性やや弱い 地山ブロック及び極細粒砂を含む



3101SK
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや弱い 極細粒砂を含み炭化物をやや多く混入する
2. 10YR4/1 褐灰色シルト　締まり強く 粘性やや強い 極細粒砂を含む
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂層 締まり強く 粘性弱い 褐灰色土のブロックを少量含む

図 148　07C 区 3088SB・3103SK 遺構図

3088SB　調査区北東隅に位置する。調査区北壁にかかって一部が検出された。平面形は隅丸方形とみられ、南西辺で約 3.6m を測る。深さは約 0.2m である。床面で主柱穴や壁溝は検出されていない。埋土は上層（1 層）と下層（2 層）に区分され、上層が床面上となる。2 層はほぼ全面に広がる掘り方である。

遺物は比較的多数出土しており、床面ほぼ全面にて土器片の広がりが見られる。土師器の高杯（437）や壺類（438・440）、線刻のある土器片（439）がある。

第8節　11A区の遺構

概要　11A区は調査着手時点で重機による多量の土取りがなされていた。一部は遺構面にまで達しており、削り込み以外にも重機のキャタピラーによる圧痕が遺構面に多く見られた。検出時にこれらは攪乱として扱っている。

そのような状況ではあったものの、調査区北部では古墳の周溝ライン（029SZ）を把握することができた。これは07C区3001SDの続きである。また東壁にかかって方形周溝墓1基（074SZ）、調査区南端で鹿乗川旧河道（008NR）、その脇で竪穴建物（021SI）が検出されている。

024SK　調査区西壁にかかって一部が検出された東西方向の長方形を呈する土坑である。検出された部分は約2.5mで西方向へさらに延びるとみられる。上端・下端ともに丸みがなく、埋土も基盤層がブロック化したものが大半をなっている。おそらく掘削されてすぐ埋め戻された状況が考えられる。時期は不明。

008NR　調査区南東隅で検出された、鹿乗川の旧河道右岸である。厳密には水流のあった旧河道の埋没が進行した最終状況であり、上流からの水流が乏しくなって有機質の堆積が極端に進行した層位を指している。その堆積は15～20°の緩い傾斜面の上にあり、この傾斜は後述する11A区003NRにみる左岸のそれより緩くなっていることが明らかである。このことから旧河道は、調査区付近では右カーブしながら延びていると想定される。特に黒褐色シルトが薄く堆積する幅約5mのテラス状部分がみられるのが特徴である。ただしここでは顕著な遺物はみられなかった。その下位にある黒色粘土層（5層）からは自然木などが出土したが、土器の出土は少ない。さらに下位には灰色粘土層（6層）がやや抉りこむような堆積をみせ、おそらく一時的な水流はあったと考えられる。ここでも土器・木製品の出土は少なく、このことは当該地点が集落の生活域から離れていることに関わっているとみることができる。

020SD　008NRのすぐ北側で検出された周溝状に延びる浅い溝である。幅約2.5mで調査区東壁から008NRと同方向に延びて6mほど進んだところで南東方向へ直角に折れている。その先は急速に幅が狭くなっている。削平されたものかもしれない。深さは約0.15mで皿形の断面形となっている。当初、方形周溝墓の可能性も考えられたが、大型竪穴建物の周溝状床下施設の可能性も考えられる。ただしこれ以外に竪穴建物の所在を示す遺構は検出されていない。

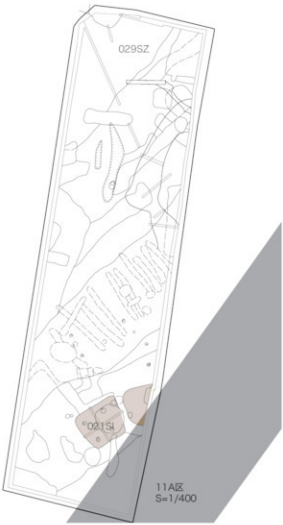
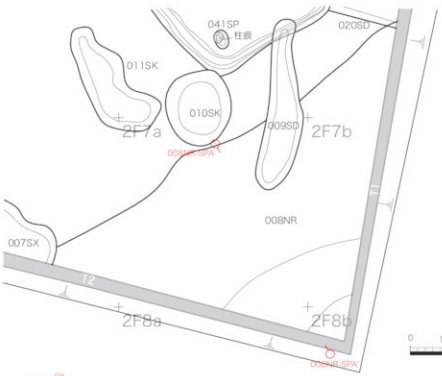


図149　11A区建物遺構分布図

024SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土ブロック大量 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
3. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱　10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(基礎砂層)
4. 10YR7/1 灰白色極細粒砂　粘性弱 酸化鉄少量含む(基礎砂層)



008NR
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　　粘性強　10YR7/1灰白色シルト粒少量 酸化鉄含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　　粘性強　10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量含む(008NR上層)
3. 10YR2/1 黒色粘土　　粘性強　10YR7/2にぶい黄橙色粘土ブロック多量 酸化鉄少量含む(008NR上層)
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物・10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(008NR上層)
5. 5YR2/2 黒褐色粘土　　粘性強　10YR7/1灰白色シルト粒多量 木片・酸化鉄少量含む(008NR下層)
6. 7.5Y7/1 灰白色粘土　　粘性強　10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(008NR下層)
7. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト　　粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒多量 炭化物・10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(基礎砂層)

0 1:50 1m

図 150　11A 区 024SK・008NR 遺構図

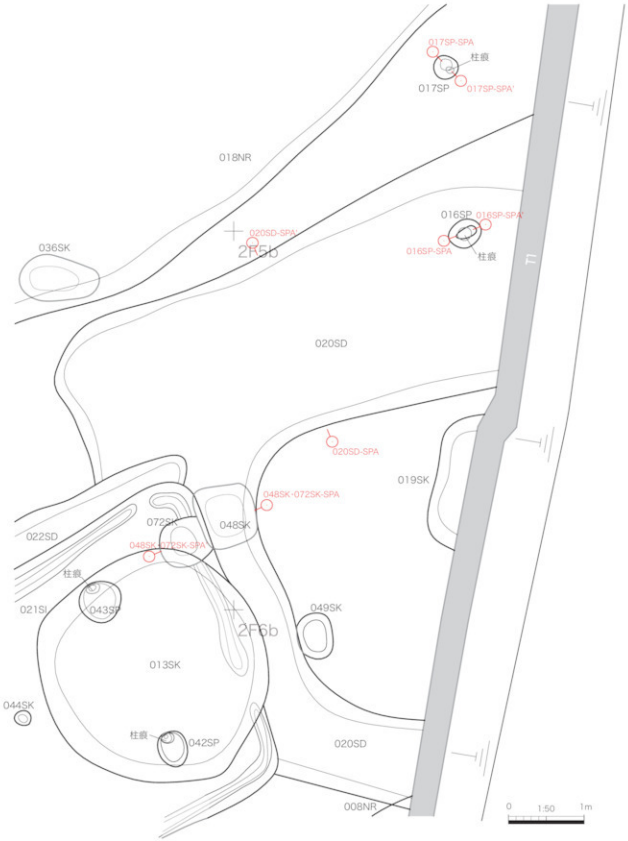


図 151　11A 区土坑・ピット平面図

図 152　11A 区土坑・ピット断面図

018NR　調査区の中央部を調査区東壁から南西隅へ延びる浅い窪地状の地形である。遺構検出時には溝状にみえたので遺構として扱っている。その幅は 5 ～ 6m、深さは約 0.2m で、断面はきわめて立ち上がりの緩い皿状を呈している。その埋土は黒褐色シルトを主体としている。この形状や埋土の状況から人為的なものではないと判断される。このほか特徴として旧河道 008NR に平行していると点である。008NR と 018NR の間に狭小な自然堤防とみられる高まりがあり、それに対する後背湿地と考えられる。

ただし 018NR の底面ではその方位とは垂直方向に延びる幅 0.5m 前後の小溝が 10 条検出されている（023・057 ～ 064・075SD）。これらは 1 ～ 2m 間隔で平行関係にある。またその深さは 0.3m ほどあって底は不明瞭な状況である。このことから、これらの溝は耕作によって掘り込まれた畝溝と推定される。後背湿地の有機質の多い土壌を利用した耕作地がほぼ 018NR の形状で北東から南西方向へ広がっていたものと推測される。ただしこれらの小溝群はもとより 018NR からの出土遺物はきわめて少なく、その時期を特定することは困難である。なお付近には古墳時代前期の竪穴建物跡 021SI が存在しているので、ここの居住者が耕作をしていた可能性はある。

021SI　調査区南部に位置する。旧河道 008NR の上端から北西約 2m に近接するが、008NR の項でも述べたように、008NR の右岸には幅 5m のテラス部分があるため、実質の河道の窪みからの距離は 7 ～ 8m はある。しかしその一方で 021SI のすぐ北西側には後背湿地 018NR が控えており、当該遺構は幅約 20m の狭小な自然堤防の上に立地していることになる。その方位は旧河道に併行し、その埋没過程につくられたものであることがうかがえる。

平面形はやや北東辺が歪んだ隅丸正方形で、南西辺長が約 4.4m となっている。幅 30 ～ 50cm の壁溝がほぼ全周しているが、これは底面が平らな掘り方を埋めた貼り床の上から掘り込まれている。幅あるので壁溝とするよりは周溝状床下施設の一類型とみるべきであろうか。主柱穴は 4 基確検出され（040 ～ 043SP）、南西辺に近い 040・041SP が 40 ～ 50cm の深さがあるのに対して 042・043SP がやや浅くて皿状である。実質前者で屋根建築構造を地面に固定していたのかもしれない。床面での顕著な焼土や炭化物の集積はない。

当該遺構の出土遺物は少なく、その北東辺で重複関係にある 072SK・084SK から古墳時代前期の土師器が出土している。また周辺からもほぼ同期の土師器しか出土しないので、021SI は古墳時代前期に機能していたと考えられる。しかし狭小な自然堤防を利用した立地はやや特異であり、また寄島遺跡 12B ～ 07B 区で検出された集落の中心域とも墓域を挟んで離れている点も興味深い。

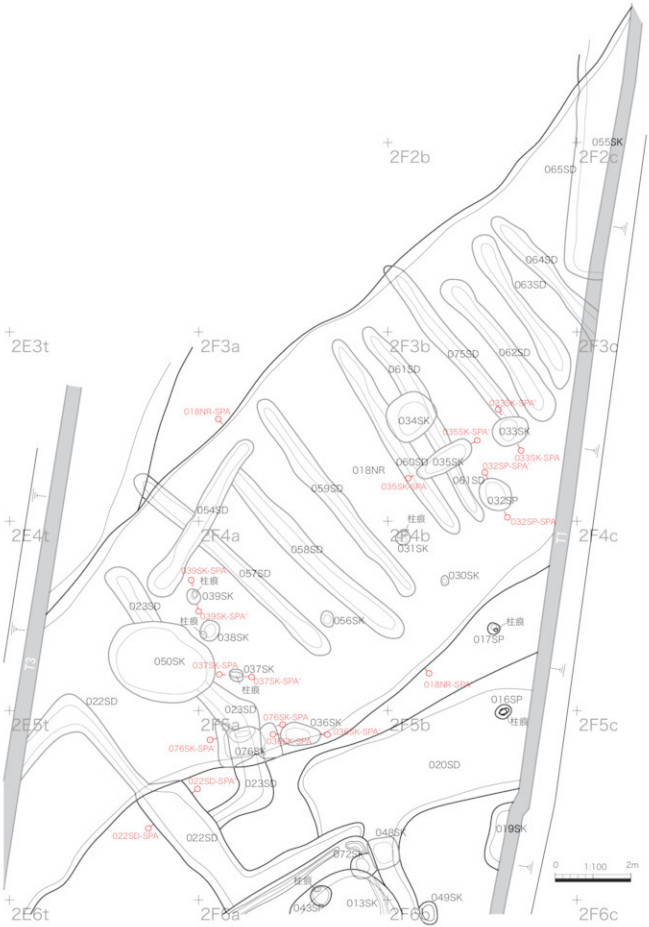


図 153　11A 区 018NR と小溝群平面図

018NR
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土粒多量 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
4. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(054SD)
5. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒少量 酸化鉄含む(058SD)
7. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む

032SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒少量 酸化鉄含む
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む(柱痕)
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒少量 酸化鉄含む

022SD
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 炭化物少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂少量 酸化鉄含む
3. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)

023SD 076SK
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(023SD)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(076SK)
3. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 7.5YR8/1灰白色極細粒砂多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(076SK)

033SK
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む

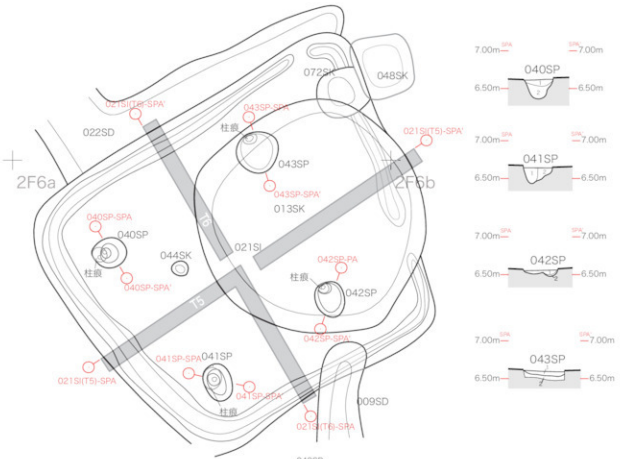
035SK
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
3. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)

036SK
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性弱 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1 灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
4. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 酸化鉄少量含む(基盤砂層)

037SK
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む
3. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 酸化鉄多量含む(基盤砂層)

039SK
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色極細粒砂・10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む

図 154　11A 区 018NR と小溝群断面図

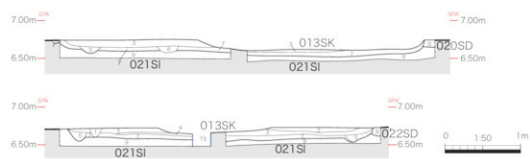


040SP
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 炭化物･10YR7/1灰白色細粒砂･酸化鉄多量含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む

041SP
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 炭化物･10YR7/1灰白色細粒砂･酸化鉄少量含む(柱痕)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む

042SP
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 炭化物･10YR7/1灰白色細粒砂･酸化鉄少量含む(柱痕)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む

043SP
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 炭化物･10YR7/1灰白色細粒砂･酸化鉄少量含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む



021SI
1. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR2/1黒色シルト粒･酸化鉄多量 炭化物少量含む
2. 10YR6/2　灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 炭化物･10YR2/1黒色粘土ブロック･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(021SI埋土)
3. 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 炭化物･10YR2/1黒色粘土ブロック･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土ブロック少量含む(021SI埋土)
4. 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒･酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
5. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR2/1黒色シルト粒･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(021SI壁溝)
6. 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR2/1黒色シルト粒･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
7. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒･酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(021SI掘方･貼床)
8. 10YR6/2　灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック･酸化鉄多量 炭化物･10YR2/1黒色シルト粒少量含む(020SD 022SD)
9. 10YR6/2　灰黄褐色細粒砂　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(基盤砂層)

図 155　11A 区 021SI 遺構図

029SZ-029SK(T7)-SPA
029SZ(T14)-SPA
T4
T12
1F18a
1F18b
1F18c
029SZ(T13)-SPA'
029SZ
077SD
045SK
029SZ-077SD(T10)-SPA
029SZ-077SD(T10)-SPA'
T10
070SK
1F19a
1F19b
1F19c
047SK
066SK
SP
025SK-SPA
025SK
SP
T3
067SD
046SK
1F20a
1F20b
1F20c
029SK-SPA
067SD
068SD
027SK
052SD
029SZ-029SK(T7)-SPA'
0
1:100
2m

029SZ(T13)
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 7.5YR6/1灰白色極細粒砂・7.5YR5/1褐灰色粘土粒・酸化鉄多量含む
4. 7.5YR8/1 灰白色極細粒砂　粘性弱 酸化鉄多量含む(基盤砂層)

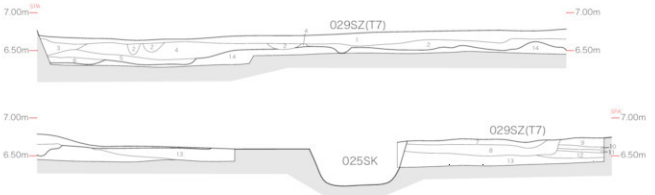
077SD(T10)
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(077SD)
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
4. 10YR3/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒多量 10YR7/1灰白色粘土粒,酸化鉄多量含む
5. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒・7.5YR8/1灰白色細粒砂少量含む
6. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む

図 156　11A 区 029SZ 遺構図

029SZ　調査区北西隅を中心に検出された方墳の周溝と墳丘の基底部分である。まず墳丘は南東隅が検出されており、そこから西へ南辺約 4m、北へ東辺約 2m 分が直線で確認されている。周溝底からは高さ約 15cm 分が残存しているが、これは基盤層を削り込んだ部分のみで、墳丘の盛土部分はほとんど確認されなかった。ちなみに墳丘には後の掘り込みがほとんどみられず、比較的近時まで墳丘盛土が残存していた可能性が高い。

周溝は、墳丘から調査区北壁付近およびトレンチ（T7）まではあまり撹乱をうけずに残存していた。しかしながら T7 から南側では外周の上端が撹乱によって不明瞭になっており、調査区西壁で確認した立ち上がりに対して直線的に延びていると推定される。この想定に基づけば、周溝の平面形状は方墳に対して不整形となるため、墳丘が前方後方形をしている可能性が調査段階に指摘されていたが、平成 26 年度の発掘調査で先述の墳丘南辺が直線で西方へ延びていることが確認されたので方墳と結論づけられる。

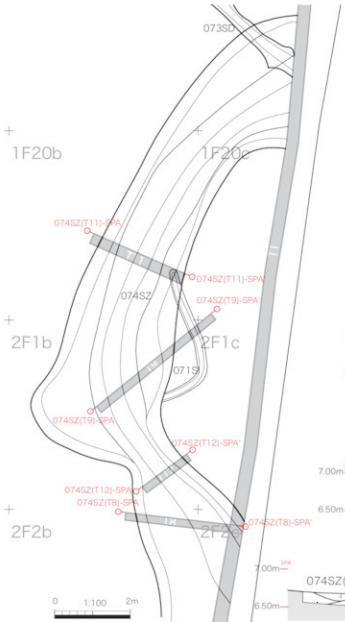
上層は黒色粘質シルトの上層と褐灰色砂質シルトの下層に区分される。まず下層は遺物は土師器の小片がわずかにあるだけで、基盤層の状況とさほど変わらないことから、古墳構築からほどない時期に流入したものであろう。一方、上層はラミナ堆積が上方からの攪拌を受けてたものである。出土遺物はここでも少なく、土師器が若干ある以外に、須恵器・灰釉陶器や山茶碗といった古代から中世前半の遺物も含まれている。このことから、古墳の周溝は埋没し時間がかかり、かつ水が流れ込む環境にあったと推測される。



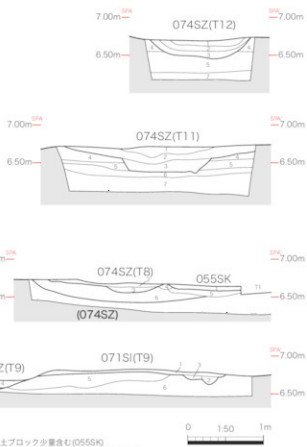
029SZ(T7)
1. 10YR2/1 黒色粘質シルト　粘性強　炭化物・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色極細粒砂少量 植物質含む ラミナ堆積が攪拌されている(029SZ上層)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(029SZ上層)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄少量含む(029SZ下層)
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(029SZ下層)
5. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(029SZ下層)
6. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(029SZ下層)
7. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
8. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土ブロック少量含む
9. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(基盤砂層)
10. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む(基盤砂層)
11. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(基盤砂層)
12. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 7.5YR8/1灰白色粘土粒少量含む(基盤砂層)
13. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR2/1黒色粘土粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)
14. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂　粘性弱　10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄少量含む(基盤砂層)

025SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土ブロック大量 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR7/1 灰白色極細粒砂　粘性弱 酸化鉄少量含む(基盤砂層)

図 157　11A 区 029SZ 断面図



074SZ　調査区東壁にかかってその西半部が検出された方形周溝墓である。方位は古墳の周溝 029SZ とほぼ平行で古墳の方から当該遺構を避けているように見受けられる。規模は外周の西辺で約 13m ある。一方内周は 8.5m である。周溝は断面が皿状を呈しており深さは 40cm ほどである。南西隅がくびれて溝も浅くなっているので陸橋に相当するのであろうか。出土遺物がほとんどないことから時期を特定できないが古墳に先行する段階と推測される。



074SZ(T8)
1. 10YR3/1　黒褐色砂質シルト　粘性弱 10YR2/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1粘土ブロック少量含む(055SK)
2. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(074SZ上層)
3. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む(074SZ下層)
4. 10YR2/1　黒色砂質シルト　粘性弱 10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土ブロック少量含む
5. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色極細粒砂・10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
6. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(基礎砂層 但し周溝墓の埋土の可能性あり)

071SI 074SZ(T9)
1. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(071SI埋土)
2. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(071SI壁溝)
3. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(071SI踏力)
4. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
5. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(基礎砂層)
6. 10YR6/1　褐灰色砂　粘性弱　10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(基礎砂層)

074SZ(T11 T12)
1. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(074SZ上層)
2. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 7.5YR8/1灰白色細粒砂・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(074SZ上層)
3. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 7.5YR8/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(074SZ下層)
4. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 7.5YR8/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(基礎砂層)
5. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(基礎砂層)
6. 7.5YR4/1 褐灰色細粒砂　粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)
7. 7.5YR8/1 灰白色極細粒砂　粘性弱 酸化鉄多量含む(基盤砂層)

図 158　11A 区 071SI・074SZ 遺構図

第 9 節　11B 区の遺構

003NR　11B 区では調査区南端を除いたほぼ全域が鹿乗川の旧河道である。なお厳密には、旧河道が機能していた段階は砂の水性堆積が徐々に進行していたものが、上流からの水流が極端に減少すると、砂以外のシルトや粘土の堆積が進行し始める。結果、沼のような状態になり、水分によって植物質が多く残存することになる。この植物質とは廃棄された木製品はもちろんのこと、河道の脇に生えていたとみられる自然木なども含まれる。半ば泥炭のような状態になるので、それまでの灰白色砂層とはうってかわって黒色の粘土層へと変貌する。本報告ではこれを旧河道として調査している。したがって、本来はその倍以上の幅(約 30 ～ 40m) が水流のある河道であったと推測される。

当該調査区では黒色粘土層の左岸上端から深さ約 2m の粗粒砂層上面（ここで湧水が激しくなり下への掘削は不能となる）までの緩い傾斜面が検出されている。深さ約 1m までを概ね上層として掘削し、植物質や土器の出土が増加するあたりから下層として掘削している。上層のうち 1・2 層では黒色シルトに細粒砂が若干混じっており、炭化物も多数みられる。当該層で最も特徴的なのは畦畔状のたかまりがみられる点である【図 159】。この高まりは上辺の幅が約 1m の台形状になっている。調査では・2 層掘削に合わせて一部で遺構検出を試みたところ、中央ベルトにおける断面での確認地点から南西方向へ延びる畦畔状高まりとその先で直交する同様の高まりを検出することができた。この形状から水田などの畦畔であると考えられる。特徴はその方位で、旧河道の左岸に対してほぼ直交方向にある。おそらく旧河道の黒色粘土層上面を水田化したと考えられ、下懸遺跡の旧河道でも同様の畦畔遺構を検出している〔永井邦仁 2010「下懸遺跡」『年報 平成 21 年度』愛知県埋蔵文化財センター〕。上層下部の 4・5 層ではブロック化した白色粘土が混じっており、耕作によって攪拌されていた可能性が考えられる。

一方、下層は 7 層に灰白色粘土層が全体を覆っており、当該層が堆積した時点では水流のあったことが考えらえる。時期は古墳時代中期～古代と推測される。そして 8・9 層の黒色土に覆われた 11 層はやや灰色がかったシルトで、土器・木製品の出土量が増加する。ただし河道の中心では少なく、傾斜面（12 層）付近に集中する傾向にある。このことは、もっぱら南側からの廃棄がなされていたことを示している。

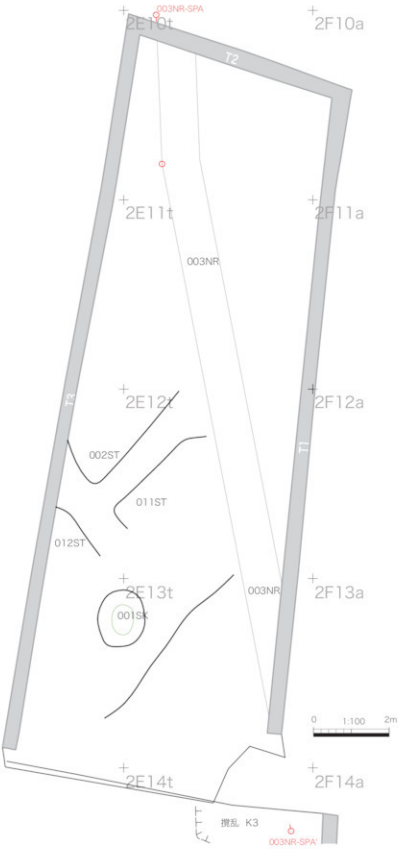
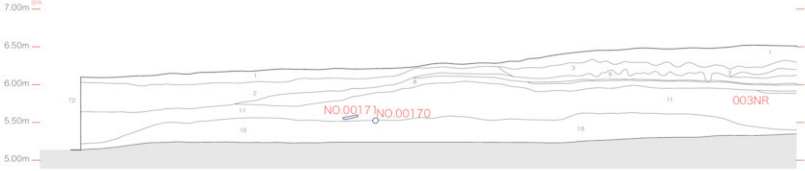
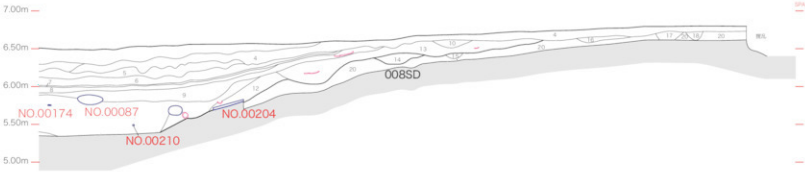


図 159　11B 区 003NR 平面図





003NR
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む(灰釉陶器片含む包含層)(003NR(1)=003NR上層)
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　粘性強 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量 炭化物微量含む(階段状(中世か))(003NR(1)=003NR上層)
3. 7.5YR3/1 黒褐色粘土　粘性強 10YR7/1灰白色粘土ブロック多量 酸化鉄少量 炭化物微量含む(水田耕土(中世か))(003NR(1)=003NR上層)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土ブロック・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物含む 3層付近で10YR7/1灰白色粘土ブロック含む(K層(全体に上部からの攪拌を受けている))(003NR(2)=003NR上層)
5. 7.5YR2/1 黒色粘質シルト　粘性強 10YR7/1灰白色粘土ブロック・酸化鉄少量含む(003NR(2)=003NR上層)
6. 10YR2/1 黒色粘質シルト　粘性強 木片・10YR7/1灰白色粘土ブロック・酸化鉄多量含む ラミナ堆積 植物質多量含む(003NR(2)=003NR上層)
7. 10YR7/1 灰白色粘土　粘性強 木片・酸化鉄多量含む(003NR(2)=003NR上層)
8. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト　粘性強 木片多量 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量 炭化物微量含む ラミナ堆積 (003NR(3)=003NR上層)
9. 7.5YR2/2 黒褐色粘土　粘性強 木片・10YR7/1灰白色粘土粒多量 炭化物・酸化鉄少量含む ラミナ堆積 植物質多量含む(003NR(3)=003NR上層)
10. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(003NR(3)=003NR上層)
11. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒少量含む ラミナ堆積 植物質多量含む 木製品と倒木・流木特に多い 土器多い(003NR(3)=003NR上層)
12. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性強 木片・炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量含む 植物質は少量 木製品と土器多量(003NR(3)=003NR上層)
13. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性強 木片多量 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(003NR(3)=003NR上層)
14. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性強 炭化物・10YR7/1灰白色粘土ブロック少量 酸化鉄含む
15. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量 炭化物微量含む
16. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
17. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性強 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
18. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄多量含む
19. 10YR7/2 にぶい黄橙色細粒砂 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒微量含む
20. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト～極細粒砂 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む 植物質はほとんどない(基盤砂層)

図 160　11B 区 003NR 断面図

第 10 節　11C 区の遺構

概要　本調査区は寄島遺跡の南端に位置しており、南接する東西道路から南側は下懸遺跡の範囲である。ただし、その区分はほぼ現代の地割であるため、調査して検出される遺構・遺物様相の変化はこの線とは異なっている。すなわち 11B 区で検出された鹿乗川の旧河道 003NR がそれに該当すると考えられる。最も明確なのは、11B・C 区で出土する土器が古墳時代初頭を中心としているのに対し、11A 区から北側の調査区で出土する土器は古墳時代前期を中心としている点である。

11C 区は、11B 区で標高 6.5m まで下がった遺構検出面が再び上昇し、平均して標高 7.0m になる。ただしこれは後世の削平を受けた状態であり、特に南東部では基盤層まで削り込まれているので、遺構が希薄になっている。本来は旧河道に伴う自然堤防が急速に発達して微高地を形成していたと思われ、下懸遺跡から続く古墳時代初頭集落の続きが展開しているとみられる。

なお、旧河道は 11C 区の西側へ回りこむが、それまで河道の左岸は攻撃面であったことから、堆積の傾斜角度が大きかったが、それが徐々に緩くなっていくとみられる。旧河道の位置は現在の鹿乗川にほぼ重なり、やがて下懸橋から下流で南東方向へと進路が変化していく。

本調査区における遺構検出面は２面あり、黒色シルト（K 層）の上面を第１遺構面、それを掘削した基盤層上面を第２遺構面としている。前者は平安時代～戦国時代の遺構、後者は弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構が検出されている。

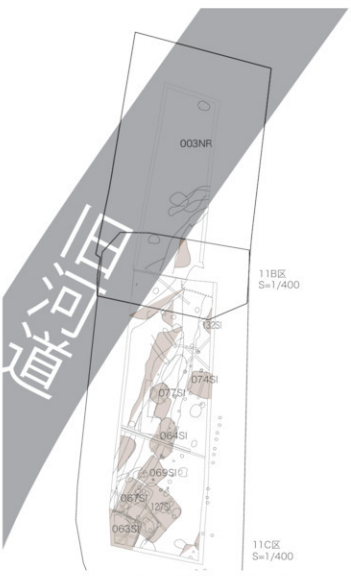


図 161　11C 区建物遺構分布図（第２遺構面）

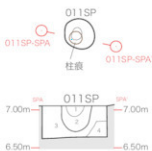
037SI　調査区南部に位置する。第 1 遺構面で検出された、不整形な周溝状遺構である。黒色シルトに掘り込まれた灰白色シルト主体の埋土が特徴である。当初は大型竪穴建物も可能性があったため遺構種別が「SI」となっているが、主柱穴や壁溝が検出されていなことから、周溝状の不明遺構としている。

出土遺物は灰釉陶器（1142 ～ 1146）があり、黒笹 90 号窯式期で 9 世紀後半と推定される。また同時期の土師器三河型甕（1155・1156）もある。遺構の性格は上述のように決め手がなく、明らかにしえない。

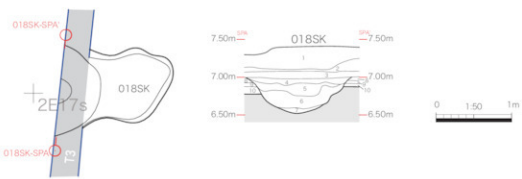
038SI　調査区南西隅に位置する。調査区西壁と南壁にかかって一部が検出されている。遺構の形状は幅 1.0 ～ 1.5m の浅い皿状の断面を呈する周溝である。埋土は褐灰色シルトで周溝状床下施設にみられるようなブロックの包含はない。、したがって種別「SI」を付しているが竪穴建物跡とするには根拠が乏しい。本報告では竪穴状遺構 tp しておく。出土遺物は古墳時代の土師器の他に灰釉陶器碗（1158）がある。

049SI　調査区中部に位置する。038SI と同様の周溝状遺構である。主柱穴など竪穴建物跡の要件に満たないので、竪穴状遺構とする。

042SI　調査区東壁にかかって一部が検出されている。038SI と同様の周溝状遺構である。幅約 1.5m の浅い溝が直角に折れる。基盤層由来の砂のブロックが含まれており、人為的な掘削の痕跡を認めるが、主柱穴や壁溝など検出されていないので、竪穴状遺構とする。当該遺構からは灰釉陶器皿（1168）・耳皿（1169）が出土しているので、9 世紀代と考えられる。

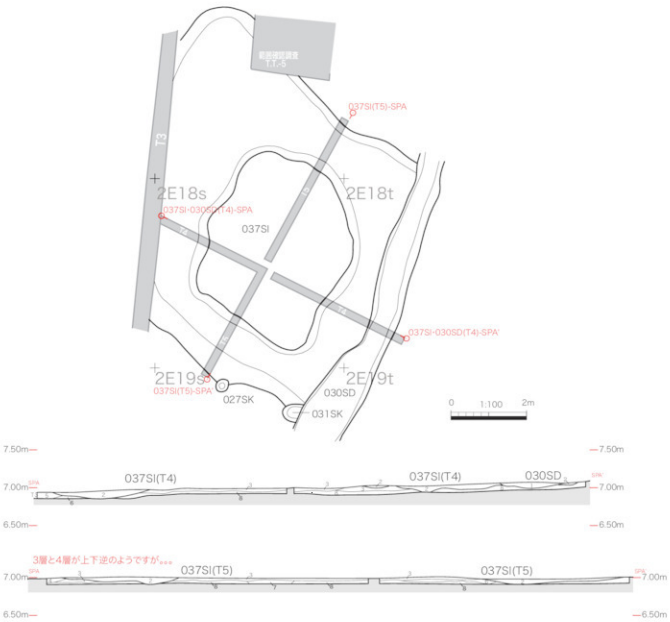


011SP
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物・10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック少量含む
3. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)
4. 10YR6/1 褐灰色細粒砂　粘性弱 10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(基盤砂層 流路のおちこみ)



018SK
1. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト　粘性やや弱 φ3～5mm小礫少量含む 下部に10YR8/3浅黄橙色砂とφ3～5mm小礫からなる砂礫が帯状に堆積(近代以降堆積土)
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック多量 φ3～5mm小礫・酸化鉄少量含む(近代の水田耕土)
3. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　φ3～5mm小礫・酸化鉄少量 酸化鉄含む(近世～近代の水田耕土)
4. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/1灰白色細粒砂少量 酸化鉄含む
5. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘土　粘性強　10YR6/1褐灰色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
7. 10YR5/2 灰黄褐色粘土　粘性強　7.5YR7/1明褐灰色細粒砂多量 酸化鉄少量含む
8. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含
9. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(古墳時代前期～平安時代前期の包含層(K層))
10. 10YR6/1 褐灰色細砂　粘性弱　10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む(基盤砂層)

図 162　11C 区 011SP・018SK 遺構図



037SI
1. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり　7.5YR8/1灰白色細粒砂少量 酸化鉄含む(030SD埋土)
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり　7.5YR8/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む(037SI貼方)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　粘性強　10YR5/3にぶい黄褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(古墳時代前期～平安時代包含層(K層))
4. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
5. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR8/1灰白色極細粒砂少量 酸化鉄含む
6. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/1灰白色極細粒砂・酸化鉄多量含む
7. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
8. 7.5YR7/1 明褐灰色砂質シルト　粘性やや強 7.5YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)

図 163　11C 区 037SI 遺構図

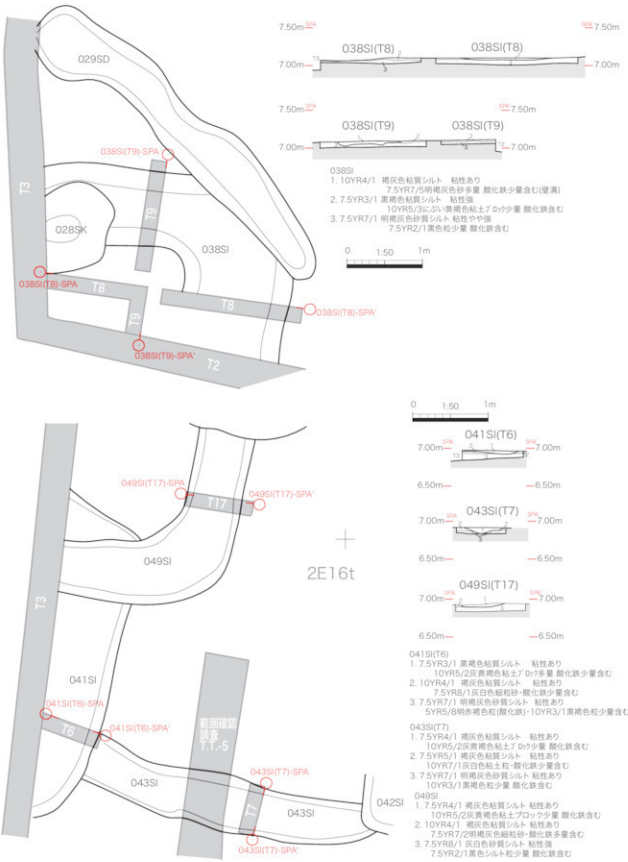


図 164　11C 区 038SI・041SI・043SI・049SI 遺構図

044SI　周溝状の遺構の一部である。竪穴建物跡とするには根拠が弱く、本報告では竪穴状遺構とする。

045SI　調査区北東部に位置する周溝状遺構の一部である。本報告では竪穴状遺構とする。弥生時代末期から古墳時代初頭の高杯が出土している。

048SI　調査区西壁にかかって検出された、周溝状遺構である。044SI と重複してこれに先行する。主柱穴などがなく、竪穴建物跡とするには根拠が弱いので、本報告では竪穴状遺構とする。

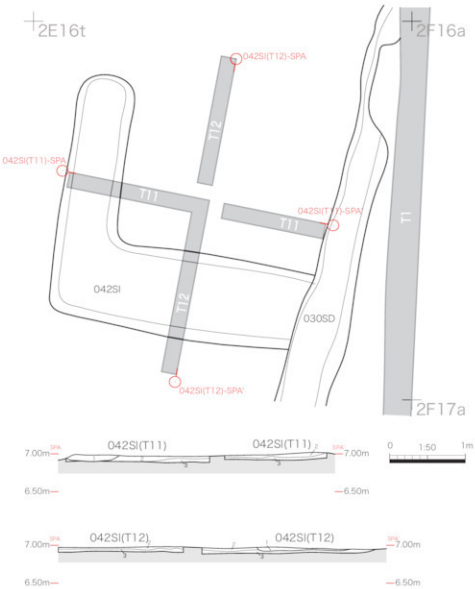
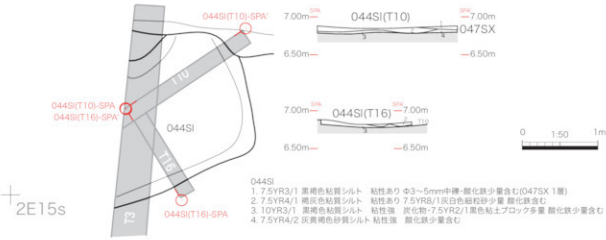


図 165　11C 区 042SI 遺構図



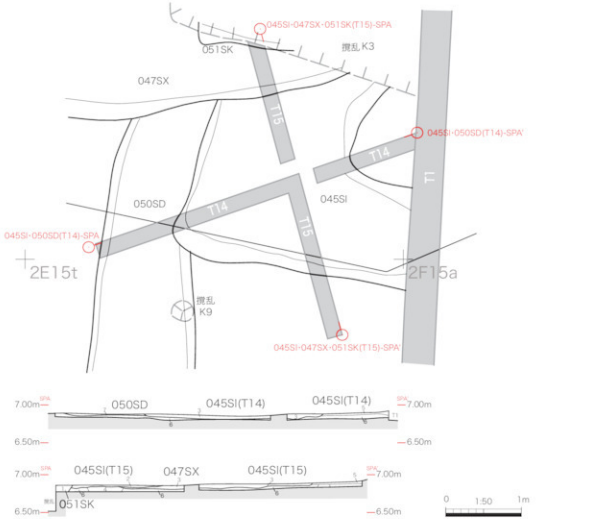
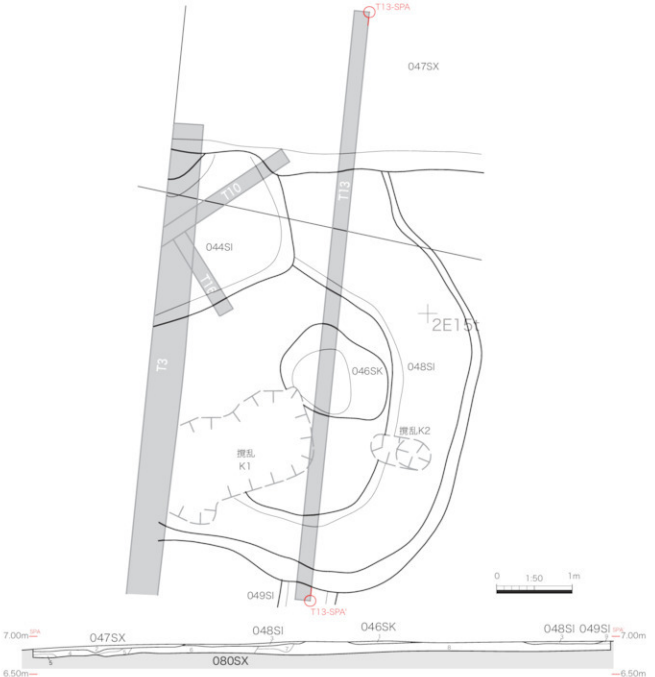
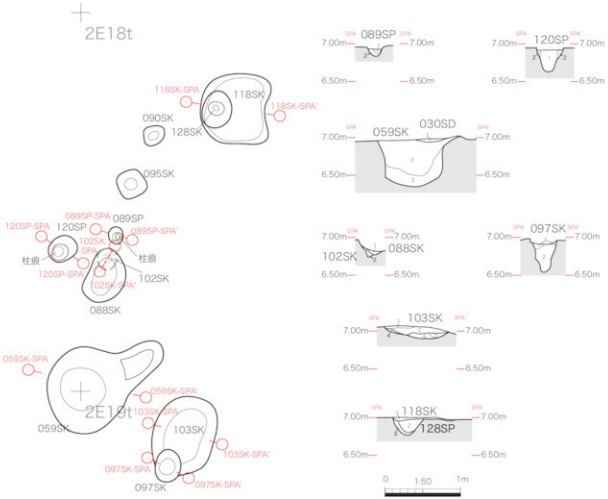


図 166　11C 区 044SI・045SI 遺構図



トレンチ(T13)
1. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/1明褐灰色細粒砂・酸化鉄多量含む(046SK 1層)
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/1明褐灰色細粒砂多量 酸化鉄少量 Φ2～3mm中礫礫量含む(047SX 1層)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/1明褐灰色細粒砂・7.5YR2/1黒色粘土ブロック多量 酸化鉄少量含む(048SI 1層)
4. 7.5YR5/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR8/2灰白色砂多量 10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック少量含む
5. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR8/2灰白色細粒砂多量 10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄少量含む
6. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性強 Φ2～3mm中礫・10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック少量 酸化鉄含む
7. 7.5YR6/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 7.5YR8/2灰白色細粒砂・酸化鉄多量 10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック少量含む
8. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性強 7.5YR5/1褐灰色粘土ブロック少量 酸化鉄含む
9. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック多量 酸化鉄少量含む(049SI 1層)

図167　11C区トレンチ（T13）断面図



089SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 酸化鉄少量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 7.5YR8/1灰白色細粒砂少量 酸化鉄含む

120SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(柱痕)
2. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄少量含む

059SK
1. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(030SD埋土)
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR6/1褐灰色細粒砂・酸化鉄多量 φ1~2mm細礫少量含む
3. 10YR3/1 褐灰色粘質シルト 粘性強　10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 φ1~2mm細礫少量含む

088SK 102SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(088SK)
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む

097SK
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 7.5YR2/1黒色細粒砂少量 酸化鉄含む
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む

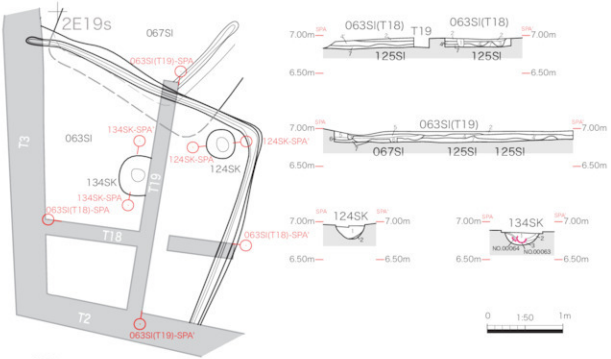
103SK
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 7.5YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 7.5YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
3. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む
4. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 酸化鉄多量含む(基盤砂層)

118SK 128SP
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 5YR5/8明赤褐色粒(酸化鉄)多量 10YR7/1灰白色砂少量含む(118SK)
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量含む(128SP)
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む(基盤砂層)

図 168　11C 区土坑・ピット遺構図

063SI　調査区南西隅に位置する。調査区西壁と南壁にかかって一部が検出されている。方位はグリッド北から東へ若干振れている。平面形は隅丸方形で、一辺の長さが 2.5m 以上と推定される。その北辺は竪穴建物跡 067SI に重複しており、さらに 063SI の下位には竪穴建物跡 125SI が存在する。当該遺構はこれらより新しい遺構である。床面上の堆積はわずか数 cm しか残存していない。床面でピット 134SK が検出されており、063SI の主柱穴とみられる。出土遺物は弥生土器の口縁が出土しているのみで、特定はしかたいが、平安時代まで下るものではなさそうである。

125SI　063SI に重複する竪穴建物跡である。部分的に壁溝が検出されている。これらをつなぐと方位がグリッド北から西へ 45° 振れる竪穴建物跡の壁溝になる。平面形は隅丸方形で、長径約 4.4m、短径約 3.9 で深さは 0.1m に満たない。063SI のトレンチ掘削で断面が検出された遺構である。主柱穴など他の施設は検出されていない。

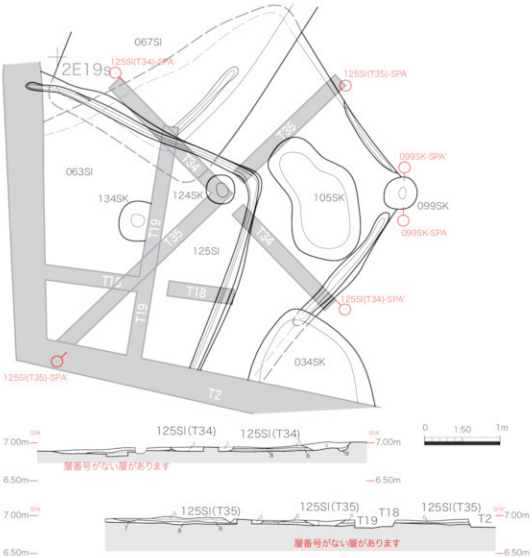


063SI
1. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR6/2　灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む(063SI埋土)
3. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(063SI埋土)
4. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 炭化物多量(上部に厚さ1cmの堆積) 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(125SI埋土)
4'. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(067SI覆方埋土)
5. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(066SI埋土)
6. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む(066SI覆方埋土)
7. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む

124SK
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱　10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量含む

134SK
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む 土師器含む

図 169　11C 区 063SI 遺構図

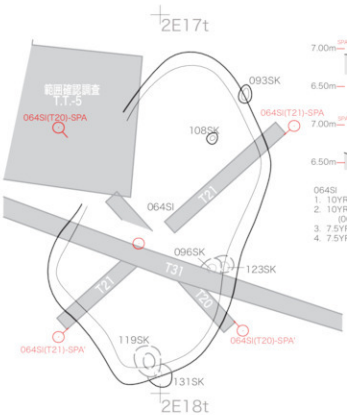


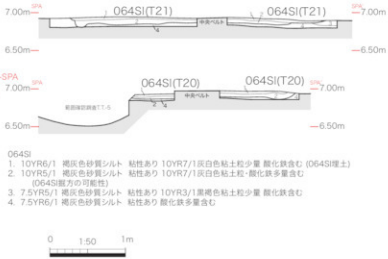
125SI
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量含む
4. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物・10YR2/1黒色シルト粒少量含む
5. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む
6. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む
7. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量含む
8. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(壁溝)

099SK
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック・酸化鉄少量含む

図 170　11C 区 125SI 遺構図

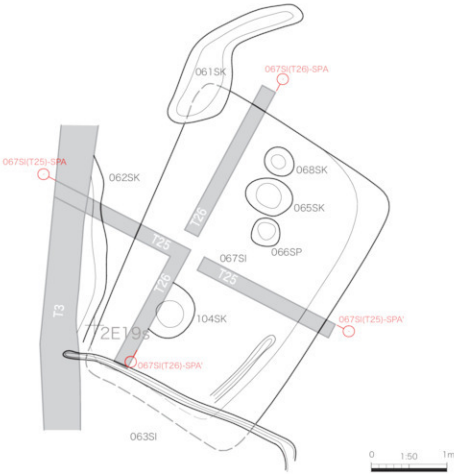
132SI
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む(132SI)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む

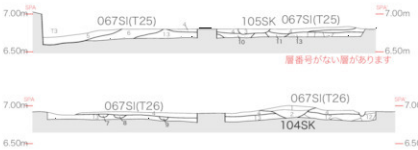




064SI
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む (064SI埋土)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
(064SI壁方の可能性)
3. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む
4. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 酸化鉄多量含む

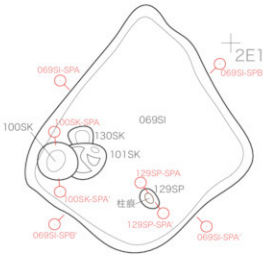
図 171　11C 区 064SI・132SI 遺構図

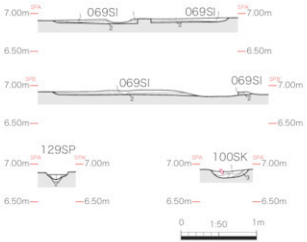




067SI
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性あり　10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(104SK 1層)
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(104SK 2層)
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(105SK)
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量含む
5. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト 粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
6. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルト 粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
7. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む
8. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む
9. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
10. 10YR6/2 褐灰色砂質シルト　粘性やや強 粒子やや細かい 10YR3/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
11. 10YR6/2 褐灰色砂質シルト　粘性やや強 粒子やや細かい 10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む
12. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
13. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり　10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む

図 172　11C 区 067SI 遺構図

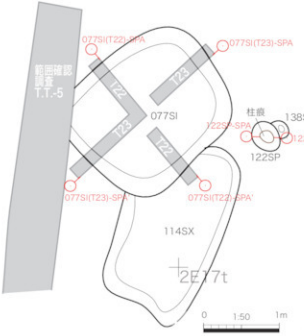


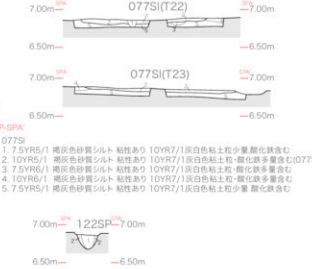


069SI
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む

129SP
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む (柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量含む

100SK
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 酸化鉄多量含む 弥生土器片含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性強　1層と比し 硬く締まる 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む
3. 7.5YR　褐灰色細粒砂　　粘性あり 酸化鉄多量含む

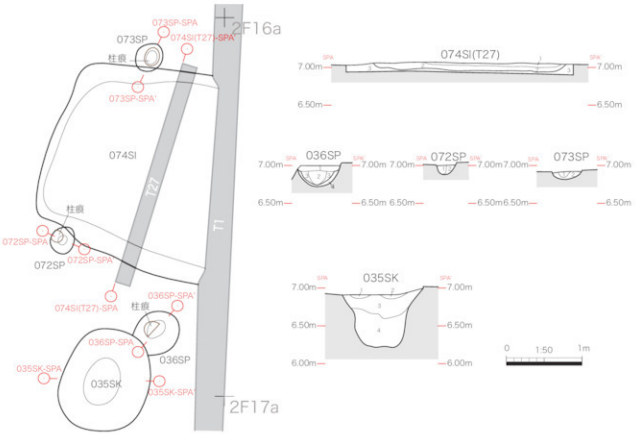




077SI
1. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量,酸化鉄含む
2. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(077SI)
3. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
4. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
5. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む

122SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量含む

図 173　11C 区 069SI・077SI 遺構図



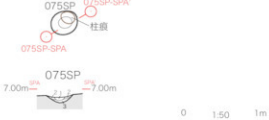
074SI
1. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む

036SP
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量 炭化物少量含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(柱痕)
3. 10YR6/1 褐色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
4. 10YR7/1 灰白色砂質シルト 粘性弱　10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む

072SP
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む (柱痕)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 酸化鉄多量含む

073SP
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性あり 10YR5/2黄褐色粘土ブロック･酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土ブロック･酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粒少量含む

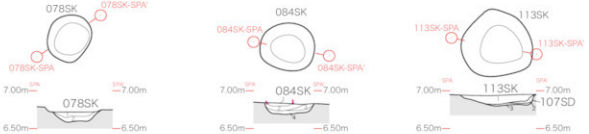
035SK
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 7.5YR2/1黒褐色粘土ブロック少量 酸化鉄含む
2. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂･酸化鉄多量 Φ1～2mm細礫微量含む
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR6/1褐灰色細粒砂･酸化鉄多量 Φ1～2mm細礫少量含む 上部は粘性強い
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルトに10YR3/1黒褐色粘質シルトブロック混入 粘性あり 10YR6/1褐灰色細粒砂･酸化鉄多量 Φ1～2mm細礫少量含む



075SP
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(柱痕)
2. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒･酸化鉄多量含む
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 酸化鉄多量含む

図 174　11C 区 074SI・075SP 遺構図

2E18t

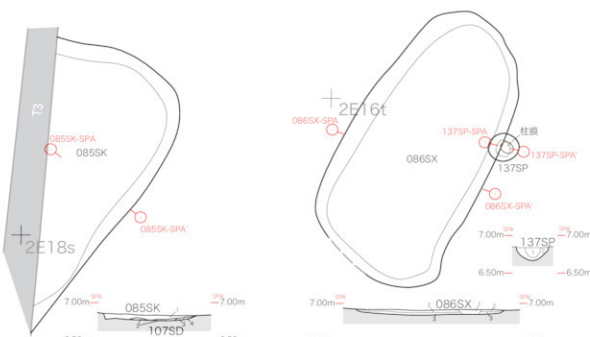


078SK
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土ブロック少量 酸化鉄含む

084SK
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性強　7.5YR2/1黒褐シルト粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト 粘性やや強 粒子やや細かい 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む 輪切り状態の弥生土器が検出面で出土
3. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり　酸化鉄多量含む
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性強　10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む

113SK
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 炭化物・10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む (113SK)
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む(107SD)
3. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱　10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む

085SK
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(085SK)
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む(107SD)
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量　10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
4. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む



086SX
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
3. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む

137SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む

図 175　11C 区土坑遺構図

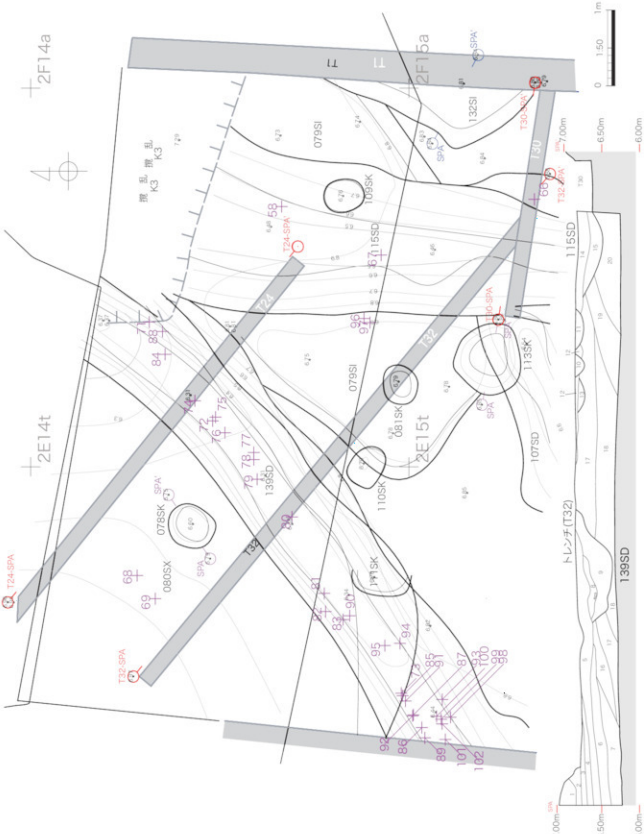
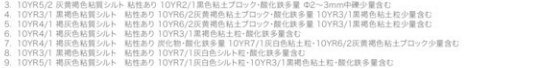


図176　11C区トレンチ（T32）断面図

139SD　調査区北西部に位置する。旧河道 11B 区 003NR に平行して調査区北壁から調査区西壁へと抜けている。検出全長は約 7.8m で、幅約 1.3m、深さ約 0.4m の断面が逆台形を呈している。トレンチ T32 の断面によれば、旧河道の埋没途上で掘削され、5 層（褐灰色粘質シルト）より上位は 139SD 埋没後に堆積が進行したことになる。080SX も 139SD を覆う河道の堆積の一部である。

出土遺物は多く、特に台付甕など（1107 など）が土管が連なるようにして横倒しになって出土している。意図は不明であるが、埋め戻しなどに際して、詰め込んだものであろうか。時期は弥生時代末期から古墳時代初頭である。集落域と旧河道を区画していたものと思われる。

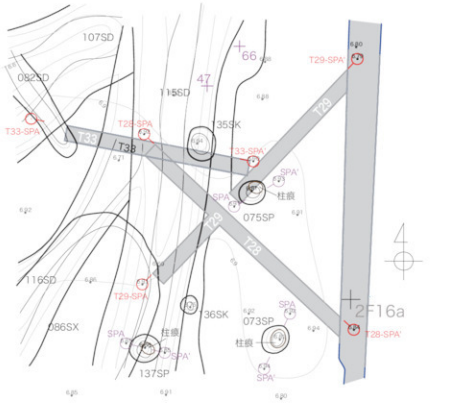
トレンチ(T32)
1. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり Φ1～2mm細礫・10YR7/1灰白色シルト粒少量 酸化鉄含む
2. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土粒・10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量 Φ2～3mm中礫少量含む
4. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
5. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 炭化物・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック少量含む
6. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む
7. 5Y4/1 灰色粘質シルト 粘性強 10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
8. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物少量 土器片含む(139SD)
9. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(139SD)
10. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
11. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
12. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む(SI)
13. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
14. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(115SD)
15. 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(115SD)
16. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
17. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
18. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄 10YR2/1黒色粘土粒少量含む
19. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
20. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト 粘性弱 10YR2/1黒色粘土粒・10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック少量 酸化鉄含む

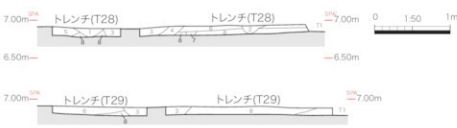


トレンチ(T24)
1. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土粒・10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土ブロック・酸化鉄多量 Φ2～3mm中礫少量含む
4. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
5. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
6. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
7. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 炭化物・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック少量含む
8. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量含む
9. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
10. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
11. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
12. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
13. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
14. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
15. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
16. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む

トレンチ(T30)
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒少量 酸化鉄含む
2. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
5. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
6. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄少量含む
7. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
8. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む 酸化鉄多量含む
9. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
10. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
11. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
12. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒多量 酸化鉄少量含む

図 177　11C 区トレンチ（T24・T30）断面図





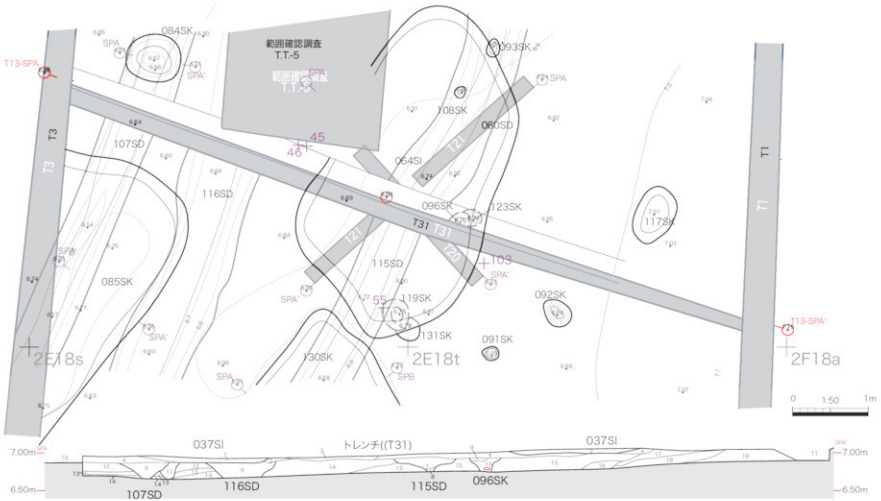
トレンチ(T28 T29)
1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒色粘土粒多量 10YR7/1灰白色シルト粒少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒色粘土粒多量含む
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む(070SDの可能性)
4. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
5. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1 黒褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む
6. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・10YR3/1 黒褐色粘土粒・酸化鉄多量含む
7. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む
8. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 7.5YR8/1灰白色細粒砂・酸化鉄多量含む

トレンチ(T33)
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
2. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
3. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色粘土粒・酸化鉄多量炭化物少量含む(135SK)
4. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱　炭化物・10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(115SD)
5. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む(115SD)
6. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒少量酸化鉄含む(115SD)
7. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む(115SD)
8. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
9. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
10. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱　10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む
11. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む

図 178　11C 区トレンチ（T28・T29・T33）断面図

115SD　調査区北端から南西隅に向けて延びる溝である。検出全長 24.3m、最大幅は約 1.7m で断面が緩いＶ字形の断面を呈している。その深さは約 0.4m である。埋土は全体に粘土やシルトブロックが混じりつつ砂が堆積しており、何度も掘り返した可能性がある。出土遺物が少なく、他の遺構に先行している点が特徴である。

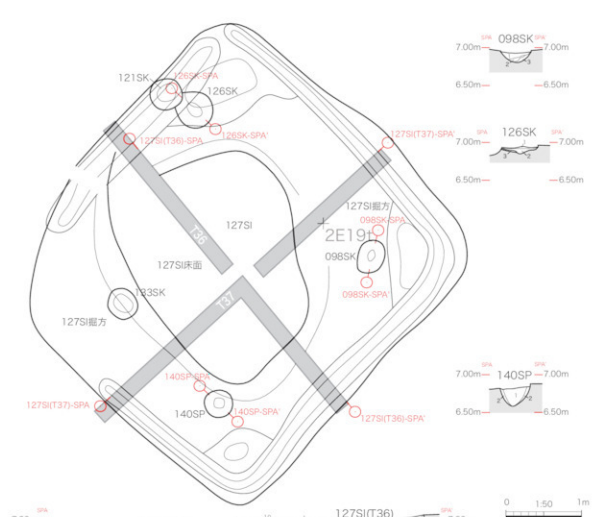
127SI　調査区南部に位置する竪穴建物跡である。方位はグリッド北から西へ 45° 振れている。平面形は隅丸正方形で一辺の長さが 4.8 ～ 5.0m である。遺構検出面（第２遺構面）からの深さは約 0.1m である。床面で主柱穴３基（140SK・098SK・126SK）が検出され、それ以外にも 121SK や 121SK といったピットが検出されている。この柱位置はややバランスを欠いており、北西辺については削平により残存状況がよくないことから、確定的とは言い難い。出土遺物は弥生土器の高杯（1120）、台付壺（1121）、加飾壺（1122）などがある。これらの時期は弥生時代後期であり、当該遺構の時期もそのあたりと推定される。

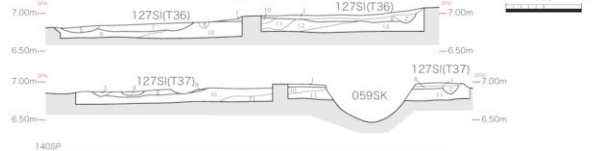


トレンチ(T31)

1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック・酸化鉄多量含む(037SI掘方)
2. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(037SI掘方)
3. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量含む
4. 10YR2/1 黒色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(古墳時代前期～平安時代前期の包含層(K層))
5. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(107SD)
6. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック少量 酸化鉄多量 10YR2/1黒色粘土粒少量含む(116SD)
7. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色粘土粒・10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック少量 酸化鉄含む(115SD)
8. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR6/1褐灰色微細粒砂・酸化鉄多量含む(115SD)
9. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 炭化物含む(096SK)
10. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒・10YR6/4にぶい黄橙色粘土粒少量含む 遺物含む(096SK)
11. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性弱 10YR2/1黒色シルト粒・10YR6/4にぶい黄橙色粘土粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
12. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒少量 酸化鉄含む
13. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 粘性あり 10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
14. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む
15. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
16. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
17. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む
18. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR2/1黒色シルト粒少量 酸化鉄含む
19. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR2/1黒色シルト粒少量含む

図179 11C区トレンチ（T31）断面図





140SP
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色粘土粒少量含む(柱痕)
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 10YR7/1灰白色シルト粒少量 酸化鉄含む

098SK
1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量含む
3. 7.5YR 褐灰色砂 粘性あり 酸化鉄多量含む

126SK
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性あり 10YR7/1灰白色細粒砂・酸化鉄少量含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱　10YR2/1黒色シルト粒・酸化鉄少量含む

127SI
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
2. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(127SI壁溝)
3. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・10YR3/1黒褐色シルト粒少量 酸化鉄含む(127SI壁溝)
4. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
5. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(127SI壁溝)
6. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
7. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む
8. 10YR6/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量 10YR7/1灰白色粘土粒少量含む(127SI掘方)
9. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1粘土ブロック・10YR3/1黒褐色シルト粒・酸化鉄多量含む(基盤砂層)
10. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(基盤砂層)
11. 10YR4/1　褐灰色極細粒砂　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(基盤砂層)
12. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(基盤砂層)
13. 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱 10YR7/1灰白色粘土粒・酸化鉄多量 10YR3/1黒褐色シルト粒少量含む(基盤砂層)

図180　127SI 遺構図

第3章　遺物

第1節　土器・陶磁器

概要　本発掘調査における出土遺物の大半は土器・陶磁器と木製品である。土器・陶磁器は、整理作業完了時点で実測図のあるもの1255点が各種コンテナ138箱分あり、それ以外のものが27ℓ入りコンテナ181箱分ある。

土器・陶磁器のほとんどを占めるのが弥生時代末期～古墳時代前期の土器で、実測図掲載の約1000点分を占める。それ以外には弥生中期～後期の土器、奈良時代の須恵器と瓦、平安時代の灰釉陶器があり、鎌倉時代以降の山茶碗などはごくわずかである。

本節では、土器と陶磁器の実測図を提示する。方針としては、まず北から順に竪穴建物跡などの遺構が多い12B・12A・07A・07B・07C・11A区の遺物を提示し、次いで旧河道遺構が中心の13B・11B区、最後に南端の調査区で実質的に下懸遺跡の様相を呈する11C区の順に遺物を提示する。表1には建物遺構ごとに集計した土器・陶磁器の重量を示す。

(1) 主要遺構の土器・陶磁器

12B区024SI～029SI　3・4は小鉢で共伴関係にあるが個体差が大きい。5の甕は口縁端部の外反が特徴である。全面ハケ調整で比較的器壁が薄い。6はミニチュア土器。8は横ミガキが特徴の高杯の杯部。姫下遺跡1b期に相当する。14は直線的に長い口縁部が特徴の台付甕。この口縁部はハケ調整で一旦成形した下部にさらに付加して高さを増している。姫下遺跡1期にみられる。18はS字状口縁台付甕。19は小鉢。029SIでは碗型の小鉢（21）もあるが、同時にハケ調整の22もある。23の鉢は内面に丁寧なミガキ。25は加飾壺の胴部上半で、二枚貝で施文しているとみられる。

12B区030SI～034SI　030SIは姫下遺跡1a期を柱穴などの一部で含むが主体は同1b期である。30は屈折脚高杯の比較的初期のもの。31は姫下遺跡1a期後半にある小鉢。32はミニチュア。35の小型壺は横ミガキ、36は直口壺で姫下遺跡1b期に相当する。50は受口口縁の甕。034SIも全般的に姫下遺跡1b期前半を中心とする。32の高杯も細かい横ミガキが施されている。53は屈折脚高杯。小型壺（54・55）もやや疎らながら横ミガキである。67建物解体時に柱抜き取り穴内に入れられた直口壺の大型品。66は台付壺。70は中型の壺であるが、被熱痕がみうけられる。同じ柱穴からは小型甕（71）が共伴する。

12B区036SI～166SI　72は器台。73の碗型杯部はやや変則的な横ミガキ。79はやや扁平な鉢で。山陰地域の系譜が想定される。80は内面がハケ調整で外面が貝殻条痕という組み合わせ。86は二重口縁壺で段の張り出しは後から付加されたものである。姫下遺跡1b期の後半に相当するとみられる。87は最終的に指ナデ調整で仕上げられているがその前に条痕がみられる。

12B区033SD　出土遺物は竪穴建物跡よりも多いが、小片が多く図化できるものは少ない。91はミニチュアの鉢で下部に被熱によるコゲがある。94(二重口縁壺)は頸部が長く直線的である。100・101の壺は長い口縁部が特徴である。101は全体に歪みのある器形で、時期は特定しがたい。102は内面が板ナデ、外面が縦ハケ→指ナデ→下部ヘラ削りという工程の変遷である。

12B区015SK　土坑出土の一括資料である。103・104は屈折脚高杯で精緻な横ミガキは畿内地域の高杯を比較的忠実に模倣したものと評価できる。この高杯にS字状口縁台付甕（106・107）が共伴関係にある。

12B区その他　110は条痕文の壺で瓜郷式期か。112は加飾壺で内面で赤彩がある。姫下遺跡1a期に相当するとみられる。

12A区020SI～066SI　114は屈折脚高杯で、工具に板を使用しているとみられる。116は小型壺姫下遺跡2期に相当するか。119の甕は口縁が若干外反した球胴型で、姫下遺跡2期の他に豊田市木川遺跡や水入遺跡でも同型がある。尾張地域の松河戸I式期に併行する。060SIの土器は姫下遺跡1b期に相当し、初期の屈折脚高杯（124・125）がある。128の二重口縁壺は縦方向のミガキが顕著で伊勢型かと思われる。133はS字状口縁台付甕。同甕は061SI（137）や062SI（145・

表 1　竪穴建物跡等出土土器の重量

調査区	遺構	重量（g）			
		縄文（図あり）	縄文（図なし）	その他破片	計
07A	1023SD	0	0	6	6
07A	1040SX	0	0	379	379
07A	1056SB	1236	114	702	2052
07A	1066SB	142	64	528	734
07A	1075SX	0	0	12	12
07A	1089SX	0	0	24	24
07A	1113SB	1160	410	1616	3186
07A	1118SX	28	22	374	424
07A	1137SK	0	0	14	14
07A	1146SX	0	0	12	12
07A	1190SX	0	0	32	32
07A	1206SX	118	30	360	508
07A	1217SX	0	0	14	14
07A	1254SX	106	28	1000	1134
07A	1280SD	0	0	48	48
07A	1330SB	1222	460	920	2602
07A	1331SB	94	296	834	1224
07A	1376SX	162	82	830	1074
07A	1473SB	270	0	212	482
07A	1545SB	2982	718	854	4554
07A	1562SB	286	0	140	426
07B	2006SB	40	56	922	1018
07B	2026SX	0	0	108	108
07B	2034SB	1152	446	2511	4109
07B	2066SX	0	0	118	118
07B	2067SX	0	0	106	106
07B	2100SX	1088	808	4019	5915
07B	2103SX	206	64	1223	1493
07B	2108SX	394	484	1906	2784
07B	2115SX	500	822	3940	5262
07B	2116SB	606	526	3500	4634
07B	2132SX	1146	302	865	2313
07B	2133SB	110	0	166	276
07B	2135SX	0	34	913	947
07B	2152SB	3246	254	3000	6502
07B	2164SB	1085	546	2506	4136
07B	2165SX	106	0	12	112
07B	2175SX	0	0	108	108
07B	2187SX	0	0	48	48
07B	2211SB	515	540	1500	2556
07B	2212SB	0	0	56	56
07B	2213SB	422	296	1023	1741
07B	2214SB	2216	823	1254	4093
07B	2215SB	2022	24	44	2090
07B	2216SX	74	16	424	514
07B	2217SB	192	568	694	1454
07B	2218SB	0	106	174	280
07B	2219SB	68	68	808	944
07B	2220SB	46	496	1619	2161
07C	3001SD	2144	732	4544	7387
07C	3003SD	552	1056	6096	7704
07C	3004SD	68	0	160	228
07C	3012SX	0	0	30	30
07C	3073SX	1016	146	472	1634
07C	3088SB	1546	572	754	2866

調査区	遺構	重量（g）			
		縄文（図あり）	縄文（図なし）	その他破片	計
11A	0216D	352	64	584	968
11A	0782D	0	0	48	48
11C	0376D	1912	286	5624	7826
11C	0386D	704	52	758	1514
11C	0415D	0	0	32	32
11C	0432D	126	0	874	994
11C	0436D	64	0	248	312
11C	0440D	86	28	1265	1379
11C	0452D	54	0	2277	2331
11C	0460D	0	12	610	622
11C	0496D	198	0	284	482
11C	0579B	0	0	8	8
11C	0626D	22	46	694	762
11C	0645D	136	0	854	990
11C	0676D	0	46	631	677
11C	0695D	102	60	664	826
11C	0746D	0	0	306	306
11C	0775D	0	0	32	32
11C	0795D	0	74	734	808
11C	0858B	72	166	722	960
11C	1258D	0	0	892	892
11C	1279D	222	0	568	790
11C	1325D	0	0	68	68
12A	0165B	0	0	28	28
12A	0326D	1238	36	2060	3334
12A	0403D	1780	502	3784	6066
12A	0615D	1848	344	1743	3935
12A	0625D	730	62	2704	3496
12A	0635D	1288	36	734	2058
12A	0645D	2392	380	996	3768
12A	0655D	262	0	150	412
12A	0665D	586	18	186	790
12A	0695D	354	0	28	382
12A	0705D	1112	0	454	1576
12A	0715B	0	0	34	34
12A	3475B	32	0	20	52
12A	3485B	0	0	4	4
12A	3495B	0	0	20	20
12A	3525B	0	0	314	314
12B	0246D	1128	292	1538	2958
12B	0258D	2532	162	2054	4748
12B	0268D	160	206	190	556
12B	0286D	164	154	2022	2340
12B	0296D	752	1282	3798	5832
12B	0306D	1772	2862	14336	18970
12B	0316D	48	16	246	310
12B	0326D	166	454	2214	2768
12B	0346D	7568	156	1120	8844
12B	0356D	0	130	356	486
12B	0366D	118	174	686	978
12B	0376D	364	198	1580	2068
12B	1169D	252	360	2713	3325
12B	1115B	441	526	1425	2390
12B	1665B	1174	18	438	1630
12B	1785B	0	0	126	126
12B	1805B	0	0	20	20
12B	2008B	0	0	376	376
12B	2806B	0	101	807	908
12B	2918B	0	17	279	296
13A	0695D	0	38	34	34

147は台部）でも出土しており、遺跡内でも比較的多い。小型壺（136）は頸部の屈曲が明瞭な点が特徴である。064SIでは小型高杯（151・152）が特徴。155の甕は口縁部がわずかに内湾している。066SIからはケズリ調整の台付甕（159）がある。二重口縁壺（158）は姫下遺跡2期に相当すると見られる。

12A区067SX～340SP　164は台付鉢で、不整形に波打つ口縁が特徴である。169～171はそれぞれ異なるピットなどから出土したものであるが横ミガキが特徴である。このような調整が施される小型の台付甕（169）は祭祀用のミニチュアとも考えられる。022SDからは灰釉陶器（177）が出土している。9世紀後半。340SPからは台付ハケ甕（175）と鉢（176）が一括して出土している。

12A区124SK・258SU　178は胴部中央に最大径のくる壺を縦方向に引き伸ばしたような樽形土器である。頸部から上方は全く残存していない。おそらく土器棺に使用されたものと考えられ、その際に欠き取ったものであろう。胴部の屈曲に凸帯を貼り付けて指などで押さえて連続する波状文が施されている。そしてほぼ全面にわたって条痕文が施されている。上下凸帯の間は文様となっている。179は胴部下半が残存していない壺である。これももとは178と同じ形状であったと考えられる。肩部からやや上方に凸帯を貼り付けるが、全周させずに紐か縄をかけたような装飾となっている。端部が内傾する口縁部には4か所に浮文が施されている。文様の下地となる条痕は横と斜めが交互となり、頸部上半は横方向のみとなる。瓜郷式期とみられるが、特殊な用途（土器棺）をあらかじめ想定した土器である。181は壺の上半部で条痕文は下から上方へ順に施されている。内傾させた口縁端部は緩やかに波状となっている。これら特異な器形の壺に対し、182・183はほぼ完存状態にある。時期の特定がしにくいが、岩滑式～瓜郷式に相当するとみられる。

07A区1056SB・1113SB　屈折脚高杯（193・194）は縦ミガキで、194は脚部端が反っていることから姫下遺跡2期に相当する。小型壺（195～197）もミガキの省略も進んでいるので同時期と考えられる。これに甕（201）が加わり一括性が高いとみられる。1113SBからは小鉢が多数出土している。212は手持ちヘラ削りで成形し内面に細かいミガキ。213は片口がある。215は碗型で他より一回り大きい点が特徴である。被熱痕があるのも関係するか。特殊なものとしては棒状の把手が付いた壺用の蓋がある。

12A区1206SB～1545SB　1330SBでは胴部に対して台部が大きい台付ハケ甕（223）、ヘラ削り成形の甕（222）がある。222は口縁が内湾気味である。228は屈折脚高杯で疎らな横ミガキと直線的な杯部の立ち上がりが特徴。姫下遺跡2期でも後半段階に相当する。同様に1545SB出土の233もミガキ調整を施し、杯部がわずかに内湾する程度で同じ時期が想定される。234の小型甕も指ナデのみで成形されており、比較的新しいとみなされる。当該遺構では壺（237）と台付甕（238～240）もあるので、これらが一括資料と位置付けられる。

07A区その他　竪穴建物跡以外では248のように姫下遺跡併行期をやや遡るものもみられるが、大半は屈折脚高杯以後のものである。

07B区2034SB　当該遺構では壺や甕は少ないが、小鉢（284）や口縁部外面に線刻のある鉢（286）がある。姫下遺跡1a期後半～同1b期前半と推定される。

07B区2157SB・2100SX　304は碗型杯部の高杯。307・308は初期の屈折脚高杯でこれらは姫下遺跡1a期の特徴である。319はX字形の器台で同1a期後半。これに近い形状のものは2211SB上層の2100SXにある（329）。2100SXからは直口壺（336）もあるがこれは縦ミガキ。338はS字状口縁台付甕。また口径の大きな甕（339）もあり概ね姫下遺跡1a期後半～1b期に相当する。

07B区2213SB～2219SB　347はミニチュア。350は姫下1a期の高杯。器台（353）は内外面に黒色物質（漆か）が塗布されている。壺の底部（354・360）も姫下遺跡の前半段階に相当するので、2214SB・2215SBはさほど時期は変わらないようである。2215SBからは大型の杯部を有する高杯（359）もあり、これは西濃地域の系譜が考えられる。

07B区その他　高杯（381）は透かしが6か所もある。382は横ミガキの後縦ミガキ。385は口縁部の施文に特徴。396は加飾壺の胴部で赤彩あり。393・394は絵画土器か、若干の線刻あり。404は深鉢形を呈する甕で、口縁内面に連続刺突文、外面は口縁部付近にヘラ削りがあり、そこから下方に斜め方向のミガキがなされる。

407 は甕の肩部に有段羽状文ふうの連続刺突文があり、遺跡内では他に例をみない。422 は高杯脚部であるが、胎土に貝殻が混入されている。詳細は第 4 章第 5 節に記載。426 は口縁端部が波打っており。意図的にこのような口縁としているタイプである。

07C 区　435 は平底甕、ハケ調整の後胴部下半にヘラ削り。438 は直口壺か。440 は大型の壺で外面に条痕文。441 は灰釉陶器の大型碗で角高台となっているが黒笹 90 号窯式。443 は小型壺で姫下遺跡 1a 期をやや遡るか。446 の壺は折り返した口縁部に施文があり、遠江系とみられる。453 は壺類の底部で外面に植物種実の圧痕が認められる。これも第 4 章第 5 節で別途報告する。459 は器種不明の絵画土器で、外面に細かい直線の交差が描かれている。460 は 9 世紀後半の灰釉陶器。底部外面に判読不能な墨書がある。

11A 区　462 は横ミガキの壺。464・465 は高杯の杯部。これらの土器は上述した 12B 区～ 07C 区の土器とはことなり、11C 区旧河道のものに近い。どちらかといえば下懸遺跡の土器といえる。470 は刻書のある須恵器底部。471・472 は灰釉陶器で 9 世紀代。475 はつまみのある蓋。486 ～ 490 は灰釉陶器。491 は須恵器瓶類、492 は丸底の鉢か。

(2) 旧河道の土器・陶磁器

13B 区旧河道　旧河道は、調査区壁面の観察における分層に対応して取り上げられている。しかしながら河道という不安定な環境であるため、遺物の時期的区分には適していない。

西壁 64 層　527 赤彩のある加飾壺。529 は縦に長い鉢である。530 は底部外面に「大十」と墨書のある須恵器杯。8 世紀半ばである。531 は 7 世紀後半の須恵器杯。533・534 は山茶碗。537 は横ミガキの高杯。540・541 も横ミガキであるがミニチュアに近い。542 は細かい横ミガキが特徴の高杯杯部。姫下遺跡 1b 期である。547 は口縁が大きく外反する鉢。遺跡内では類例をみない外来系か。554 ～ 557 は加飾壺。554 以外は浮文がある。558 は貝殻で施文した加飾壺。567 は板ナデもしくはタタキ痕とみられる。570 ～ 572 は S 字状口縁台付甕。

東壁 18 層　全体に姫下 1a 期に相当する。あまり混在がないようである。578 は多透かしが特徴。

東壁 20・25 層　592 は底部付近に三角形の線刻がある。また底部は焼成後に穿孔されている。593 は口縁が著しく外反する高杯。高杯（594 ～ 607）は姫下遺跡 1a 期を中心に 596 や 597 などやや遡るものがみられる。小鉢もさまざまで、610 は尖底である。616 は横ミガキのヒサゴ壺。対して 617 は縦ミガキのヒサゴ壺。631 は胴部下方に焼成前の穿孔あり。636 は大型の壺で外面はハケ調整で仕上げているが、その途中で肩部に絵画が描かれている。主題は特定しがたいが、水面の波紋とその中心に魚が配置されたものであろうか。642 ～ 656 は台付甕。642・643 では指ナデが多用されているが、645 ではヘラ削り。649 は条痕。

東壁 26 層　658 は西遠江系の加飾壺。頸部付け根に凸帯が巡り、色調は白色で雲母がほとんどないことも在地の土器と異なる。659 は台付壺で、山中式期の後半段階。

東壁 29 層　669 は山中式期の高杯。他の高杯も杯部が大きく、11C 区旧河道の様相に近い。一方で横ミガキの高杯（677・681）、浅い鉢（682）があり、姫下遺跡 1a 期に相当するか。692 は口縁内面に黒褐色の付着物（漆か）がある小型壺。697 などの指ナデ成形のミニチュア土器もあり、時期幅があると見た方がよい。701 は貝殻で施文されたとみられるヒサゴ壺。尾張地域の廻間Ⅱ式の末期、姫下遺跡 1a 期を遡る時期である。740 は口縁部に連続する刺突文があり、遠江もしくは駿河系とみられる。東壁 29 層は台付甕は少ない印象である。

11B 区 003NR　11B 区では旧河道の堆積中に土器廃棄の単位がいくつか認められ、SU として取り上げている（004SU ～ 010SU）。

773 は華美ともいえる竹管文や波状文が特徴の加飾壺である。792 は橙色の色調をしており、折り返しの口縁は剥離している。駿河もしくは遠江の系譜が考えられる。806 は胴部下方に凸帯が付加される。装飾のなされた甕である。809 は口縁付近を横ミガキ。810 は底部に木葉痕が線刻で描かれている。811 は甕に使用した蓋で、外縁部は黒色化して劣化している。

旧河道堆積の土器は、上から掘削した (1)、(2) の順に掲載する。主体は 003NR 下層で、高杯もここで多数が出土している。871 は 3 方の透かしとは別に 1 方向の透かしがある。正面が決められていたものか。このように通常施される透かしとは別の透かしがあるもの（877・

886）は注意が必要である。809は土玉。912は台付長頸壺の蓋とみられる。遺跡内では他に例をみない。924・925は蓋の可能性が高い。926は手炙り形土器。938は灰白色を呈する繊細な文様が特徴である。西濃地域に系譜が求められるとみられる。951は貝殻で施文している可能性が高い。974は肩部に結節縄文による施文。1050は口縁部に斜格子の施文が特徴である。1076は大型品で、知立市岡瀬口遺跡などに類例がある。

(3)11C区の土器・陶磁器

11C区北端に位置する080SXや139SDからは弥生時代末期～古墳時代初頭の土器が多く出土している。1094は北陸からの搬入甕。1103は斜格子の下にハの字形の施文。

11C区001SK～035SK　1125・1126は灰釉陶器瓶類で9世紀代。1127は古瀬戸のおろし皿。1129は灰釉陶器の甕で平底である。1132は黒笹90号窯式の灰釉陶器碗で、底部外面に墨書がある。判読不能であるが「くにがまえ」の内側に一文字を記すもので、当該遺跡の他に下懸遺跡や惣作遺跡でもみられる。1133は鍋類の把手部分で中空である。古瀬戸のものか。1135は土師器三河型甕の最終段階で9世紀後半。1137～1141は灰釉陶器の供膳具で、1137は折戸53号窯式の高台、1139・1141は黒笹90号窯式の高台である。

11C区037SI　周溝状遺構からは灰釉陶器供膳具（1142～1149）、同瓶類（1150・1151）、須恵器甕（1152・1153）、同長頸瓶（1154）、土師器三河型甕（1155・1156）が出土している。1144は角高台でやや古いものか、1142や1148などは黒笹90号窯式の高台である。1148も「くにがまえ」墨書の類であろう。1143・1149は薄手平底が特賞である。1152は大甕の胴部で8世紀まで遡る可能性あり。1154は実測図で復元したもので、肩部はもう少しなだらかになるかもしれない。1155・1156の土師器甕は、長胴型の胴部が寸詰りになる段階とみられるので、鍋と考えられる。1156は口縁上端のつまみ上げが特徴である。

11C区038SI～045SI　竪穴状遺構を含む微高地の遺構からは主に灰釉陶器が出土している。1158・1159は黒笹90号窯式、1160は黒笹14号窯式、1161は黒笹90号窯式で底部外面に判読不能の墨書がある。1165は折戸53号窯式の碗。1169は灰釉陶器の耳皿。底部は回転糸切り離しで未調整。9世紀後半か。1171は弥生土器の細首壺。1172は高杯脚部。1173は弥生土器の壺、外面に横方向の条痕文が特徴である。

11C区060SD～134SK　灰釉陶器は9世紀後半が中心、1175は瓶類の底部。1181は底部外面に「くにがまえ」墨書、1182は太い線で「○」としたものの。188は小鉢で内外面の丁寧な横ミガキ。1190は弥生時代後期の加飾壺で浮文あり。

11C区検出面など　1193も加飾壺の胴部で連続竹管文。1194は壺胴部に赤彩あり。1195は部位不明だが、波状の施文が特徴。1196は多孔式甑の底部。1197は須恵器盤で折戸10号窯式。1198は須恵器杯底部の窯印。1203は灰釉陶器でやや時期が下って東山72号窯式か。1204は輪花をつくるので同様に灰釉陶器末期。1207・1208は9世紀後半の灰釉陶器底部外面に墨書。1215は緑釉陶器の小片、器種不明。1217～1223は土師器三河型甕。口径の大きい1220～1223は鍋と考えられる。いずれも9世紀後半代とみられる。1224は移動式カマドの掛け口。胎土は三河型甕と同じもので、使用により内面が黒色化している。1225は初期段階の山茶碗で11世紀後半か。1226も山茶碗で、尾張第8型式以降とみられる。1229・1230は同第5～6型式。1232は瀬戸・美濃窯産陶器の皿、1233は同天目茶碗で古瀬戸後期末～大窯段階。1234は丸碗。1235は古瀬戸の大型鉢で灰釉がかかる。1236以降は近世陶器。1237・1238は擂鉢である。1239・1241は土師器内耳鍋で概ね古瀬戸～大窯段階であろう。

古代の瓦　11C区では7世紀後半～8世紀前半と推定される瓦が出土している。小片で摩滅したものが多い中、一部に残存状況の良いものもあることから、当該地点に瓦葺き建物があったことをうかがわせる。1242～1244は丸瓦で凸面ナデによりタタキ不明。1245～1255は平瓦で、1255では布目痕の他に桶状模骨痕も観察される。

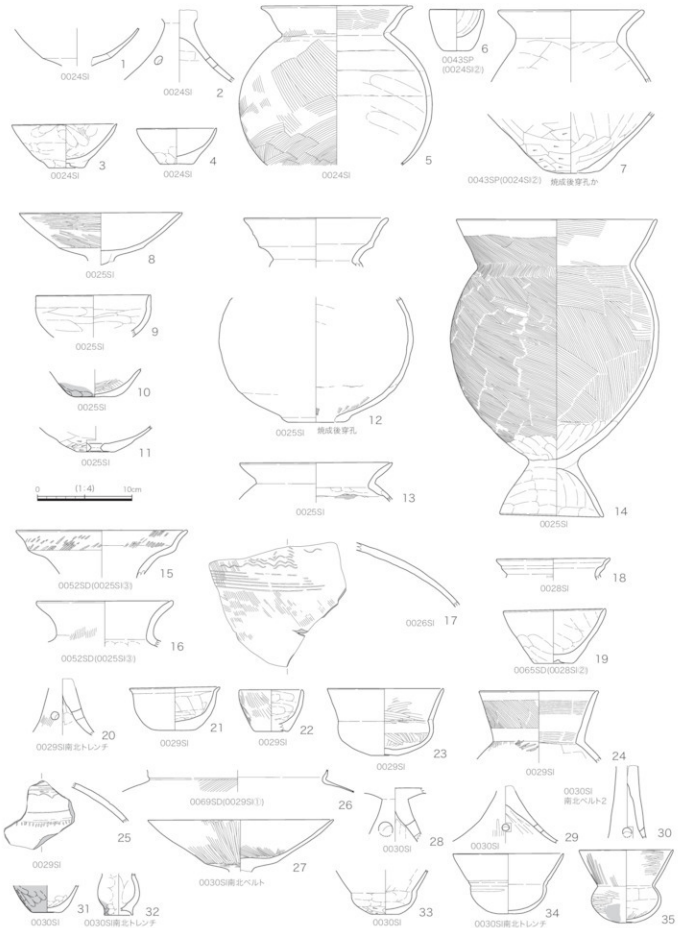


図181　12B区出土土器実測図

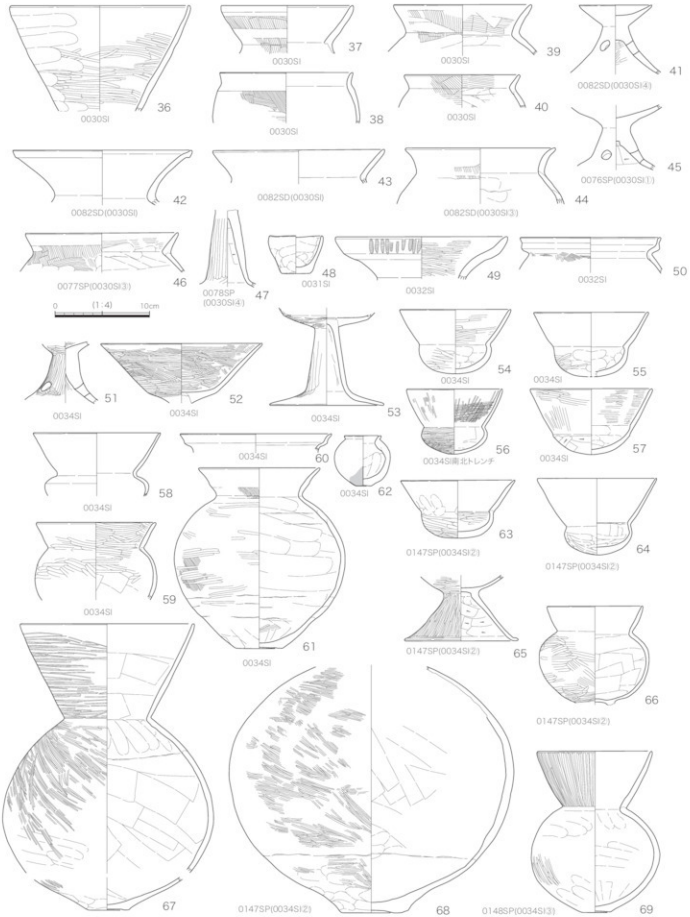


図182　12B区出土土器実測図

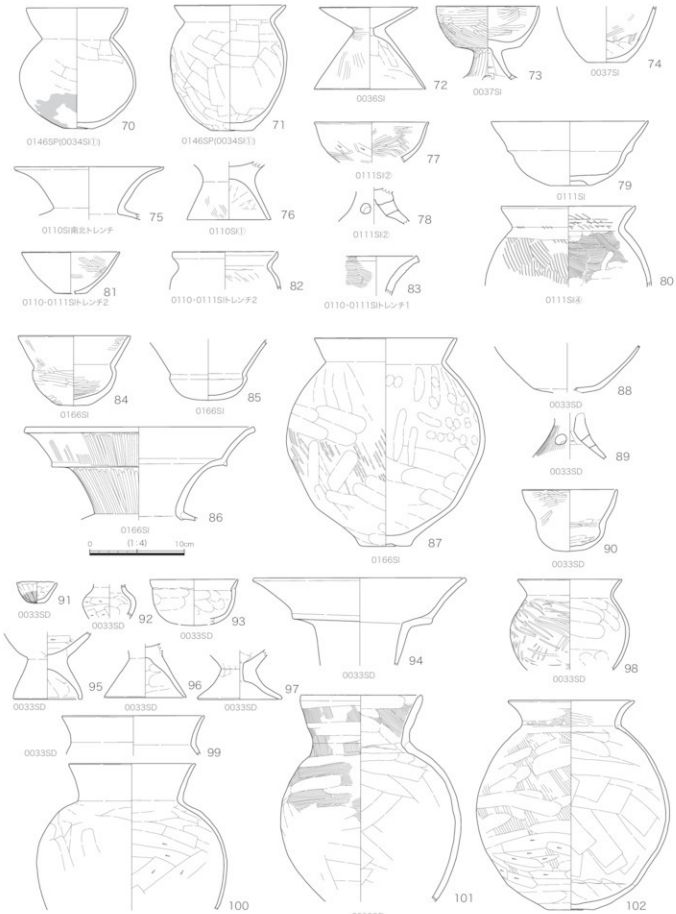


図183　12B区出土土器実測図

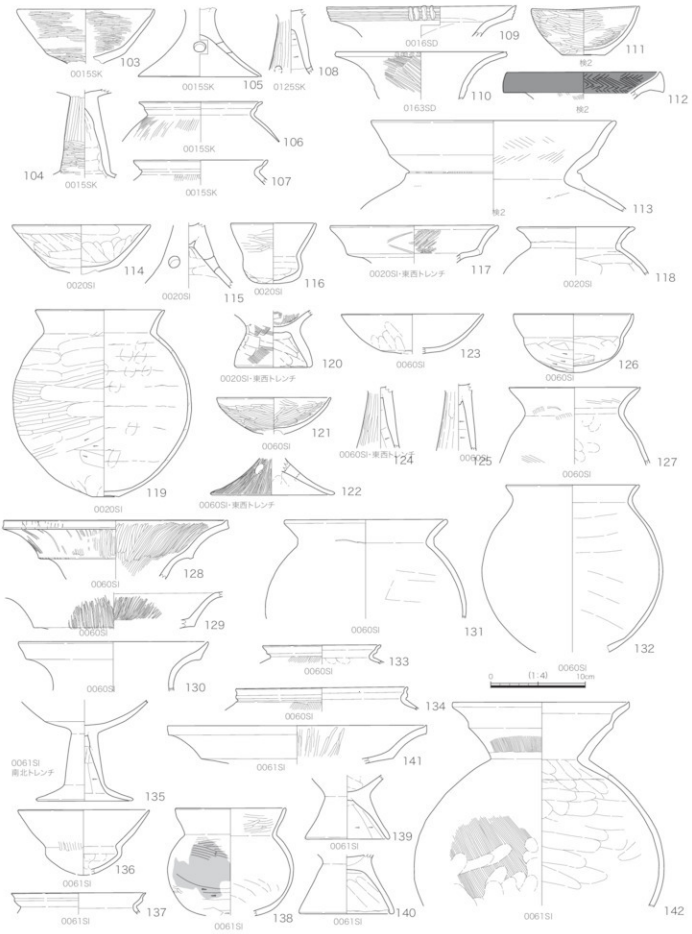


図184　12B区出土土器実測図

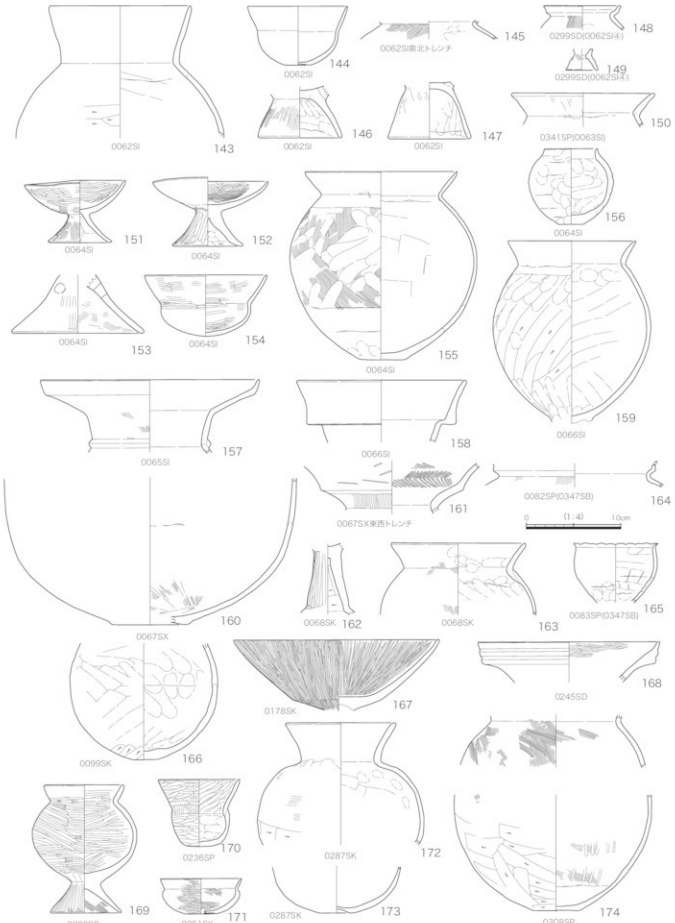


図185　12A区出土土器実測図

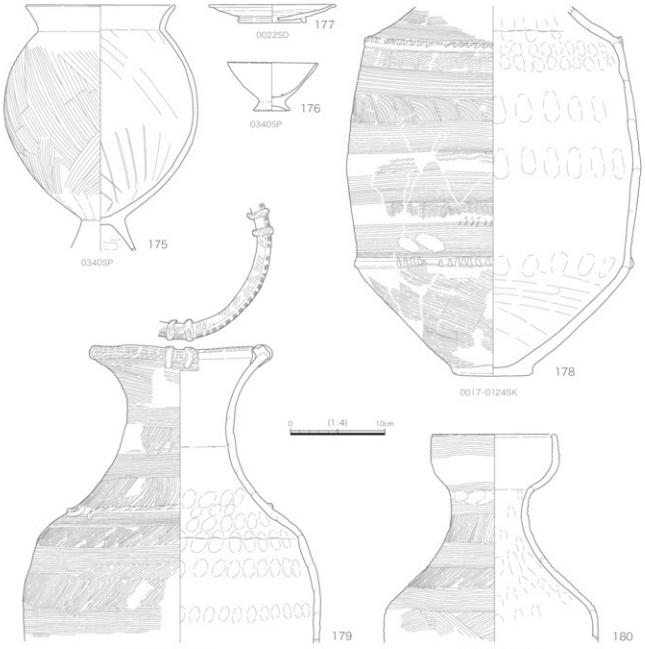


図186　12A区出土土器実測図

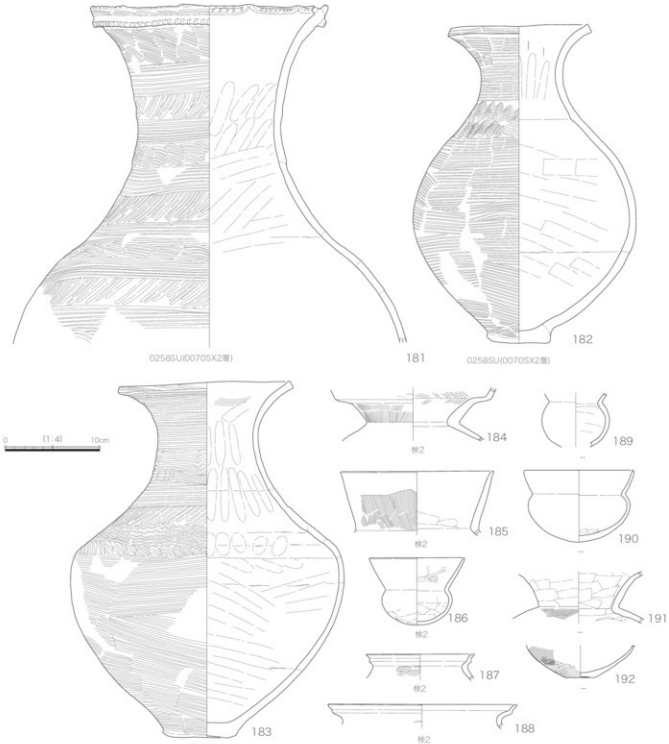


図 187　12A 区出土土器実測図

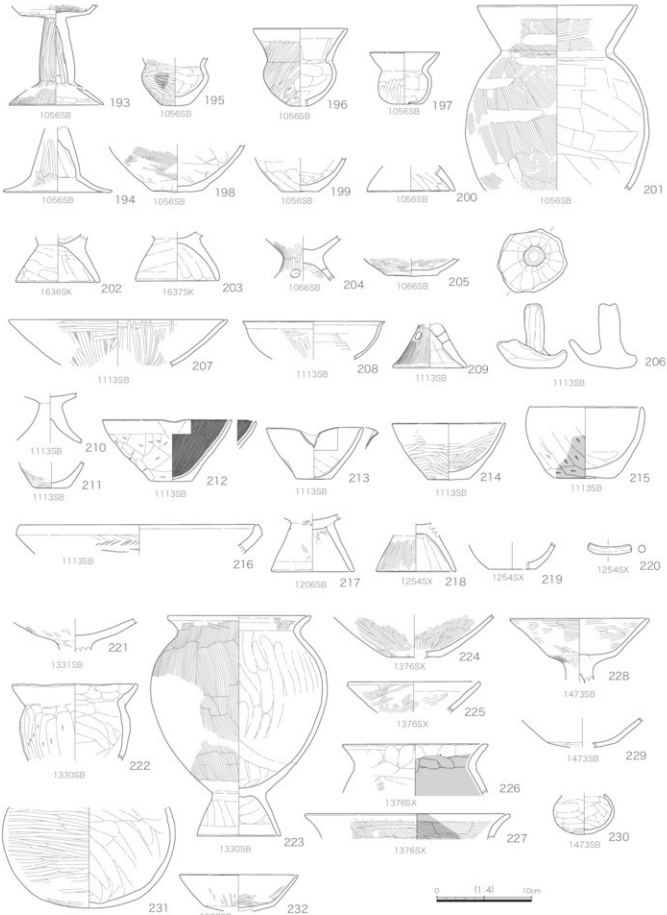


図188　07A区出土土器実測図

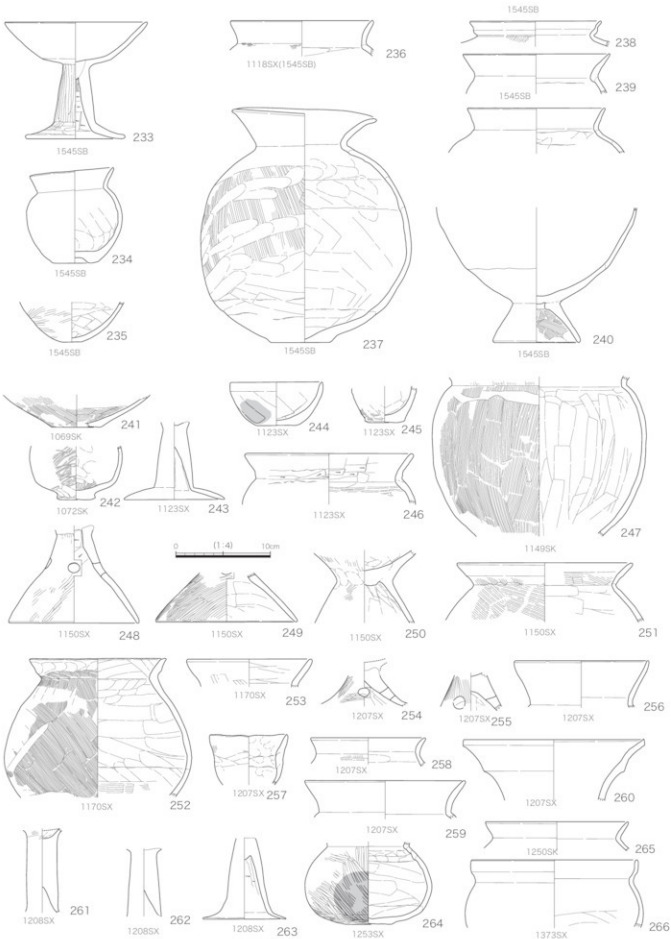


図189　07A区出土土器実測図

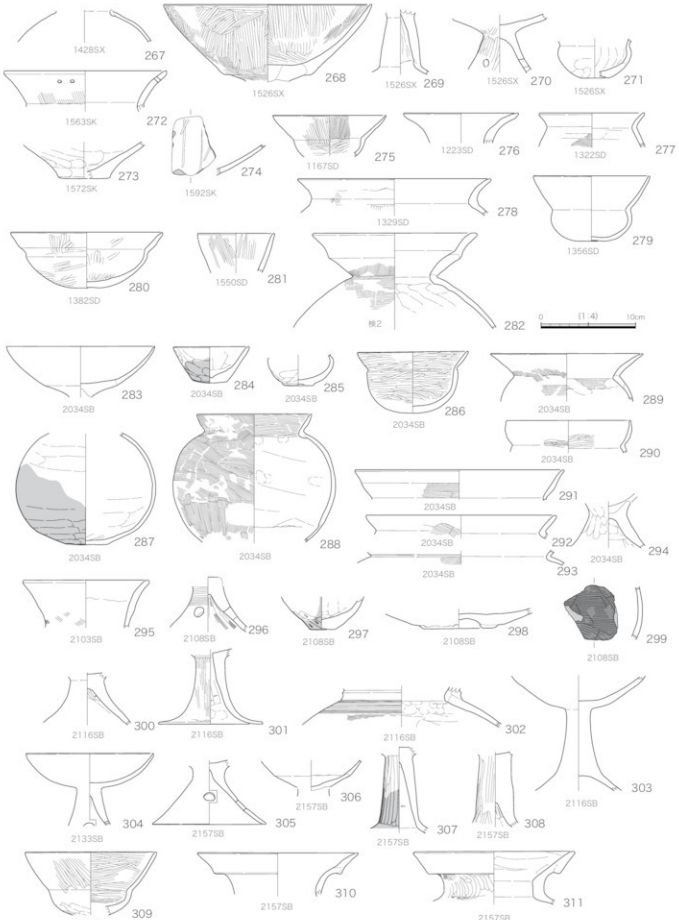


図190　07A・B区出土土器実測図

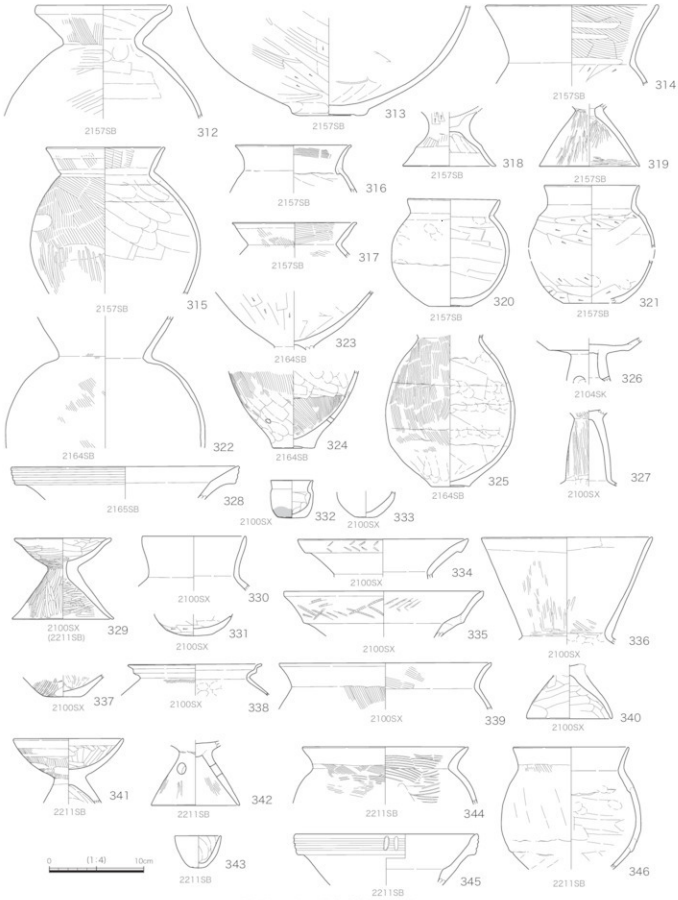


図191　07B区出土土器実測図

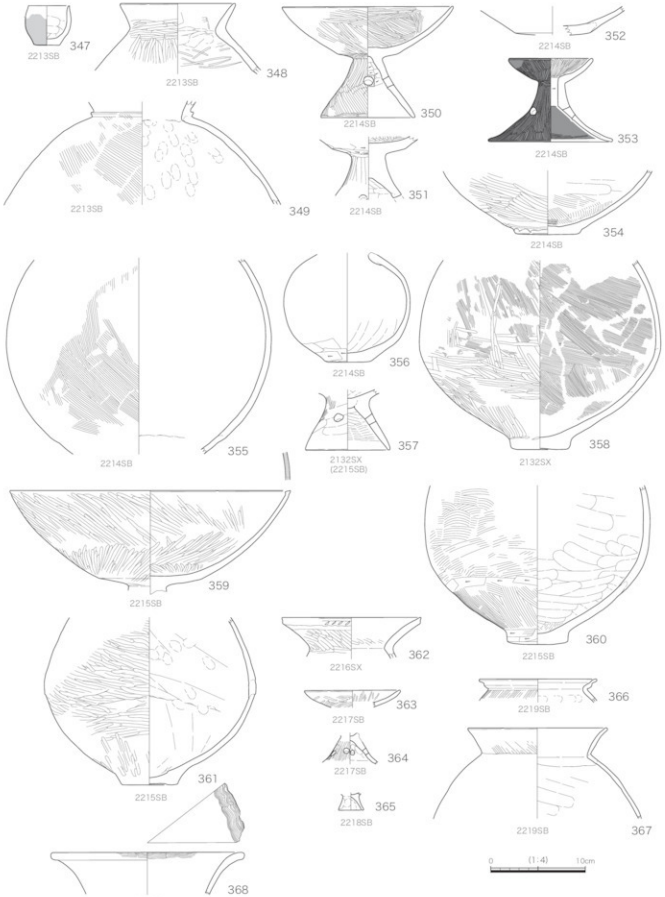


図192　07B区出土土器実測図

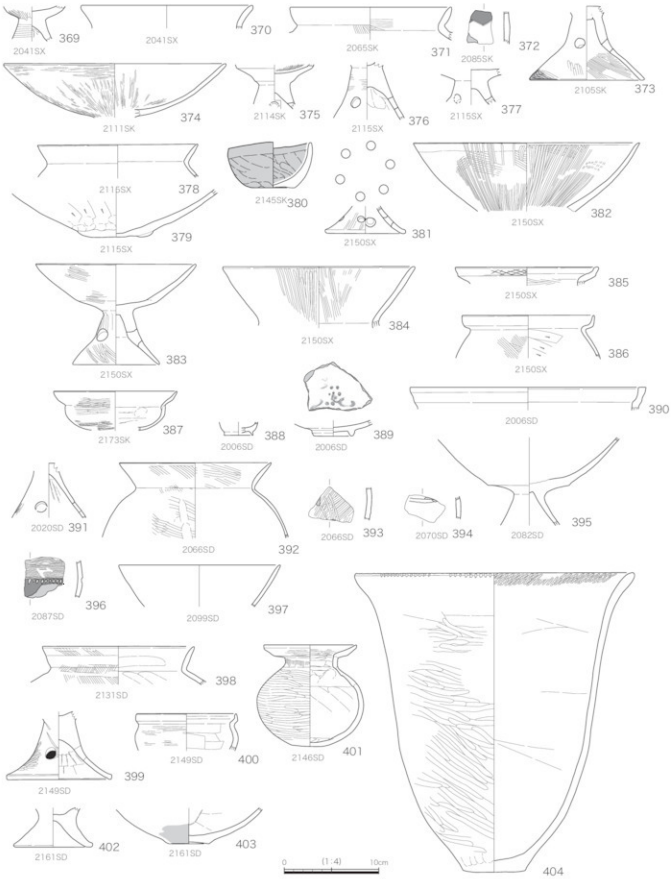


図 193　07B 区出土土器実測図

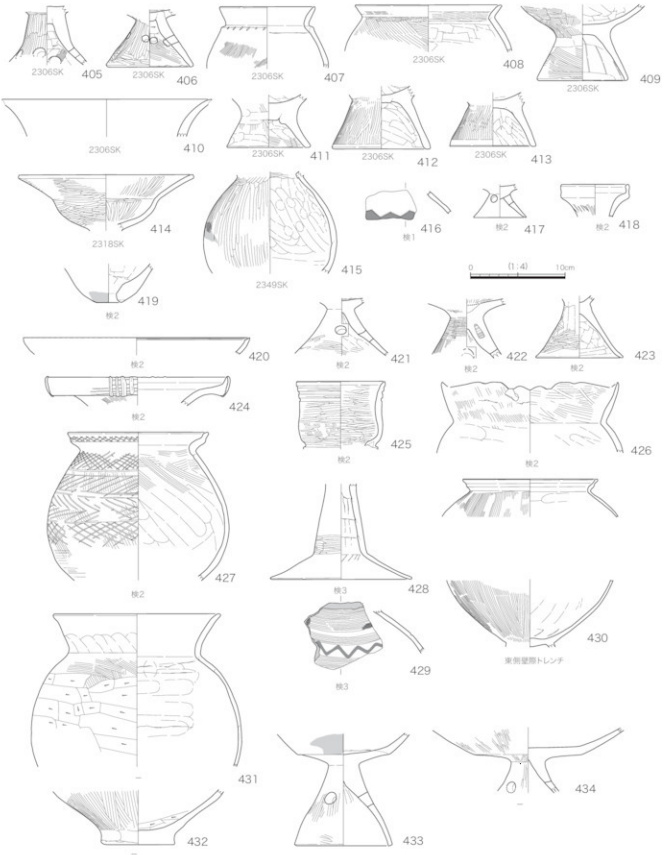


図194　07B区出土土器実測図

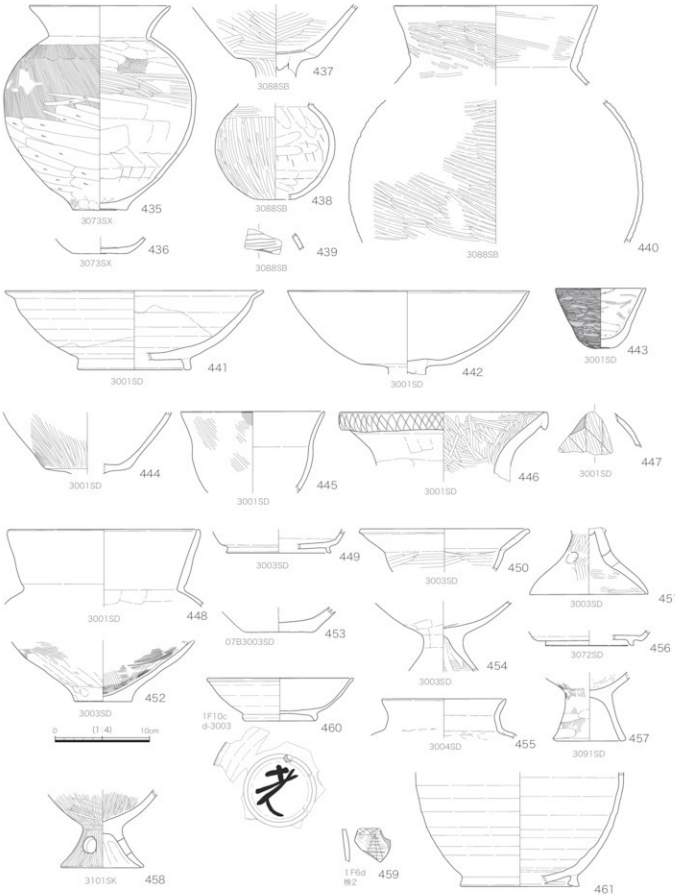


図 195　07C 区出土土器実測図

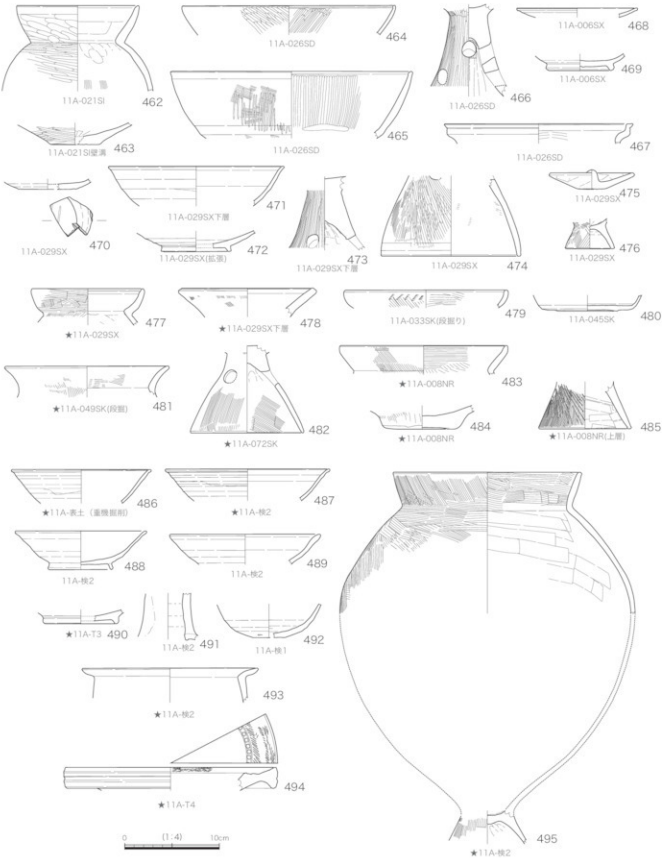


図196　11A区出土土器実測図

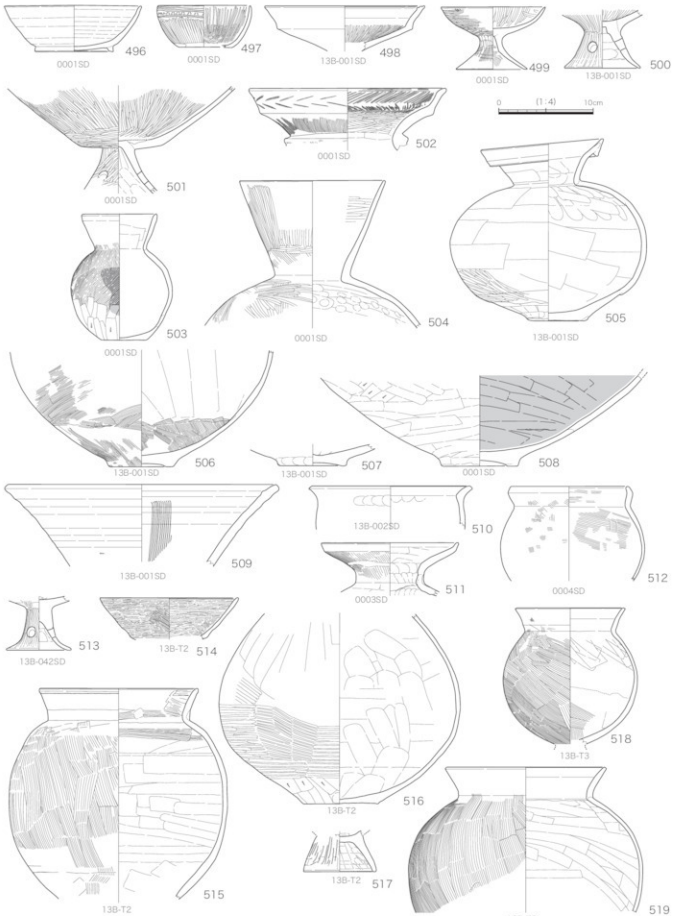


図 197　13B 区出土土器実測図

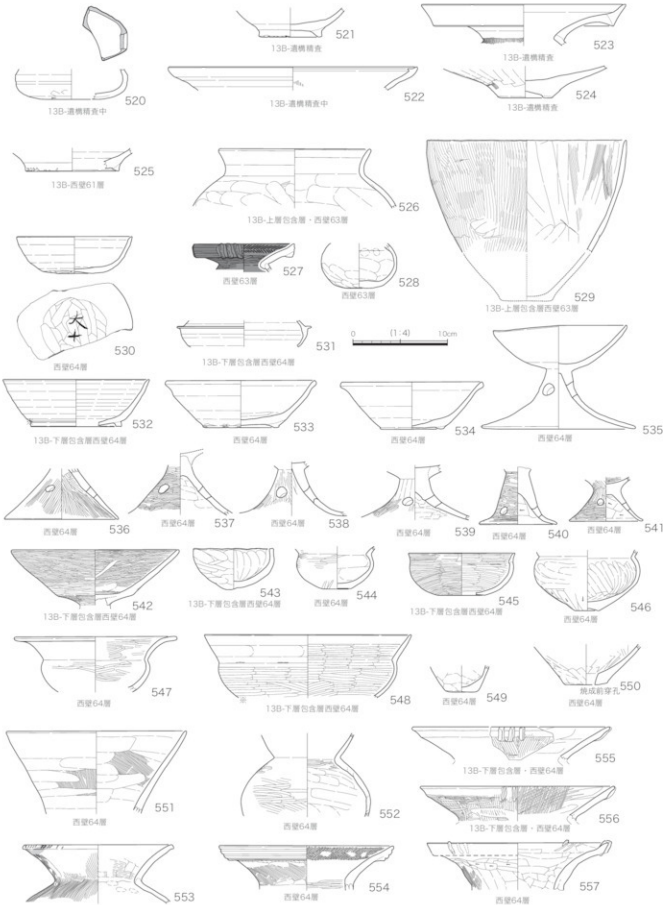


図198　13B区出土土器実測図

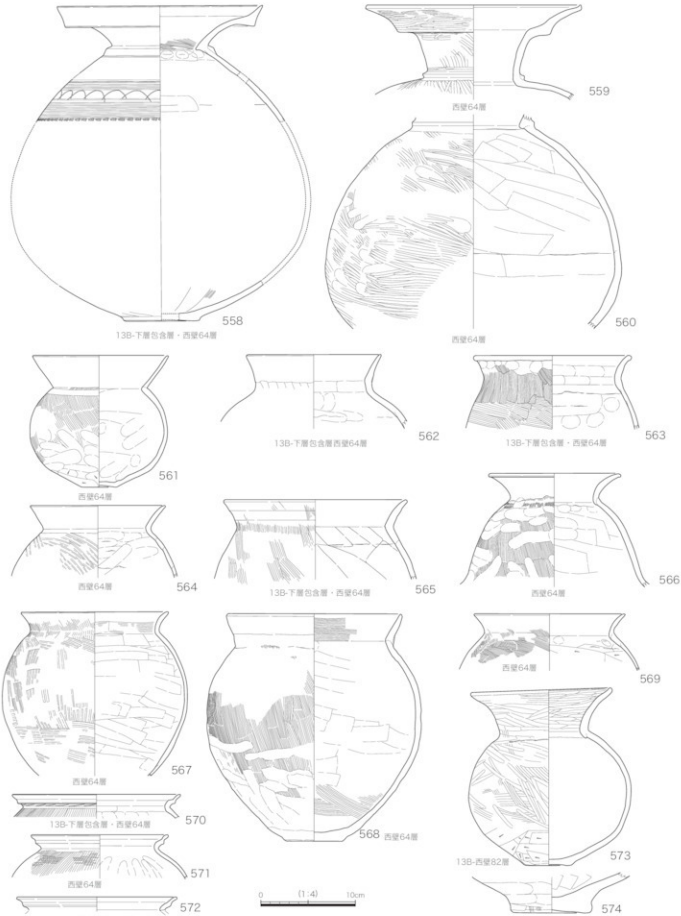


図199　13B区出土土器実測図

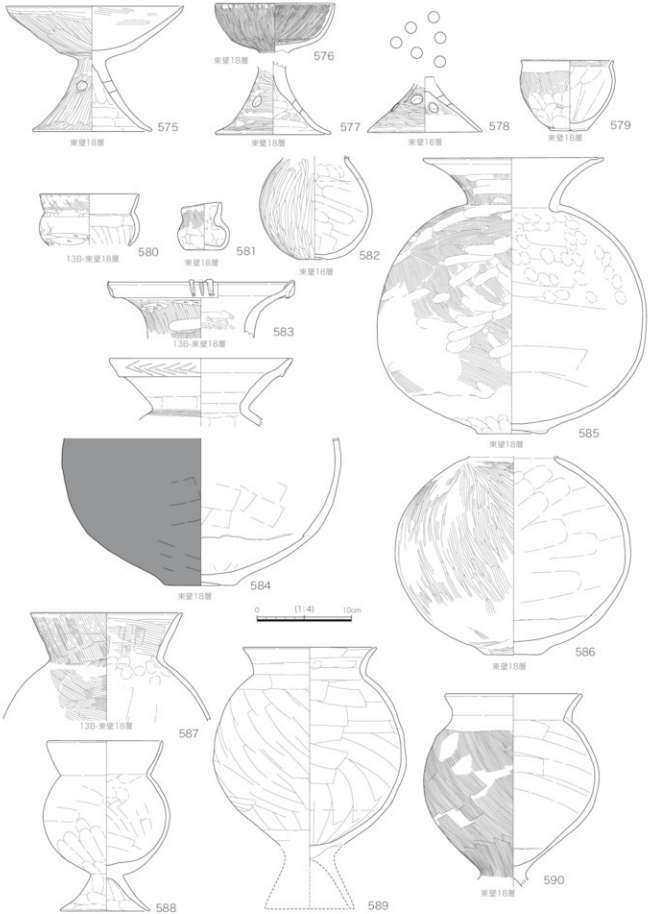


図 200　13B 区出土土器実測図

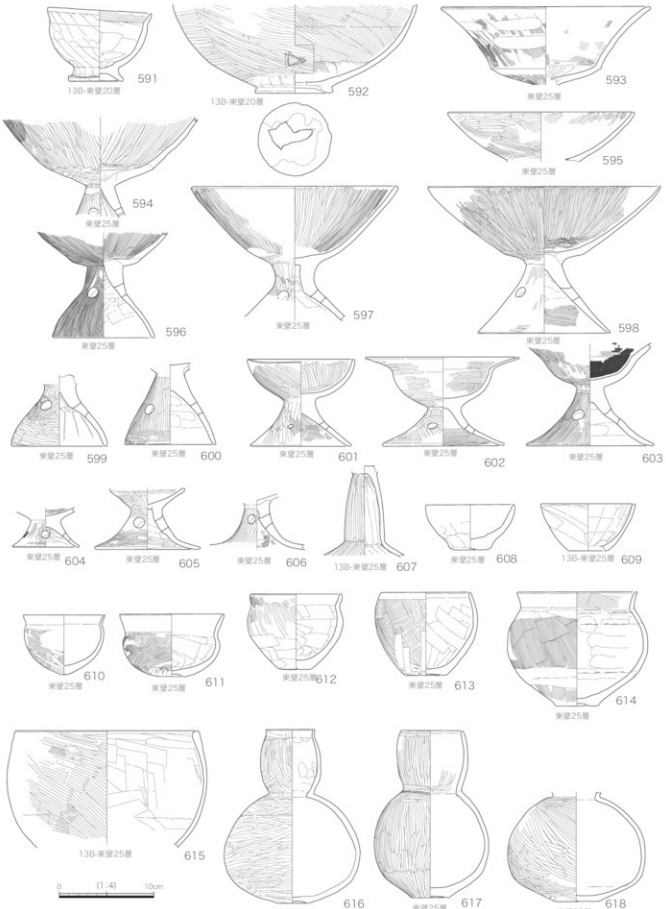


図 201　13B 区出土土器実測図

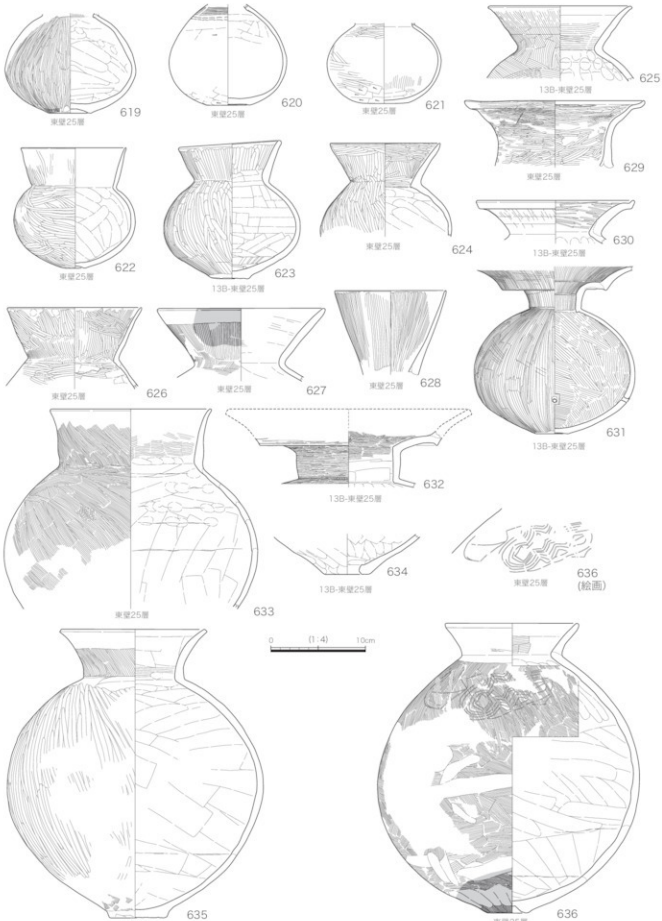


図 202　13B 区出土土器実測図

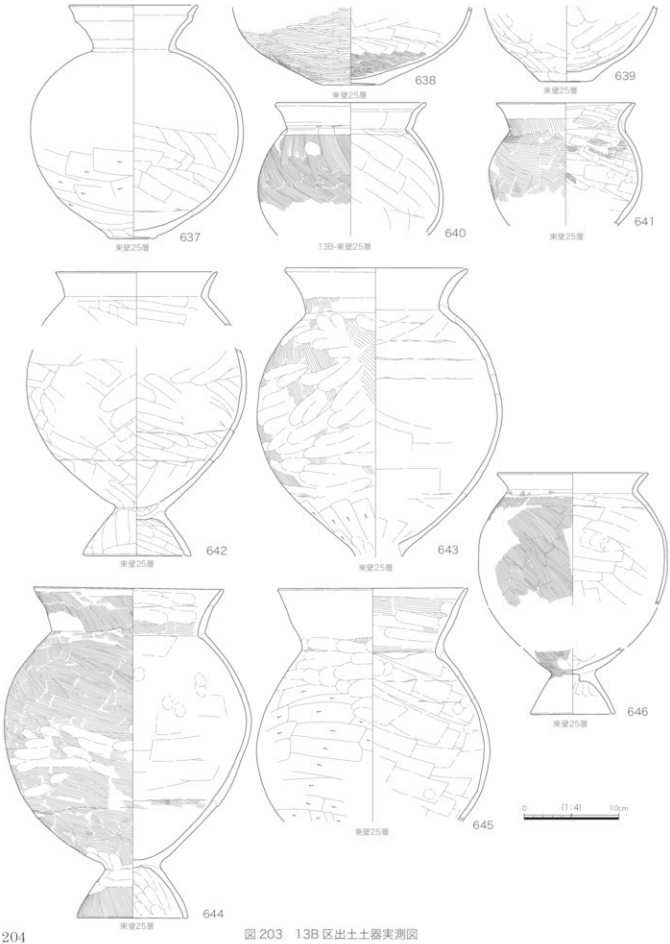


図 203　13B 区出土土器実測図

647
東壁25層

648
東壁25層

649
東壁25層

650
13B-東壁25層

651
東壁25層

652
東壁25層

653
13B-東壁25層

654
東壁25層

655
東壁25層

656
東壁25層

657
13B-東壁25層

658
13B-東壁26層

659
13B-東壁27層

0　(1:4)　10cm

図 204　13B 区出土土器実測図

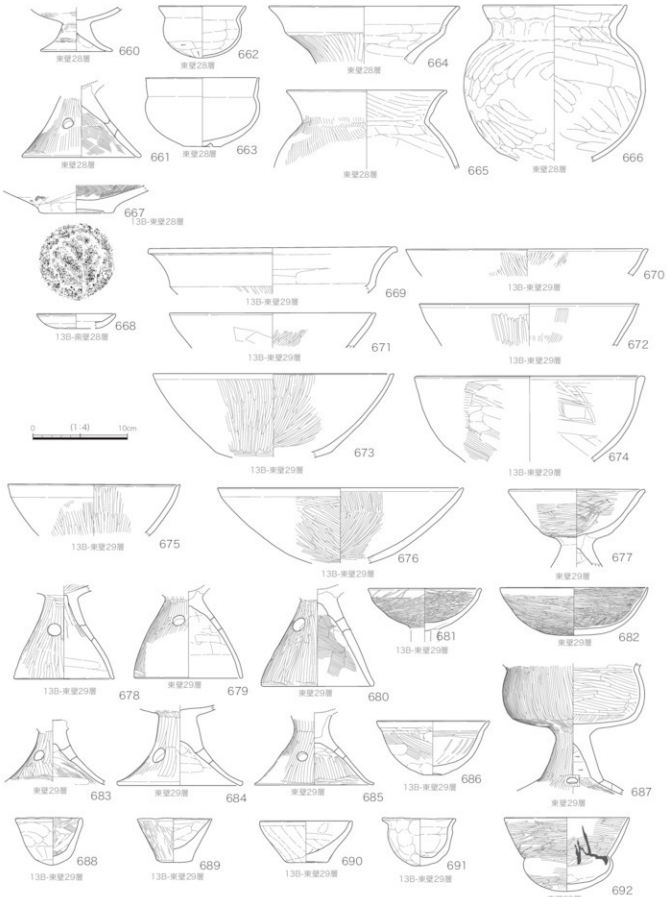


図 205　13B 区出土土器実測図

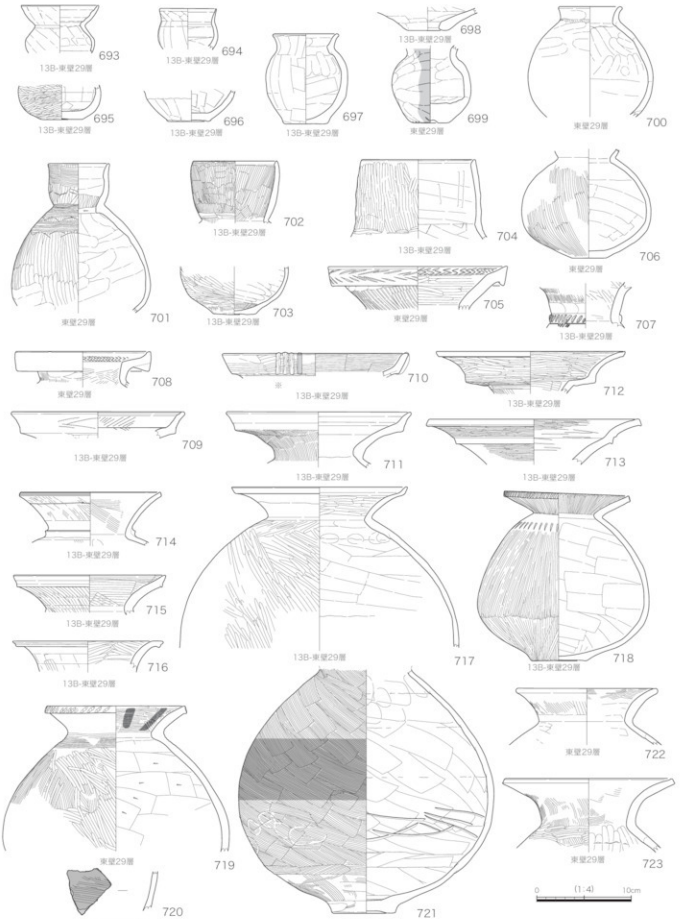


図 206　13B 区出土土器実測図

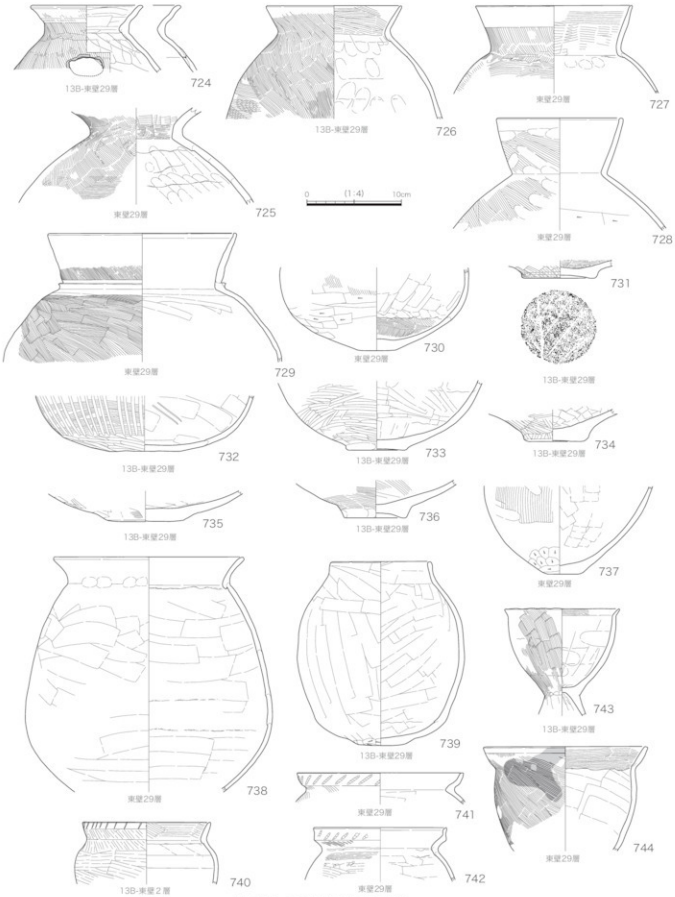


図 207　13B 区出土土器実測図

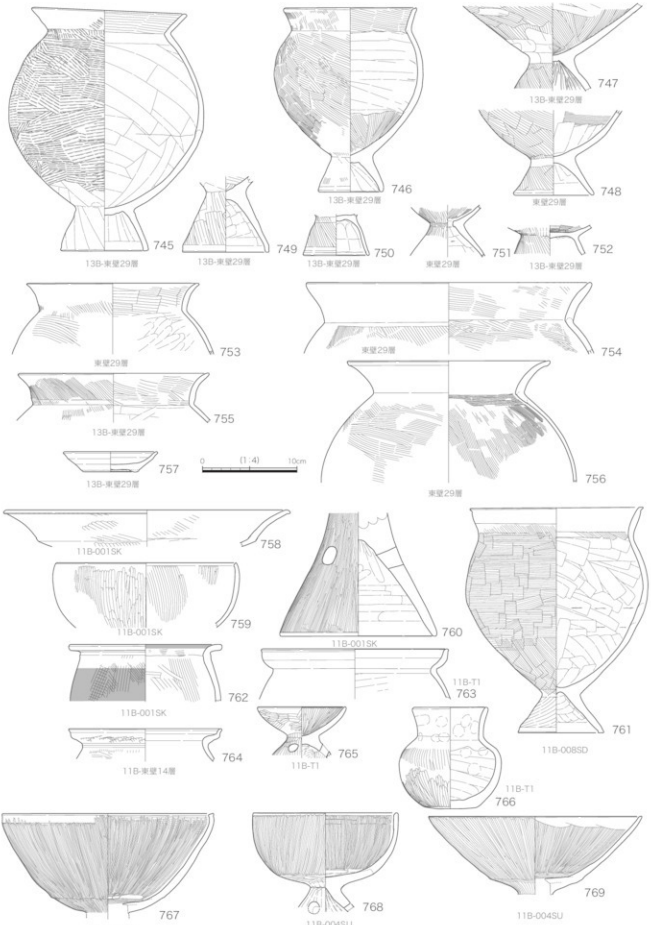


図208　13B・11B区出土土器実測図

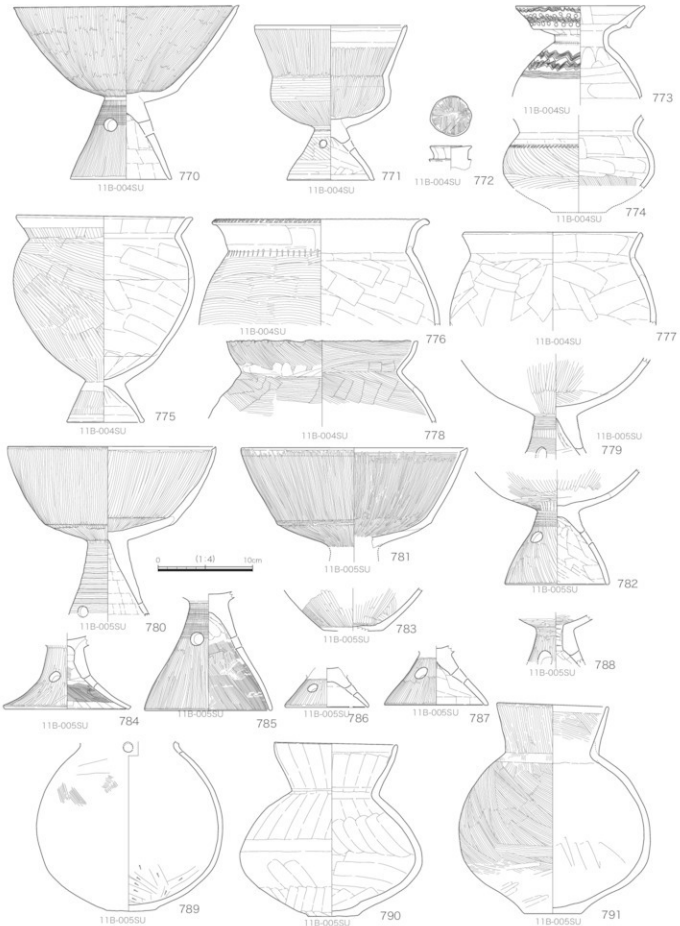


図 209　11B 区出土土器実測図

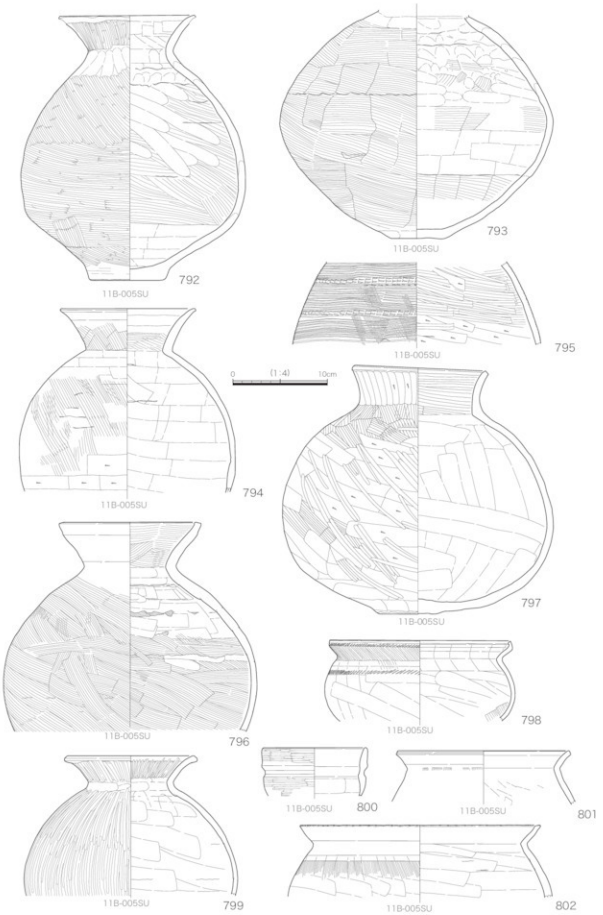


図210　11B区出土土器実測図

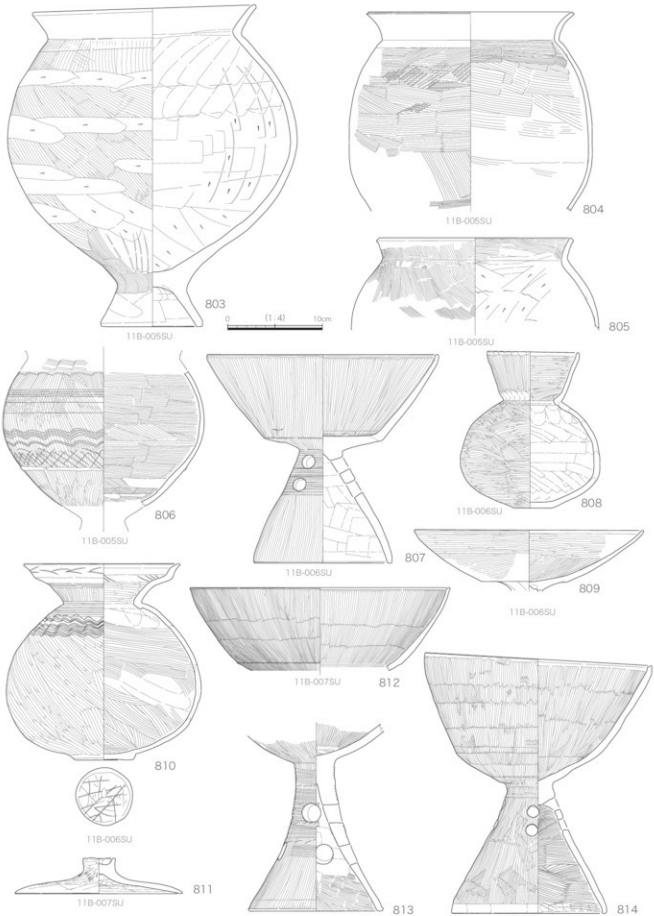


図211　11B区出土土器実測図

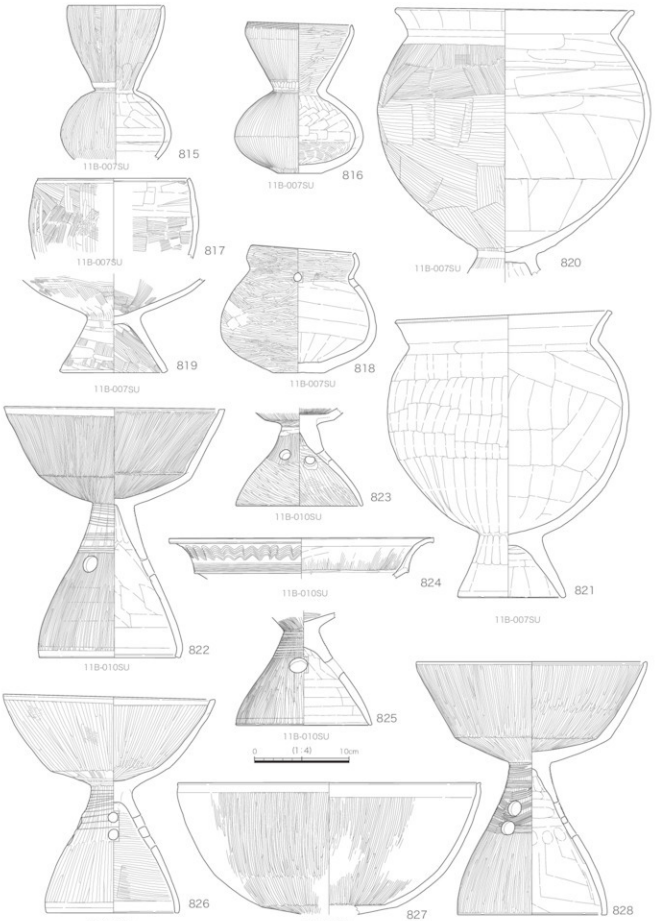


図212　11B区出土土器実測図

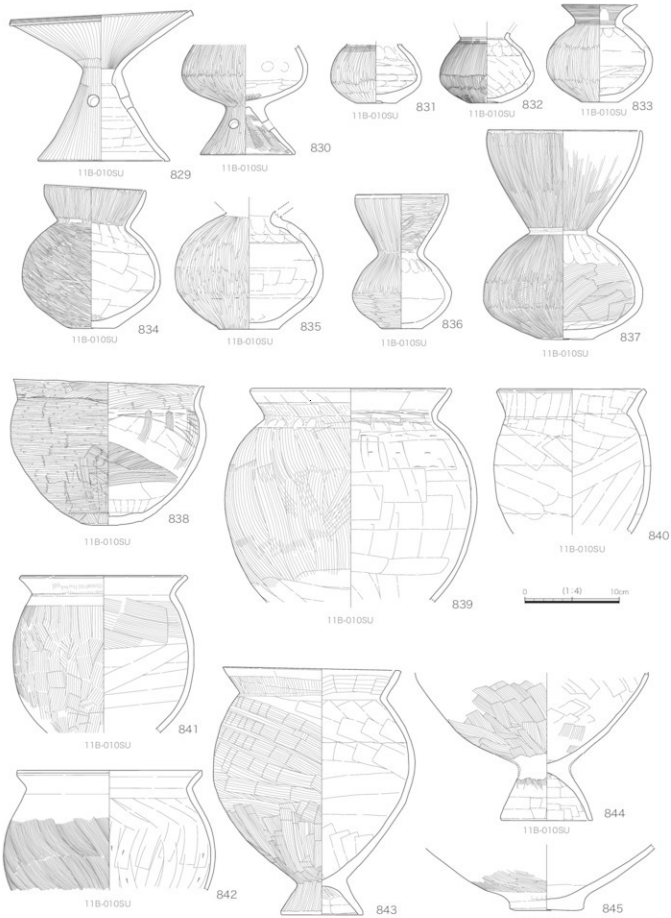


図213　11B区出土土器実測図

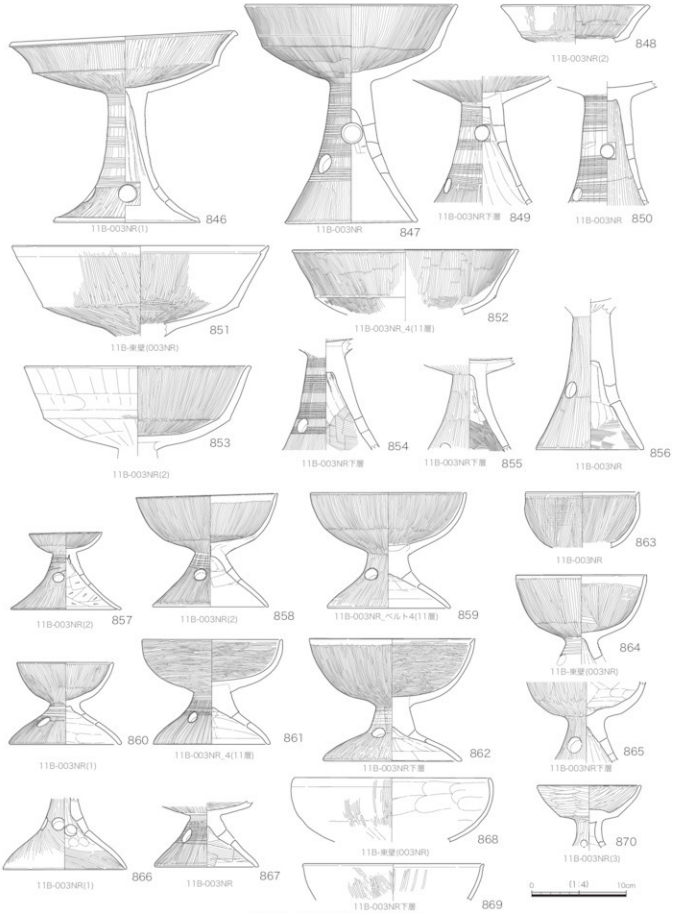


図214 11B区出土土器実測図

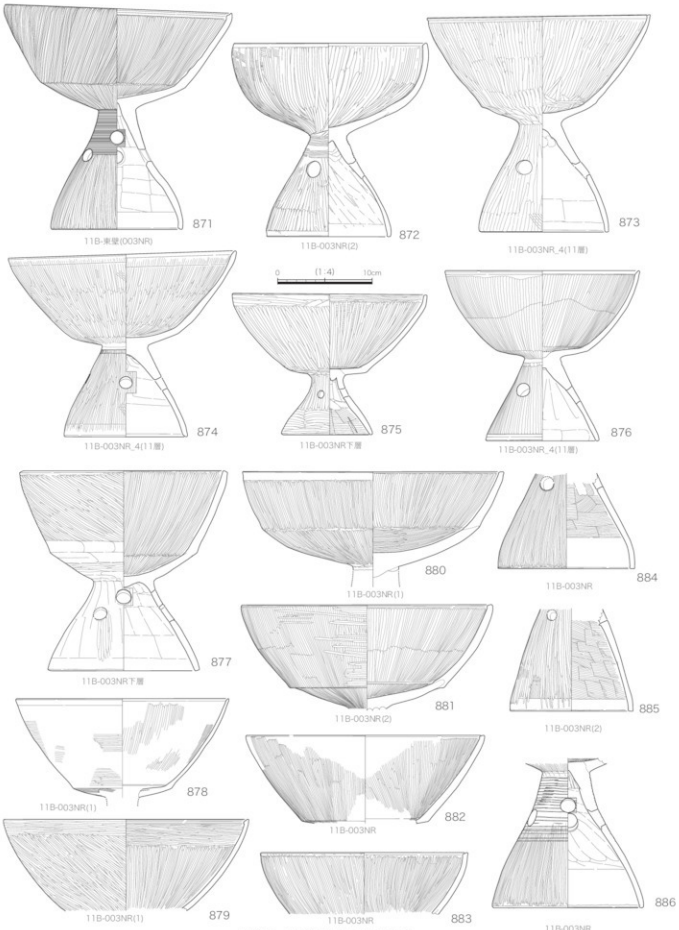


図 215　11B 区出土土器実測図

887 11B-003NR_4(11層)
888 11B-003NR下層
889 11B-東壁(003NR)
890 11B-003NR
891 11B-003NR(2)
0 (1:4) 10cm
892 11B-003NR下層
893 11B-003NR(1)
894 11B-003NR(1)
895 11B-東壁(003NR)
896 11B-東壁(003NR)
897 11B-003NR(1)
898 11B-003NR(1)
899 11B-003NR(3)
900 11B-003NRベルト
901 11B-003NR(1)
902 11B-003NR(1)
903 11B-003NR(1)
904 11B-003NR(1)
905 11B-003NR(2)
906 11B-003NR(1)
907 11B-003NRベルト2(6・8層)
908 11B-003NR_4(11層)
909 11B-003NRベルト1(1～4層)
910 11B-003NR(1)
911 11B-003NR(2)
912 11B-003NR(3)
913 11B-003NR(1)
914 11B-003NRベルト
915 11B-003NR(1)
916 11B-003NR上層
917 11B-003NR
918 11B-003NR(1)
919 11B-003NR下層
920 11B-003NR(1)
921 11B-003NRベルト
922 11B-003NR(2)
923 11B-003NR4(11層)
924 11B-003NR下層
925 11B-003NR

図216　11B区出土土器実測図

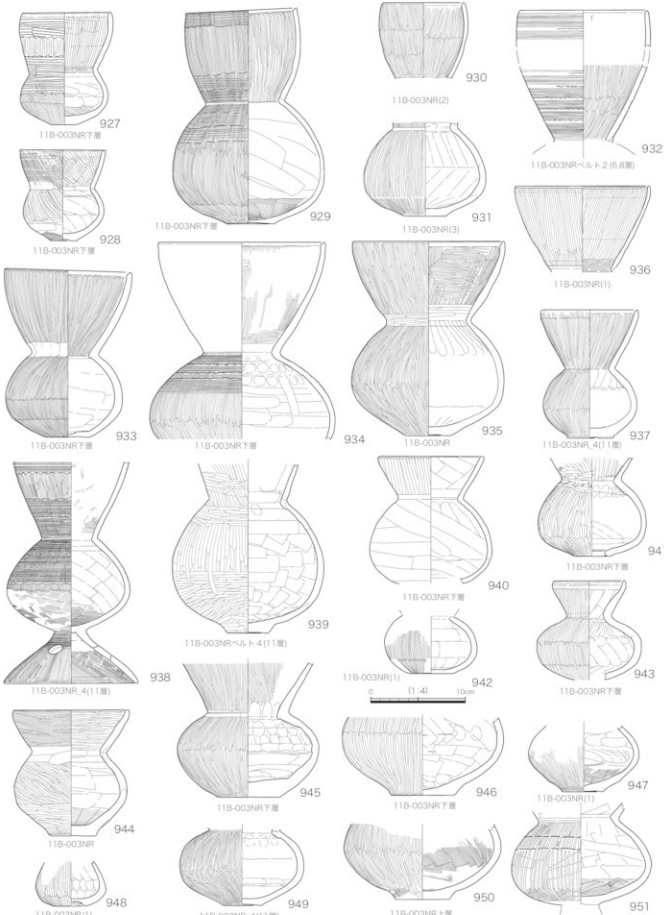


図 217　11B 区出土土器実測図

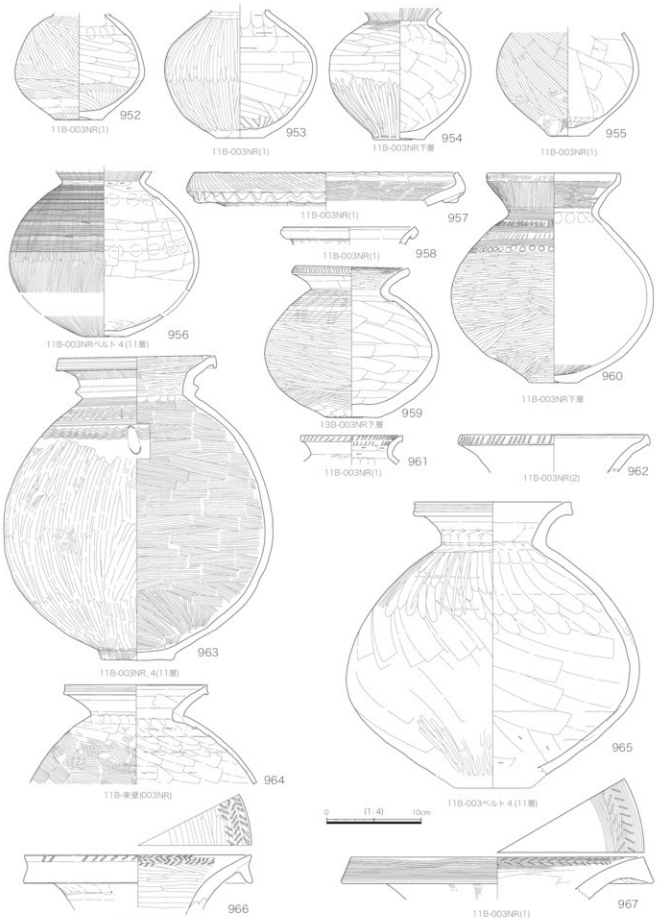


図218　11B区出土土器実測図

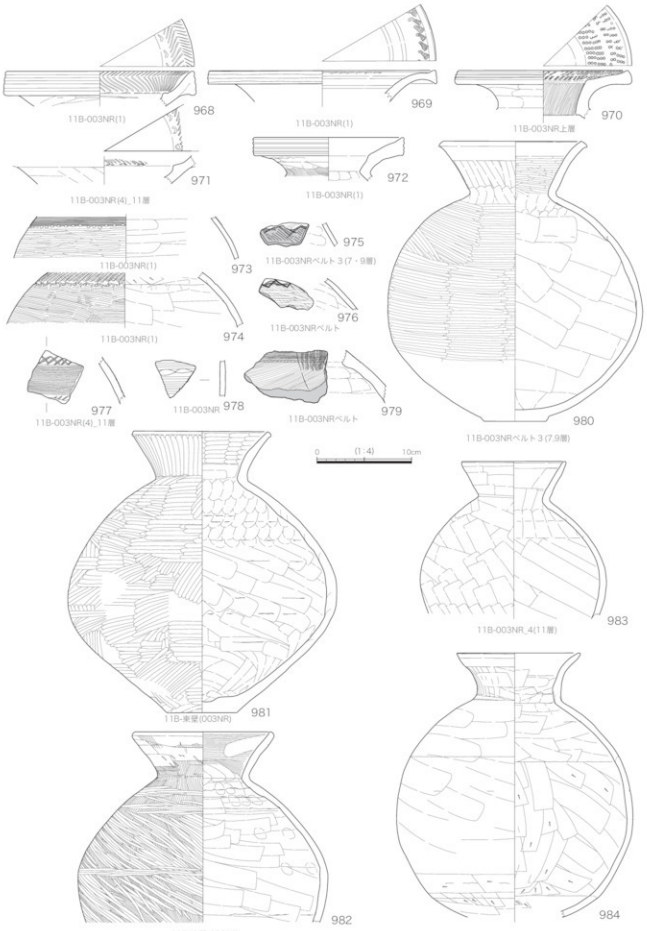


図 219　11B 区出土土器実測図

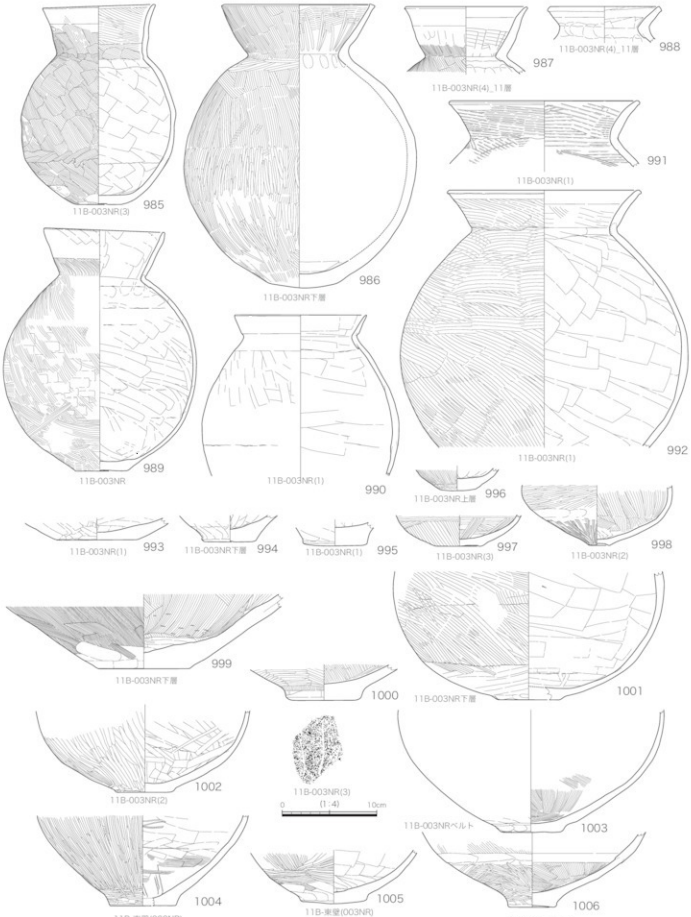


図 220　11B 区出土土器実測図

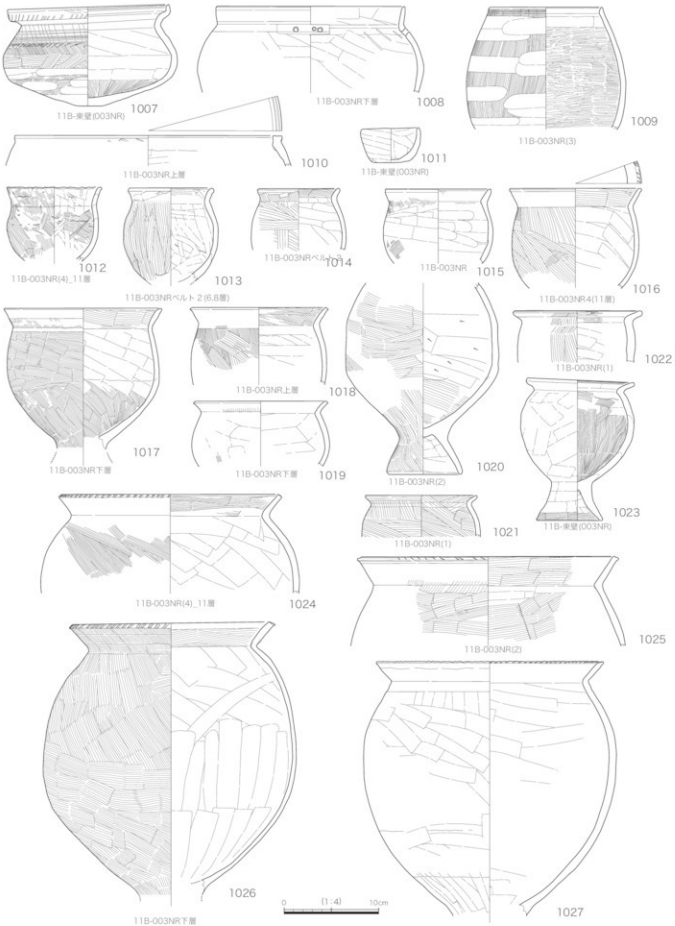


図 221　11B 区出土土器実測図

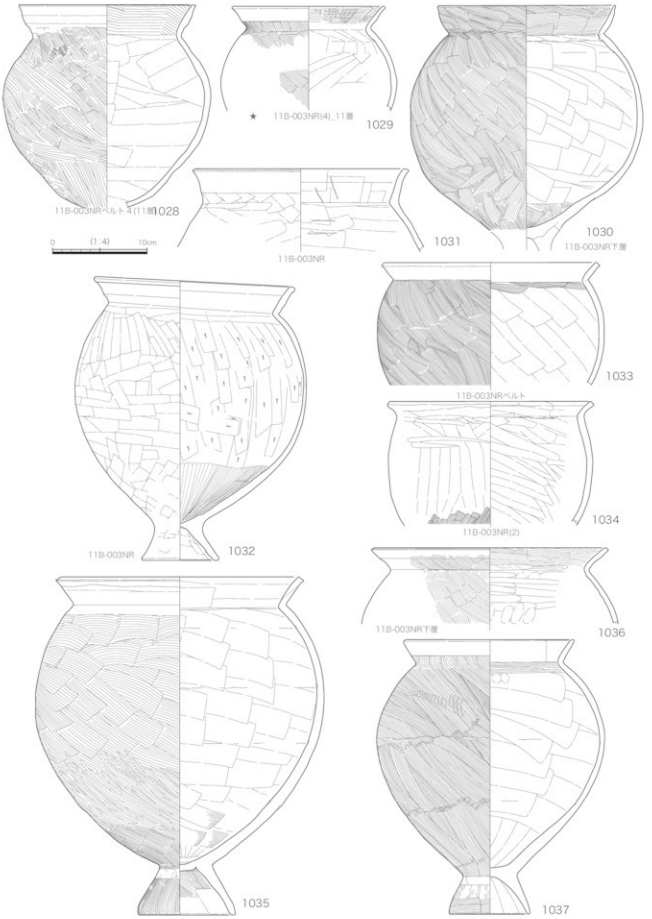


図 222　11B 区出土土器実測図

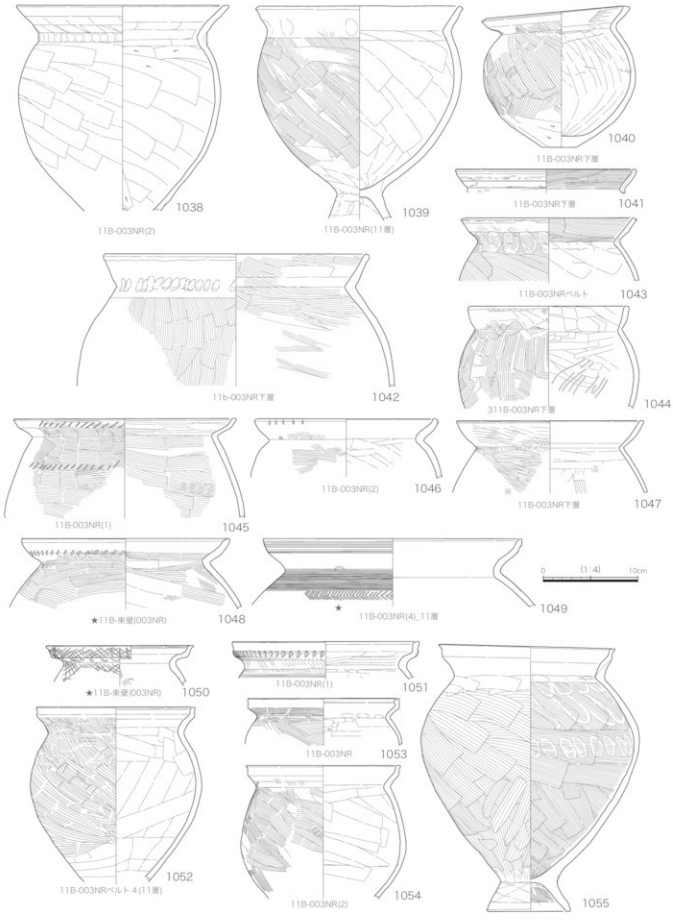


図 223　11B 区出土土器実測図

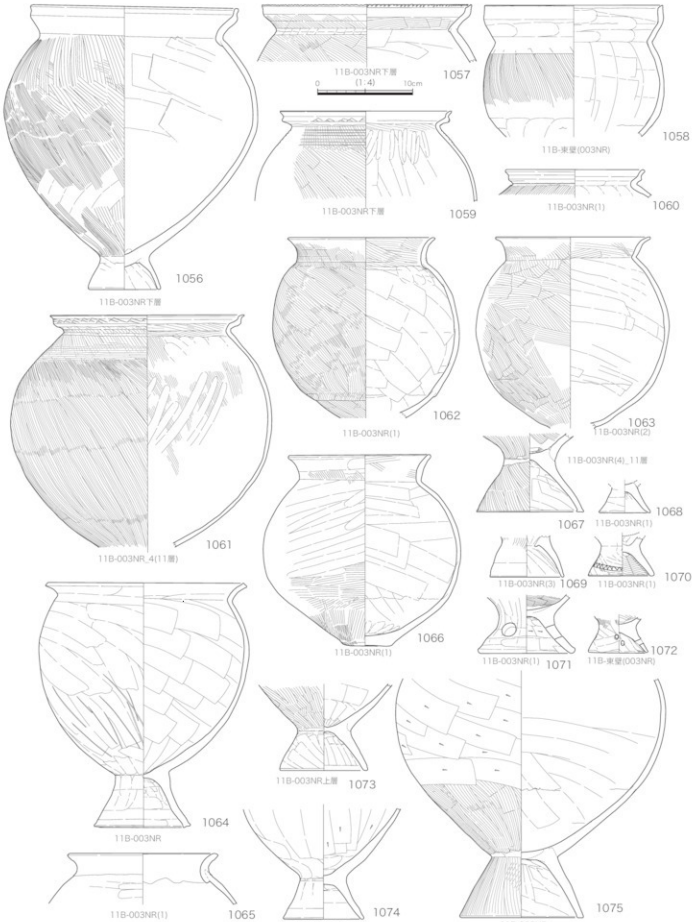


図 224　11B 区出土土器実測図

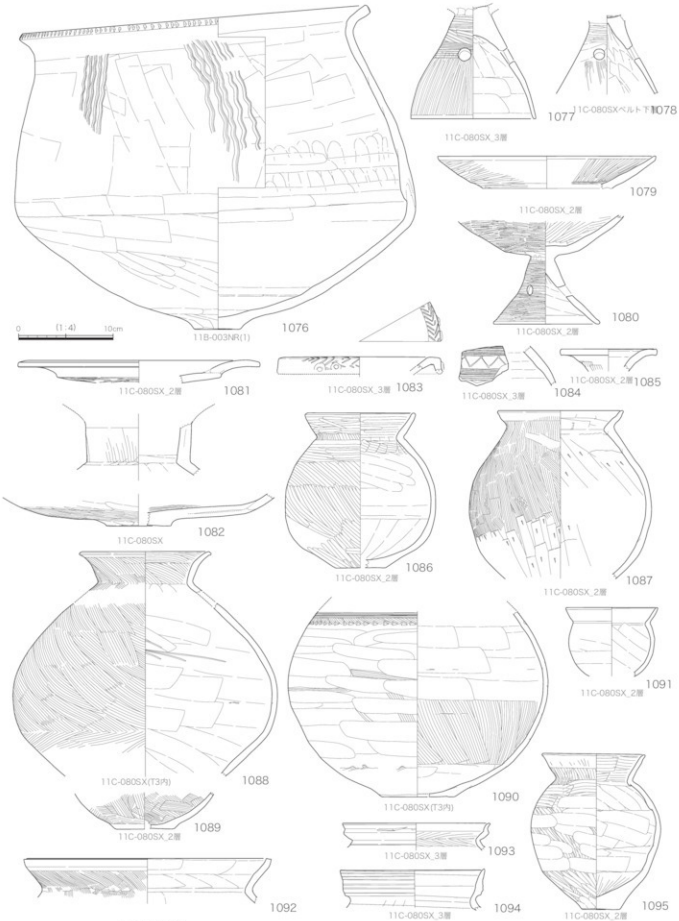


図225　11B・11C区出土土器実測図

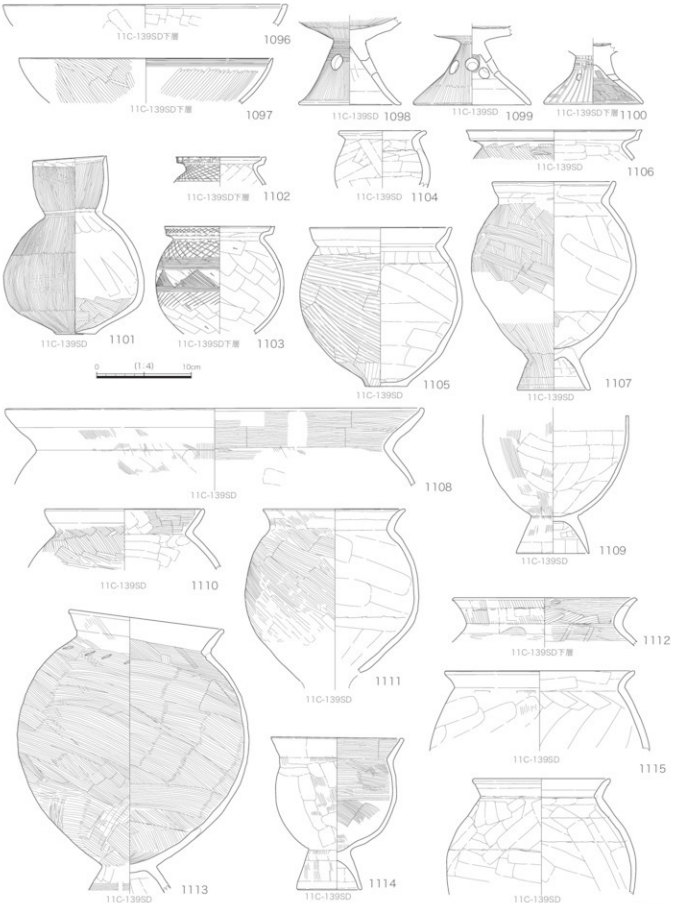


図226　11C区出土土器実測図

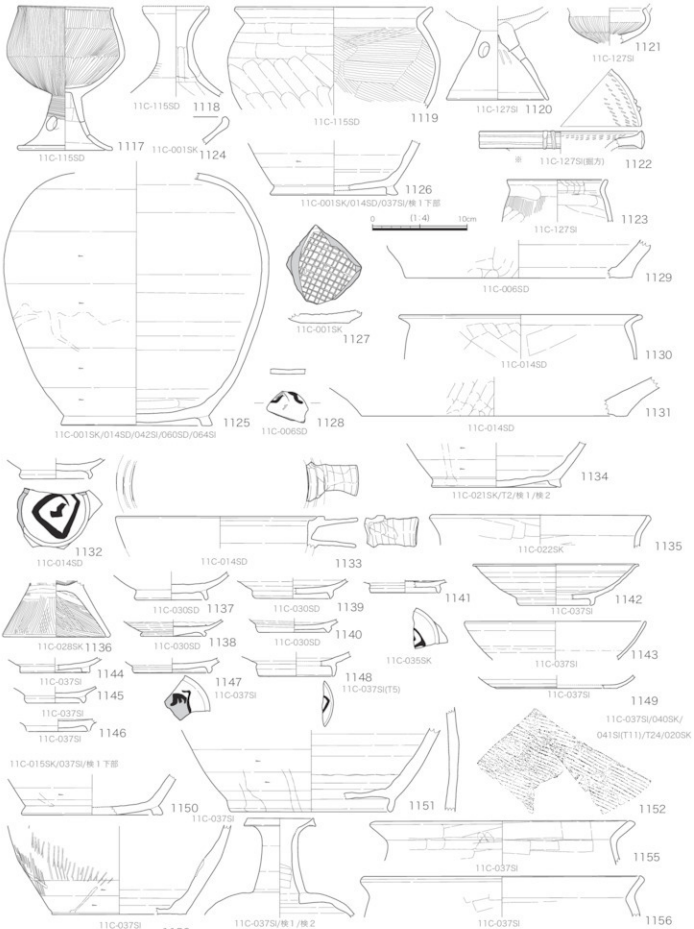


図 227　11C 区出土土器実測図

図228　11C区出土土器実測図

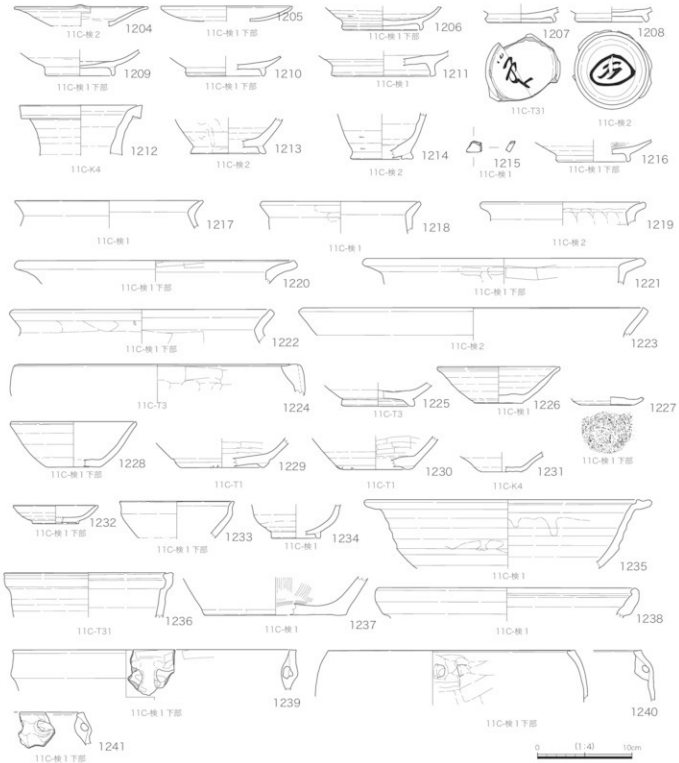


図 229　11C 区出土土器実測図

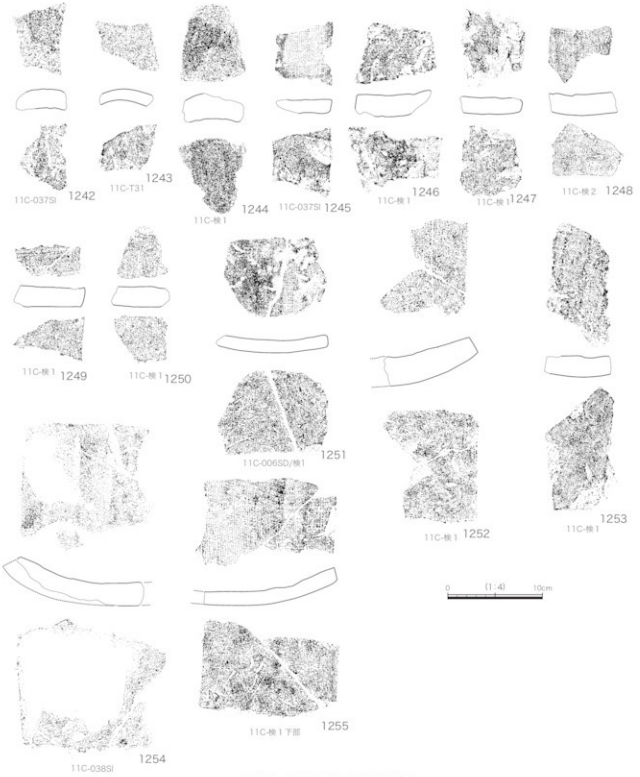


図230　11C区出土土器実測図

第 2 節　石器・石製品など

石杵　寄島遺跡では石製品に数は少ない。しかしその中でも竪穴建物跡出土の石杵は目立っており、自然石に近い棒状のものがほとんどであるが、使用により端部が摩滅しているものや微量の赤色顔料が付着しているものが認められる。S1（12B 区 0029SI）は片麻岩で両端が摺面となっている。片麻岩を使うのはこれ以外に S12・S13・S14（07B 区 2214SB）・S15・S20 があり、10 ～ 12cm の角棒状が主体である。この他の石材では S6 が緑色片岩、S7・S8・S17 が砂岩である。S6 はやや尖った端部も使用したらしく、赤色顔料が付着している。また S17・S39 は握りやすい形状となっており、広い端面全面が摺面となっている。S21 の石材はアプライトであるが、もと楕円形の円礫であったものが使用により両端が平らになっている。

摺石　石杵とは異なるが、なめらかな円礫に摺面の認められるものがある（S10・S11）。土器製作時のミガキなどに使用されたと推測される。S10 はアプライト、S11・S39 は軽石で、御嶽山で産出されたものか。

管玉　S22（凝灰岩製）・S23（溶結凝灰岩製）は周溝墓の副葬品とみられる。対して S5（凝灰岩製）や S18（溶結凝灰岩製）は集落内で出土している。

砥石　S2 は砂岩、S19 は片麻岩、古墳時代前期。

磨製石斧　S3 は緑色岩、S14 は安山岩、ともに遺構外出土で時期特定はできない。

石鏃　S4 は溶結凝灰岩製の有茎石鏃、S9 は安山岩。S32 は下呂石製。S42 も有茎石鏃と推定される。

剥片など　S35 は黒曜石の削器。S31 は細かい調整を加えた剥片である。S41 は柱状の原石素材。

金属製品　M1 は近世の鉄砲玉。他に宋銭と寛永通宝が 1 点ずつ出土している。

ガラス臼玉　X1 は旧河道出土であるため時期不詳のガラス玉である。

表 2　石製品一覧

番号	調査区	グリッド	遺構	層位	Doc. No.	種別	形状・状態	石材	法量			
									全長（残存長）	幅（D.Omm）	厚さ（D.0mm）	重量（D.0 g）
S1	12B	9F4k	0029SI	3上層	No.042	石杵	完形・風化著しい。両端部に敲打痕あり	片麻岩	110.0	47.3	28.2	233.8
S2		8F20	0031SI	3上層	No.080	砥石	完形。風蝕面	砂岩	115.0	59.0	89.5	916.2
S3	12B	9F5j	検2	—	No.012	磨製石斧	完形。磨製偏平片刃石斧	緑色岩	118.0	53.6	21.0	202.3
S4		9F4k	検2	—	No.011	有茎石鏃	先端部・基部欠損。未製品か	溶結凝灰岩	33.4	13.8	4.7	2.2
S5		9F7k	検1	—	No.001	管玉	端部欠損	凝灰岩	13.7	4.5	4.8	0.3
S6		9F18h	0285SI	下層	No.005	石杵	基部欠損。赤色顔料付着か	緑色片岩	62.3	21.3	16.5	24.4
S7	12A	9F14j	0615SI	4上層	No.082	摺石	円盤形	砂岩	74.3	105.4	35.6	364.6
S8		9F13h	2985K	下層	No.046	石杵	完形・棒状	砂岩	72.7	32.3	24.0	87.4
S9		9F17j	検2	包含層	No.024	有茎石鏃	先端部欠損。未製品か	安山岩	30.0	13.7	6.1	2.2
S10	07A	10F4f～5f	1066SB		摺石	完形。風蝕著しい。両端部使用痕	アプライト	44.9	34.9	21.6	47.5
S11		10F12h	検2		摺石	被熱	軽石	51.1	48.4	30.7	12.7
S12		10F5h	検2		石杵	棒状・風化著しい。両端部使用痕	片麻岩	127.5	37.8	29.9	168.5
S13		10F7i	検2		石杵	分離・風化著しい。両端部擦り痕	片麻岩	104.2	36.8	28.9	173.4
S14		10F6i	掘高		磨製石斧	先端部のみ破断して残存	安山岩	54.7	48.6	14.1	27.6
S15		—	表土・砂		石杵	端部欠損。端部打撃による欠損か	花崗岩	70.5	34.0	19.5	65.6
S16		10F20e～1F1f	2214SB		石杵	風化著しい。偏平	片麻岩	108.9	48.1	24.1	181.5
S17		10F20g	2213SB		Dot.2094	石杵	完形・棒状。両端部に敲打痕	砂岩	87.3	33.6	27.5	114.8
S18	07B	—	2217SB		Dot.2095	管玉	完形。	溶結凝灰岩	20.7	4.5	4.5	0.6
S19		10F19g	2115SX		Dot.2013	砥石	破片	片麻岩	41.7	40.8	26.2	52.4
S20		10F18e	検2			石杵	風化著しい	片麻岩	81.4	43.6	39.4	172.4
S21		10F19g	検2		石杵	完形。両端部敲打痕あり	アプライト	97.2	60.1	43.1	368.3
S22	07C	—	3003SD	下層	Dot.3069	管玉	端部一部欠損	凝灰岩	7.8	4.7	4.8	0.2
S23		1F11d	—	下層	Dot.2017	管玉	完形。欠損跡磨滅	溶結凝灰岩	19.5	7.2	7.2	1.7
S24		1F16c	3001SD	下層		摺石		軽石	37.1	26.9	2.2	3.9
S25		1F7c	検2	—		砥石	欠損	砂岩	41.1	43.8	18.6	57.4
S26	13B	8F1p	柔溝	29層		砥石	1/4破片。	花こう岩	(80.59)	(56.42)	39.63	147.24
S27		2E10i	003NR	4(11層)	No.00225	磨き石	完形。分離石を転用した磨き石。破断・コゲ	花こう岩	69.02	40.03	18.5	59.61
S28		2E13i	003NR	(1)		石杵	完形。両端に敲打痕。丸い・ツルツル	アプライト	72.09	46.35	33.09	163.87
S29	11B	2E2i	003NR	下層		石杵	完形。上半ビヤセあり。石圧か。側面あり	花こう岩	87.67	39.81	28.69	132.86
S30		2E11i	003NR	8(11層)		石杵	端部破片。端部に敲打痕。破断・丸い。	砂岩	(37.1)	48.77	36.25	60.13
S31		2E12i	003NR	(3)	No.00054	砥石	上端欠損。下端部は破断面にも痕跡あり。	カルシフェルス	(42.31)	32.38	18.34	24.20
S32		2E13i	003NR		No.00002	剥離調整をおすすめ	完形。大側縁に剥離調整。	安山岩（下呂石）	32.82	16.92	5.20	1.19
S33		2E16i	042SI		No.00032	石鏃	飛行機鏃。未成品か。	安山岩（下呂石）	25.43	14.25	3.8	1.03
S34		2E17i	014SD			石杵	完形。両端に敲打痕。側面あり	アプライト	83.62	63.16	46.66	334.13
S35		2E18i	006SD		No.00018	スクレイパー	完形。裏状原石素材。	黒曜石	32.8	41.85	12.95	8.65
S36		2E13・16i	086SX			石杵	完形。下端に敲打痕。側面あり	花こう岩	40.83	17.31	13.0	11.92
S37		2E15i	113SK			ピエス・エスキーユ	正面に両側剥離痕。	安山岩	16.39	9.8	4.22	0.59
S38	11C	2E14n	1139SD			石杵	被熱による調質か。破断・コゲ	砂質凝灰岩	(71.96)	(49.31)	15.98	40.93
S39		2E19n	1403SK			砥石	上端欠損か。側面あり。	軽石	45.52	46.58	37.11	12.05
S40		2E16i	検1下層			石杵	完形。右側・下端に敲打痕。側面あり	閃緑岩	111.93	46.96	35.16	224.53
S41		2E15i	検1		No.00016	石核	柱状原石素材。	黒曜石	12.36	16.22	11.2	2.01
S42		2E14i	検1			剥離調整をおすすめ	完形。大側縁に剥離調整。	チャート	18.33	11.49	5.06	0.67
S43		2E17i	T1		No.00001	石鏃	基部欠損。飛行機鏃。	チャート	(37.5)	13.52	6.31	2.68

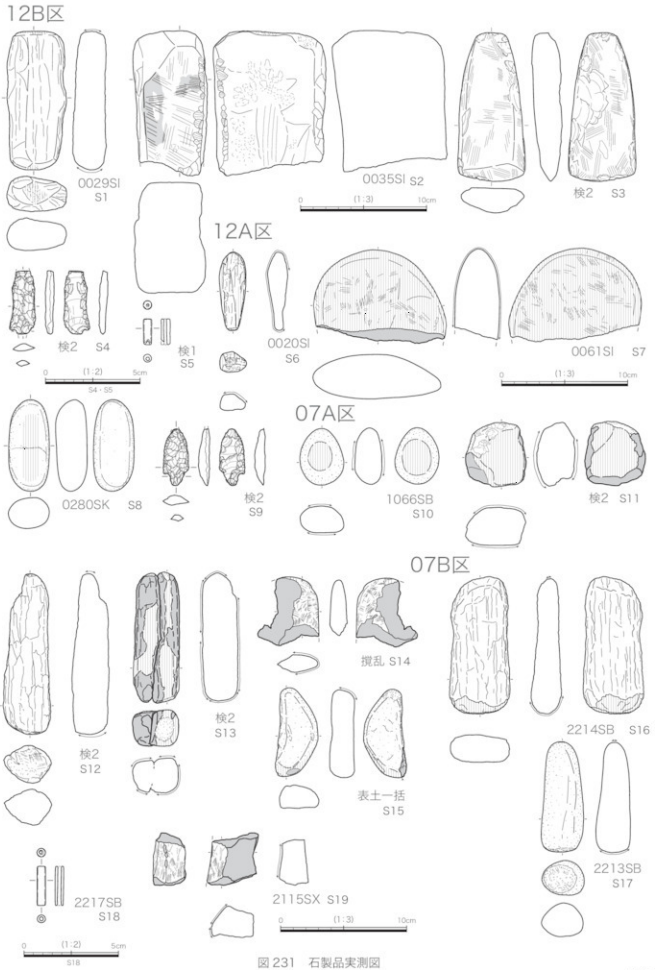

12B区
0029SI
S1
0035SI S2
(1:3)
10cm
検2　S3
12A区
検2　S4
検1
S5
(1:2)
5cm
S4・S5
0020SI
S6
0061SI　S7
(1:3)
10cm
07A区
0280SK　S8
検2
S9
1066SB
S10
検2　S11
07B区
検2
S12
検2
S13
撹乱 S14
表土一括
S15
2214SB　S16
2213SB
S17
2217SB
S18
(1:2)
5cm
S18
2115SX S19
(1:3)
10cm

図231　石製品実測図

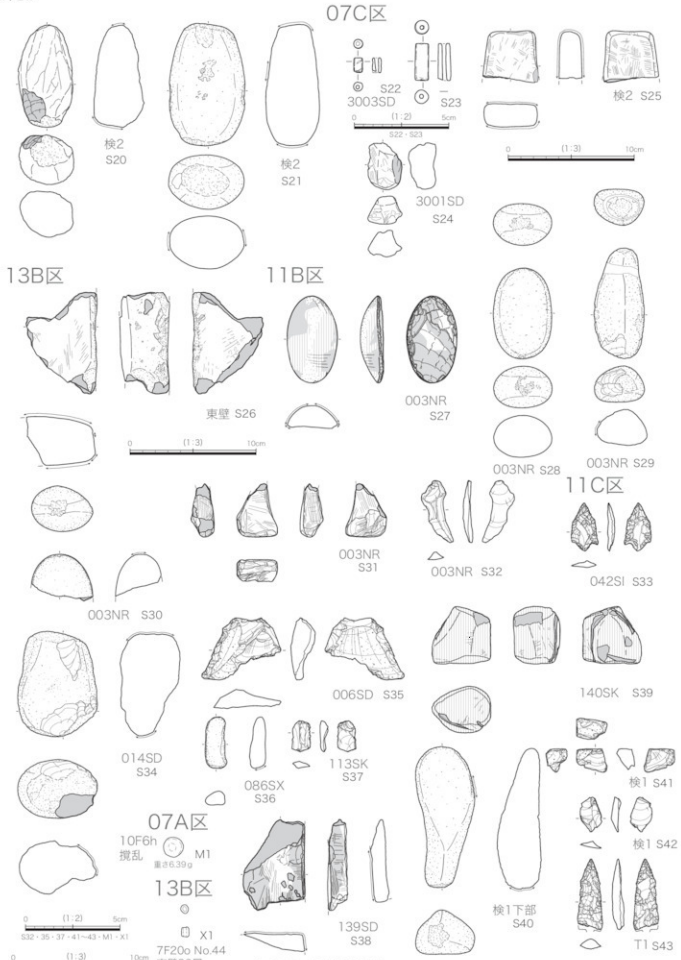

07C区
S22
3003SD
S23
0 (1:2) 5cm
S22・S23
検2 S25
0 (1:3) 10cm
検2
S20
検2
S21
3001SD
S24
13B区
11B区
東壁 S26
0 (1:3) 10cm
003NR
S27
003NR S28
003NR S29
11C区
003NR
S31
003NR S32
042SI S33
003NR S30
006SD S35
140SK S39
014SD
S34
113SK
S37
086SX
S36
検1 S41
07A区
10F6h
撹乱
M1
重さ6.39g
検1 S42
13B区
0 (1:2) 5cm
S32・35・37・41～43・M1・X1
X1
7F20o No.44
東壁26層
139SD
S38
検1下部
S40
T1 S43
0 (1:3) 10cm

図 232　石製品実測図

第3節　木製品

(1) 11B区003NR下層

掘削具・農具・工具・容器・編み具・建築材・土木材・板・角棒・丸棒・分潮材・丸太がある。

掘削具　W001は伊勢湾型曲柄平鍬で、肩部をしっかり作り出し、刃部幅が肩部から下半部までほぼ一定のⅠ類。軸部の上半部と刃部下端を欠損する。

W002も伊勢湾型曲柄平鍬で、肩部が省略されて刃部の平面形がやや下ぶくれ上になるⅡ類。軸部上端部を欠損するが、膝柄と結合するための溝が深いV字状を呈するD類。W001・M002ともに樹種はコナラ節。

W003は、伊勢湾型曲柄平鍬の未成品とおもわれる。樹種はクヌギ節。

農具　W004は小型臼で、クワ属の芯持ち材を用いる。

工具　W005は横斧柄で、台部の中位に段を有することから板状鉄斧の柄と考えられる。樹種はサカキ。

容器　W007は槽の破片で、樹種はコウヤマキ。

W006は用途不明だが、容器の脚部である可能性が高い。樹種は同じくコウヤマキ。

編み具　W008・009は編み台で、いずれもピッチは不均等。樹種はW008がヒノキで、W009がサワラ。

建築材　W010～014は掘立柱建物の柱材。うち、W011のみは断面が長方形を呈するごひら柱で、他は円柱ないしは多角柱。また、桁を受けるために、W010・011は上端部に輪薙ぎ込み、 W012は上端部に直角に振った2段の出枘を有する。W013は上端部を山状に作り出す。W012・013は下端部を尖らせている。樹種はW010がコナラ節、W011・012がクリ、W013・014がヒノキで、いずれも芯持ち材。

W015～017は竪穴建物の柱材。うち、W016・W017は上端部を叉状に作り出す。W017は下端部を尖らす。樹種はW015・016がクリで、W017がヒノキ。

W018～022は梯子。うち、W018はステップの幅が24.4cmとかなり大型で、W019も大型の部類に属する。樹種はW018・019がクリ、W020がムクノキ、W021がヒノキ、W022がカヤで、木取りはW018・W019・021が芯を外した板目材で、W020・022は芯持ち材。

W023～028は両端部に段を有する丸太状の建築材である。『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告3　建築部材（資料編）』によると、端部の処理が斜めのものを梁材、直角のものを根太材としているため、W023～025が梁材、W026～028が根太材となる。実際に、後者は前者より直径が倍近くあることから、床を受ける根太材である蓋然性は高いものと考えられる。これら両者はいずれも梁間方向の建築材であることから、この寄島遺跡には梁間が2.6～4.0mの大型掘立柱建物が数棟存在していたことを示している。また、W027・028は材の直径がほぼ同じことから、同一建物の部材である可能性が高い。樹種はW023・025・027・028がコナラ節、W024がアカガシ亜属、W026がヒノキで、木取りは全て芯持ち材。

W030は出枘を持つ丸太材で、柱の可能性がある。樹種はコナラ節の芯持ち材。

W029は片側の端部を平たく仕上げて段を作り出し、かつ正方形の穿孔を施すのに対し、もう一方の端部は円柱状のままに仕上げる建築材。樹種はコナラ節の芯持ち材。

土木材　W031は矢板で、中央やや下に幅広の蟻溝がある。樹種はクリの追柾目材。

W032～048は杭。樹種はW032・033がコナラ節、W048がコウヤマキで、他は全てヒノキ。W042・044・045・048は長さが140m前後、W046・047は200cm前後ある。

W085・103は端部が欠損しているために丸棒に分類したが、W046・047と同大の杭である可能性がある。

板　W049はアカガシ亜属の柾目材を用いた板で、中央部に段を有する。樹種と木取りからみて掘削具の可能性が高いが、全体の形状は不明。

W050～069は板。樹種はW050がクリ、W051はスダジイ、W052はツブラジイ、W053～059はヒノキ、W060～065はサワラ、W066～068はスギ、W069はモミ属。このうち、W061・069は厚みのある大型の板材のため、床板や壁板などの建築材であった可能性を有する。

角棒　W070は、両端部から約8cm内側に約5cm幅の彫り込みをほどこした角棒。比較的厚みがあることから、建築材の可能性がある。樹種はヒノキの芯持ち材。

W071・072はヒノキ、W073～076はサワラ、W077

はモミ属、W078 はクリの角棒。

丸棒　W079 は図面上の下が太く、底部は丸く仕上げる。上端部は断面が方形で、穿孔をほどこす。全体にヤリガンナをかけて丁寧に作られている。4 本一対で机の脚の可能性を有する。樹種はヒノキの芯持ち材。

W080 はコウヤマキの芯持ち材で、図面上の上端部を断面方形に仕上げて穿孔をほどこす。

W081 は全長 15.4cm、直径約 5.0cm で、図面上の上端部から 3.0cm 下に幅 1.0cm の浅い溝をめぐらす。その形状から、陽物（男根）型の可能性がある。

W083 はモモ、W084 はネムノキ、W085 ～ 102 はヒノキ、W103 ～ 106 はアスナロ、W107 はコウヤマキの芯持ち材を用いた丸棒。

分割材　W108 はエノキ属の 1/8 分割材。

W109 はエノキ属、W110 はヒノキの 1/4 分割材。W110 はその形状から残材の可能性がある。

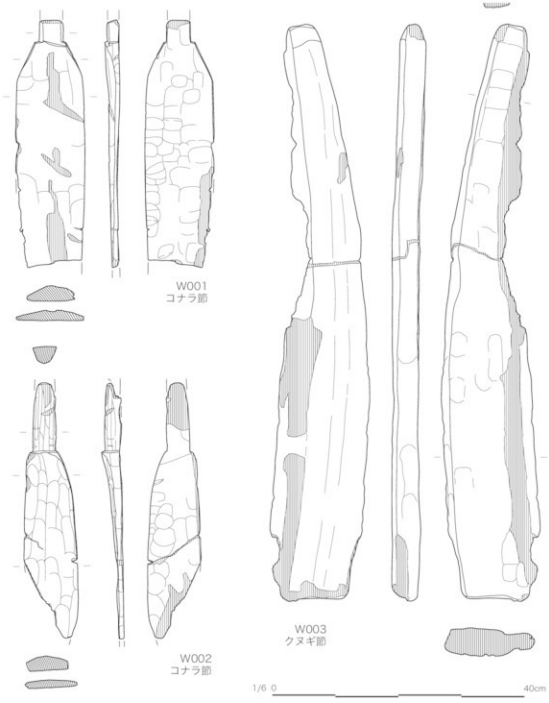


図 233　木製品実測図

W111・112はクリ、W113はムクノキ、W114～W119はヒノキ、W120・121はマツ属の1/2分割材。丸太　W122～125はコナラ節、W126・127はスダジイ、W128はサカキ、W129はヒノキの芯持ち丸太だが、いずれも太さが10cm前後で、掘立柱建物の柱材としたものと同程度であり、なおかつ丁寧に面取りされたものが多いことから、分割して利用するための材ではなく、柱材であった可能性が高い。

(2) 11B区003NR上層

農具・調度・容器・建築材・土木材・板・角棒・丸棒・分割材・丸太がある。

農具　W130は竪杵の搗き部で、先端が丸くなる「たまご掘り（衝撃粉砕機能）」タイプの臼に用いたと考えられる。クヌギ節の芯持ち材だが、この時期の竪杵としては細い部類に属する。

調度　W131は、いわゆる肘掛け（床几）の脚とみられる。樹種はヒノキの柾目材。

容器　W132は比較的大型の槽で、樹種はスギ。

W133は平面が半円形の板だが、図面上の右側が欠損していることから、本来は直径約48cmの円形を呈していたとみられる。断面形状では図化した側の方の面取りがより内側まで削られていることから、縁部の幅が広いこの時期の曲物底板（図261-W178・W179のようなタイプ）の未成品である可能性が高い。樹種はヒノキの板目材。

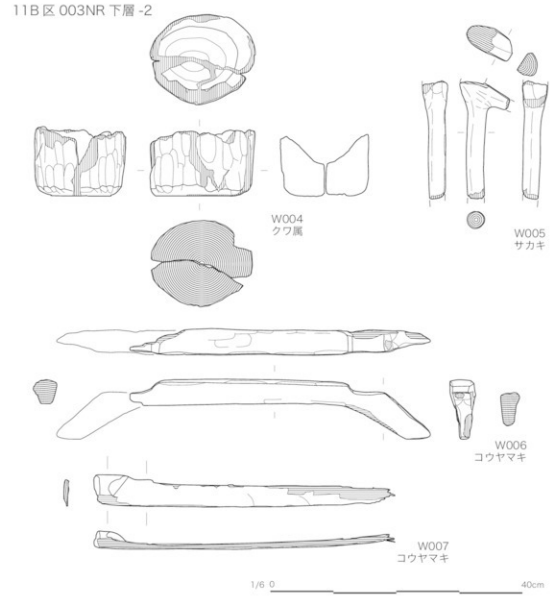


図234　木製品実測図

11B-003NR 下層 -3

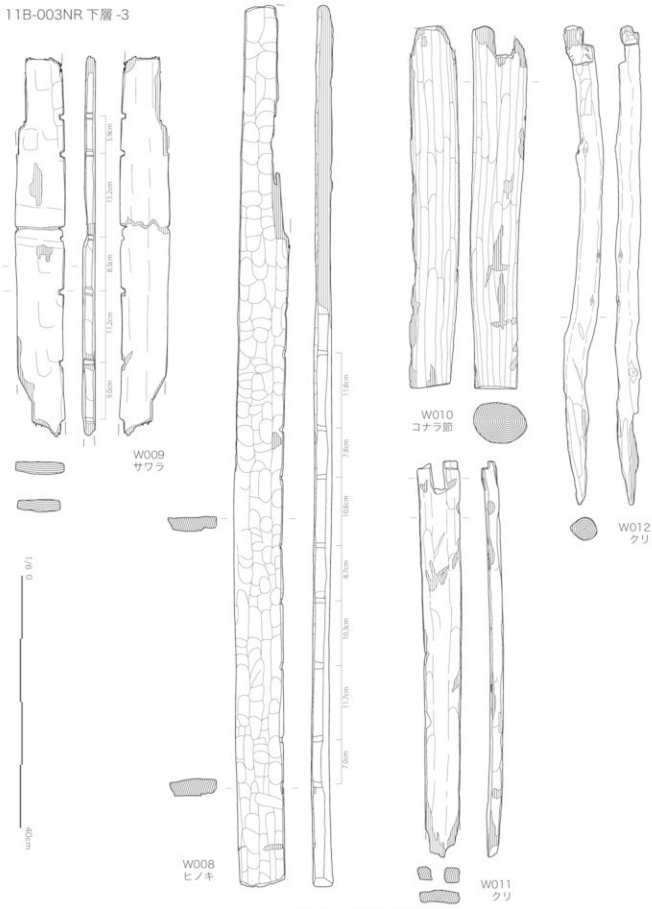


図 235　木製品実測図

11B 区 003NR 下層 -4

11B-003NR 下層 -5

W013
ヒノキ

W014
ヒノキ

W015
クリ

W016
クリ

W017
ヒノキ

80cm

0

1/12

図 236　木製品実測図

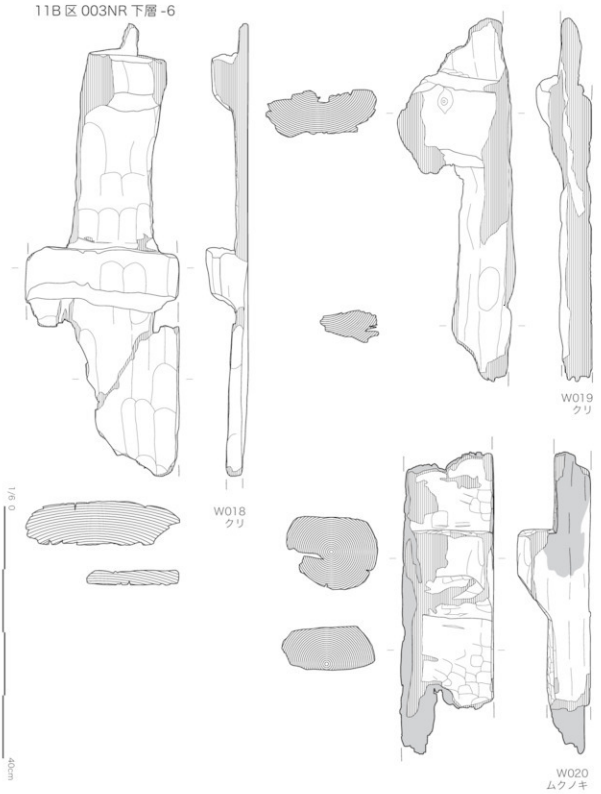


図 237　木製品実測図

建築材　W134 は上端部が又木状に細工された竪穴建物の柱材で、ヒノキの芯持ち材を用いる。

W135・W136 は梯子。W135 はほぼ完形で、ステップは 4 段。樹種はいずれもヒノキの 1/2 分割材。

W137 は幅 9.3cm、厚さ 4.5cm の角棒で、一方の端部が炭化して欠損している。加工の程度から完成品とみられることから、建築材の可能性がある。樹種はヒノキの芯持ち材。

土木材　W138・W139 は杭で、W138 はコナラ節、W139 はヒノキの芯持ち材を用いる。

板　W081 は 2 箇所に小孔を開けた板で、樹種はヒノキの板目材。

角棒　W141 ～ W143 はヒノキ、W144 はスギ、W145 はマツ属の角棒。

丸棒　W146・W147 はヒノキ、W148 はアスナロの丸棒で、いずれも芯持ち材。太さからみて、杭の可能性がある。

分割材　W149 はクワ属の 1/2 分割材。

丸太　W150・W151 はコナラ節、W152 はムクノキの丸太。うち、W151 は樹皮付きだが、W150 と W152 はいくぶん面取りがなされている。

(3) 13B 区 048SE

クスノキ科の芯持ち材を割りぬいた一木の井筒（W153）と井筒を固定するための板（W154）と 1/2 分割材（W155）は上方がわずかに開く円筒状で、80.0cm の高さまで残存する。平面は長軸 89.8cm、短軸 66.0cm の楕円形で、厚さは 9.2cm。下端部に幅約 10cm の段がめぐるが、この段は井戸枠としての機能とは無関係である。おそらく本来は井戸枠としてではなく、大型の桶状容器として作られた際に底板を受ける機能を有していたものと思われる。

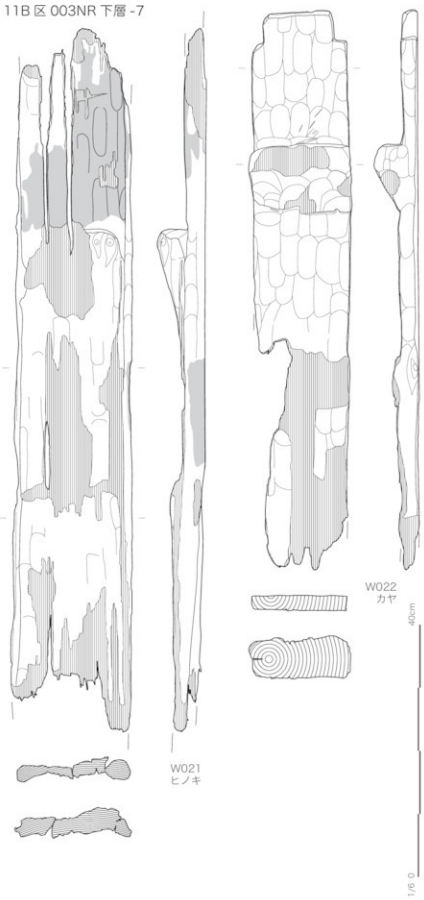


図 238　木製品実測図

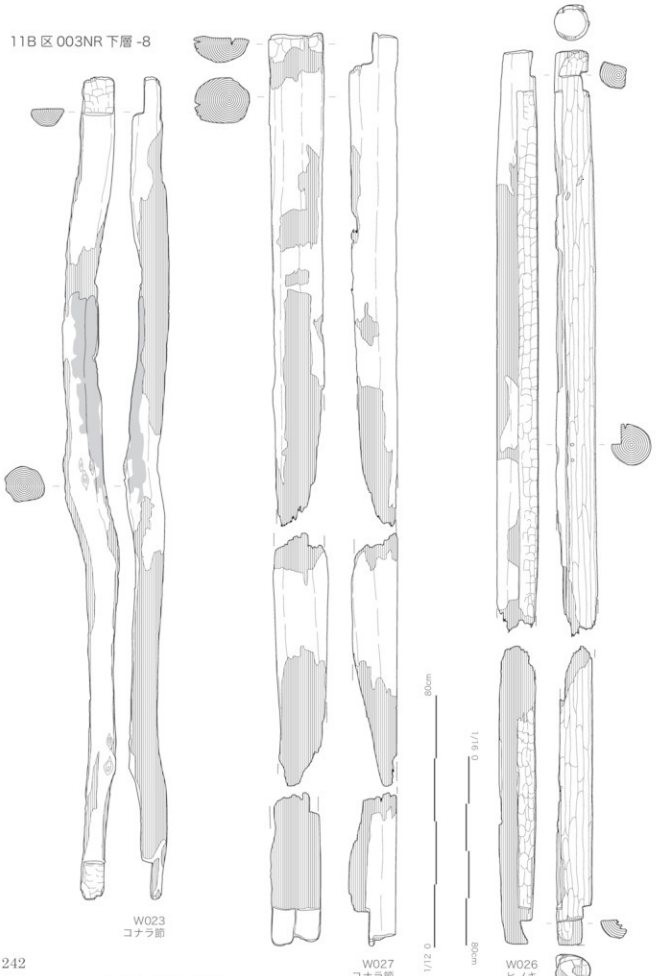

11B 区 003NR 下層 -8
W023
コナラ節
W027
コナラ節
W026
ヒノキ
80cm
1/12 0
1/16 0
80cm

図 239　木製品実測図

11B 区 003NR 下層 -9

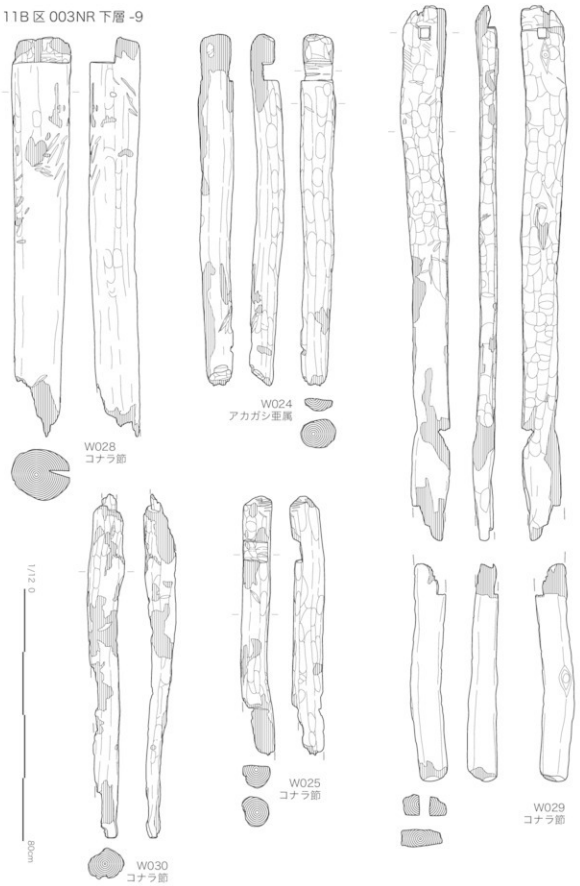


図 240　木製品実測図

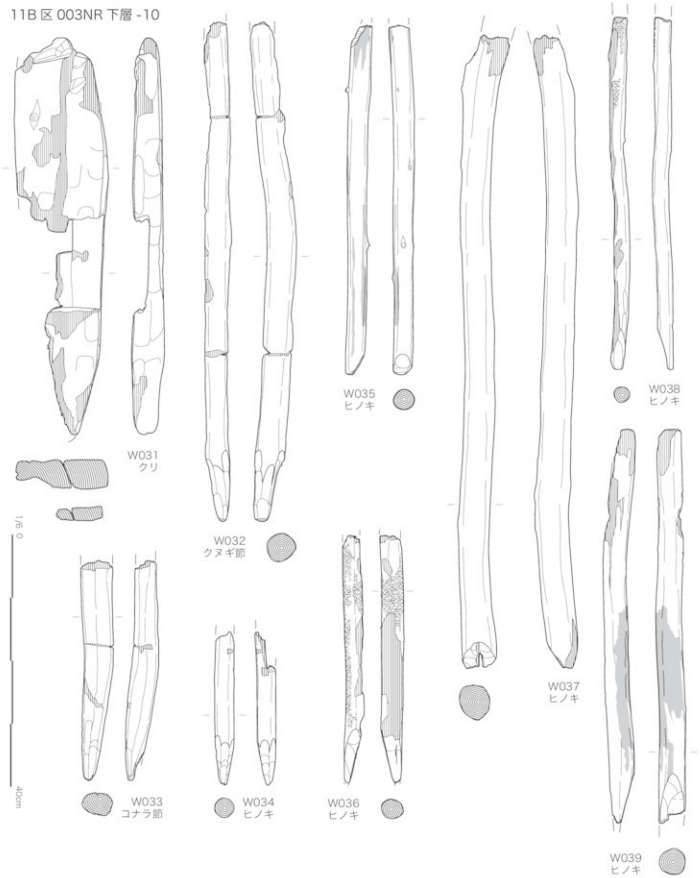

11B 区 003NR 下層 -10
W031
クリ
W032
クヌギ節
W033
コナラ節
W034
ヒノキ
W035
ヒノキ
W036
ヒノキ
W037
ヒノキ
W038
ヒノキ
W039
ヒノキ
1/6
0
40cm

図 241　木製品実測図

11B 区 003NR 下層 -12

図 242　木製品実測図

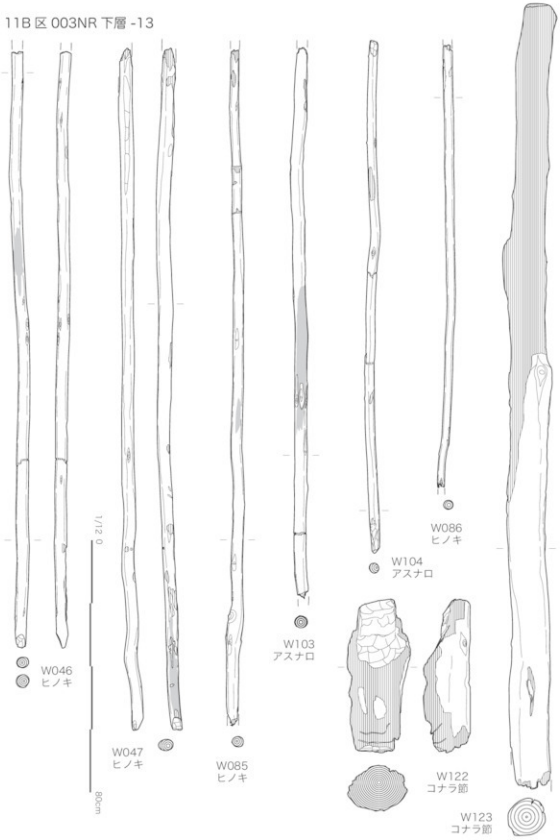

11B 区 003NR 下層 -13
1/12
0
80cm
W046
ヒノキ
W047
ヒノキ
W085
ヒノキ
W103
アスナロ
W104
アスナロ
W086
ヒノキ
W122
コナラ節
W123
コナラ節

図 243　木製品実測図

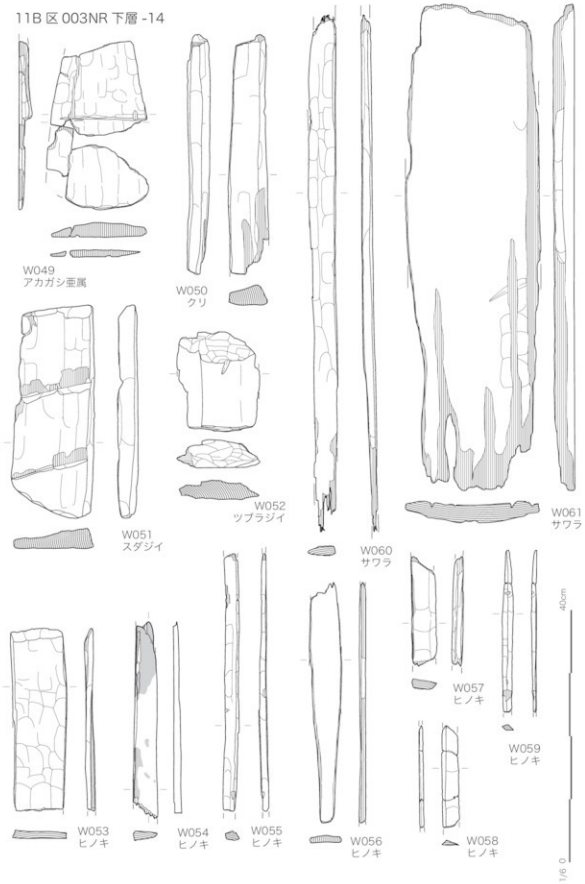

11B 区 003NR 下層 -14
W049
アカガシ亜属
W050
クリ
W051
スダジイ
W052
ツブラジイ
W060
サワラ
W061
サワラ
W053
ヒノキ
W054
ヒノキ
W055
ヒノキ
W056
ヒノキ
W057
ヒノキ
W058
ヒノキ
W059
ヒノキ
40cm
1/6 0

図 244　木製品実測図

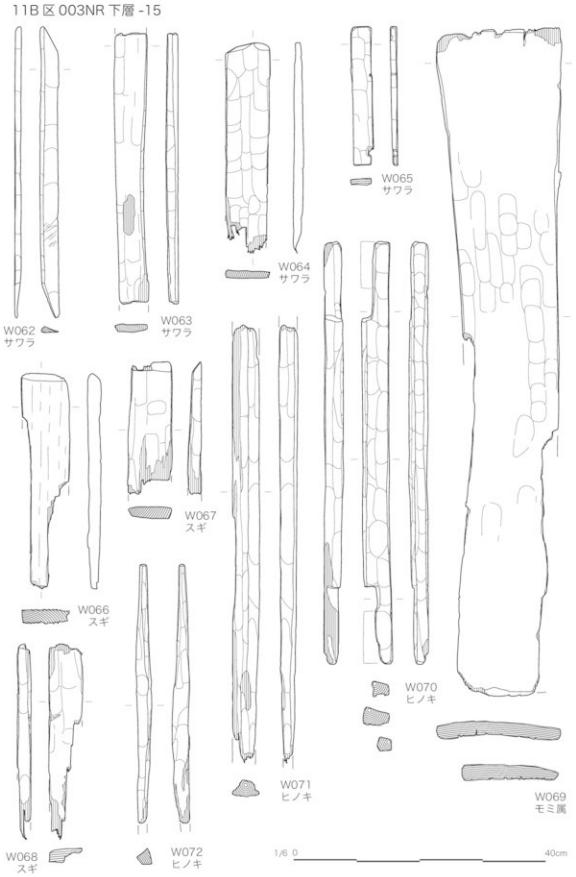

11B 区 003NR 下層 -15
W062
サワラ
W063
サワラ
W064
サワラ
W065
サワラ
W066
スギ
W067
スギ
W068
スギ
W069
モミ属
W070
ヒノキ
W071
ヒノキ
W072
ヒノキ
1/6
0
40cm

図 245　木製品実測図

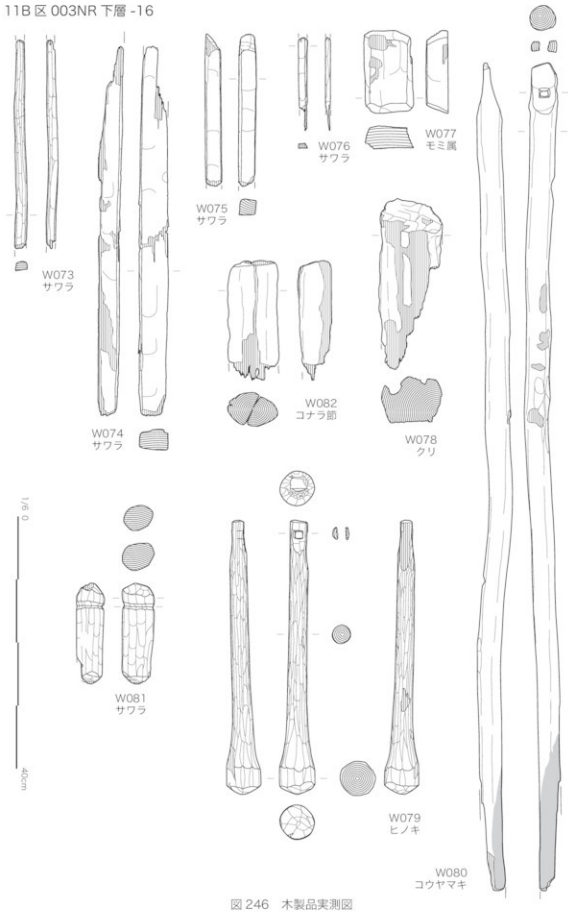

11B 区 003NR 下層 -16
W073
サワラ
W074
サワラ
W075
サワラ
W076
サワラ
W077
モミ属
W078
クリ
W079
ヒノキ
W080
コウヤマキ
W081
サワラ
W082
コナラ節
1/6
0
40cm

図 246　木製品実測図

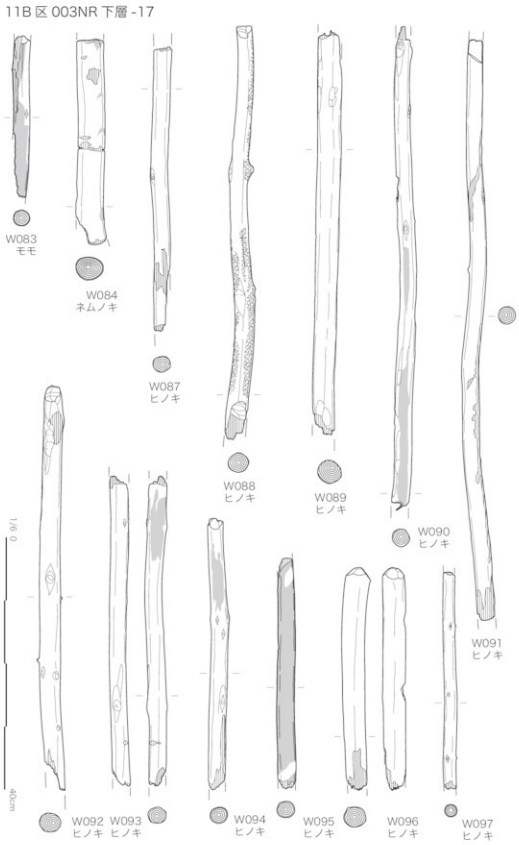

11B 区 003NR 下層 -17
W083
モモ
W084
ネムノキ
W087
ヒノキ
W088
ヒノキ
W089
ヒノキ
W090
ヒノキ
W091
ヒノキ
1/6 0
40cm
W092
ヒノキ
W093
ヒノキ
W094
ヒノキ
W095
ヒノキ
W096
ヒノキ
W097
ヒノキ

図 247　木製品実測図

11B 区 003NR 下層 -18

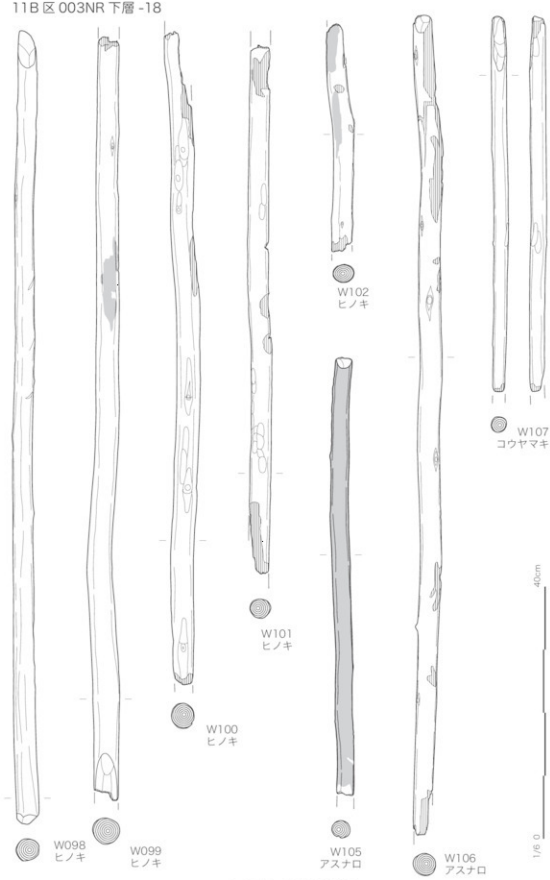


図 248　木製品実測図

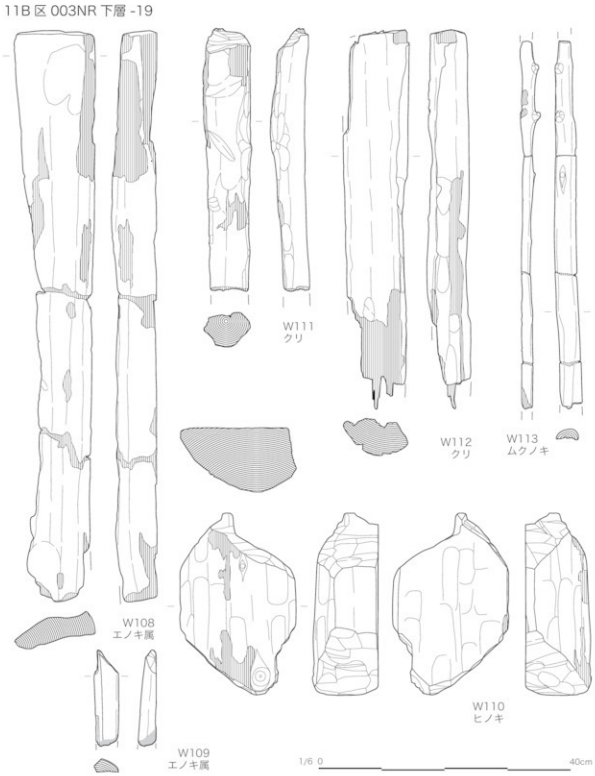

11B 区 003NR 下層 -19
W111
クリ
W112
クリ
W113
ムクノキ
W108
エノキ属
W109
エノキ属
W110
ヒノキ
1/6
0
40cm

図 249　木製品実測図

11B 区 003NR 下層 -20

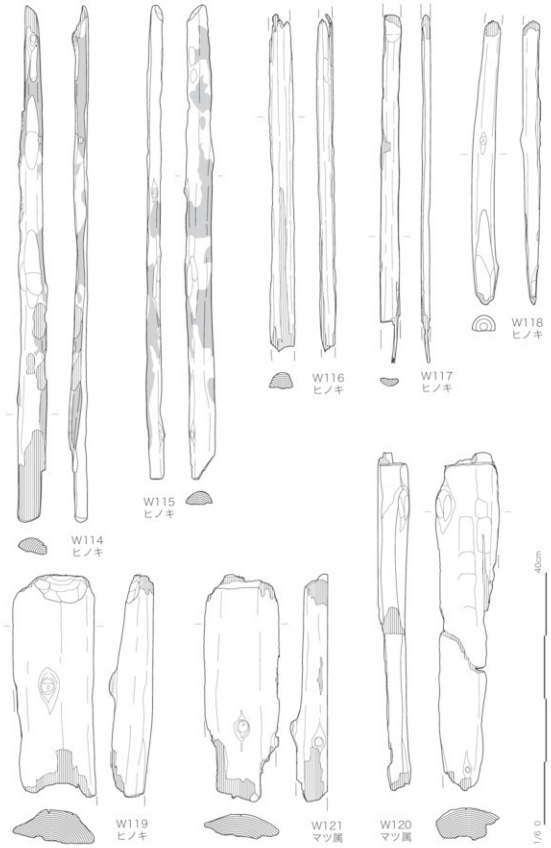


図 250　木製品実測図

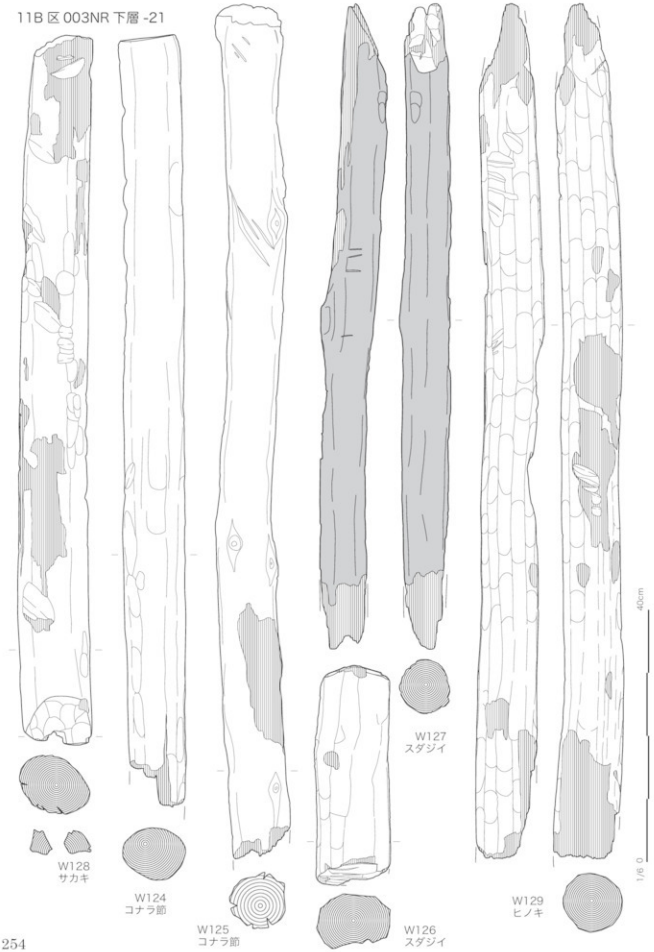

11B 区 003NR 下層 -21
W128
サカキ
W124
コナラ節
W125
コナラ節
W126
スダジイ
W127
スダジイ
W129
ヒノキ
40cm
1/6 0

図 251　木製品実測図

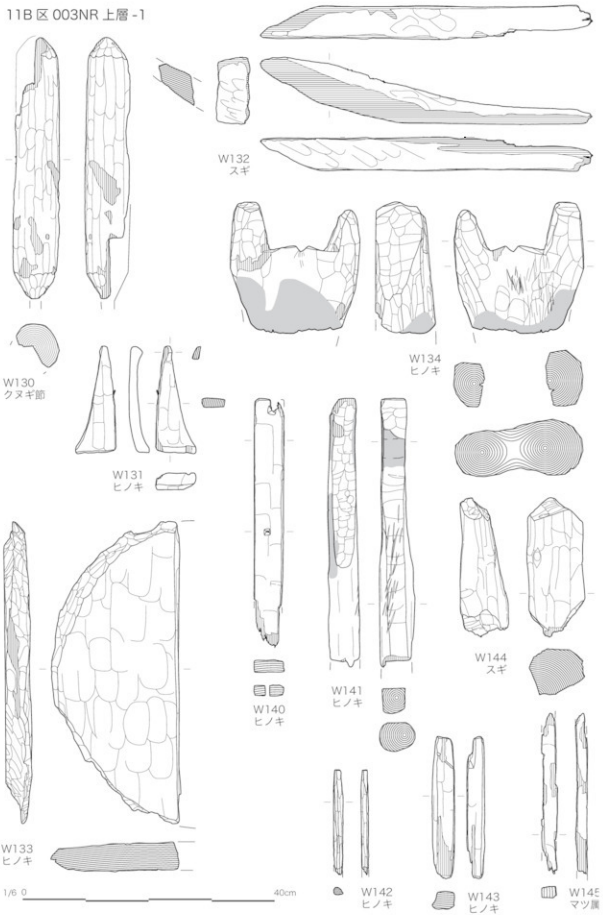

11B区 003NR 上層 -1
W132
スギ
W134
ヒノキ
W130
クヌギ節
W131
ヒノキ
W144
スギ
W141
ヒノキ
W140
ヒノキ
W133
ヒノキ
W142
ヒノキ
W143
ヒノキ
W145
マツ属
1/6
0
40cm

図 252　木製品実測図

この井筒を固定するための板（W154）は、全長 214.0cm、幅 15.6cm、厚さ 3.6cm を測るヒノキの板目材。一方の端部にV字状の切れ込みを有することから、この材もまた転用材である可能性が高い。

W155 はクヌギ節の 1/2 分割材。全長 111.0cm で、材の直径は 13.2cm を測る。

杭（W156）はマツ属の芯持ち材で、上端部も斜めに面取りをほどこす。

(4) 13B 区東壁 30 ～ 39 層

調度・紡織具・土木材・板・丸棒がある。

調度　W157 は椅子の座板で、短辺側の両端部付近に脚部を挿入するための長楕円形の穿孔をほどこす。樹種はヒノキの板目材。出土層位は東壁 30 層。

紡織具　W162 は棒で、支え木が約半分残存し、この支え木の端部に穿孔をほどこして、腕木を挿入している。支え木は東村純子の分類による凸帯Ⅰ型の「腕木貫通式」に属する（東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房）。樹種は支え木・腕木ともにヒノキの柾目材。

W167 は棒の腕木。中央部に長方形の孔をうがち、ここに支え木を挿入する「支え木さしこみ式」。中央がや

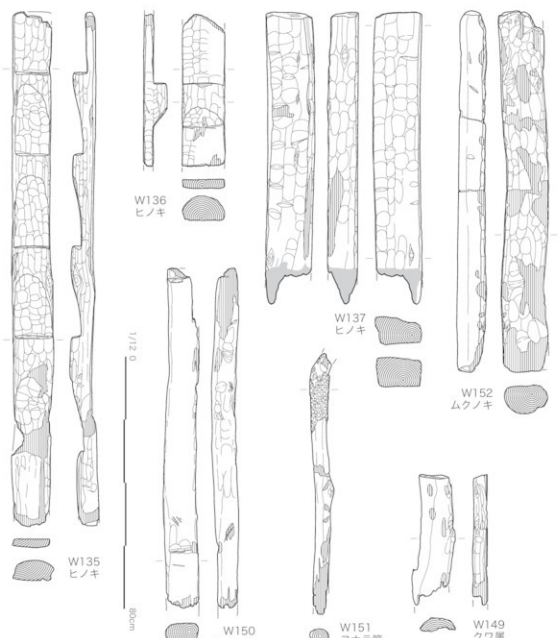


図 253　木製品実測図

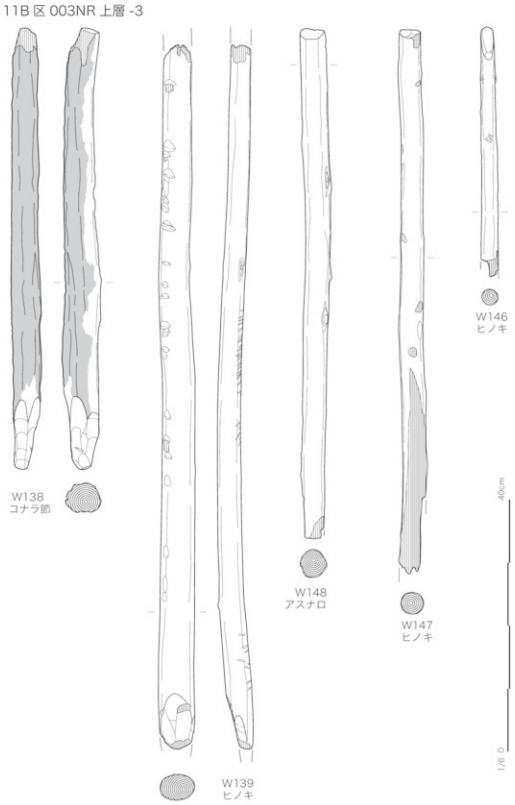
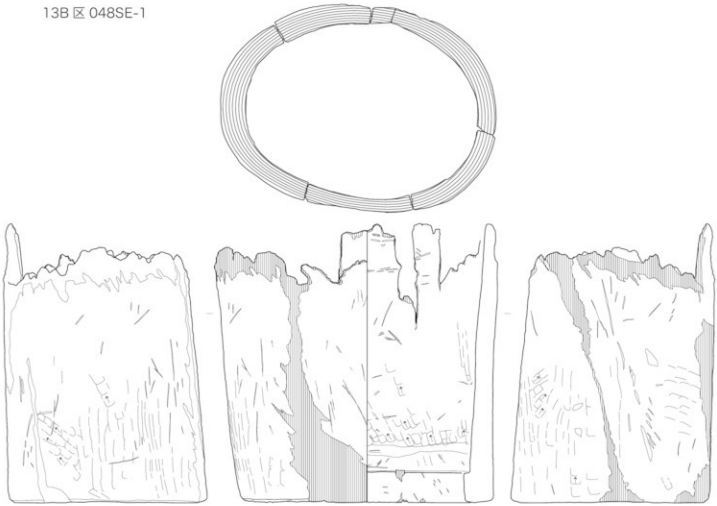
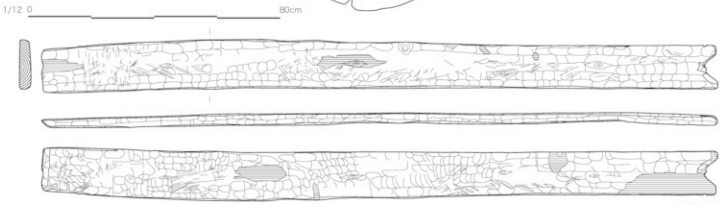

11B 区 003NR 上層 -3
W138
コナラ節
W139
ヒノキ
W148
アスナロ
W147
ヒノキ
W146
ヒノキ
40cm
1/6 0

図 254　木製品実測図

13B 区 048SE-1



W153
クスノキ科



W154
ヒノキ

図 255　木製品実測図

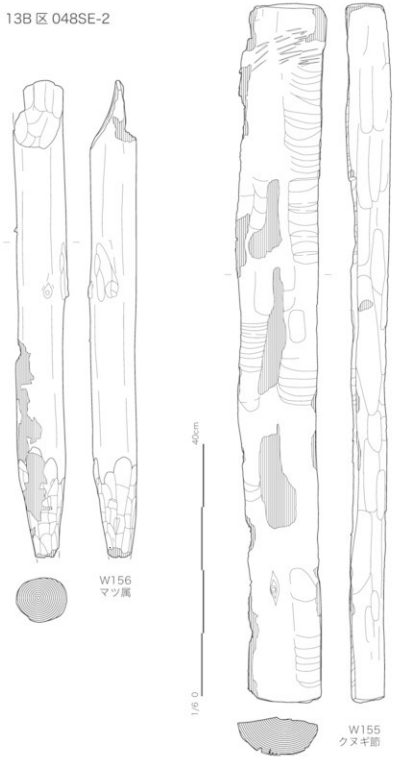


図256　木製品実測図

や太く、両端に向けて細くなるＴｉ型に属する。ヒノキの柾目材で、出土層位は東壁39層。

土木材　W160は杭でアスナロの芯持ち材。残存長が141.4cmを測る。出土層位は東壁32層。

板　W158は長辺の中央部付近のV字状の切れ込みを有する板で、ヒノキの板目材を用いる。出土層位は東壁32層。W165は穿孔板で、3箇所に円孔が開く。スギの板目材で、出土層位は東壁35層。

W163はヒノキの板目材で、短辺の一方に面取りをほどこす。出土層位は東壁33層。W166はヒノキの柾目板で、東壁36層からの出土。

丸棒　W164・159は有頭棒。樹種はW164がクスノキ科でW165がヒノキの芯持ち材。出土層位はW164が東壁33層で、W165が東壁32層。W161は両端部を欠損する丸棒で、樹種はアスナロの芯持ち材。東壁32層の出土。

(5) 13B区東壁26・27・29層

工具・祭祀具・建築材・角棒・丸太がある。

工具　W157は横斧柄。台部中央に突起を作り出し、袋状鉄斧のストッパーとする。樹種はサカキで、東壁26層からの出土。

祭祀具　W169は鏑形。粗製で図面上の上半部が鏑先である。樹種はヒノキの板目材で、東壁29層からの出土。

建築材　W176は柱で、コナラ節の芯持ち材。東壁26層の出土。

W192は梯子で、ステップは6段を数える。クヌギ節の芯持ち材を用い、出土層位は東壁26層。

W196は残存長140.4m、幅11.6cm、厚さ5.6cmを測り、一方の面に6か所の未貫通の方形孔を設ける。残存する端部はコの字状に仕上げて別材と組み合わ

せる構造となる。用途は不明だが、掘立柱建物の横架材である可能性が高い。樹種はヒノキの 1/2 分割材で、東壁 27 層の出土。

W189 は一方の端部に鍵の手状の突起を作り出す板で、建築材とみられる。樹種はクヌギ節の追柾目材で、出土層位は東壁 26 層。

角棒　W180 は残存長 146.2cm を測る有頭棒で、カヤの 1/2 分割材を用いる。東壁 26 層の出土。

丸太　W159 はコナラ節芯持ち材の有段丸太で、出土層位は東壁 29 層。

(6) 13B 区東壁 25 層

掘削具・容器・建築材・土木材がある。

掘削具　W194 は直柄平鍬。使用者側の面の上部に蟻

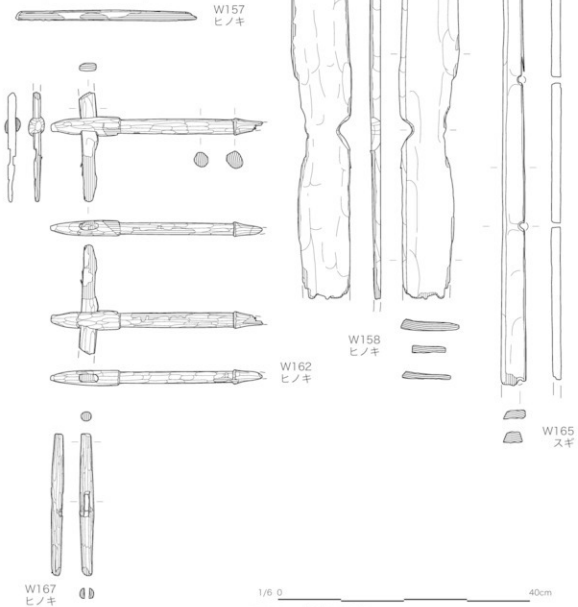


図 257　木製品実測図

13B 区東壁 30～39 層 -2

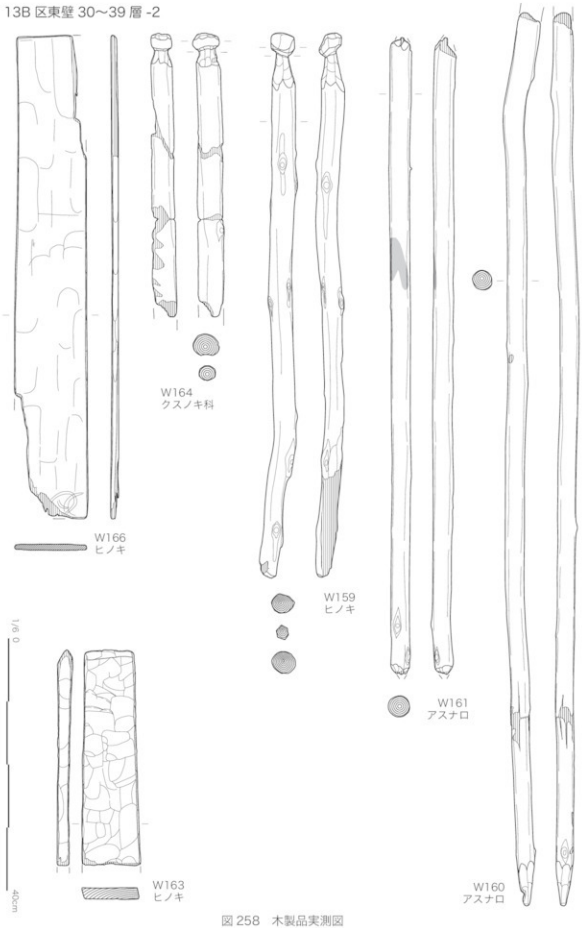


図 258　木製品実測図

13B 区東壁 26・27・29 層 -1

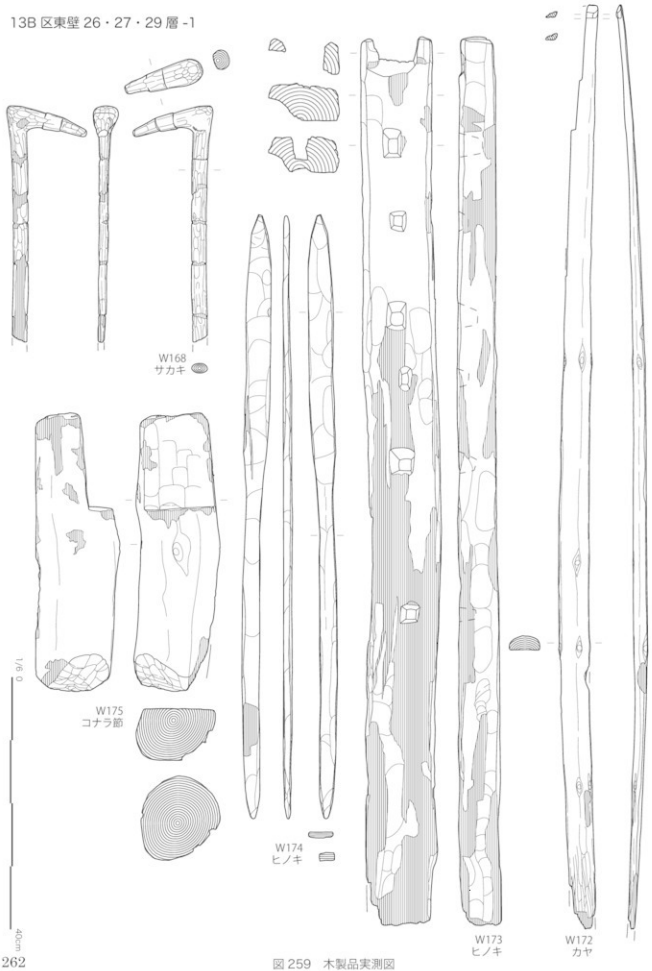


図 259　木製品実測図

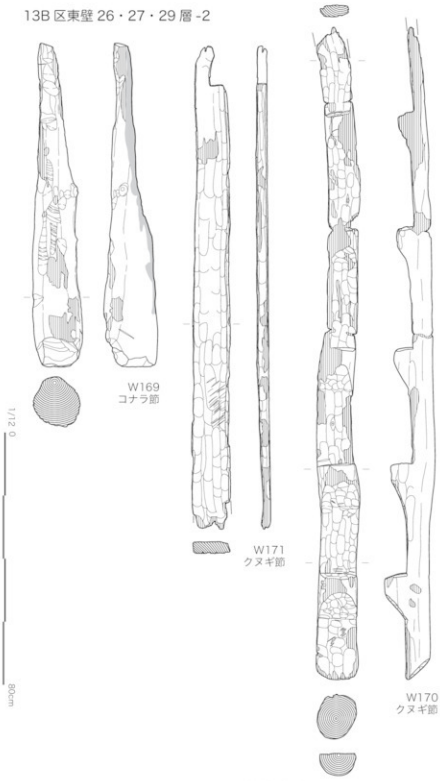


図 260　木製品実測図

溝があり、装着されていた泥除け具の破片が残る。反対側の面は、柄孔の周辺の隆起部と接続して、刃部の少し上に横方向の突帯を設ける。日本列島の各地でこのタイプの直柄平鍬が散見されるが、その機能は未だ明らかにされていない。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

容器　W161 は刳物の箱形容器。上面に蟻溝状の低い段を設けて、図面上の左方向から挿し込む板状の蓋を固定する。底部に 2 箇所の穿孔がある。樹種はサワラの板目材。

W165・166 は曲物の底板。縁辺部の幅が広く、かつ外側に向かって薄くなる作り。いずれもヒノキの板目材を用いる。

W160 はいわゆる樺皮で、曲物の底板と側板の固定などにも用いる。

建築材　W175 は柱材で、図面上の下端部付近に段を持たせる。鹿乗川流域遺跡群のなかでは、下懸遺跡において、ほぼ同形の柱材が出土している（愛知県埋蔵文化財センター 2009）ほか、鳥取県青谷上寺地遺跡においても類似した柱材が認められる（鳥取県埋蔵文化財センター 2008『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 3 建築部材 (資料編)』）。ヒノキの芯持ち材を用いる。

W190・191 は 2 箇所に方形の貫孔を持つ柱材で、樹種はいずれもコナラ節の芯持ち材。

W182 は短辺を斜めにカットした板で、本来のサイズの中央付近に穿孔をほどこす。おそらくは掘立柱建物の破風部分の壁板と思われる。スギの板目材を用いる。

W183 は長辺 90.0cm、短辺 13.0cm、厚さ 2.1cm の板で、多数の穿孔がある。掘立柱建物の壁板の可能性がある。樹種はヒノキの追柾目材。

土木材　W167 は杭で、樹種はヒノキの芯持ち材。

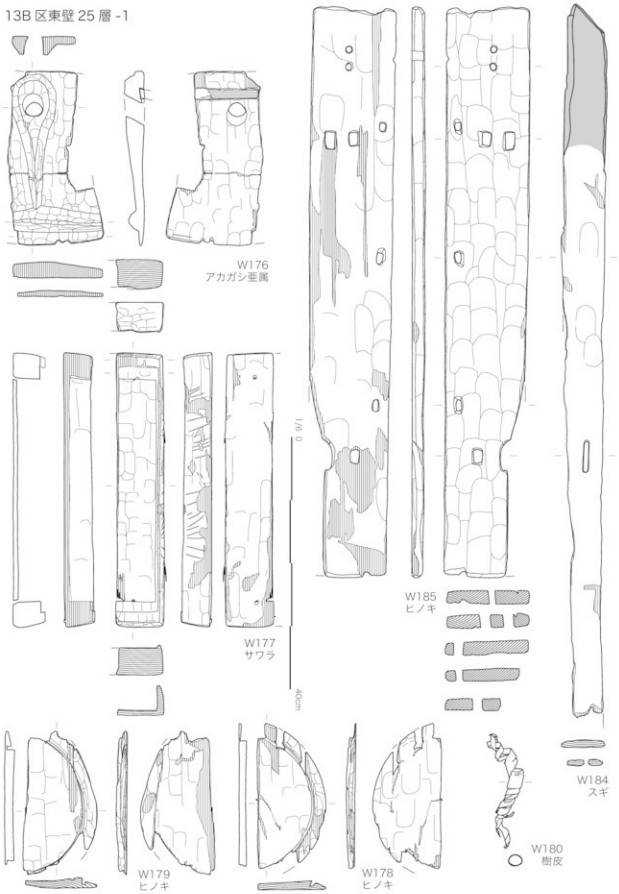

13B 区東壁 25 層 -1
W176
アカガシ亜属
W177
サワラ
1/6 0
40cm
W185
ヒノキ
W184
スギ
W179
ヒノキ
W178
ヒノキ
W180
樹皮

図 261　木製品実測図

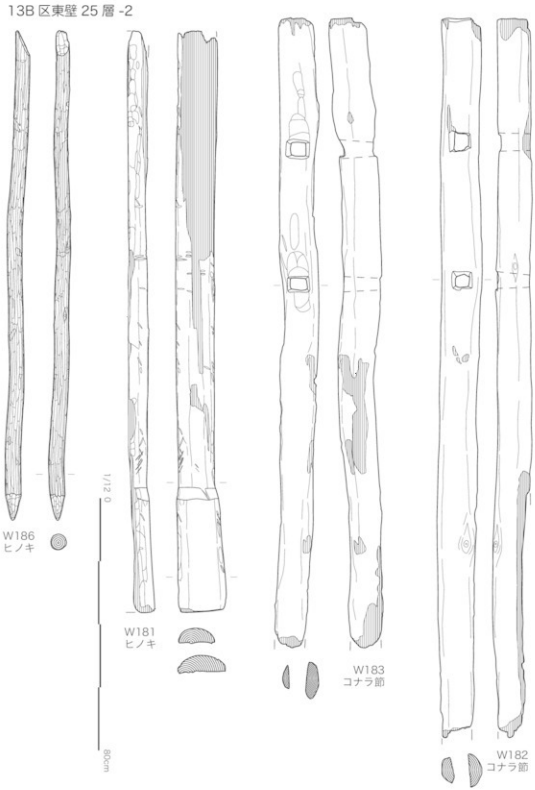


図 262　木製品実測図

13B 区東壁 23 層

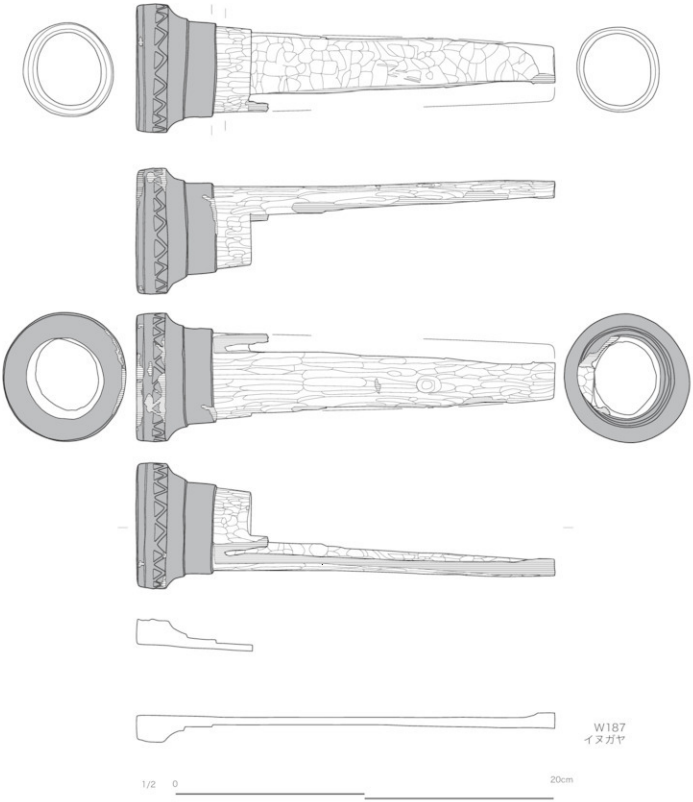


図 263　木製品実測図

(7) 13B 区東壁 23 層

W168 はイヌガヤの芯持ち材を刳りぬいた筒状の木製品で、図面上の左側が台形状に幅広くなり、端部付近に鋸歯紋を描き出す。薄くトーンをかけた箇所に黒漆が塗布されている。漆をかけていない箇所は外面にヤリガンナ痕が残り、円筒部分のうち約 4 分の 3 をカットしている。右端の内側は、わずかに削り道してある。きわめて丁寧なつくりの特殊製品であることは疑いないが、全国的にも類例が皆無であり、現時点で用途を特定することができない。

(8) 13B 区東壁 18 ～ 21 層

容器・紡織具？・建築材・土木材・角棒がある。

容器　W163 は槽か刳物箱の脚部かと思われる。外反する脚の上部に未貫通の方形孔があることから、容器の脚とした場合、一木のものではなく、組み合わせて使用するものと考えられる。樹種はヒノキの柾目材で、東壁 18 層の出土。

W171 はイヌガヤの芯持ち材を途中まで刳りぬいて放棄したもので、内外面に加工痕を多数とどめる。出土層位は東壁 20 層。

紡織具？　W158 はヒノキの板目材を用いた有頭棒で、紡織具の可能性が高い。東壁 21 層出土。

建築材　W170 ～ 193 は梯子で、樹種は W170・184 がヒノキ、W193 がマツ属の芯持ち材を使用。出土層位は 170・184 が東壁 21 層で、W193 は東壁 18 層。

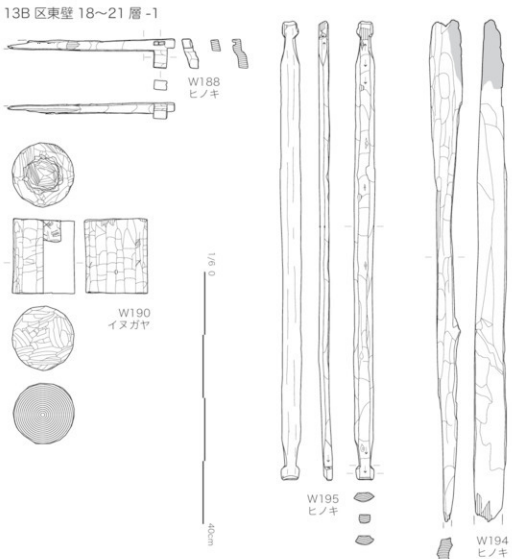


図 264　木製品実測図

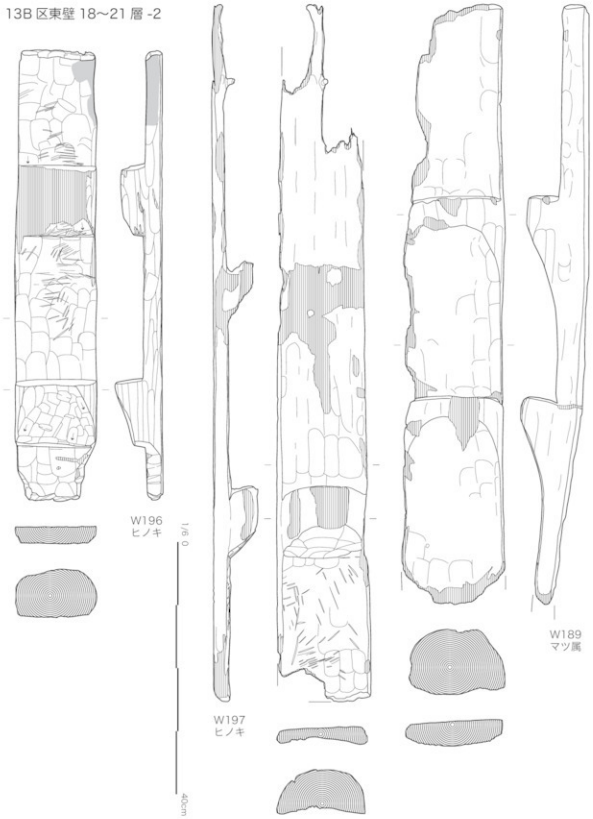


図 265　木製品実測図

13B 区東壁 18～21 層 -3

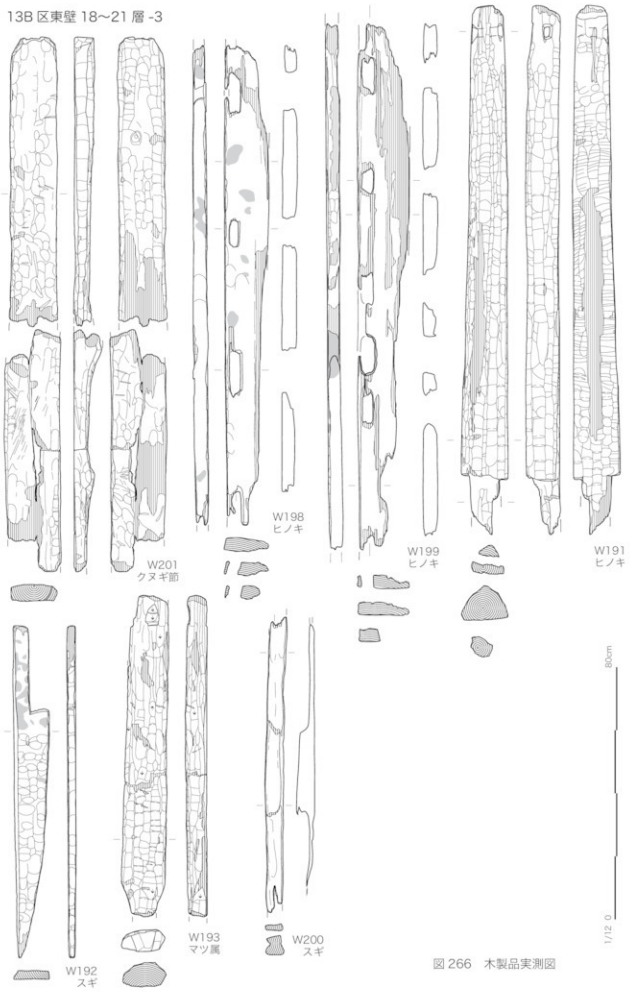


図 266　木製品実測図

W177・178 は幅 16cm 程度、厚さ約 4cm の板で、長辺の片側に寄せて、長軸 10 ～ 15cm ほどの穿孔を不規則にほどこす。壁板かなにかの建築材かと思われる。樹種はいずれもヒノキの板目材。東壁 21 層の出土。

そのほか、短辺の片側に出枘、もう一方に穿孔をほどこす W172、平面の中央部に突出部を設ける W181 も建築材と考えられるが、部位は不明。W172 はヒノキの芯持ち材で、W181 はスギの柾目材。出土層位は W172 が東壁 20 層で、W181 は東壁 21 層。

土木材　W173・174 は矢板で、うち W173 は上半部に切り欠きがあることから転用材と考えられる。W173 はスギの追柾目材で、W174 はマツ属の 1/2 分割材。

W185 はクヌギ節の芯持ち材で、図面上の中央より下側に 2 箇所の突出部を設ける。建築材か土木材と思われるが、用途は不明。東壁 21 層の出土。

(9) 01A 区 1454SK

W202 は柱で、樹種はコナラ節の芯持ち材。

(10) 07B 区 232SK

W203 はヒノキの追柾目材の板。

(11) 11B 区 005SU

W204 はサワラの角棒で、1/4 分割材。

(12) 11B 区検 1

W205 はスギの細い角棒。

(13) 11B 区 001SD

W206 はヨコヅチで、樹種はコナラ節の芯持ち材。太さからみてカケヤの可能性がある。

（樋上　昇）

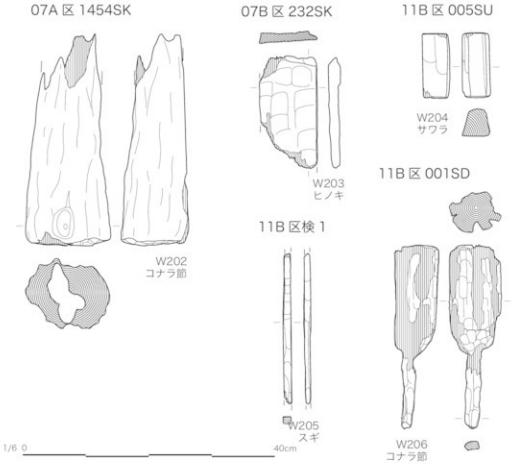


図 267　木製品実測図

第４章　自然科学分析

第１節　岡崎平野中央部、寄島遺跡における堆積環境

(1) 試料と分析方法

はじめに　岡崎平野中央部、安城市小川町の寄島遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、火山灰分析，放射性炭素年代測定の結果を報告する。

試料および分析方法　寄島遺跡では試錐調査と遺跡の基盤層を形成する地層の地層構造解析のため水平（側方）方向に連続した断面図を作成した。試錐調査は12A 区において南西端１地点で地表（標高 7.75m）から試錐調査を実施した【図 268】。試錐調査は 2013 年(平成 25 年）３月、株式会社アーキジオに依頼し、油圧式ロータリー型試錐機を使用した。試錐はコアパックスリーブ内蔵型サンプラー（φ 66mm）によるオールコアで実施した。また、寄島遺跡の基盤層をつくる地層の成り立ちを解明するため、13B 区の北、東、西の壁面に沿って遺構検出面から地下方向にさらに掘削し、水平（側方）方向の地層断面を得た【図 268】。露出させた地層断面では断面図の作成と試料採取を行なった。地層断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。試錐調査で採取したコアは科学分析室に運び、地層の観察を行ない、火山灰分析および放射性炭素年代測定用の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

火山灰分析の試料は古澤〔2003〕の方法を基本に前処理を行なった。はじめにナイロン製＃255 メッシュシート（糸径 43 μ m、オープニングワイド 57 μ m）を用い、流水中で洗浄した。残渣を＃125 メッシュシート（糸径 70 μ m、オープニングワイド 133 μ m）を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ（1/8 ～ 1/16）に粒度調整した試料を超音波洗浄器を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉱物観察用スライドグラスの上に硬化後屈折率が 1.545 程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を撹拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を 1.545 とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子を偏光顕微鏡（100 倍）を用いて観察し、テフラ純層の場合 300 粒子（1000 粒子の平均値）を古澤〔2003〕の区別手法にしたがって区分した。また、テフラ固有で含有率の低い粒子の産出層準を特定するため 3000 粒子（10000 粒子の平均値）の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置 "MAIOT" を使用した。測定精度は火山ガラスで ±0.0001、斜方輝石および角閃石で ±0.0002 程度である〔古澤，1995〕。火山ガラスの主成分分析について SEM は HITACHI 製 SU1510 を使用し、エネルギー分散型 X 線マイクロアナライザー (EDX) は HORIBA 製 EMAX ENERGY EX-270 を用いた。分析は古澤地質株式会社に依頼した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代値の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL13）を使用した。なお、2 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して

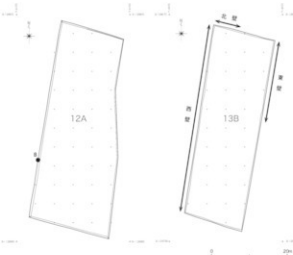
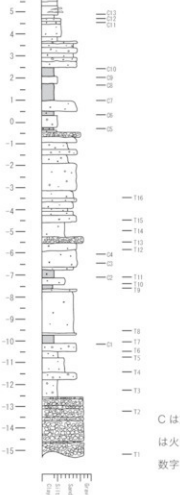


図 268　寄島遺跡における地層解析および試錐調査地点
12A 区の B は試錐調査地点、13B 区の両矢印は地層解析地点を示す

算出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

(2) 分析結果

寄島遺跡における試錐層序　12A 区の西端でオールコア・ボーリングを実施した【図 268】。地表（標高 7.75m）から深度約 23m の深掘断面を得た【図 269】。下位層より順に、標高 -15.25m（深度 23.00m）から標高 -12.59m（深度 20.34m）までは砂粒子の混じる中礫層が累重する。礫層すべてが淡黄色（2.5Y8/4）を呈する。角礫～亜角礫を主体とし、基質に粘土を含む。



C は放射性炭素年代測定試料、T は火山灰分析試料の採取層準を、数字は試料番号を示す。

図 269　寄島遺跡における試錐調査地点の層序

礫支持礫層であり、礫の淘汰は不良である。礫層の固結度は高い。最下位層である標高 -15.25m ～ -14.63m（深度 23.00m ～ 22.38m）の極細粒砂の混じる中礫層の下部、標高 -15.23m（深度 22.98m）から火山灰試料 T1 を採取した。また、標高 -13.49m ～ -13.11m（深度 21.24m ～ 20.86m）の極細粒砂混じりの中礫層の中部、標高 -13.25m（深度 21.00m）から火山灰試料 T2 を得た。標高 -12.59m（深度 20.34m）から標高 -6.75m（深度 14.50m）までは堆積物の粒径が小さい粘土層やシルト層が砂層との累重の間に挟まれる傾向がみられる。標高 -12.59m ～ -11.80m（深度 20.34m ～ 19.55m）の中礫の混じる砂質シルト層の中部、標高 -12.25m（深度 20.00m）から火山灰試料 T3 を、標高 -11.47m ～ -10.79m（深度 19.22m ～ 18.54m）の細粒砂層の下部、標高 -11.45m（深度 19.20m）から火山灰試料 T4、標高 -10.79m ～ -10.55m（深度 18.54m ～ 18.30m）の砂質シルト層の下部、標高 -10.75m（深度 18.50m）から火山灰試料 T5、標高 -10.55m ～ -10.13m（深度 18.30m ～ 17.88m）の細礫混じりの極粗粒砂層の下部、標高 -10.51m（深度 18.26m）から火山灰試料 T6、標高 -10.13m ～ -9.75m（深度 17.88m ～ 17.50m）の黒色（2.5Y2/1）を呈する粘土層の下部、標高 -10.10m（深度 17.85m）から火山灰試料 T7 と放射性炭素年代測定試料 C1、標高 -9.65m ～ -7.75m（深度 17.40m ～ 15.50m）のシルト質粗粒砂層の下部、標高 -9.57m（深度 17.32m）から火山灰試料 T8、標高 -7.65m ～ -7.45m（深度 15.40m ～ 15.20m）の黒褐色（10YR2/2）を呈する細礫の混じる砂質シルト層の下部、標高 -7.61m（深度 15.36m）から火山灰試料 T9、標高 -7.45m ～ -7.15m（深度 15.20m ～ 14.90m）の黄灰色（2.5Y5/1）のシルト質細粒砂層細礫の下部、標高 -7.41m（深度 15.16m）から火山灰試料 T10、標高 -7.15m ～ -6.75m（深度 14.90m ～ 14.50m）の黒色（2.5Y2/1）の粗粒砂の混じる粘土層の下部、標高 -7.13m（深度 14.88m）から火山灰試料 T11 と放射性炭素年代測定試料 C2 を採取した。標高 -6.75m（深度 14.50m）から標高 -0.45m（深度 8.20m）までは下位層に比べて堆積物の粒径は大きくなり、礫や砂から構成されるようになる。礫層は中礫～細礫サイズからなる礫支持礫層で、礫の淘汰は全体に不良である。角礫～亜円礫からなる。標高 -6.63m ～ -5.89m（深度 14.38m ～ 13.64m）のシルトの混

じる極粗粒砂層の標高 -6.43m（深度 14.18m）から放射性炭素年代測定試料 C3 と、標高 -6.03m（深度 13.78m）から放射性炭素年代測定試料 C4 を採取した。標高 -5.89m ～ -5.53m（深度 13.64m ～ 13.28m）の極粗粒砂層の下部、標高 -5.85m（深度 13.60m）から火山灰試料 T12、標高 -5.53m ～ -5.25m（深度 13.28m ～ 13.00m）の中礫層の下部、標高 -5.51m（深度 13.26m）から火山灰試料 T13、標高 -5.25m ～ -4.57m（深度 13.00m ～ 12.32m）の細粒砂層の下部、標高 -5.15m（深度 12.90m）から火山灰試料 T14、標高 -4.57m ～ -4.25m（深度 12.32m ～ 12.00m）の細礫の混じる極粗粒砂層の下部、標高 -4.53m（深度 12.28m）から火山灰試料 T15、標高 -3.49m ～ -3.15m（深度 11.24m ～ 10.90m）のシルト質粗粒砂層の下部、標高 -3.45m（深度 11.20m）から火山灰試料 T16 を採取した。標高 -0.45m（深度 8.20m）から標高 2.50m（深度 5.25m）にかけて粘土やシルトの細粒な堆積物が卓越する。累重する粘土層やシルト層は塊状・均質で、堆積構造は認められない。また、粘土層が黒褐色（2.5Y3/1 や 10YR3/1）を呈することが特徴でもある。標高 -0.35m ～ -0.25m（深度 8.10m ～ 8.00m）の黒褐色（2.5Y3/1）の極細粒砂の混じる粘土層の下部、標高 -0.33m（深度 8.08m）から放射性炭素年代測定試料 C5、標高 0.31m ～ 0.49m（深度 7.44m ～ 7.26m）の黒色（2.5Y2/1）の極粗粒砂の混じる粘土層の下部、標高 0.35m（深度 7.40m）から放射性炭素年代測定試料 C6、標高 0.97m ～ 1.75m（深度 6.78m ～ 6.00m）の黒色（2.5Y2/1）の粘土層の下部、標高 1.00m（深度 6.75m）から放射性炭素年代測定試料 C7、上部である標高 1.70m（深度 6.05m）から放射性炭素年代測定試料 C8 を採取した。標高 2.05m ～ -2.50m（深度 5.70m ～ 5.25m）の黒褐色（10YR3/1）の砂混じりの粘土層の下部である標高 2.07m（深度 5.68m）から放射性炭素年代測定試料 C9 を、上部である標高 2.45m（深度 5.30m）から放射性炭素年代測定試料 C10 を採取した。標高 2.50m ～ 4.67m（深度 5.25m ～ 3.08m）は砂の卓越する地層からなり、下部の標高 2.50m ～ 3.65m（深度 5.25m ～ 4.10m）にかけては極粗粒砂層や粗粒砂層が累重し、上部の標高 3.65m ～ 4.67m（深度 4.10m ～ 3.08m）では砂粒子の混じるシルト層ないしシルト質砂層が累重し、全体に上方細粒化傾向を示す。下部でみられる極粗粒砂層や粗粒砂層には礫を含み、角礫～亜円礫の中礫を主体とする。標高 4.43m ～ 4.57m（深度 3.32m ～ 3.18m）の植物片の混じるシルト質砂層の上部、標高 4.53m（深度 3.22m）から放射性炭素年代測定試料 C11、標高 4.57m ～ 4.67m（深度 3.18m ～ 3.08m）のシルト質砂層の上部、標高 4.65m（深度 3.10m）から放射性炭素年代測定試料 C12 を採取した。標高 4.67m から地表（標高 7.75m）までには、下部の標高 4.67m ～ 5.25m（深度 3.08m ～ 2.50m）で褐色（10YR4/6）ないし褐灰色（10YR5/1）の腐植質シルト層と極細粒砂層との互層が認められ、この互層を覆って粘土層やシルト層が累重する。標高 4.85m ～ 5.25m（深度 2.90m ～ 2.50m）の褐灰色（10YR5/1）の腐植質シルト層と極細粒砂層との互層の下部、標高 4.89m（深度 2.86m）から放射性炭素年代測定試料 C13、標高 6.92m ～ 7.15m（深度 0.83m ～ 0.60m）の黒褐色（2.5Y3/2）を呈する粘土層の下部、標高 6.95m（深度 0.80m）から放射性炭素年代測定試料 C14 を採取した。

13B 区でみられる地層構造　13B 区では考古遺構が検出される標高約 7m ～ 8m よりも下位層の堆積状況を解析するために、調査区の北、東、西側において地表から約 2.0m ～ 2.5m 掘り下げて地層を露出させた。露出させた地層断面では断面図の作成と試料採取を行なった。地層断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。以下では北、東、西側断面図の順に記載を行なう。

北側では調査区北西端を起点として側方（東方向）に約 5.9m、地表からの深度約 1.5m の地層断面を設定した【図 268・図 270】。下位層より、黒褐色（10YR2/1）または灰色（5Y5/1）を呈する腐植質粘土層からなる。なお、図 270 に示した地層断面図では黒褐色粘土層（1 層）の下位に極粗粒砂層（2 層）があるようにみえるが、深掘のための掘削途中において標高 6.5m 付近から湧水をみたため、標高 6.5m よりも下位でみられる地層は図示できていない。実際には極粗粒砂層（2 層）の下位には黒褐色粘土層（1 層）が認められることをつけ加えておく。黒褐色粘土層（1 層）は全体に塊状・均質で堆積構造がみられない場合が多いが、それぞれ層厚 2mm ほどの粘土層と極細粒砂層とが東へ数 ° 傾斜して互層する部分もある。互層する部分には褶曲を呈する部分（コンボリューション）がみられたり、粘土層の下位にある極粗粒砂からなる砂脈（サンド・ダイ

ク）により粘土層が破断している部分もある。本層の標高5.55mから放射性炭素年代測定試料2を採取した。下位層の黒褐色粘土層をにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈する極粗粒砂層（2層）が覆う。砂層には明瞭な堆積構造はみられず全体に塊状である。層厚約 1cm ほどの灰色を呈する粘土層と互層する場合もあるが、互層する粘土層の側方への連続性は悪く、レンズ状を呈する。砂層中に径 10cm ほどの黒褐色を呈する粘土層のブロックを含むときがある。本層の標高 5.65m から放射性炭素年代測定試料 1 を採取した。下位層の黒褐色粘土層とそれを覆う極粗粒砂層とは全体に数°で東へ傾きながら指交関係で累重する。また、それぞれの地層の地層境界は不明瞭で微小な凹凸をもつ。黒褐色粘土層（1 層）と極粗粒砂層（2 層）を灰色（5Y5/1）を呈する粘土層とにぶい黄橙色（10YR7/2）の極粗粒砂層との互層（3 層）が覆う。それぞれ層厚数 mm の粘土層と砂層とが葉理を形成するが、平行する葉理が褶曲したり地層境界が癒着する部分がみられ、初生堆積構造は乱されている。本層の標高 6.67m から放射性炭素年代測定試料 3 を採取した。これらの地層を覆って現代の撹乱層（図 270 では白抜きの部分）が地表 (標高 7.72m) まで覆う。

東壁では、調査区北東端を起点として南端までの約 51m、地表からの深度約 2m の地層断面を設定したが、そのうち地層の観察と分析試料を採取した北から 23m 分を図示する【図 268・図 271】。東壁の地層断面にはそれぞれの地層が 10° から 20° 程度で南へ傾斜しながら北から南方向へ上位層が累重するのがみられた。これを地質学・堆積学的には側方付加堆積物という。みかけ上、下位層と思われる北の地層から南へ順に記載する。北の下位層には 41 層として黒褐色（10YR3/2）を呈する腐植質粘土層がみられる。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の標高 5.99m から放射性炭素年代測定試料 1 を採取した。41 層を覆う 42 層は黄灰色（2.5Y5/1）の砂質シルト層、さらに 42 層を覆う 43 層は暗灰黄色（2.5Y5/2）のシルト質砂層である。43 層を覆う 44 層は灰黄色（2.5Y6/2）の細粒砂層であり、北から 3m 地点から 14m 地点までにみられる。44 層中には 20° ほど南に傾斜した砂層やシルト層、粘土層がレンズ状に挟まれる。それらを北から記載すれば、45 層は黄灰色（2.5Y6/1）のシルト質砂層、46 層は灰黄褐色（10YR5/2）のシルト質砂層、47 層は黄灰色（2.5Y5/1）の砂質シルト層、48 層は黄灰色（10YR4/1）の腐植質粘土層となる。47 層（砂質シルト層）の標高 5.65m で放射性炭素年代測定試料 2 を、標高 5.56m で放射性炭素年代測定試料 3 を、48 層（腐植質粘土層）の標高 5.67m で放射性炭素年代測定試料 4 を、44 層（細粒砂層）の標高 5.63m で放射性炭素年代測定試料 5 を採取した。44 層を覆って 49 層の黄灰色（2.5Y5/1）の砂質シルト層、50 層の黄灰色（2.5Y5/1）の粘土質シルト層、51 層の灰色（5Y5/1）のシルト質砂層、52 層の灰色（5Y4/1）のシルト質粘土層、53 層の灰色（5Y5/1）のシルト質砂層が南方向に順に覆っていく。それまでの、南へ傾斜した堆積物の陸側縁辺は次第に層厚を減じてせん滅傾向にあったのに対して、49 層から 53 層までの標高の高い縁辺はせん滅することなく、標高の高い部分を覆っていることである。50 層（粘土質シルト層）の標高 5.68m で放射性炭素年代測定試料 6、52 層（シルト質粘土層）の標高 5.66m で放射性炭素年代測定試料 7 を採取した。53 層を覆って 54 層が堆積する。54 層

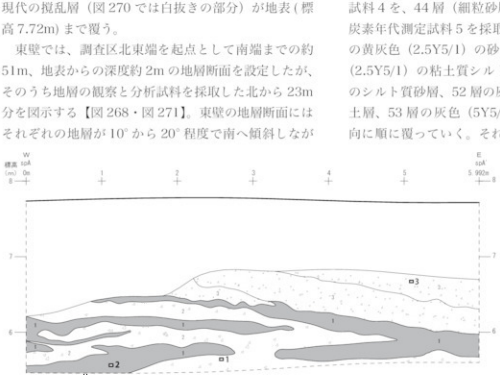


図 270　13B 区北壁における東西地層断面　図中の数字は放射性炭素年代測定試料の採取層準を示す

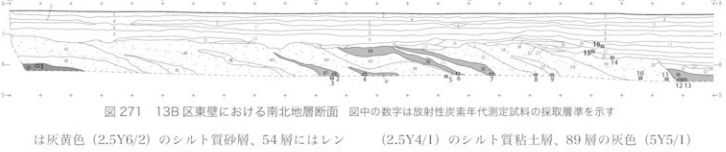


図271　13B区東壁における南北地層断面　図中の数字は放射性炭素年代測定試料の採取層準を示す

は灰黄色（2.5Y6/2）のシルト質砂層、54層にはレンズ状に55層の灰色（5Y5/1）の砂質シルト層が挟まれる。さらに54層を覆って39層の灰色（10Y4/1）のシルト層が覆っている。54層（シルト質砂層）の標高5.64mで放射性炭素年代測定試料8、55層（砂質シルト層）の標高5.64mで放射性炭素年代測定試料9、39層（シルト層）の標高5.54mで放射性炭素年代測定試料10、同じく39層の標高5.50mで放射性炭素年代測定試料11を採取した。それまでの地層が全体に南方向へ傾斜した地層であったのに対して、56層から18層までは水平かつ上方への累重で特徴づけられるようになる。北から22m付近の下位層である56層は黄灰色（2.5Y4/1）のシルト質粘土層、その上位層として25層は黒褐色（10YR3/1）の粘土質シルト層、その上位層として21層は黒褐色（10YR3/1）の腐植質粘土層、さらに上位層として18層は黒色（N1.5/0）の粘土層となる。56層（シルト質粘土層）の標高5.45mで放射性炭素年代測定試料12、標高5.43mで放射性炭素年代測定試料13を、25層（粘土質シルト層）の標高6.19mで放射性炭素年代測定試料14、21層（腐植質粘土層）の標高6.41mで放射性炭素年代測定試料15、18層（黒色粘土層）の標高6.56mで放射性炭素年代測定試料16を採取した。これらの下位層をさらに覆って標高7m付近を9層の灰黄褐色（10YR4/2）の粘土層が側方を水平に覆う。

西壁では、調査区南西端を起点として北端までの約48m、深度約2mの地層断面を設定した【図268・図272】。南から北へ順に記載する。南端の最下位層には83層に黒褐色（10YR3/1）の腐植質粘土層と灰色（5Y4/1）のシルト質細粒砂との互層がある。本層の上位層に84層の灰白色（2.5Y7/1）の中礫層が、さらに上位を51層の黒色（10Y2/1）の粘土質シルト層が覆う。この北側には85層の灰色（5Y5/1）の細粒砂層、86層の明黄褐色（7.5YR7/6）の中礫層、87層の灰色（5Y5/1）のシルト質細粒砂層、88層の黄灰色（2.5Y4/1）のシルト質粘土層、89層の灰色（5Y5/1）の粘土質シルト層、90層の灰黄褐色（10YR5/2）のシルト質粘土層、91層は灰色（5Y5/1）のシルト質細粒砂層、92層は黒褐色（10YR3/2）の腐植質粘土層、93層は灰色（5Y5/1）のシルト質粘土層、94層は黒褐色（10YR3/2）の腐植質粘土層、95層は灰色（5Y5/1）の細粒砂層、96層は灰黄褐色（10YR5/2）のシルト質粘土層、97層は灰色（5Y6/1）の細粒砂層、98層は黄灰色（2.5Y5/1）の粘土質シルト層、99層は灰白色（10YR7/1）の中粒砂層、100層は褐灰色（10YR4/1）の腐植質粘土層、101層は黄灰色（2.5Y6/1）の中粒砂層、103層は灰色（5Y6/1）の中粒砂層が北へ向かうにつれて地層が数°程度北へ傾いて傾斜している。これらの地層のうち83層（黒褐色腐植質粘土層）の標高5.70mで放射性炭素年代測定試料1を、85層（細粒砂層）の標高5.63mで放射性炭素年代測定試料2、90層（シルト質粘土層）の標高5.66mで放射性炭素年代測定試料3、96層（シルト質粘土層）の標高5.64mで放射性炭素年代測定試料4、98層（粘土質シルト層）の標高5.64mで放射性炭素年代測定試料5を採取した。南から27mから35mまでの地層の傾斜はほぼ水平に近くなり、下位層である102層の褐灰色（10YR6/1）の極粗粒砂層、その上を覆う105層の褐灰色（10YR 5/1）のシルト質粘土層、さらに104層のにぶい黄褐色（10YR7/2）の極粗粒砂層、106層のにぶい黄褐色（10YR7/2）の極粗粒砂層がある。これらの地層のうち105層（シルト質粘土層）の標高5.60mで放射性炭素年代測定試料6を採取した。いっぽう、南端から35m～北側46mまでは地層全体が南へ数°の角度で傾斜し、南端から北へ27m付近までの地層が全体に北へ傾斜していたのと対照的である。それらは107層の明黄褐色（10YR7/6）の中礫層、108層の灰色（5Y4/1）の粘土層、109層の灰黄褐色（10YR5/2）の腐植混じり粘土層、112層の褐灰色（10YR4/1）の粘土層である。109層（腐植混じり粘土層）には110層の黄灰色（2.5Y5/1）

の細粒砂層と 111 層の黄灰色（2.5Y5/1）のシルト質粘土層をレンズ状に挟む。109 層（腐植混じり粘土層）の標高 5.60m で放射性炭素年代測定試料 7、112 層（粘土層）の標高 5.63m で放射性炭素年代測定試料 8 を採取した。

火山灰分析　12A 区の西端で実施した試錐資料から 16 点（T1 ～ T16）を採取し分析に供した【表 3】。標高 -7.65m ～ -7.45m（深度 15.40m ～ 15.20m）の黒褐色砂質シルト層の下部、標高 -7.61m（深度 15.36m）の試料 T9、標高 -7.45m ～ -7.15m（深度 15.20m ～ 14.90m）のシルト質細粒砂層細礫の下部、標高 -7.41m（深度 15.16m）の試料 T10、標高 -7.15m ～ -6.75m（深度 14.90m ～ 14.50m）の黒色粘土層の下部、標高 -7.13m（深度 14.88m）の試料 T11 からバブルウォールタイプ（Bw）の火山ガラスが検出された。また、すべての試料から緑色普通角閃石（Gho）が検出されている。検出された火山ガラスのうち試料 T9 から得られた火山ガラスの屈折率は 1.496 - 1.501 であった。屈折率測定と同時に行なった火山ガラスの主成分化学組成分析から、試料 T9 から試料 T11 でみられる火山ガラスは姶良 Tn 火山灰（AT）起源である。また、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）起源の火山ガラスはまったく含まれなかった。したがって、火山ガラスの産出状況から、標高 -7.61m（深度 15.36m）の試料 T9 を得た標高 -7.65m ～ -7.45m（深度 15.40m ～ 15.20m）の細礫の混じる砂質シルト層の層準付近に姶良 Tn 火山灰（AT）が降灰していると考えられる。

放射性炭素年代測定　12A 区の試錐資料から 14 試料【表 4】、13 区の北壁地層断面で 3 試料、東壁地層断面で 16 試料、西壁地層断面で 8 試料の放射性炭素年代値を得た【表 5・表 6・表 7】。12A 区の試錐資料では、標高 -10.13m ～ -9.75m（深度 17.88m ～ 17.50m）の黒色粘土層の標高 -10.10m（深度 17.85m）から採取した試料 C1 が 36875 - 36015 (BC 34926 - 34066) cal yrs BP(PLD-26885) と約 3 万 6000 年前の古い値を示した【表 4】。標高 -7.15m ～ -6.75m（深度 14.90m ～ 14.50m）の黒色粘土層の標高 -7.13m（深度 14.88m）から採取した試料 C2 が 9442 - 9249 (BC 7493 - 7300) cal yrs BP(PLD-26884) と約 9000 年前代を、標高 -0.35m ～ -0.25m（深度 8.10m ～ 8.00m）の黒褐色粘土層の標高 -0.33m（深度 8.08m）から採取した試料 C5 が 6013 - 5917 (BC 4064 - 3968) cal yrs BP(PLD-26881) と約 6000 年前代、標高 6.92m ～ 7.15m（深度 0.83m ～ 0.60m）の黒褐色粘土層の標高 6.95m（深度 0.80m）から採取した試料 C14 が 2359 - 2323 (BC 410 - 374) cal yrs BP(PLD-26872) と約 2300 年前代を示し、試錐層序の上位層に向かって次第に新しい数値年代が得られた。いっぽう 13 区の試料では、北壁地層断面【図 270】において見かけ上、下位層である極粗粒砂層の標高 5.65m から採取した草本が 1422 - 1354 (AD 529 - 597) cal yrs BP(PLD-26749) であったのに対し、その砂層の上を覆う腐植質粘土層の標高 5.55m から採取した植物の葉片が 1952 - 1879 (BC 3 - AD 71) cal yrs BP(PLD-26750)、さらにそれらを覆う灰色粘土層と極粗粒砂層との互層の標高 6.67m から採取した炭化材が 2307 - 2229 (BC

表 3　試錐調査試料における火山灰の粒子組成分析結果

試料番号	標高(m)	火山ガラスの形態別含有量(/3000)			重鉱物の含有量(/3000)			β石英(/3000)	特記鉱物	火山ガラスの屈折率	テフラ名
		Bw	Pm	O	Opx	Gho	Cum				
T16	-3.45	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	0.0			
T15	-4.53	0.0	0.0	0.0	0.0	15.0	0.0	0.0			
T14	-5.15	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	0.0			
T13	-5.51	0.0	0.0	0.0	0.2	6.0	0.0	0.0			
T12	-5.85	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0			
T11	-7.13	2.5	0.0	0.0	2.5	68.0	0.0	0.0			AT起源ガラス含む
T10	-7.41	3.0	0.0	0.0	0.0	23.0	0.0	0.0			
T9	-7.61	9.0	0.0	0.0	3.0	42.0	0.0	0.1		1.496-1.501	AT降灰層準？
T8	-9.57	0.0	0.0	0.0	0.0	23.0	0.0	0.0			
T7	-10.10	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0			
T6	-10.51	0.0	0.0	0.0	0.0	43.0	0.0	0.0			
T5	-10.75	0.0	0.0	0.0	0.0	60.0	0.0	0.0			
T4	-11.45	0.0	0.0	0.0	0.0	88.0	0.0	0.0			
T3	-12.25	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0	0.0	0.0			
T2	-13.25	0.0	0.0	0.0	0.0	(60)	0.0	0.0	(試料微量)		
T1	-15.23	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0			

Bw：バブルウォールタイプ　　Opx：斜方輝石
Pm：パミスタイプ　　Gho：緑色普通角閃石
O：低発泡タイプ　　Cum：カミングトン閃石

表 4　試雌調査試料における放射性炭素年代測定結果

試料番号	調査区（区）	標高（m）	堆積物	試料の種類	¹⁴C年代（yrs BP）	δ¹³C PDB（‰）	2σ暦年代範囲（AD/BC, probability）	2σ暦年代範囲（Cal yrs BP, probability）	Lab Code No.(method)
C1	12A	-10.10	粘土層	土壌	32510 ± 160	-22.79 ± 0.15	34926 - 34066 BC (95.4 %)	36875 - 36015 (95.4 %)	PLD - 26685 (AMS)
C2	12A	-7.13	暗粒砂混じり粘土層	土壌	8315 ± 30	-24.46 ± 0.12	7493 - 7300 BC (94.2 %)	9442 - 9249 (94.2 %)	PLD - 26684 (AMS)
							7217 - 7203 BC (1.2 %)	9166 - 9152 (1.2 %)	
C3	12A	-6.43	シルト 混じり 極細粒砂層	生材	7445 ± 30	-27.51 ± 0.14	6395 - 6239 BC (95.4 %)	8344 - 8188 (95.4 %)	PLD - 26683 (AMS)
C4	12A	-6.03	シルト 混じり 極細粒砂層	生材	7200 ± 30	-26.55 ± 0.16	6110 - 6003 BC (91.4 %)	8059 - 7952 (91.4 %)	PLD - 26682 (AMS)
							6161 - 6142 BC (2.1 %)	8110 - 8091 (2.1 %)	
							6203 - 6193 BC (1.0 %)	8152 - 8142 (1.0 %)	
							6181 - 6171 BC (0.9 %)	8130 - 8120 (0.9 %)	
C5	12A	-0.33	極細粒砂混じり粘土層	土壌	5225 ± 25	-25.49 ± 0.13	4064 - 3968 BC (90.7 %)	6013 - 5917 (90.7 %)	PLD - 26681 (AMS)
							4154 - 4134 BC (3.4 %)	6103 - 6083 (3.4 %)	
							4221 - 4211 BC (1.3 %)	6170 - 6160 (1.3 %)	
C6	12A	0.35	極細粒砂混じり粘土層	土壌	4680 ± 25	-27.13 ± 0.11	3477 - 3370 BC (70.2 %)	5426 - 5319 (70.2 %)	PLD - 26680 (AMS)
							3522 - 3482 BC (23.0 %)	5471 - 5431 (23.0 %)	
							3621 - 3610 BC (2.3 %)	5570 - 5559 (2.3 %)	
C7	12A	1.00	粘土層	土壌	4705 ± 25	-24.91 ± 0.15	3468 - 3373 BC (56.2 %)	5417 - 5322 (56.2 %)	PLD - 26679 (AMS)
							3531 - 3492 BC (21.4 %)	5480 - 5441 (21.4 %)	
							3629 - 3585 BC (17.8 %)	5578 - 5534 (17.8 %)	
C8	12A	1.70	粘土層	炭化材	4020 ± 25	-20.72 ± 0.23	2581 - 2472 BC (94.3 %)	4530 - 4421 (94.3 %)	PLD - 26678 (AMS)
							2617 - 2611 BC (1.1 %)	4566 - 4560 (1.1 %)	
C9	12A	2.07	暗粒砂混じりシルト 層	生の草本	3695 ± 25	-26.89 ± 0.14	2146 - 2017 BC (89.0 %)	4095 - 3966 (89.0 %)	PLD - 26677 (AMS)
							2195 - 2174 BC (4.0 %)	4144 - 4123 (4.0 %)	
							1996 - 1981 BC (2.4 %)	3945 - 3930 (2.4 %)	
C10	12A	2.45	暗粒砂混じりシルト 層	生材	3480 ± 25	-25.88 ± 0.17	1884 - 1743 BC (94.2 %)	3833 - 3692 (94.2 %)	PLD - 26676 (AMS)
							1708 - 1703 BC (1.2 %)	3657 - 3652 (1.2 %)	
C11	12A	4.53	植物片混じりシルト 質砂層	生材	2455 ± 20	-28.42 ± 0.13	594 - 415 BC (46.2 %)	2543 - 2364 (46.2 %)	PLD - 26675 (AMS)
							753 - 682 BC (32.3 %)	2702 - 2631 (32.3 %)	
							670 - 611 BC (16.8 %)	2619 - 2560 (16.8 %)	
C12	12A	4.65	シルト 質砂層	生材	2410 ± 25	-26.39 ± 0.18	544 - 403 BC (86.6 %)	2493 - 2352 (86.6 %)	PLD - 26674 (AMS)
							730 - 692 BC (7.6 %)	2679 - 2641 (7.6 %)	
							659 - 652 BC (1.2 %)	2608 - 2601 (1.2 %)	
C13	12A	4.89	腐植質シルト 層と極細粒砂層の互層	生材	2480 ± 20	-27.32 ± 0.12	766 - 534 BC (94.0 %)	2717 - 2483 (94.0 %)	PLD - 26673 (AMS)
							529 - 519 BC (1.4 %)	2478 - 2468 (1.4 %)	
C14	12A	6.95	粘土層	土壌	2325 ± 20	-20.17 ± 0.12	410 - 374 BC (95.4 %)	2359 - 2323 (95.4 %)	PLD - 26672 (AMS)

358 - 280) cal yrs BP(PLD-26751) と上位層になるほど数値年代が古くなり、年代の逆転がみられた【表5】。13 区東壁地層断面ではそれぞれの地層が北から南へ将棋倒しのように重なる側方付加堆積物において北から南へ順に試料を採取したものである【図 271】。もっとも北側で採取した黒褐色腐植質粘土層の標高 5.99m から得た草本（試料 1）が 1569 - 1518 (AD 381 - 433) cal yrs BP(PLD-26724) であったのに対して、もっとも南側のシルト質粘土層の標高 5.43m で得た葉片（試料 13）が 1950 - 1866 (AD 1 - 85) cal yrs BP(PLD-26732) を示し、地層構造より判断して、より新しい堆積物と予想される地層から得た試料が古い数値年代を示し、数値年代の逆転が生じた【表 6】。13 区西壁地層断面では、断面図の起点である南端から北方向へ約 25m ～ 30m 付近を境にして、それより北でみられる地層が南へ傾斜しているのに対して、南でみられる地層は全体に北へ傾斜しており対称的であった【図 272】。南端の黒褐色腐植質粘土層と灰色シルト質細粒砂層との互層の標高 5.70m から採取した草本（試料 1）が 1415 - 1336 (AD 535 - 615) cal yrs BP(PLD-26737) であり、みかけ上それらを覆う腐植質粘土層の標高 5.64m から採取した生材が 1926 - 1825 (AD 25 - 126) cal yrs BP(PLD-26741) と、地層構造から予想される数値年代よりも古い値であった。もっとも北側の褐灰色粘土層の標高 5.63m から採取した生材も 1901 - 1821 (AD 50 - 129) cal yrs BP(PLD-26744) と同様の値であった【表 7】。

(3) 考察

寄島遺跡調査地点における地下層序と堆積年代　寄島遺跡 12A 区の試雌調査では地表（標高 7.75m）から深度 23m の層序断面が得られた【図 269】。地層全体は中礫や極粗粒砂サイズの粗粒な堆積物が卓越し、特に標高 -15.25m（深度 23.00m）から標高 -12.59m（深度 20.34m）までには中礫層が累重した。この礫層を覆って標高 -0.5m 付近までは極粗粒砂層の優先する地層が覆う。標高 -15.25m（深度 23.00m）から標高 -3.15m（深度 10.90m）までの 16 層準で火山灰分析を行なった。標高 -15.25m（深度 23.00m）から標高 -12.59m（深度 20.34m）までではみられた中礫層からは残念ながら火山ガラスを検出することができなかったが、礫層を覆う極粗粒砂層や粗粒砂層に挟

表 5　13B 区北壁の放射性炭素年代測定結果

試料番号	調査区（区）	標高（m）	堆積物	試料の種類	^{14}C年代（yrs BP）	δ ^{13}C PDB（‰）	2σ 暦年代範囲（AD/BC, probability）	2σ 暦年代範囲（cal yrs BP, probability）	Lab code No.（method）
1	13B 北壁	5. 65	にぶい黄橙色極粗粒砂層	生の草本	1530 ± 20	−27. 81 ± 0. 15	529 − 597 AD (57. 0 %)	1422 − 1354 (57. 0 %)	PLD − 26749 (AMS)
							429 − 494 AD (36. 6 %)	1521 − 1457 (36. 6 %)	
							510 − 518 AD (1. 7 %)	1441 − 1433 (1. 7 %)	
2	13B 北壁	5. 55	黒褐色または灰色腐植質粘土層	生の葉	1975 ± 20	−29. 92 ± 0. 15	3 BC − 71 AD (86. 9 %)	1952 − 1879 (86. 9 %)	PLD − 26750 (AMS)
							23 − 10 BC (5. 9 %)	1972 − 1959 (5. 9 %)	
							37 − 29 AD (2. 6 %)	1986 − 1978 (2. 6 %)	
3	13B 北壁	6. 67	灰色粘土とにぶい黄橙色極粗粒砂との互層	炭化材	2180 ± 20	−26. 84 ± 0. 12	358 − 280 BC (58. 6 %)	2307 − 2229 (58. 6 %)	PLD − 26751 (AMS)
							236 − 172 BC (33. 9 %)	2185 − 2121 (33. 9 %)	
							259 − 242 BC (3. 0 %)	2208 − 2191 (3. 0 %)	

表 6　13B 区東壁の放射性炭素年代測定結果

試料番号	調査区（区）	標高（m）	堆積物	試料の種類	^{14}C年代（yrs BP）	δ ^{13}C PDB（‰）	2σ 暦年代範囲（AD/BC, probability）	2σ 暦年代範囲（cal yrs BP, probability）	Lab code No.（method）
1	13B 東壁	5. 99	黒褐色腐植質粘土層	生の草本	1630 ± 20	−28. 01 ± 0. 17	381 − 433 AD (84. 0 %)	1569 − 1518 (84. 0 %)	PLD − 26724 (AMS)
							490 − 532 AD (10. 9 %)	1460 − 1419 (10. 9 %)	
							358 − 362 AD (0. 5 %)	1593 − 1588 (0. 5 %)	
2	13B 東壁	5. 65	黄灰色砂質シルト 層	生材	2005 ± 20	−29. 00 ± 0. 17	45 BC − 52 AD (95. 4 %)	1994 − 1899 (95. 4 %)	PLD − 26725 (AMS)
3	13B 東壁	5. 56	黄灰色砂質シルト 層	生の葉	1980 ± 20	−29. 26 ± 0. 16	39 BC − 67 AD (95. 4 %)	1988 − 1883 (95. 4 %)	PLD − 26745 (AMS)
4	13B 東壁	5. 67	黄灰色腐植質粘土層	生材	1975 ± 20	−26. 93 ± 0. 19	3 BC − 68 AD (84. 9 %)	1952 − 1883 (84. 9 %)	PLD − 26726 (AMS)
							37 − 10 BC (10. 5 %)	1986 − 1959 (10. 5 %)	
5	13B 東壁	5. 63	黄灰色砂質シルト 層	生の草本	1635 ± 20	−26. 76 ± 0. 19	380 − 430 AD (85. 5 %)	1571 − 1520 (85. 5 %)	PLD − 26746 (AMS)
							492 − 512 AD (4. 5 %)	1458 − 1438 (4. 5 %)	
							349 − 368 AD (3. 3 %)	1601 − 1583 (3. 3 %)	
							517 − 529 AD (2. 1 %)	1433 − 1422 (2. 1 %)	
6	13B 東壁	5. 68	黄灰色粘土質シルト 層	生の草本	2015 ± 20	−27. 75 ± 0. 17	51 BC − 30 AD (91. 6 %)	2000 − 1921 (91. 6 %)	PLD − 26727 (AMS)
							37 − 50 AD (3. 8 %)	1913 − 1900 (3. 8 %)	
7	13B 東壁	5. 66	灰色シルト 質粘土層	生の葉	1970 ± 20	−29. 78 ± 0. 17	2 BC − 73 AD (91. 4 %)	1951 − 1878 (91. 4 %)	PLD − 26728 (AMS)
							22 − 11 BC (4. 0 %)	1971 − 1960 (4. 0 %)	
8	13B 東壁	5. 64	灰黄色シルト 質砂層	生の葉	1940 ± 20	−27. 15 ± 0. 19	17 − 90 AD (87. 8 %)	1934 − 1861 (87. 8 %)	PLD − 26729 (AMS)
							100 − 123 AD (7. 6 %)	1851 − 1827 (7. 6 %)	
9	13B 東壁	5. 64	灰色砂質シルト 層	生の草本	1595 ± 15	−26. 63 ± 0. 18	415 − 537 AD (95. 4 %)	1535 − 1414 (95. 4 %)	PLD − 26730 (AMS)
10	13B 東壁	5. 54	灰色シルト 層	生の草本	1625 ± 15	−25. 94 ± 0. 23	388 − 434 AD (72. 7 %)	1562 − 1517 (72. 7 %)	PLD − 26731 (AMS)
							489 − 533 AD (21. 9 %)	1462 − 1418 (21. 9 %)	
							461 − 466 AD (0. 8 %)	1489 − 1484 (0. 8 %)	
11	13B 東壁	5. 50	灰色シルト 層	生の草本	1690 ± 20	−27. 21 ± 0. 18	324 − 405 AD (86. 1 %)	1627 − 1546 (86. 1 %)	PLD − 26748 (AMS)
							259 − 281 AD (9. 3 %)	1691 − 1669 (9. 3 %)	
12	13B 東壁	5. 45	黄灰色シルト 質粘土層	生の葉	1880 ± 20	−28. 28 ± 0. 16	73 − 214 AD (95. 4 %)	1877 − 1737 (95. 4 %)	PLD − 26747 (AMS)
13	13B 東壁	5. 43	黄灰色シルト 質粘土層	生の葉	1955 ± 20	−27. 99 ± 0. 19	1 − 85 AD (95. 4 %)	1950 − 1866 (95. 4 %)	PLD − 26732 (AMS)
14	13B 東壁	6. 19	黒褐色粘土質シルト 層	生材	1845 ± 20	−27. 46 ± 0. 19	125 − 235 AD (94. 1 %)	1826 − 1715 (94. 1 %)	PLD − 26733 (AMS)
							92 − 99 AD (1. 3 %)	1859 − 1852 (1. 3 %)	
15	13B 東壁	6. 41	黒褐色腐植質粘土層	生材	1780 ± 20	−28. 30 ± 0. 16	210 − 265 AD (47. 3 %)	1740 − 1686 (47. 3 %)	PLD − 26734 (AMS)
							272 − 332 AD (42. 5 %)	1678 − 1619 (42. 5 %)	
							168 − 195 AD (4. 2 %)	1783 − 1755 (4. 2 %)	
							144 − 155 AD (1. 3 %)	1807 − 1795 (1. 3 %)	
16	13B 東壁	6. 56	黒色粘土層	生材	1705 ± 20	−22. 41 ± 0. 18	320 − 395 AD (75. 1 %)	1630 − 1556 (75. 1 %)	PLD − 26735 (AMS)
							257 − 297 AD (20. 3 %)	1694 − 1653 (20. 3 %)	

表 7　13B 区西壁の放射性炭素年代測定結果

試料番号	調査区（区）	標高（m）	堆積物	試料の種類	^{14}C年代（yrs BP）	δ ^{13}C PDB（‰）	2σ 暦年代範囲（AD/BC, probability）	2σ 暦年代範囲（cal yrs BP, probability）	Lab code No.（method）
1	13B 西壁	5. 70	黒褐色腐植質粘土層と灰色シルト 質細粒砂との互層	生の草本	1505 ± 20	−27. 62 ± 0. 11	535 − 615 AD (92. 5 %)	1415 − 1336 (92. 5 %)	PLD − 26737 (AMS)
							472 − 466 AD (2. 0 %)	1478 − 1464 (2. 0 %)	
							437 − 445 AD (0. 9 %)	1514 − 1505 (0. 9 %)	
2	13B 西壁	5. 63	灰色細粒砂層	生材	2085 ± 20	−29. 25 ± 0. 13	171 − 47 BC (95. 4 %)	2120 − 1996 (95. 4 %)	PLD − 26738 (AMS)
3	13B 西壁	5. 66	灰黄褐色腐植質シルト 質粘土層	生材	1925 ± 25	−30. 50 ± 0. 11	25 − 129 AD (95. 4 %)	1925 − 1821 (95. 4 %)	PLD − 26739 (AMS)
4	13B 西壁	5. 64	灰黄褐色シルト 質粘土層	生の草本	1685 ± 20	−27. 32 ± 0. 15	325 − 411 AD (88. 7 %)	1625 − 1539 (88. 7 %)	PLD − 26740 (AMS)
							260 − 280 AD (6. 7 %)	1690 − 1671 (6. 7 %)	
5	13B 西壁	5. 64	褐灰色腐植質粘土層	生材	1930 ± 20	−28. 74 ± 0. 11	25 − 126 AD (95. 4 %)	1926 − 1825 (95. 4 %)	PLD − 26741 (AMS)
6	13B 西壁	5. 60	褐灰色シルト 質粘土層	生材	1910 ± 25	−30. 92 ± 0. 11	50 − 133 AD (92. 9 %)	1901 − 1817 (92. 9 %)	PLD − 26742 (AMS)
							28 − 39 AD (2. 5 %)	1922 − 1911 (2. 5 %)	
7	13B 西壁	5. 60	灰黄褐色腐植混じり粘土層	生の葉	1960 ± 20	−29. 46 ± 0. 12	2 BC − 82 AD (92. 6 %)	1951 − 1869 (92. 6 %)	PLD − 26743 (AMS)
							22 − 11 BC (2. 8 %)	1971 − 1960 (2. 8 %)	
8	13B 西壁	5. 63	褐灰色粘土層	生材	1920 ± 20	−29. 37 ± 0. 13	50 − 129 AD (91. 1 %)	1901 − 1821 (91. 1 %)	PLD − 26744 (AMS)
							28 − 39 AD (4. 3 %)	1922 − 1911 (4. 3 %)	

まれる粘土層やシルト層において標高 -7.61m（深度15.36m）の試料 T9、標高 -7.41m（深度15.16m）の試料 T10、標高 -7.13m（深度14.88m）の試料 T11からバブルウォールタイプ（Bw）の火山ガラスを検出できた。火山ガラスの屈折率は 1.496 - 1.501 であり、その主成分化学組成分析結果から判断して、火山ガラスは姶良 Tn 火山灰（AT）起源であることがわかった。また、火山ガラスの産出状況から標高 -7.61m（深度15.36m）の試料 T9 を得た標高 -7.65m ～ -7.45m（深度15.40m ～ 15.20m）の砂質シルト層の層準付近に姶良 Tn 火山灰（AT）が降灰していると考えられた。姶良 Tn 火山灰（AT）は約 2 万 9000 年前～ 2 万 6000 年前の火山灰と見積もられている（町田・新井，2003）。このことから試料 T9 の層準付近はおよそ 2 万 9000 年前～ 2 万 6000 年前頃に堆積したものであると考えられる。試料 T9 よりも 2.49m 下位で採取した標高 -10.10m（深度 17.85m）の放射性炭素年代測定の試料 C1 が 36875 - 36015(BC 34926 - 34066)cal yrs BP(PLD-26885) と約 3 万 6000 年前の値を示しており、更新統堆積物が寄島遺跡の調査地点地下、標高 -7.61m（深度 15.36m）よりも下位に存在することがわかった。いっぽう、標高 -7.61m（深度 15.36m）よりも 0.48m 上位である標高 -7.13m（深度 14.88m）から採取した放射性炭素年代測定の試料 C2 が 9442 - 9249 (BC 7493 - 7300) cal yrs BP(PLD-26884) と約 9000 年前代を、1.18m 上位の標高 -6.43m（深度 14.18m）から採取した放射性炭素年代測定の試料 3 が 8344 - 8188 (BC 6395 - 6239) cal yrs BP(PLD-26883) と約 8000 年前代、1.58m 上位にある標高 -6.03m（深度 13.78m）から採取した放射性炭素年代測定の試料 4 が 8059 - 7952 (BC 6110 - 6003) cal yrs BP(PLD-26882) と約 8000 年前代の数値年代が得られ、約 1 万年前以降の完新統堆積物であることがわかる。この結果から、姶良 Tn 火山灰（AT）が検出された標高 -7.61m（深度 15.36m）の層準と約 9000 年前代の放射性炭素年代測定値を得た標高 -7.13m（深度 14.88m）の層準との間には更新統と完新統との地層境界が存在することになる。ところで、試錐層序の上部、標高 4.67m（深度 3.08m）から地表（標高 7.75m）までは粘土層やシルト層といった細粒堆積

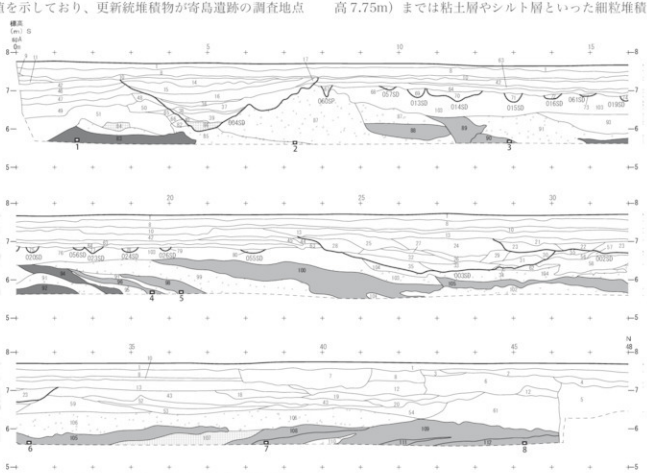


図 272　13B 区西壁における南北地層断面　図中の数字は放射性炭素年代測定試料の採取層準を示す

物が卓越するようになる。例えば、標高 4.85m ～ 5.25m（深度 2.90m ～ 2.50m）でみられる腐植質シルト層と極細粒砂層との互層の下部、標高 4.89m（深度 2.86m）から得た放射性炭素年代測定試料 C13 は 2717 - 2483 (BC 768 - 534) cal yrs BP(PLD-26873) を、標高 6.92m ～ 7.15m（深度 0.83m ～ 0.60m）の黒褐色粘土層の下部、標高 6.95m（深度 0.80m）から得た放射性炭素年代測定試料 C14 は 2359 - 2323 (BC 410 - 374) cal yrs BP(PLD-26872) と 2700 ～ 2300 年前代であった。

2000 年前以降の古環境　13B 区では考古遺構が検出される標高およそ 7m ～ 8m よりも下位層の堆積状況を解析するために調査区の北、東、西側で地表から掘り下げた地層断面の観察と試料採取を行なった。北壁断面では東西方向に長さ約 5.9m の、東壁では南北方向に長さ約 51m の（本論ではそのうちの北端から約 23m 分を図示）、西壁でも南北方向に長さ約 48m の地層断面を得た【図 270・図 271・図 272】。これらの地層断面において特徴的なのは、地層のひとつひとつが一方向に傾斜していることである。それは東壁と西壁の地層断面において観察される。東壁では標高 7m よりも下位にみられ、シルト質砂層と砂質シルト層ないしは腐植質粘土層とが互層し、かつそれらの地層のひとつひとつが 10° ～ 20° で南へ傾いていた。西壁では、南端の起点から北へ 16m のところから北端までの標高 6m ～ 6.5m よりも下位層にみられる。起点から北へ 16m の地点から 27m に至る地点では中粒砂層と細粒砂層が腐植質粘土層やシルト質粘土層と互層し、それぞれの地層は北へ 10° ほど傾いた。いっぽう、起点から 35m の地点から 46m までは中礫層や細粒砂層が粘土層やシルト質粘土層と互層して、5° ～ 10° 程度で南へ傾いた。このような、地層のひとつひとつがつくる層理全体があるひとつの方向に傾斜する地層の構造は河川の流路縁辺部に特有の堆積構造であり、地質学ではイプシロン斜層理と呼ばれる。このような構造は流路自体が徐々に側方（横方向）に移動しながら砂や粘土などの堆積物を埋積するために生じる。ここで説明を加えれば、河川は河床をつくる堆積物の粒度やそれと関連する摩擦力が流れの抵抗力となり、自然の状態では直線的に流れ下ることはできず必ず曲流する傾向がある。この曲流現象が蛇行であり、河川流路のうち蛇行が生じているところを蛇行帯という。蛇行帯でみられる地形には名称がついており攻撃斜面と滑走斜面に分けられる。攻撃斜面の河岸の断面形態は凹型になっており、河川流路が堤防や谷壁を攻撃するところであるため、このような名称がつけられている。いっぽうの滑走斜面は、河岸の断面形態が凸型になっており、ゆるく湾曲したいく筋かの蛇行州（ポイントバー :point bar）が特徴的である。蛇行州は突州、寄州などとも呼ばれる。小河川の蛇行州は滑走斜面（凸型斜面）から攻撃斜面（凹型斜面）に向かってゆるく傾斜した起伏の少ない斜面をなすことが多い。先に述べた 13B 区で観察された側方付加堆積物は滑走斜面側に顕著に認められ、イプシロン斜層理は蛇行州を形成する内部堆積構造のひとつである〔アレン , 1963〕。このように標高 7m よりも下位層でみられる地層の堆積構造から、13B 区には蛇行河川が流下しており、東壁で地層断面図の層理が全体に南傾斜を示すことから、南に凸地形をもった蛇行州が形成されており、ちょうど蛇行の屈曲地点であった。また、屈曲する河川の流路は南方向に移動をしながら次第に堆積物を累積していった。

13B 区の地層観察の結果から本地点に蛇行河川跡が存在することがわかった。ここでさらに詳細に検討を加える。13B 区の標高 7m 以下で観察された地層の南傾斜は、13B 区西壁の地層断面においてもみることができ、地層断面図の起点である南端から北へ 35m から 46m では中礫層や極粗粒砂層と粘土層やシルト質粘土層との互層が南傾斜で下位層を覆っているのが観察された。この南へ傾斜する地層の堆積年代について放射性炭素年代測定の結果では、東壁地層断面の層位関係より下位層と思われる北端付近でみられる黒褐色腐植質粘土層の標高 5.99m より採取した草本（試料 1）が 1569 - 1518 (AD 381 - 433) cal yrs BP(PLD-26724) と 1500 年前代であったのに対して、それよりも上位層である東壁起点（北端）より 10m 南付近の 47 層（砂質シルト層）の標高 5.65m から採取した放射性炭素年代測定試料 2 が 1994 - 1899 (BC 45 - AD 52) cal yrs BP(PLD-26725)、東壁起点（北端）より 12m 南付近の 48 層（腐植質粘土層）の標高 5.67m から採取した放射性炭素年代測定試料 4 は 1952 - 1883 (BC 3 - AD 68) cal yrs BP(PLD-26726)、さらに上位層である東壁起点（北端）より 15m 南付近の 52 層（灰色シルト質粘土層）の標高 5.66m から採取した放射性炭素年代測定試料 7 が 1951 - 1878 (BC 2 - AD 73) cal yrs BP(PLD-26728) と 1900 年前代であり、約 400 年

間の年代値の隔たりがあった。いっぽう、西壁地層断面の層位関係において下位層である西壁起点（南端）より 45m 北付近の 112 層（褐灰色粘土層）の標高 5.63m から採取した放射性炭素年代測定試料 8 が 1901 - 1821 (AD 50 - 129) cal yrs BP(PLD-26744)、西壁起点（南端）より 38m 北付近の 109 層（腐植混じり粘土層）の標高 5.60m から採取した放射性炭素年代測定試料 7 が 1951 - 1869 (BC 2 - AD 82) cal yrs BP(PLD-26743)、西壁起点（南端）より 32m 北付近の 105 層（シルト質粘土層）の標高 5.60m から採取した放射性炭素年代測定試料 6 が 1901 - 1817 (AD 50 - 133) cal yrs BP(PLD-26742) と 1800 年前～ 1900 年前代を示し、西壁地層断面では試料ごとの大きな時間の隔たりはなかった。ここで注目したいのは、南方向へ傾斜して堆積するそれぞれの地層をさらに覆う堆積物である。東壁地層断面では一連の南傾斜の地層を灰黄褐色（10YR4/2）の粘土層（9 層）、黄灰色（2.5Y6/1）のシルト層（12 層）、黒褐色（10YR3/1）の粘土層（11 層）などが覆った。対して西壁断面では南方向傾斜の地層を標高 6.5m 付近でにぶい黄褐色（10YR7/2）の極粗粒砂層（106 層）と同じ粒度組成の極粗粒砂層（104 層）が覆った。これは、同じように南への傾斜傾向を示す地層ではあるものの、東壁と西壁でみられる地層群は堆積様式や堆積時期が異なる可能性を示唆するものである。加えて、南傾斜を示す陸側縁辺の標高値が、東壁地層断面では標高 7m 付近にみられるのに対して、西壁断面では標高 6m 付近にあり、両断面間で 1m ほどの標高差が認められる。また、認められる堆積物の最大粒径も、東壁断面ではシルト質砂層であるのに対し、西壁断面では中礫層や極粗粒砂層と粗粒であった。以上のことから、西壁断面の北、標高 6m よりも下位で確認される極粗粒砂層で覆われる南傾斜の地層群は 1800 年前～ 1900 年前代に 13B 区地点にあった蛇行河川の存在を、東壁の標高 7m よりも下位でみられる粘土層やシルト層により頂部を覆われる南傾斜の地層群は 1500 年前代の蛇行河川を示し、寄島遺跡調査地点周辺では 1900 年前代から蛇行河川の流下するような環境が出現しており、1900 年前代の蛇行河川跡の上をさらに覆って 1500 年前代にも新たに蛇行河川が流下していたことがわかった。蛇行河川は流路を南方向へ移動しながら、蛇行州（ポイントバー）を形成した。蛇行州の上の堆積地形をさらに細かく分ければ、微小な凸地形をスクロールバー（scroll bar）あるいはメアンダースクロール（meander scroll）とよび、凹地をスウェール（swales）とよぶ。これらは蛇行州の成長方向に直交していく筋が現われ、蛇行州全体では滑走斜面側から攻撃斜面に向かって緩く傾斜した地形面をつくる。蛇行州は一般に、周囲の後背湿地より相対的に 0.5m ～ 2m ほど標高が高くなる。13B 区では河道に沿う微高地端部に最大幅約 7m の溝と微高地上を南北に走る溝 2 条が検出されている［酒井，2014］。これらの溝は、上で説明をしたような蛇行州上に生じた凹地や、その凹地を人為的に利用した跡を遺構として検出しているものと推定でき、河川流路の移動に伴って離水した蛇行州の上で人為活動が行なわれた。ところで、13B 区の西壁地層断面の南端（起点）付近の下位層には黒褐色腐植質粘土層とシルト質細粒砂層との互層がみられ、腐植質粘土層の標高 5.70m から採取した草本（試料 1）は 1415 - 1336 (AD 535 - 615) cal yrs BP(PLD-26737) の数値年代であった。この値は 13B 区の北、東、西側のそれぞれの地層断面から採取した放射性炭素年代測定試料の中でもっとも新しい年代値であり、それまでの蛇行州とは異なった堆積システムに移行したことがわかる。この年代値を示した 13B 区南端には、13A 区にかけてひろがる北西 - 南東方向の近世以前の流路跡が考古学的に検出されている［酒井，2014］。1900 年前代と 1500 年前代の蛇行河川とは異なった堆積過程が少なくとも 1400 年前代頃には生じていたことがわかった。（鬼頭剛）

謝辞　本論を作成するにあたり、13B 区の地層断面図作成では日本海航測株式会社の橋本崇史氏に、試錐調査では株式会社アーキジオに、火山灰分析では古澤地質株式会社の古澤　明氏に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤　茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

Allen, J. R. L., 1963, The classification of cross-stratified units, with notes on their origin, Sedimentology, 2, 93-114.

古澤　明，1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析，地質学雑誌，101, 123-133.

古澤　明，2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別，地質学雑誌，109, 1-19.

町田　洋・新井房夫，2003, 新編　火山灰アトラス［日本列島とその周辺］，東京大学出版会，336p.

酒井俊彦，2014, 寄島遺跡，愛知県埋蔵文化財センター平成 25 年度「年報」，愛知県埋蔵文化財センター，16-17.

第 2 節　寄島遺跡出土木材の樹種同定

はじめに　鹿乗川東岸の自然堤防上に立地する寄島遺跡から出土した木材の樹種同定を行った。

試料と方法　試料は、自然流路である 11B 区 003NR から 230 点、グリッド取上げの試料が 50 点、13B 区東壁から 17 点、検出面 1 から 3 点、土坑である 059SK と 1454SK から各 2 点、001SK と 232SK、2352SK から各 1 点、遺物集積である 11B 区 005SU・007SU・010SU から各 1 点、井戸跡である 13B 区 048SE から 1 点、不明遺構である 080SX(T3) から 1 点、検出面 3 から 1 点の、計 313 点の出土木材である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

結果　同定の結果、針葉樹であるカヤとイヌガヤ、モミ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロの 9 分類群と、広葉樹であるヤナギ属とクリ、スダジイ、ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、ムクノキ、エノキ属、クワ属、サカキ、クスノキ科、モモ、ネムノキ、モチノキ属、ニワトコの 16 分類群、針葉樹か広葉樹かの判断ができなかった樹皮が 1 分類群の、計 26 分類群がみられた。

ヒノキが 100 点と最も多く、コナラ節が 45 点、クリが 24 点、クヌギ節が 21 点、サワラが 15 点、エノキ属が 14 点、マツ属複維管束亜属が 11 点、クワ属とスギが各 10 点、スダジイが 9 点、アスナロが 8 点、ヤナギ属が 7 点、サカキが 6 点、コウヤマキが 5 点、アカガシ亜属が 4 点、ムクノキとクスノキ科、モモ、モチノキ属が各 3 点、カヤとイヌガヤ、モミ属、ツブラジイ、ネムノキが各 2 点、ニワトコと樹皮が各 1 点であった。同定結果を表 1 に、一覧を付表 1 に示す。

次に、同定された材の特徴を記載する。

表 8　寄島遺跡出土木材の樹種同定結果

時期	弥生時代末～古墳時代前期													中世		時期不明				
樹種 大分類	農耕工具	木工具	編み・紡織具	容器	調度	祭祀具	建築部材	施設材・器具材	土木材	その他	自然木	農耕土木具	建築部材	施設材・器具材	その他	自然木	合計
カヤ							1	1									2
イヌガヤ						2											2
モミ属								2									2
マツ属複維管束亜属							1	1	2	3				2	1	1	11
コウヤマキ			1	1				2	1								5
スギ			1				2	6	1								10
ヒノキ			3	3	1	1	18	45	16	10	1			2			100
サワラ			1	1	1			12									15
アスナロ								6	1	1							8
ヤナギ属								1		4	2						7
クリ							6	5	1	9						3	24
スダジイ								2		5	2						9
ツブラジイ								1		1							2
コナラ属アカガシ亜属		1					1	1		1							4
コナラ属クヌギ節		2					4		1	7	1		1			5	21
コナラ属コナラ節		2					11	2	2	16	6	1				5	45
ムクノキ								1		1	1						3
エノキ属										13						1	14
クワ属		1								7	1		1				10
サカキ	2									2	1					1	6
クスノキ科								2		1							3
モモ								1		2							3
ネムノキ							1			1							2
モチノキ属										1						2	3
ニワトコ										1							1
樹皮										1							1
合計	2	6	4	6	3	3	45	91	25	87	15	1	2	4	1	18	313

(1) カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.
イチイ科　図 273　1a-1c(No.180)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1 ～ 5 細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 4 個みられる。また仮道管の内壁には、2 本 1 対のらせん肥厚がみられる。かやは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(2) イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight ex Forbes) K.Koch
イヌガヤ科　図 273　2a-2c(No.168)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1 ～ 3 細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、2 ～ 4 個みられる。また仮道管の内壁には、らせん肥厚が確認できる。イヌガヤは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する常緑小高木の針葉樹である。樹木自体が小さいため、現在では顕著な木材利用は行われていない。

(3) モミ属　Abies　マツ科　図 273　3a-3c(No.107)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1 ～ 5 細胞高となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個みられる。また、放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きく、保存性に優れる。

(4) マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科
図 273　4a-4c(No.200)

仮道管と放射組織、放射仮道管、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は、単列のものと水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は縦南状に肥厚する。マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。油分が多く、耐朽性が高い。

(5) コウヤマキ　Sciadopitys verticillata (Thunb.) Siebold et Zucc.
コウヤマキ科　図 273　5a-5c(No.69)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 1 ～ 5 列となる。分野壁孔は窓状となる。コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている 1 科 1 属 1 種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

(6) スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　スギ科　図 273、274
6a-6c(No.182)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2 ～ 15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(7) ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.
ヒノキ科　図 274　7a-7c(No.177)、8a-8c(No.197)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ 1 ～ 15 列となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1 分野に 2 個みられる。ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(8) サワラ　Chamaecyparis pisifera (Siebold et Zucc.) Endl.
ヒノキ科　図 274　9a-9c(No.67)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1 ～ 6 細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1 分野に 2 個みられる。サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(9) アスナロ　Thujopsis dolabrata (L.f.) Siebold et Zucc.
ヒノキ科　図 274　10a-10c(No.100)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ 2 ～ 13 列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個みられる。アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

(10) ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　図 274、275　11a-11c(No.246)

小型の道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、単列となる。ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

(11) クリ　Castanea crenata Sieboid. et Zucc.　ブナ科　図 275
12a-12c(No.222)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 3 列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は単列で同性となる。クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(12) スダジイ　Castanopsis sieboldii (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　図 275　13a-13c(No.226)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(13) ツブラジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky
ブナ科　図 275　14a-14c(No.282)

年輪のはじめに大型の道管が不連続に 1 ～ 3 列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと集合放射組織がみられる。ツブラジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(14) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis
ブナ科　図 275　15a-15c(No.194)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやウクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(15) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops
ブナ科　図 275　16a-16c(No.216)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 2 列並び、晩材部では径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(16) コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus
ブナ科　図 276　17a-17c(No.78)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 2 列並び、晩材部では急に径を減じた、壁の薄い角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靭で、切削加工はやや難しい。

(17) ムクノキ　Aphananthe aspera (Thunb.) Planch.
ニレ科　図 276　18a-18c(No.82)

中型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、4 列以上の帯状となる。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、幅 1 ～ 4 列となる。ムクノキは温帯の日当たりのよい適潤地を好み、海に近い所に比較的多い落葉高木の広葉樹である。材の強さは中庸であるが、靭性があり割裂しにくい。

(18) エノキ属　Celtis　ニレ科　図 276　19a-19c(No.217)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が方形となる異性で、幅 1 ～ 5 列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(19) クワ属　Morus　クワ科　図 276　20a-20c(No.208)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、徐々に径を減じた道管が晩材部では数個複合し、斜めに断続して疎らに散在する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 ～ 2 列が直立となる異性で、幅 3 ～ 6 列となる。クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、ヤマグワは温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられ、マグワは養蚕のために栽培も行なわれていた。いずれも落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高く、切削加工はやや困難である。

(20) サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科
図 276　21a-21c(No.215)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は、20 ～ 30 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 2 ～ 4 列が直立する異性で、幅 1 ～ 2 列となる。サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靭、堅硬で、切削加工は困難である。

(21) クスノキ科　Lauraceae　図版 276、277　22a-22c(No.201)

やや小型の道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、幅 1 ～ 3 列となる。クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

(22) モモ　Prunus persica (L.) Batsch
バラ科　図 277　23a-23c(No.137)、24a(No.252)

年輪のはじめに中型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合してやや密に散在する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、幅 1 ～ 5 列となる。モモの原産地は中国北部で、平安時代には果実を食用や薬用として利用するために日本列島でも栽培されていた樹木である。材は重硬で、切削加工等は困難である。

(23) ネムノキ　Albizia julibrissin Durazz.　マメ科　図 277
25a-25c(No.141)

年輪の始めにやや大型の道管が 1 ～ 2 列並び、晩材部では急に径を減じた道管が数個複合して配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、連合翼状～帯状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅 1 ～ 3 列となる。ネムノキは温帯下部から熱帯に分布し、日本では陽性の二次林に多い落葉高木の広葉樹である。材はやや軽量であり強くないが、切削加工は容易である。

(24) モチノキ属　Ilex　モチノキ科　図 277　27a-27c(No.313)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20 ～ 40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、幅 1 ～ 5 列となる。モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

(25) ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) H.Hara　スイカズラ科　図 277　27a-27c(No.241)

小型の道管が塊状に複合し、接線から斜線状に配列する散孔材である。年輪のはじめにやや大きい道管が集まる傾向がみられる。軸方向柔組織は年輪界に沿って分布する。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 列が方形となる異性で、幅 1 ～ 4 列となる。放射組織は鞘細胞を有する。ニワトコは本州や四国、九州の山野のやや湿った場所に分布する落葉低木の広葉樹である。材は、現在ではあまり利用されていない。

(26) 樹皮　Bark　図 277　28a(No.160)

篩部細胞が放射組織に並ぶ樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

考察　工具の横斧柄および横斧柄？はいずれもサカキであった。サカキは堅硬な樹種であり（伊東ほか，2011）、堅い樹種を選択していたと考えられる。東海地方の木製品の集成によれば、弥生時代後期以降の横斧柄ではサカキが多く確認されており（樋上，2012）、今回の結果は東海地方の当時の用材傾向と調和的であった。農耕土木具の直柄平鍬はアカガシ亜属、曲柄鍬未製品と竪杵はクヌギ節、曲柄平鍬はコナラ節、小型臼はクワ属であった。いずれも堅硬な樹種である（伊東ほか，2011）。東海地方で出土した木製品の集成（樋上，2012）によれば、直柄平鍬などの刃部幅の広い木製品にはアカガシ亜属が、曲柄鍬や曲柄平鍬などの刃部幅が狭い木製品にはクヌギ節やコナラ節が多く、竪杵にもクヌギ節が多用される傾向がみられた、今回の結果はこれに調和的であった。小型臼についてはクリが大多数を占めており、今回の結果はこれと異なる様相を示した。編み具・紡織具の編台はヒノキとサワラが各１点、カセと有頭棒はヒノキであった。東海地方では糸巻き具にヒノキ科が多く利用されており（樋上，2012）、今回の傾向はこれに類似する。容器の曲物底板はヒノキが２点、蓋付槽はサワラ、槽はコウヤマキとスギ、槽？はヒノキであった。いずれの針葉樹も木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い（伊東ほか，2011）。東海地方の遠江以西では曲物にヒノキ科が多く用いられ、槽には様々な樹種が用いられている（樋上，2012）。今回の寄島遺跡でも同様の傾向を示した。調度の脚？はヒノキとサワラ、台？はコウヤマキであった。東海地方では調度の試料数が少なく、樹種の利用傾向は不明である。祭祀具のヤリ形？はヒノキ、装飾付円筒形と筒形未成品はイヌガヤであった。東海地方の遠江以西では、形代にヒノキ科が多く使われており（樋上，2012）、今回の結果はこれと同様の傾向を示した。建築部材では、建築材でヒノキとコナラ節が各６点、スギが２点、クリとアカガシ亜属、クヌギ節が各１点みられた。また柱では、ヒノキが４点と、クリとコナラ節が各３点みられ、竪穴住居柱と有頭棒、有抉板はヒノキが各１点、柱？はコナラ節が２点であった。建築材および柱には、ヒノキやスギなどの真っ直ぐで加工性の良い材や、クリやアカガシ亜属、クヌギ節、コナラ節といった堅硬な材が利用されていた。用途によって、使い分けが行われていた可能性も考えられる。また梯子では、ヒノキが５点とクリが２点、カヤとマツ属複維管束亜属、クヌギ節、ムクノキが各１点みられ、様々な樹種が利用されていた。東海地方の遠江以西では、建築部材には主にヒノキ科とクリを利用し、他には様々な樹種が利用される傾向がある（樋上，2012）。今回の寄島遺跡でも、これと同様の傾向を示した。施設材・器具材の井戸枠はクスノキ科、井戸枠の土留めはヒノキであった。東海地方の遠江以西の集成によれば、井戸側にヒノキ科が最も多く利用され、他にマツ属、スギ、コナラ節、モモも多くみられる（樋上，2011）。有段角棒を含めた角棒では、ヒノキが７点と最も多く、サワラが４点、スギが２点、モミ属とマツ属複維管束亜属、クリが各１点みられた。穿孔丸棒、有抉丸棒を含めた丸棒では、ヒノキが23点、アスナロが６点、コウヤマキが２点、サワラとクリ、スダジイ、モモ、ネムノキが各１点みられた。有頭棒を含めた棒では、カヤとサワラ、クスノキ科が各１点みられた。有段板、穿孔板を含めた板では、ヒノキが14点とサワラが６点、スギが４点、クリが２点、モミ属とスダジイ、ツブラジイ、アカガシ亜属、コナラ節が各１点みられた。板？では、ヤナギ属とクリ、コナラ節が各１点みられた。これらの木製品には、ヒノキ科を主とした針葉樹が多くみられ、木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性の良い針葉樹が選択的に利用されていたと考えられる。土木材では、杭でヒノキが16点、コナラ節が２点、マツ属複維管束亜属とコウヤマキ、アスナロ、クヌギ節が各１点みられた。矢板ではスギとクリが各１点みられた。土木材ではマツ属複維管束亜属が１点みられた。東海地方の遠江以西における出土例では、杭にヒノキ科、マツ属、アカガシ亜属、クヌギ節、クリ、サカキ、シイノキ属などの樹種が利用されている（樋上，2012）。寄島遺跡の杭ではヒノキが多い傾向はあるものの、多様な樹種が利用されており、遠江以西の例と同様の傾向を示した。

1/2分潮材、1/4分潮材、1/8分潮材を含めた分潮材では、ヒノキが７点、マツ属複維管束亜属とクリ、コナラ節、エノキ属が各２点、ムクノキとクワ属が各１点みられた。ヒノキが最も多かったが、広葉樹も一定数みられた。分潮材は木製品作成の際の原木であると考えられる。また、有段丸太はコナラ節で、樺皮は樹皮であった。

加工木では、針葉樹のヒノキが３点、マツ属複維管束亜属とアスナロが各１点なのに対し、広葉樹ではコナ

ラ節が 13 点、エノキ属が 11 点のほかに 13 種がみられ、分離材とは異なる様相を示した。丸太を含めた自然木では、針葉樹は少なく、広葉樹が優勢である。加工木の樹種構成は自然木の構成に近いと考えられる。クリやクヌギ節、コナラ節といった落葉広葉樹が多くみられるが、アカガシ亜属やモチノキ属、サカキといった常緑広葉樹も一定量確認できる。またヤナギ属やエノキ属、ムクノキといった、湿地を好んで生育する樹種もみられる。遺跡周辺には、落葉広葉樹と落葉広葉樹の混交林や、湿地を好む樹木で構成される河畔林なども広がっていた可能性がある。

時期不明の木製品では、建築材の柱やこクワ属、柱？でクヌギ節がみられた。また、施設材・器具材の角棒と丸棒は共にマツ属複維管束亜属、板と板？は共にヒノキであった。また加工木と丸太、自然木では、コナラ節とクヌギ節が 5 点、クリが 3 点、マツ属複維管束亜属とモチノキ属が各 2 点、エノキ属とサカキが各 1 点みられた。弥生時代末～古墳時代前半の木製品の樹種と似た傾向を示すが、いずれも時期不明であり、詳細は不明である。

小林克也（パレオ・ラボ）

表 9　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果 (1)

大分類	工具								農耕土木具								編み・紡織具				容器								調度			祭祀具			
樹種	器種	横斧柄？	横斧柄？	流平鍬	曲柄平鍬	曲柄型	小型刃	曲柄鍬末成品	編み台	有孔カセ	蓋頭付槽	蓋付槽	蓋付槽	曲物底板	曲物底板	曲物底板	曲物ワ	曲物ワ	曲物ワ	台脚形	台脚形	台脚形	袋飾付ヤリ	筒円筒形	筒形鉄品	筒形鉄品	合計
イヌガヤ																									1	1	2
コウヤマキ														1						1							2
スギ														1													1
ヒノキ									1	1	1					1	2	1		1							8
サワラ									1			1						1									3
コナラ属アカガシ亜属				1																							1
コナラ属クヌギ節						1		1																			2
コナラ属コナラ節					2																						2
クワ属							1																				1
サカキ		1	1																								2
合計	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	24

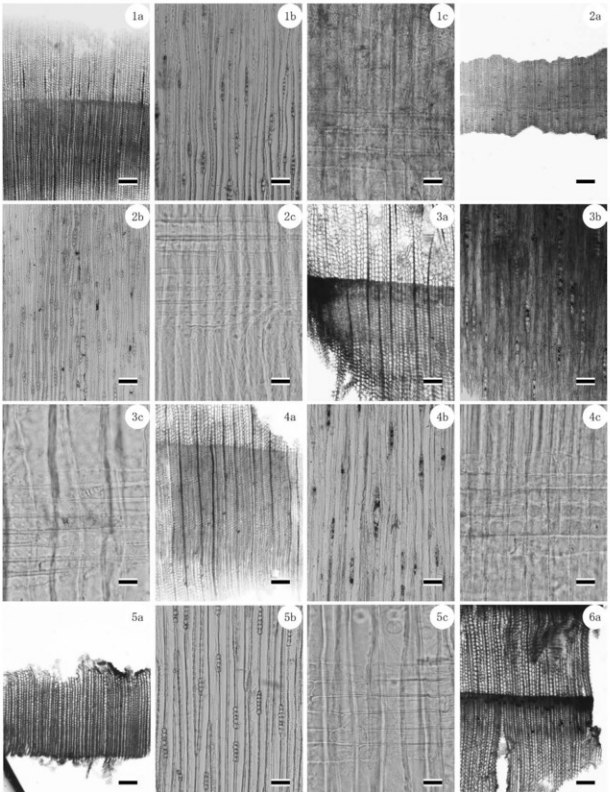
表 10　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果 (2)

大分類	建築部材																施設材・器具材								土木材			
樹種	器種	竪穴住居柱	柱	柱？	棟？	建築材	建築板	有孔板	成形板	分割材	土材	木。	建築材	井戸枠留板	井戸枠土枠	板	板？	角棒	丸棒	棒	棒	杭	矢板	土木材	合計
カヤ				1																	1				2
キミ属																1		1							2
マツ属複維管束亜属				1														1				1		1	4
コウヤマキ																			2			1			3
スギ						2										4		2					1		9
ヒノキ	1	4			5	6	1	1					1	14			7	23				16			79
サワラ														6			4	1	1						12
アスナロ																		6				1			7
ヤナギ属																	1								1
クリ		3			2	1										2	1	1	1				1		12
スダジイ																1			1						2
ツブラジイ																1									1
コナラ属アカガシ亜属						1										1									2
コナラ属クヌギ節					1	1			1	1												1			5
コナラ属コナラ節		3	2			6										1	1					2			15
ムクノキ					1																				1
クスノキ科													1								1				2
モモ																				1					1
ネムノキ																				1					1
合計	1	10	2	11	17	1	1	1	1	1	1	31	3	16	35	3	22	2	1	160					

表 11　弥生時代末～古墳時代前期の樹種同定結果 (3)

大分類	その他					自然木		
樹種	器種	分割材	加工木	有段丸太	棒丸太	皮	自然木	合計
マツ属複維管束亜属		2	1					3
ヒノキ		7	3				1	11
アスナロ			1					1
ヤナギ属			4				2	6
クリ		2	7					9
スダジイ			5				2	7
ツブラジイ			1					1
コナラ属アカガシ亜属			1					1
コナラ属クヌギ節			7				1	8
コナラ属コナラ節		2	13	1			6	22
ムクノキ		1					1	2
エノキ属		2	11					13
クワ属		1	6				1	8
サカキ			2				1	3
クスノキ科			1					1
モモ			2					2
ネムノキ			1					1
モチノキ属			1					1
ニワトコ			1					1
樹皮					1			1
合計		17	68	1	1	12	3	102

引用・参考文献
樋上　昇（2012）東海・中部～三重県・岐阜県・愛知県・静岡県－，木の考古学－出土木製品用材データベース－，193-209.
伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

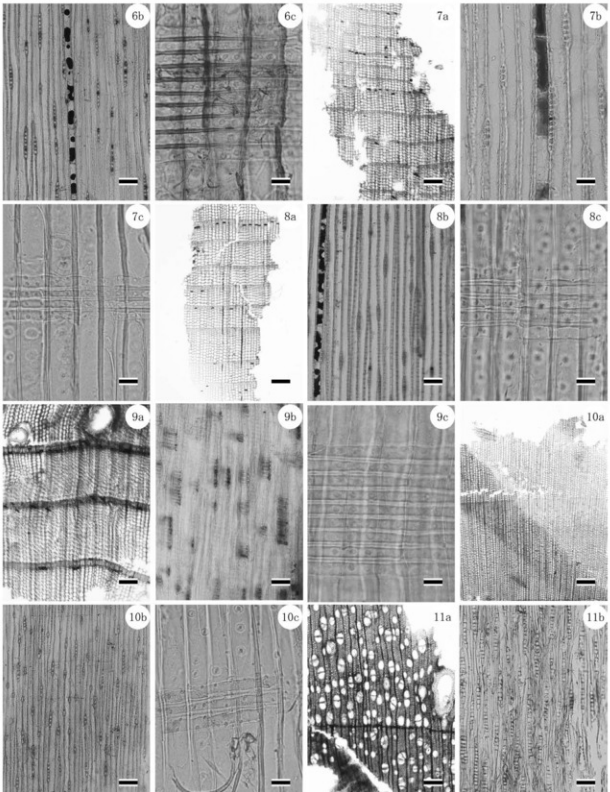


図版1　寄島遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. カヤ(No. 180)、2a-2c. イヌガヤ(No. 168)、3a-3c. モミ属(No. 107)、4a-4c. マツ属複維管束亜属(No. 200)、5a-5c. コウヤマキ(No. 69)、6a. スギ(No. 182)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=25 μm)

図 273　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真 (1)

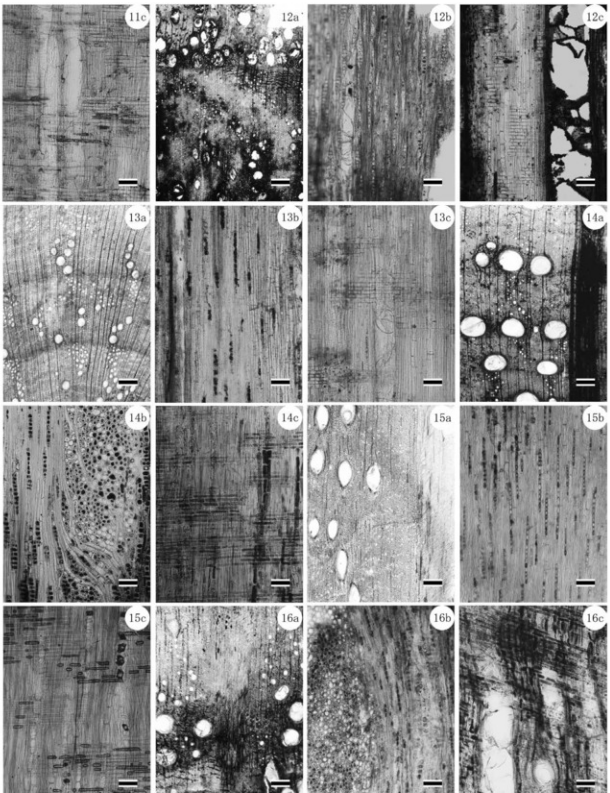


図版2　寄島遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(2)

6b-6c. スギ(No. 182)、7a-7c. ヒノキ(No. 177)、8a-8c. ヒノキ(No. 197)、9a-9c. サワラ(No. 67)、10a-10c. アスナロ(No. 100)、11a-11b. ヤナギ属(No. 246)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=25 μm)

図274　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(2)

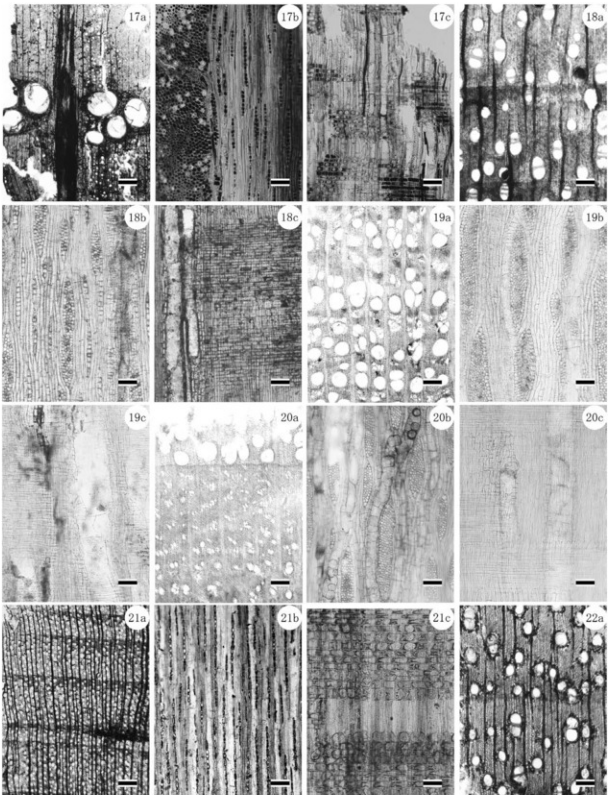


図版3　寄島遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(3)

11c. ヤナギ属(No. 246)、12a-12c. クリ(No. 222)、13a-13c. スダジイ(No. 226)、14a-14c. ツブラジイ(No. 282)、15a-15c. コナラ属アカガシ亜属(No. 194)、16a-16c. コナラ属クヌギ節(No. 216)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

図275　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(3)

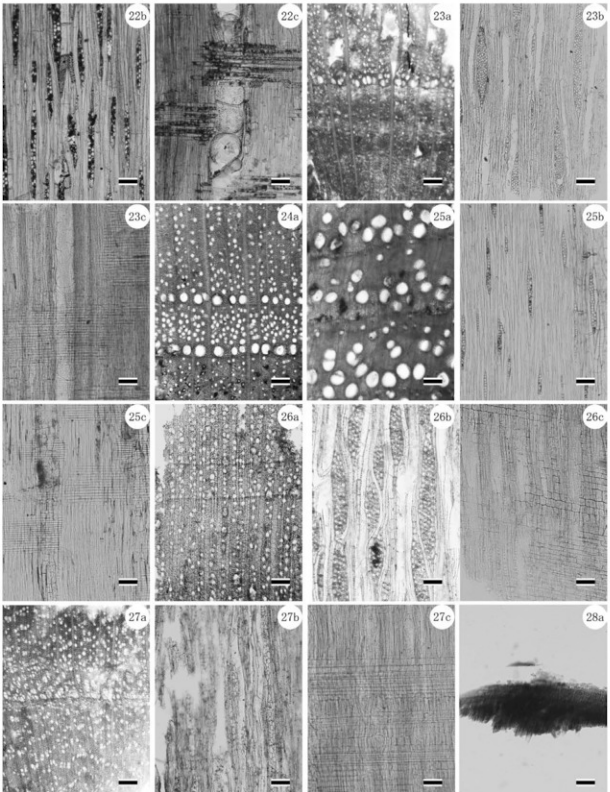


図版4　寄島遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(4)

17a-17c. コナラ属コナラ節(No. 78)、18a-18c. ムクノキ(No. 82)、19a-19c. エノキ属(No. 217)、20a-20c. クワ属(No. 208)、21a-21c. サカキ(No. 215)、22a. クスノキ科(No. 201)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

図 276　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真 (4)



図版5　寄島遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(5)

22b-22c. クスノキ科(No. 201)、23a-23c. モモ(No. 137)、24a. モモ(No. 252)、25a-25c. ネムノキ(No. 141)、26a-26c. モチノキ属(No. 313)、27a-27c. ニワトコ(No. 241)、28a. 樹皮(No. 160)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

図277　寄島遺跡出土木材の高額顕微鏡写真(5)

第 3 節　寄島遺跡 07B 区出土炭化材の放射性炭素年代測定

はじめに　愛知県安城市に位置する寄島遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法　測定試料の情報、調製データは表 12 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果　表 12 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 1 と 2 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

暦年較正　暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

考察　試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代，3-20.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

表 12　測定試料及び処理　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲 1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-13001	調査区：2AY07A グリッド：10F4i 遺構：**1056SB** Dot：1066	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪?, 枝状 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-26.51±0.17	1737±21	1735±20	255AD(46.7%)305AD 313AD(21.5%)336AD	242AD(90.3%)358AD 366AD(5.1%)381AD
PLD-13002	調査区：2AY07A グリッド：10F7h 遺構：**1113SB** Dot：1054	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪? 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-25.52±0.17	1838±20	1840±20	134AD(42.0%)179AD 186AD(26.2%)213AD	126AD(95.4%)238AD
PLD-13003	調査区：2AY07A グリッド：10F11f 遺構：**1330SB** Dot：1004	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-24.89±0.22	1820±20	1820±20	139AD(16.1%)156AD 169AD(26.8%)196AD 209AD(25.3%)233AD	132AD(95.4%)241AD
PLD-13004	調査区：2AY07A 遺構：**1331SB**	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-29.72±0.19	1812±21	1810±20	140AD(12.8%)155AD 168AD(24.0%)195AD 209AD(31.4%)239AD	131AD(95.4%)252AD
PLD-13005	調査区：2AY07A グリッド：10F2h 遺構：**1473SB** Dot：1055	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪? 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-27.30±0.20	1748±20	1750±20	249AD(13.8%)262AD 279AD(54.4%)328AD	236AD(94.0%)350AD 370AD(1.4%)378AD
PLD-13006	調査区：2AY07A グリッド：10F6i 遺構：**1545SB** Dot：1083	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-24.30±0.20	1770±20	1770±20	235AD(31.2%)260AD 285AD(37.0%)323AD	175AD(1.4%)190AD 212AD(94.0%)341AD
PLD-13007	調査区：2AY07A グリッド：10F4i 遺構：**1636SK**	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-27.99±0.18	1716±21	1715±20	259AD(27.1%)293AD 322AD(28.2%)358AD 366AD(12.4%)381AD	255AD(95.4%)391AD
PLD-13008	調査区：2AY07A グリッド：10F4i 遺構：**1637SK**	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-11.78±0.20	1754±20	1755±20	244AD(19.1%)261AD 281AD(49.1%)325AD	231AD(95.4%)347AD
PLD-13009	調査区：2AY07A グリッド：10F9g 遺構：**11708X** Dot：1063	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)	-28.31±0.19	1789±22	1790±20	174AD(8.0%)191AD 212AD(46.8%)258AD 298AD(13.4%)319AD	135AD(75.6%)260AD 281AD(19.8%)325AD
PLD-13010	調査区：2AY07B 遺構：**2034SB**	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-25.48±0.19	1813±21	1815±20	140AD(13.1%)155AD 168AD(24.5%)195AD 209AD(30.6%)238AD	131AD(95.4%)251AD
PLD-13011	調査区：2AY07B グリッド：1F2g 遺構：**2217SB** Dot：2100	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-26.91±0.20	1717±21	1715±20	259AD(30.6%)295AD 322AD(26.6%)353AD 367AD(11.1%)381AD	255AD(95.4%)390AD
PLD-13012	調査区：2AY07B 遺構：**2220SB**	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-26.55±0.18	1958±21	1960±20	23AD(68.2%)70AD	36BC(1.0%)30BC 22BC(1.2%)11BC 2BC(91.9%)85AD 109AD(1.0%)114AD
PLD-13013	調査区：2AY07B 遺構：**2201SK**	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-24.47±0.18	1700±21	1700±20	264AD(9.7%)276AD 333AD(58.5%)389AD	258AD(22.2%)298AD 319AD(73.2%)406AD
PLD-13014	調査区：2AY07B グリッド：1F3c 遺構：**2317SK** Dot：2105	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-27.27±0.21	1706±22	1705±20	262AD(14.3%)279AD 328AD(53.9%)386AD	256AD(28.3%)304AD 314AD(67.1%)405AD
PLD-13015	調査区：2AY07C グリッド：1F11b 遺構：**3001SD** 層位：下層	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)	-25.44±0.18	1675±21	1675±20	346AD(68.2%)409AD	263AD(4.8%)278AD 330AD(90.6%)421AD

第 4 節　寄島遺跡出土の弥生～古墳時代土器の胎土材料

1. はじめに　土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易ではない。土器は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材で構成されており、粘土採掘坑の調査から、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取されていたと推察される〔藤根・今村，2001〕。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器では、3 分の 1 程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている〔藤根，1998〕。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

本節では、寄島遺跡および周辺遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器について、薄片の偏光顕微鏡観察による胎土分析を行った。

2. 試料と方法　試料は、寄島遺跡から出土土器 21 点と、参考試料として姫下遺跡から 7 点、下懸遺跡から 5 点、鹿乗川流域遺跡から 1 点、中狭間遺跡から 6 点、本神遺跡から 10 点の、合計 50 点である【表 13】。

表 13　胎土分析を行った試料とその詳細

No.	遺跡名	遺跡記号	器種	新干色調	遺構	遺物No.	位置・層位等	日付	その他	備考
1	寄島遺跡	2AHS06C	甕	黄褐色	151SX	E-283	6Fh,Do598	070220		畿内系（布留式）
2		2AHS06C	坩	橙～赤色	151SX	E-357	6Fh,Do804	070221		畿内系
3		2AHS06C	坩	黄褐色	151SX	E-358	6Fh,Do743	070220		畿内系
4		2AHS06C	小型丸底壺	灰黄色	151SX	E-362	6Fh,Do841	070221		
5		2AHS05B	高杯	明赤褐色	N801	E-663	VG12C,3層	060222		怡土系？ギナ
6		2AHS05B	高杯	明赤褐色	N801	E-690	VG11C,3層	060221	No.754	御笠川系？ギナ
7		2AHS06C	直口壺	に赤～黄橙色	N801	E-1198	5G16b,Do524,4層	070124		
8	姫下遺跡（安城市姫小川町）	Ⅱ ASK00A	壺	に赤～黄橙色	東ルート	E-0667	9層117b			畿内？
9		Ⅱ ASK00A	壺	橙色	862	E-0662	9層118b	010307	No.261	北上宮系？南東方面の土器、赤っぽい
10		Ⅱ ASK00A	甕	明灰黄色	862	E-0402	9層118b	010307	No.253	北陸系
11		Ⅱ ASK00B	器台？	に赤～黄褐色	SK29	E-0236			No.590	瀬戸内系？
12		Ⅱ ASK00C	壺	に赤～黄橙色	801	E-850	9層115a	010222	No.41	東海地方の搬入品か　南関東？
13	鹿乗川流域遺跡群	鹿乗川流	壺	橙色	畝出中	627	4Xc,G5C	011228	No.3768	東日本地域？
14	中狭間遺跡（安城市桜井町中狭間）	中狭間NH	甕	に赤～黄橙色	10-61 砂層	80		791130?		北陸系くずれ　北陸東部
15		中狭間NH	甕	に赤～黄橙色	14-65	85	AIC	791123		北陸東部（越後・越中）
16		中狭間NH	甕	に赤～橙～黒色	42-69,44-50,60-59 砂層	134		791123		北陸系
17		中狭間NH	甕	に赤～黄橙～黒褐色	42-61 黒色土	133		791117		北陸系
18		中狭間NH	甕	に赤～黄褐色	70-67 砂層	292		791213		瀬戸口編、北陸系・山陰の要素もあり
19		中狭間NH	甕	に赤～橙色	78-69	298		791209	No.649	東京型
20	本神遺跡（安城市古井町本神）		壺	浅黄橙色	-		H.D44			灰白色コンテナNo.41～46
21			壺	灰白色	-		H.D64			灰白色/注記不明
22			壺	灰白色	-		H.D64			明黄褐色/注記不明
23			甕	黄褐色	-		H.D64			明黄褐色/注記不明
24			甕	に赤～黄橙色	-		H.D64			明褐色/注記不明
25			甕	に赤～黄橙色	-		H.D64			明褐色/注記不明
26			甕	明赤褐色	-		H.D64			橙色/カメ部位遺外
27			甕	明赤褐色	-		H.D64			橙色/カメ部位遺外
28			高杯	明赤褐色	SD1		H.BG,G5	111207	No.1019	赤褐色
29			壺	明赤褐色	SD1		H.BG,G5	111129	No.0185	赤褐色
30	寄島遺跡（安城市小川町上太田地内）	2AYJ07B	台付甕	に赤～黄橙色	2100SX	E-338		071226		S字状口縁
31		2AYJ07B	台付甕	明灰褐色	2210SB	E-366		080111		S字状口縁
32		2AYJ07B	深鉢	暗褐色	2282SK	E-454		080116		
33		2AYJ07C	壺	灰黄褐色	3088SB	E-440		080312		条痕文
34		2AYJ12A	壺	灰黄褐色	258SI	E-183	最下層	121108		中期初頭
35		2AYJ12A	壺	黒色	2586SI,0076SZ3層	E-182		121105		中期初頭
36		2AYJ12B	高杯	に赤～黄褐色	015SK	E-163		121212		屈折脚,脚ミガキ
37		2AYJ12B	高杯	橙色	025SI	E-8	①上層	130109		屈折脚,脚ミガキ
38		2AYJ12B	高杯	に赤～黄橙色	034SI	E-52	①上層	130121		屈折脚,脚ミガキ
39		2AYJ12B	甕	に赤～褐色	034SI	E-57	①	130130		
40		2AYJ12A	壺	灰黄褐色	020SI	E-110	下層	120603		ナデ,直線系
41		2AYJ12B	直口壺	に赤～褐色	1-47SP(03-48)2)	E-67	下層	130128		横ミガキ
42		2AYJ13B	加飾壺	灰白色	東壁	E-658	28層	140203		
43		2AYJ11B	台付壺	灰白色	003NR	E-938	3-(11)層	110906		目盛施文
44		2AYJ11B	ヒサゴ壺	灰白色	003NR	E-935		110830		在地系
45		2AYJ11B	高杯	黒褐色	003NR	E-881	(2)	110824		
46		2AYJ11B	高杯	灰白色	003NR	E-888	下層	110831		
47		2AYJ11B	壺	に赤～黄橙色	003NR	E-955	(1)	110823		
48		2AYJ11B	大鉢	灰色	003NR	E-1076	(1)	110829		
49		2AYJ11C	台付甕	1398D		E-1113	1C	110801		
50		2AYJ11C	甕	橙色	080SX トレンチ3内	E-1088	1C	110706		

分析方法は、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。各土器片は、以下の方法で処理して土器薄片を作製した。

(1) 試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

これらの土器薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

［珪藻化石］　珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

［骨針化石］　海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

［植物珪酸体化石］　主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

［胞子化石］　胞子は、直径約10～30μm程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］　石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

［長石類］　長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

［雲母類］　一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩など、ケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

［輝石類］　主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

［角閃石類］　主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

［ガラス質］　透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

［片理複合石英類］　石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

［砂岩質・泥岩質］　石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

［複合石英類］　複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

［斑晶質・完晶質］　斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

［流紋岩質］　石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

［凝灰岩質］　ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

［不明粒子］　下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

表14　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

No.	遺跡名	遺構	粒度	容量	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物長石・岩類組成
1	鳥子遺跡	窯	350cc～ 700cc	1.32	mm	珪藻化石（ほぼ試料全体を占める群集組成Fragilaria pinnata var.lanceo、Cocconeis scutella、Synedra ulna、Pinnularia sp.、不明殻）、骨針化石多産（17）、植物珪酸体化石、殻子化石（1）。	石英・長石類：斑晶石英類（大型）、斑晶石英類（微細）、角閃石類、斑晶石英類（中型）、カリ長石（バーサイト）、斜長石（風化）、ジルコン、斑晶石英類（小型）、ガラス質、凝灰岩質、珪藻類、ガラス化、黒曜石
2		甕	80cc～ 130cc	0.43	mm	骨針化石（2）、植物珪酸体化石	石英・長石類、角閃石類、ガラス質、カリ長石（バーサイト）、斜長石（風化）、ジルコン、斑晶石英類（微細）、黒曜石
3		甕	120cc～ 400cc	2.14	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類、ジルコン、斜長石（風化）、カリ長石（バーサイト）、角閃石類、ガラス質、斜長石類（大型）、斑晶石英類（微細）、凝灰岩質
4		小型甕	80cc～ 300cc	2.03	mm	骨針化石（6）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：ジルコン、斜長石（風化）、角閃石類、カリ長石（バーサイト）、斜長石類、斑晶石英類（微細）、斑晶石英類（大型）、黒曜石、ガラス質、凝灰質、珪藻類
5		高杯	110cc～ 390cc	1.44	mm	骨針化石（8）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン、黒曜石、カリ長石（バーサイト）、斜長石類、角閃石類、凝灰質、斑晶石英類（微細）、斑晶石英類（大型）、ガラス質
6		高杯	70cc～ 300cc	0.68	mm	骨針化石多産（20）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン、黒曜石、カリ長石（バーサイト）、斜長石類、角閃石類、ガラス質、斜長石類（大型）
7		底台部	420cc～ 350cc	1.00	mm	骨針化石（35）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）カリ長石（バーサイト）、角閃石類、ガラス質、斜長石類（微細）、斜長石類（大型）、黒曜石、単結晶石
8	寄島川流域遺跡群	壺	70cc～ 180cc	0.61	mm	植物珪酸体化石	石英・長石類、黒曜石、ジルコン、斜長石（風化）、凝灰質、角閃石類、カリ長石（バーサイト）、ガラス質、斜長石類（大型）、斜長石類（微細）
9		壺	160cc～ 280cc	2.08	mm	骨針化石（2）	石英・長石類：斜長石類（微細）、斜長石類（大型）、斜長石類（中型）、斜長石類（小型）、ジルコン、凝灰質、斜長石（風化）、砂質、黒曜石、角閃石類、単結晶
10	下熊遺跡	甕	80cc～ 250cc	2.08	mm	骨針化石（12）、植物珪酸体化石、殻子化石、砂粒状若珪藻化石Navicula lucifiam	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類（微細）、ジルコン、カリ長石（バーサイト）、斜長石類、斜長石類（大型）、黒曜石、角閃石類、ガラス質
11		鉢台？	90cc～ 300cc	0.67	mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia、Aulacoseira属、不明殻成り多産）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類、ガラス質、黒曜石、斜長石（風化）、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（大型）、斜長石類、角閃石類
12	前東川流域遺跡群	壺	100cc～ 420cc	1.66	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類）、ジルコン、斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）、角閃石類、黒曜石、斜長石類（微細）、ガラス化
13		壺	80cc～ 200cc	0.54	mm	骨針化石（2）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類）、斜長石類（微細）、斜長石類（大型）、ジルコン、カリ長石（バーサイト）、黒曜石、斜長石類（大型）、角閃石類
14	中田田遺跡	壺	100cc～ 350cc	0.37	mm	骨針化石（6）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、斜長石類）、斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）、黒曜石、斜長石類（微細）
15		壺	80cc～ 280cc	1.27	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：ジルコン、斜長石（風化）、ガラス質、黒曜石、斜長石類（大型）、斜長石類（小型）、斜長石類（微細）、角閃石類、斜長石類（大型）
16		壺	80cc～ 600cc	2.27	mm	骨針化石多産（26）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、斜長石類）、カリ長石（バーサイト）、黒曜石、斜長石類（微細）、凝灰質
17		壺	120cc～ 480cc	3.11	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）、斜長石類（大型）、斜長石類（微細）、カリ長石（バーサイト）、黒曜石、凝灰質、単結晶石、斜長石類）
18		壺	100cc～ 400cc	1.44	mm	骨針化石多産（140）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）斜長石類）、角閃石類、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（大型）、斜長石類（大型）、黒曜石、斜長石類（微細）、ガラス化
19		壺	100cc～ 400cc	1.23	mm	骨針化石多産（8）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類）、ジルコン、角閃石類、斜長石類（大型）、斜長石類、凝灰質、斜長石類（微細）
20	本町遺跡	壺	100cc～ 300cc	2.20	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：ジルコン、黒曜石類）斜長石（風化）、斜長石類（大型）、斜長石類（微細）、角閃石類
21		壺	100cc～ 300cc	0.68	mm	骨針化石多産（135）、植物珪酸体化石多産	石英・長石類：ガラス質）斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、黒曜石類、カリ長石（バーサイト）、斜長石類、ガラス化
22		壺	80cc～ 320cc	1.44	mm	珪藻化石（淡水種Epithemia sorex）、骨針化石（3）、植物珪酸体化石多産	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）斜長石類（微細）、ガラス質、角閃石類、黒曜石類
23		壺	80cc～ 400cc	1.44	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、黒曜石類、ジルコン、斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）、角閃石類、ガラス化、カリ長石（バーサイト）
24		壺	70cc～ 300cc	1.44	mm	骨針化石（4）	石英・長石類：黒曜石類）斜長石（風化）、斜長石類（微細）斜長石類（大型）、ジルコン、角閃石類、斜長石類、ガラス化、カリ長石（バーサイト）
25		壺	100cc～ 400cc	4.05	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）、角閃石類、斜長石類）
26		壺	80cc～ 420cc	1.00	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、角閃石類、ジルコン）斜長石類（大型）、黒曜石類、斜長石類、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）、ガラス質
27		壺	90cc～ 300cc	1.00	mm	骨針化石（3）	石英・長石類：黒曜石類、斜長石（風化）、ジルコン）斜長石類（大型）、角閃石類、斜長石類）、斜長石類（微細）、斜長石類（大型）
28		高杯	70cc～ 280cc	0.60	mm	骨針化石（8）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石類（風化）、斜長石類）角閃石類、ジルコン、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（大型）、ガラス質
29		壺	80cc～ 250cc	1.00	mm	骨針化石（12）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、黒曜石類、カリ長石（バーサイト）、ガラス化、斜長石類（大型）、斜長石類（微細）
30	台付甕	甕	90cc～ 300cc	1.00	mm	骨針化石（2）、植物珪酸体化石多産	石英・長石類：斜長石類（風化）、斜長石類（微細）斜長石類（大型）、斜長石（風化）、ジルコン、角閃石類、斜長石類）、カリ長石（バーサイト）、黒曜石類、ガラス化、石英質化石類
31	台付甕	甕	70cc～ 280cc	0.76	mm	骨針化石（2）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：ガラス化、ガラス質）斜長石類（微細）、角閃石類、斜長石（風化）、ジルコン、カリ長石（バーサイト）、凝灰質、黒曜石、斜長石類（大型）、斜長石類）
32	深谷	甕	300cc～ 650cc	1.00	mm	珪藻化石（淡水種Navicula属）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、角閃石類、カリ長石（バーサイト）、ジルコン、黒曜石類、斜長石類（大型）、斜長石類（微細）、斜長石類）、凝灰質、ガラス化
33		壺	220cc～ 900cc	1.40	mm	骨針化石（3）、殻子化石	石英・長石類：斜長石類（大型）、斜長石（風化）、ジルコン）、凝灰質、カリ長石（バーサイト）、角閃石類、斜長石類（微細）、斜長石類）
34		壺	450cc～ 750cc	0.35	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類（大型）カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）、角閃石類、黒曜石類、斜長石類）、ジルコン、
35		壺	400cc～ 850cc	0.26	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：角閃石類、斜長石（風化）斜長石類）斜長石類（大型）、ジルコン、黒曜石類、ガラス質
36		高杯	100cc～ 250cc	1.32	mm		石英・長石類：黒曜石類、ジルコン、斜長石類（微細）、角閃石類、斜長石類（大型）、斜長石（風化）、ガラス質
37		高杯	60cc～ 250cc	0.96	mm	骨針化石（2）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）、カリ長石（バーサイト）、黒曜石類、角閃石類、斜長石類（微細）、ガラス質
38		高杯	100cc～ 420cc	0.48	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、斜長石類）斜長石類（微細）、黒曜石類、斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）
39		甕	120cc～ 350cc	2.32	mm	植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、ジルコン、斜長石類（微細）、黒曜石類、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（大型）、ガラス質
40	寄島遺跡	壺	110cc～ 400cc	1.40	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、ジルコン）斜長石類（大型）、黒曜石類、斜長石類（微細）、カリ長石（バーサイト）、凝灰質
41		底台部	120cc～ 350cc	1.12	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石、殻子化石	石英・長石類：斜長石（風化）、黒曜石類、ジルコン、角閃石類）カリ長石（バーサイト）、凝灰質、ガラス化
42		加飾壺	100cc～ 800cc	0.76	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石類（風化）、斜長石類（微細）斜長石類（大型）、ジルコン、角閃石類、カリ長石（バーサイト）、黒曜石
43		台付甕	80cc～ 420cc	1.00	mm	骨針化石（4）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石類（風化）、斜長石類（微細）斜長石類（大型）、ジルコン）斜長石（風化）、ガラス質、角閃石類、斜長石類（中型）、凝灰質
44		ミヤノ甕	100cc～ 380cc	1.40	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石類）斜長石（風化）、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）、ジルコン、斜長石類、角閃石類
45		高杯	100cc～ 350cc	2.05	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：ガラス質、斜長石（風化）、黒曜石類、斜長石類（微細）、カリ長石（バーサイト）、ジルコン、角閃石類、斜長石類）
46		高杯	120cc～ 420cc	2.23	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石	石英・長石類：斜長石（風化）、斜長石類）、斜長石類（大型）、ジルコン）カリ長石（バーサイト）、斜長石類、黒曜石類、斜長石類（微細）、斜長石類（小型）
47		壺	80cc～ 300cc	0.76	mm	珪藻化石（不明殻）、骨針化石（6）、植物珪酸体化石	石英・長石類：黒曜石類）斜長石（風化）、ジルコン）角閃石類、斜長石類（微細）、角閃石類、斜長石類（大型）、斜長石類（中型）
48		大鉢	100cc～ 350cc	1.00	mm	骨針化石多産（8）、植物珪酸体化石多産、殻子化石	石英・長石類：斜長石類）、角閃石類）斜長石類（大型）、ジルコン）ガラス化、斜長石（風化）、黒曜石、ガラス質
49		台付甕	80cc～ 300cc	1.50	mm	骨針化石（22）、植物珪酸体化石多産、殻子化石	石英・長石類：ガラス質、ジルコン、斜長石（風化）、角閃石類、斜長石類（大型）、カリ長石（バーサイト）、斜長石類（微細）
50		壺	70cc～ 230cc	2.47	mm	骨針化石（3）、植物珪酸体化石、殻子化石	斜長石類（微細）3 ガラス質、石英・長石類、斜長石（風化）、斜長石類）斜長石類（大型）、斜長石類（小型）、ジルコン、斜長石類（中型）、斜長石（風化）、凝灰質、斜長石類、単結晶石、角閃石類、黒曜石、カリ長石（バーサイト）

3. 結果および考察　以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察結果について述べる。胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、表14における不等号は、おおまかな量比を示す。

3-1. 微化石類による粘土材料の分類　各土器の薄片全面の観察の結果、珪藻化石や骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである〔地学団体研究会・地学事典編集委員会，1981〕。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は土器の粘土材料中に含まれると考えられ、粘土材料中に含まれている植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a）淡水成粘土、b）水成粘土、c）その他粘土、の3種類に分類された【表15】。表3において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、表2の微化石類の特徴欄の骨針化石の（）内の数字は計数値を示す。

1）淡水成粘土（3試料）　これらの土器胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。このうち、姫下遺跡の甕（No.1）では、沼沢湿地付着生指標種群のEunotia praerupta var.bidensなどが特徴的に含まれ、沼沢湿地成の粘土と考えられる。

2）水成粘土（41試料）　これらの土器胎土中には、骨針化石または不明種珪藻化石が含まれていた。なお、分析No.6、No.16、No.18、No.21では骨針化石が多産した。

3）その他粘土（6試料）　これらの土器胎土中には、堆積環境を指標するような珪藻化石または骨針化石は含まれていなかった。

表15　土器胎土中の粘土および砂粒の一覧表

| No. | 遺跡名 | 分類 | 粘土の組成 | 粘土の特徴 | | |

3-2. 土器胎土中の砂粒組成による分類　本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定するのが困難となる。ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った【表 15】。岩石の推定は、片岩質が片岩類（A/a）、複合石英類（大型）が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質または軽石質がテフラ（G/g）である。ただし、結晶度の低い斑晶質・完晶質は、凝灰岩類と考えられる。推定した起源岩石は、表 4 の組み合わせに従って分類した。以下に、胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。

1）主に深成岩類からなる B 群（42 試料）　これらの胎土中の砂粒は、大型結晶で構成される複合石英類からなり、その他起源の岩石は少ない。なお、砂粒が少なくかつ細粒の土器において、堆積岩類や火山岩類などのその他起源の砂粒を含まない場合、ジルコンやカリ長石 (パーサイト) あるいは角閃石類を多く含む場合には、深成岩類（B）群とした。

この岩石組成は、主に花崗岩が広く分布する地域と考えられ、東海地域では東濃地域～瀬戸猿投山地域、豊田市～岡崎市の東側地域に広く分布する領家花崗岩類などが起源と考えられる。

2）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群（3 試料）

これらの胎土中の砂粒は、主に深成岩類が多く、堆積岩類も多く含まれていた。

3）主に堆積岩類からなる C 群（1 試料）　この胎土中の砂粒は、主に深成岩類が多く、ガラス質のテフラも多く含まれていた。

4）主に堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群（3 試料）

これらの胎土中の砂粒は、主に堆積岩類が多く、深成岩類も多く含まれていた。

5）主にテフラと深成岩類からなる Gb 群（1 試料）

この胎土中の砂粒は、主にテフラが多く、深成岩類も多く含まれていた。

3-3. 各遺跡土器の材料に関する特徴　土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、1）淡水成粘土（3 試料）、2）水成粘土（41 試料）、3）その他粘土（6 試料）の 3 種類に分類された。一方、岩石種の推定とその組み合わせから、1）主に深成岩類からなる B 群（42 試料）、2）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群（3 試料）、3）主に堆積岩類からなる C 群（1 試料）、4）主に堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群（3 試料）、5）主にテフラと深成岩類からなる Gb 群（1 試料）の 5 種類に分類された。以下に、各遺跡における土器材料の特徴について述べる。

［姫下遺跡（7 試料）］　粘土材料は、淡水成粘土が 1 試料、水成粘土が 6 試料であった。また、砂粒組成は、深成岩類からなる B 群・(B) 群が 5 試料、深成岩・堆積岩類 Bc 群が 2 試料であった【表 17】。

全体としては、水成粘土で、主に深成岩類の砂粒からなる胎土が多い。

［下懸遺跡（5 試料）］　粘土材料は、淡水成粘土が 1 試料、水成粘土が 3 試料、その他粘土が 1 試料であった。また、砂粒組成は、深成岩類からなる B 群・(B) 群が 3 試料、堆積岩・深成岩類 Cb 群が 1 試料、テフラ・深成岩類 Gb 群が 1 試料であった【表 17】。

［鹿乗川流域遺跡群 (1 試料)］　粘土材料が水成粘土で、砂粒組成が深成岩類からなる B 群であった【表 17】。

［中挟間遺跡（6 試料）］　粘土材料はいずれも水成粘土であり、砂粒組成はいずれも深成岩類からなる B 群・(B) 群であった【表 17】。

［本神遺跡（10 試料）］　粘土材料は水成粘土 9 試料、その他粘土 1 試料であった。また、砂粒組成はいずれも深成岩類からなる B 群・(B) 群であった【表 17】。

［寄島遺跡（21 試料）］　粘土材料は、淡水成粘土が 1 試料、水成粘土が 16 試料、その他粘土が 4 試料であった。また、砂粒組成は、深成岩類からなる B 群・(B) 群

表 16　岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

が17試料、深成岩・堆積岩類Bc群が1試料、堆積岩類からなるC群が1試料、堆積岩・深成岩類Cb群が2試料であった【表17】。

全体としては、水成粘土で、主に深成岩類の砂粒からなる胎土が特徴的に多い。

3-4　土器の材料　粘土の種類と砂粒組成の関係では、水成粘土で深成岩類B群（(B) 群を含む）からなる胎土が最も多く、35試料であった。水成粘土では、深成岩・堆積岩類Bc群が2試料、堆積岩類からなるC群が1試料、堆積岩・深成岩類Cb群が3試料であった。淡水成粘土では、深成岩類B群からなる胎土が1試料、深成岩・堆積岩類Bc群から成る胎土が1試料、テフラ・深成岩類Gb群が1試料であった。その他粘土では、深成岩類B群（(B) 群を含む）からなる胎土が6試料であった。

寄島遺跡および比較した遺跡の周辺では、碧海面をなす碧海層（中位段丘；図1の tm）が分布するが、この碧海層は後期更新世（リス氷期からヴュルム氷期前半）までに形成されたデルタ性堆積物（海成シルトなど）で構成される〔森山，1994〕。今回の寄島遺跡および周辺遺跡の土器においては、海成粘土を用いた土器は検出されなかった。

姫下遺跡の坩（分析No.2）、直口壺（分析No.7）、下懸遺跡の壺（分析No.9）、鹿乗川流域遺跡群の壺（分析No.13）、中狭間遺跡の甕（分析No.16）、本神遺跡の甕（分析No.23、No.26、No.27）、高坏（分析No.28）、壺（分析No.29）、寄島遺跡の高坏（分析No.37、No.38）、台付甕（分析No.49）、甕（分析No.50）は、胎土断面などにおいて明赤褐色や橙色を呈し、薄片観察において赤褐色や赤色の（微）粒子が多く含まれていた。

西三河平野（岡崎平野）では、三好面や挙母面の表層部に、赤色土の化石土壌と考えられているきわめて赤い表土が発達する〔森山，1994〕。松井〔1976〕は、こうした赤黄色土の特徴と成因に関し以下のように述べている。すなわち、土壌学では、B層と呼ばれる粘土質の土層で、著しい風化作用と洗脱作用（粘土表面に吸着されていた塩基が洗脱）の生成物であり、もともと鉄分に富む母岩からは赤色土、鉄分に乏しい母岩からは黄色土ができやすい。日本の赤色土の大半は、中位段丘堆積物（南関東の下末吉期相当層）の堆積期に相当する温暖期（間氷期）に生成した古赤色土である。したがって、古赤色土の生成期は、高位段丘形成後、その浸食末期～中位段丘構成層の堆積期（下末吉期：12.5万年前）に相当する。遺跡に隣接する台地は、この中位段丘であり（図278の tm）、その表層土は特徴的な赤色土を呈する粘土質堆積物である。

明赤褐色や橙色を呈する土器の粘土材料は、これらの赤色土層の粘土を利用していたと考えられる。なお、こうした明赤褐色や橙色の土器では、主として深成岩類の砂粒からなる土器が多い。

4. おわりに　土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土は、1) 淡水成粘土、2) 水成粘土、3) その他粘土の3種類に分類された。一方、岩石種の推定とその組み合わせから、1) 主に深成岩類からなるB群、2) 主に深成岩類と堆積岩類からなるBc群、3) 主に堆積岩

表17　遺跡・器種毎の粘土の種類・砂粒組成

遺跡	器種	深成岩類（B群）			深成岩類（B群）		深成岩・堆積岩類（Bc群）		堆積岩類（C群）・深成岩類（Cb群）・深成岩類（G群）			合計
		淡水成	水成	その他	水成	その他	淡水成	水成	水成	水成	淡水成	
姫下遺跡	直口壺		1									1
	小型丸底壺							1				1
	坩		1		1							2
	甕						1					1
	高坏				2							2
下懸遺跡	壺		1			1				1		3
	甕		1									1
	器台？										1	1
鹿乗川流域遺跡群	壺				1							1
中狭間遺跡	甕		5		1							6
本神遺跡	壺		2		2							4
	甕		3	1	1							5
	高坏				1							1
寄島遺跡	壺		3		1							4
	ヒサゴ壺		1									1
	短脚坏		1									1
	直口壺				1							1
	台付壺							1				1
	甕			1								1
	甕					1			1			2
	台付甕		1							2		3
	器台	1										1
	大鉢		1									1
	高坏		2	2	1							5
合計		1	23	4	12	2	1	2	1	3	1	50

類からなる C 群、4) 主に堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群、5) 主にテフラと深成岩類からなる Gb 群の 5 種類に分類された。

寄島遺跡および周辺遺跡から出土した土器は、水成粘土で深成岩類 B 群（(B) 群を含む）からなる土器が最も多い。また、明赤褐色や橙色など赤味のある土器は、隣接する中位段丘堆積物に見られる赤色土が利用されたと推定される。

藤根　久・米田恭子（パレオ・ラボ）

参考・引用文献
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理．42（2），73-88．
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典．1612p．平凡社．
藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会，土器・窯が語る．108 － 117．
藤根　久・今村美智子（2001）第 3 節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．「波志江中宿遺跡」：262-277．日本道路公団・伊勢崎市・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団．
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究．27，1-20．
牧本　博・山田直利・水野清秀・高田　亮・駒澤正夫・須藤定久（2004）20 万分の 1 地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」．独立行政法人産業技術総合研究所　地質調査総合センター．
松井　健（1976）赤黄色土．特集「日本の土壌」アーバンクボタ，No.13，10-11．株式会社クボタ．
森山昭雄（1994）西三河平野，碧海層の堆積構造と海水準変動．地理学評論．67A-10，723-744．
日本の地質『中部地方 II』編集委員会編（1988）日本の地質 5　中部地方 II．共立出版．310p．

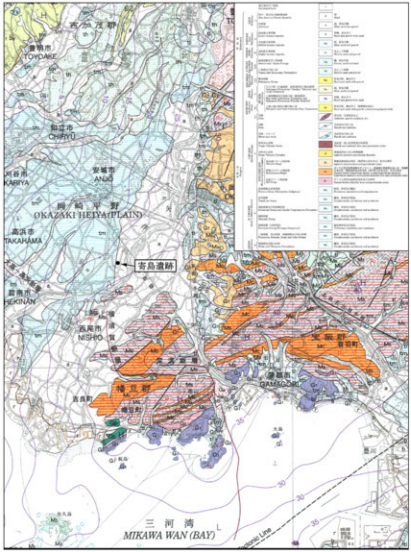


図 278　寄島遺跡とその周辺の地質図
（牧本ほか（2004）20 万分の 1 地質図「豊橋及び伊良湖岬」を編集）

第5節　寄島遺跡12A・B区出土炭化種実

はじめに　愛知県安城市小川町に位置する寄島遺跡は、矢作川下流域、鹿乗川右岸の沖積地に立地する集落跡である。ここでは、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構から出土した土器内の土壌を水洗して得られた炭化種実について同定を行い、当時の利用植物や栽培状況について検討した。

試料と方法　試料は、土器内の土壌試料22試料である。うち3試料は木材のみであったため、検討の対象外とした。試料が採取された土器の出土遺構は、12A区では竪穴住居跡が061SIと066SIの2棟、土坑が099SKと287SKの2基、ピットが163SPと298SP、340SPの3基、遺物集積が258SUの1基、不明遺構が070SXの1基、12B2区では竪穴住居跡が024SIと029SI、034SI、036SIの4棟、ピットが146SPと147SP、148SPの3基、炉が040SLの1基である。遺構の時期は、いずれも弥生時代後期～古墳時代前期と考えられている。

試料の水洗は、500ccを基本の水洗量とし、500ccに満たない試料は100cc単位で全量を水洗した。水洗はパレオ・ラボで行い、最小0.5mm目の篩を用いた。水洗量（cc）は、表を参照されたい。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

結果　同定した結果、木本植物ではサンショウ炭化種子の1分類群のみ、草本植物ではタデ属炭化果実とアカザ属炭化種子、ヒトリシズカ果実、ヒエ炭化種子、イネ炭化籾殻・炭化小穂軸・炭化種子、アワ炭化種子、イネ科炭化種子の7分類群の、合計8分類群が産出した（表1、2）。科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。炭化種実以外には、炭化した子嚢菌が得られた。

以下に、炭化種実の産出状況を遺構別に記載する（同定不能炭化種実は除く）。

061SI：イネが少量、サンショウとタデ属、アカザ属、アワ、イネ科がわずかに得られた。

066SI：同定可能な炭化種実は得られなかった。

024SI：イネがわずかに得られた。

029SI：アカザ属とヒエ、イネがわずかに得られた。

034SI：ヒトリシズカとイネがわずかに得られた。

036SI：アカザ属がわずかに得られた。

099SK：同定可能な炭化種実は得られなかった。

287SK：タデ属がわずかに得られた。

163SP：同定可能な炭化種実は得られなかった。

298SP：イネがわずかに得られた。

340SP：イネがやや多く、アワが少量、タデ属とアカザ属がわずかに得られた。

146SP：イネがわずかに得られた。

147SP：ヒトリシズカとイネがわずかに得られた。

148SP：アカザ属とイネがわずかに得られた。

258SU：アカザ属とイネがわずかに得られた。

070SX：イネがわずかに得られた。

040SL：イネがわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) サンショウ　Zanthoxylum piperitum (L.) DC.

炭化種子　ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。縦方向に中央部まで伸びる稜線があり、短い臍が斜め下を向く。網目状隆線は、低く細かい。種皮は厚く硬い。長さ3.1mm、幅2.4mm、残存厚1.5mm。

(2) タデ属　Polygonum spp.　炭化果実　タデ科

側面観は紡錘形、断面は三稜形。表面は平滑で光沢がある。長さ1.2mm、幅1.0mm。

(3) アカザ属　Chenopodium spp.　炭化種子　アカザ科

上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突起し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ0.8mm、幅1.0mm。

(4) ヒトリシズカ　Chloranthus quadrifolius (A.Gray) H.Ohba et S.Akiyama　果実　センリョウ科

上面観は円形、側面観は完形ならば楕円形。表面の網目状隆線は、低く細かい。長さ2.3mm、残存幅1.4mm。

(5) ヒエ　Echinochloa esculenta (A.Braun) H.Scholz

炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は卵形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ1.2mm、幅1.1mm。

(6) イネ　Oryza sativa L.　炭化籾殻・炭化小穂軸・炭

化種子（頴果）　イネ科

籾殻の側面観は完形ならば長楕円形。基部（小穂軸）は残存していない。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。最大の破片で残存長 1.9mm、残存幅 1.0mm。基部の小穂軸は、残存長 1.0mm、残存幅 0.7mm。種子（頴果）は完形ならば上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがある。本来は両面に縦方向の 2 本の浅い溝があるが、不明瞭。残存長 1.6mm、残存幅 1.8mm。

(7) アワ　Setaria italica P.Beauv.　炭化種子（頴果）
イネ科

上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の 2/3 程度。長さ 1.2mm、幅 1.0mm。

(8) イネ科　Poaceae spp.　炭化種子

状態が悪いが、上面観は楕円形、側面観は狭卵形。内頴側は扁平。下端に全長の 2/3 以上のやや長細い胚がある。長さ 1.5mm、幅 0.8mm。

考察　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構から出土した土器内の土壌に含まれていた炭化種実を同定した結果、栽培植物で水田作物のイネが複数の遺構から得られ、畑作物のヒエとアワもわずかに得られた。いずれも食用部位が産出しており、調理中などに炭化した種子が検出された可能性がある。イネは籾殻や小穂軸も得られているため、籾の状態で炭化した可能性もある。イネは竪穴住居跡 6 棟のうち 4 棟、ピット 6 基のうち 5 基のほか、遺物集中、不明遺構、炉と、多くの遺構から出土した土器内で得られたのに対し、ヒエは竪穴住居跡 1 棟、アワは竪穴住居跡 1 棟とピット 1 基のみで少なく、イネと対照的であった。

また、野生植物で食用可能なサンショウが竪穴住居跡出土の土器内から得られた。タデ属とアカザ属は種によっては利用可能な種類があるが、いずれも 1 点ないし 2 点の産出量で、人間が利用したかは不明である。形状から野生種と考えられるイネ科は利用されなかった可能性が高く、偶発的に炭化し、堆積したと考えら

表 18　寄島遺跡から出土した炭化種実 (1)　（括弧内は破片数）

	調査区	12AX			12BZX				12AY				
	グリッド	9F14i		9F13j	9F19k	9F3i		9F20j	9F2j	9F19k	9F11k	9F17k	9F14g
	遺構	06150		06061	02443	02503		02453	01604	01606A	20376K	01315P	20805P
	層位	③上層	②下層	③上層	③上層	③上層	③上層	③上層	③上層	③上層	③上層		
	取上げNo.	No.83	No.95	No.615	No.21	No.26	No.96	No.77	No.94	No.49	No.90	No.47	No.84
	時期	弥生時代後期～古墳時代前期											
分類群	水洗量 (ml)	500	500	500	500	200	500	500	500	100	500	200	300
サンショウ	炭化果皮	(1)											
タデ属	炭化果実	(1)	(1)								1		
アカザ属	炭化種子	(1)				1			1				
ヒトリシズカ	果実							(1)					
ヒエ	炭化種子					1							
イネ	炭化籾殻	(1)											
	炭化小穂軸	(28)	(20)		60	(2)		(2)					(2)
アワ	炭化種子	(1)											
イネ科	炭化種子	1	1										
同定不能	炭化果実	(25)	(25)			(7)	(9)	(19)	(2)	(4)			(3)
	時期	概実なし					概実なし				概実なし		

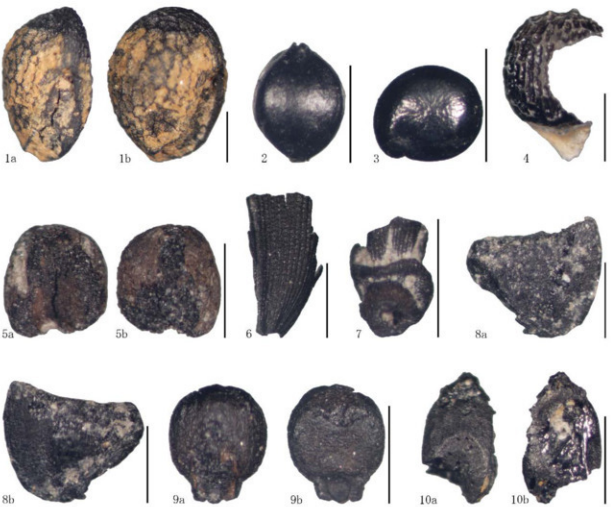
表 19　寄島遺跡から出土した炭化種実 (2)　（括弧内は破片数）

	調査区	12AX				12BZX			12AX			12BZX
	グリッド	9F14i				8F20j			9F10g			8F19k
	遺構	34108P			34085P	34178P	14885P	25485U			07585X	04605L
	層位	土壌上層	土壌下層	-	(03458①)	(03458②)	(03458③)	(07585X②補)	(07585X④)		-	(04250①)
	取上げNo.	No.35外		No.94外		No.100外		No.51	No.38外			No.22
	時期	弥生時代後期～古墳時代前期										
分類群	水洗量 (ml)	500	500	500	50	400	100	500	500	500	100	
タデ属	炭化果実	(1)		(2)								
アカザ属	炭化種子	1		(1)			(1)		(1)			
ヒトリシズカ	果実					(1)						
イネ	炭化籾殻	(6)	(5)	(12)	(2)							
	炭化小穂軸	(55)	(14)	(62)		(3)	(2)	(1)		(1)	(1)	
	炭化種子	(1)		(2)			(1)					
アワ	炭化種子	7 (1)	7	3 (1)								
同定不能	炭化種実	(27)	(32)	(19)	(1)	(40)				(1)	(1-4)	
子葉類	炭化子葉	1										

れる。草地などに生えるヒトリシズカの果実は骨質（炭酸カルシウム）であり、石灰岩地帯や貝層などでは生の状態で保存される。産出数も少ないので、偶発的に堆積した果実が残存した可能性がある。

今回検討した試料は土器内の土壌であったが、いずれの試料も特定の種実が大量に保管されていたような状況はみられなかった。ただし、ピット340SPから出土した2個体の土器内（No.93と94）には、イネの籾殻や小穂軸が多く含まれ、アワなどを伴う組成も類似しており、ピットの覆土自体にイネの籾殻などが堆積していた可能性があり、人為的に廃棄された可能性もある。

バンダリ スダルシャン・佐々木由香（パレオ・ラボ）



スケール 1-10:1mm

図279　寄島遺跡から出土した炭化種実

1. サンショウ炭化種子（061SI、①上層、No.83）、2. タデ属炭化果実（287SK、上層、No.90）、3. アカザ属炭化種子（061SI、①上層、No.83）、4. ヒトリシズカ果実（034SI、③上層、No.77）、5. ヒエ炭化種子（029SI、①上層、No.36）、6. イネ炭化籾殻（340SP、土壌上層、N0.93内）、7. イネ炭化小穂軸（340SP、No.94内）、8. イネ炭化種子（340SP、土壌上層、N0.93内）、9. アワ炭化種子（340SP、土壌上層、N0.93内）、10. イネ科炭化種子（061SI、①上層、No.83）

第 6 節　土器の種実圧痕および貝類圧痕について

(1) 土器圧痕試料採取の経緯

1. はじめに　寄島遺跡の整理作業中に、土器圧痕のなかに、種実および巻貝の可能性が考えられるものがあるとの話を受けた。そのことから、27 リットルコンテナ 319 箱分の出土土器全点について確認を行い、検討候補を 22 点抽出した。

まず、土器の観察を行い、土器の中での圧痕位置および状態を記録し、メモ写真撮影を行い（写真 1）、観察表を作製した（表 1）。その中で、シリコン樹脂による型取り作業に耐える状態の土器 16 点について、レプリカ法に基づいてレプリカ資料 19 点を採取した。その中で、1012 は礫であったことが判明したため、その後の分析からは除外した。

以上の土器 15 点の圧痕から採取されたレプリカ資料 18 点について、SEM 画像撮影および同定は、パレオ・ラボによって行われた。詳細な結果は第 2 項に掲載する。

事情によりレプリカ作製ができなかったものについても、長軸方向の稜線が著しく発達しているものが多く、イネ（籾）の可能性が高いのではと想定される。

2. 植物種実圧痕の位置について　種実などの圧痕が認められた土器器種には、壷・甕・台付甕・高杯があり、壷・甕ともに多く認められるが、高杯には 2 点と少ない傾向にある。圧痕が確認された器面としては内外面ともに認められ、底部に関しては外面が圧倒的に多い。但し、胎土に対して圧痕の存在している位置は深いものがしばしばあり、937・995 などは実質的には胎土内に存在しているといえる。838 は事情によりレプリカ作成できなかったものであるが、これも土器の胎土内で確認された圧痕である。

植物種実に関しては、土器製作時に偶発的あるいは意図的に施されたものかは判断できないものの、器面深い位置で見つかった圧痕もあることから、他にも表面から見えない状態で、種実圧痕が存在している可能性もある。

3. 貝類圧痕について　登録番号 422 の土器圧痕資料は特に注目されるものである。土器胎土内から見つかった圧痕で、脚部上方に拡頂側、脚部下方に殻口側の状態となっている。この巻貝はほぼ完形のものであったと考えられる。ウミニナ類と推定される貝種であるが、寄島遺跡では貝層の形成が認められない遺跡で、干潟や河口付近から採集されたものが遺跡内に搬入されたものであろう。

断定はできないものの、この事例については、土器製作時において、意識的に入れられた可能性が高いものではないかと考えられる。（川添和暁）

図 280　422 の土器胎土内で見つかった貝殻圧痕の想定状態（貝は原生のヘナタリガイ）

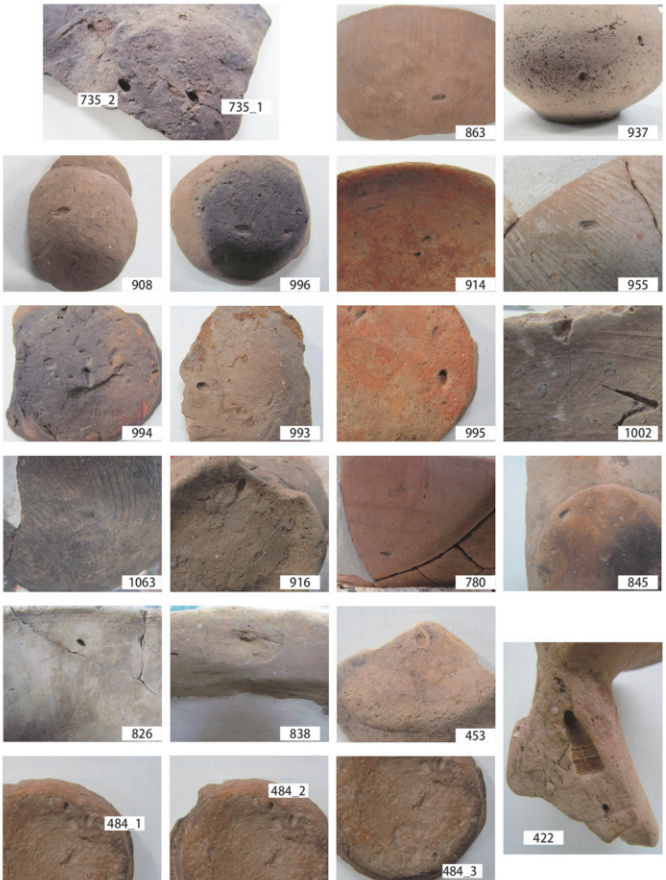


図281　寄島遺跡の土器圧痕写真

表 20　寄島遺跡の土器圧痕資料一覧（登録番号太字のものが、レプリカ法による確認資料）

試料通番	試料番号	**登録番号**	調査区	グリッド	遺構	取上番号	日付	種別	器種	圧痕所在位置	備考
1	2818_1	**735_1**	13B	8F3p	東壁29層		140131	土師器	甕	底部外面	
2	2818_2	**735_2**	13B	8F3p	東壁29層		140131	土師器	甕	底部外面	
3	3126_1	**863**	11B	2E12t	003NR	37	110829	土師器	高杯	杯部外面	
4	3157_1	**937**	11B	2E12t	003NR_4_11層	234	110906	土師器	赤口壺	胴部外面	
	3159_1	1012	11B	2E12t	003NR_ベルト4_（11層）		110905	土師器	甕	胴部内面	裸のため、未撮影
5	3160_1	**908**	11B	2E12t	003NR_ベルト4_（11層）		110906	土師器	壺	胴部外面	
6	3178_1	**996**	11B	2E13s	003NR上層		110831	土師器	壺	底部外面	
7	3180_1	**914**	11B	2E13t	003NRベルト		110909	土師器?	鉢	胴部内面	
		955	11B	2E13t	003NR(1)		110823	土師器	鉢	胴部外面	レプリカ未実施 モミか
8	3237_1	**994**	11B	2E12t	003NR下層		110831	土師器	壺	底部外面	
9	3256_1	**993**	11B	2E12t	003NR(1)		110817	土師器	甕	底部外面	
10	3262_1	**995**	11B	2E12t	003NR(1)		110822	弥生土器	壺	底部外面	
11	3273_1	**1002**	11B	2E12t	003NR(2)	58	110829	土師器	壺	胴部下半内面	
		1063	11B	2E12t	003NR(2)		110824	土師器	台付甕	胴部下半外面	レプリカ未実施 モミか
12	3307_1	**916**	11B	2E13s	003NR上層		110831	土師器	台付甕	底部外面	
		780	11B	2E12t	005SU		110831	土師器	高杯	胴部外面	レプリカ未実施 モミか
13	3439_1	**945**	11B	2E12t	010SU	200	110905	土師器	壺	底部外面	
		826	11B	2E12t	010SU	195	110905	土師器	高杯	胴部内面	レプリカ未実施 モミか
		838	11B	2E12t	010SU		110905	土師器	甕	胴部内面側胎土中	レプリカ未実施 イネ以外の雑穀種子?
		982	11B		東壁（003NR）		110907	土師器	壺	胴部内面	レプリカ未実施 モミか
14	4007_1	**484_1**	11A	2F7a	008NR	1	110727	土師器	壺	底部外面	
15	4007_2	**484_2**	11A	2F7a	008NR	1	110727	土師器	壺	底部外面	
16	4007_3	**484_3**	11A	2F7a	008NR	1	110727	土師器	壺	底部外面	
17	4606_1	**453**	07C		3003SD	3105	080308	土師器	壺?	底部外面	
18		**422**	07B	1F2d	検2		071205	土師器	高杯	脚部胎土内	

(2) レプリカ法による土器の種実圧痕および貝類圧痕の同定

1. はじめに　寄島遺跡から出土した土師器や弥生土器には、土器の表面に種実や貝類の圧痕と思われる痕跡が確認された。ここでは、レプリカ法による種実圧痕の同定と貝類圧痕の同定を行った。

2. 資料と方法　資料は、弥生土器 1 点と土師器 16 点、土師器？1 点の、計 18 点である（表 1）。資料の抽出およびレプリカの作製は、愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。

レプリカを整形した後、金蒸着をして、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）で観察および写真撮影を行い、同定した。採取したレプリカおよび土器は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果　同定の結果、大型植物遺体の圧痕では草本植物のイネ籾・種子（頴果）とササゲ属アズキ亜属種子、マメ科種子の 3 分類群の他に、科以上の詳細な同定ができなかった不明 A 種実と不明 B 種実、不明冬芽が得られた。これらの他に、種実以外の同定不能圧痕と、カニモリガイ上科近似種の腹足綱が見出された。同定結果を表 2 に示す。

イネの圧痕が 8 点と最も多く、うち籾が 5 点、種子（頴果）が 3 点であった。アズキ亜属種子とマメ科種子、不明 A 種実、不明 B 種実、不明冬芽、カニモリガイ上科近似種腹足綱は各 1 点であった。

次に、分類群ごとに記載を行い、同定の根拠とする。

(1) イネ　Oryza sativa L.　籾・種子（頴果）　イネ科

籾は上面観が楕円形で、側面観は長楕円形。2 条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。果柄側は残存していない。No.916 は基部に護頴が残る。

No.993 は、外頴の一部が欠けている。いずれも内部に種子（頴果）が入った籾で、小穂軸が基部にある。種子（頴果）は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した窪みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。基部側から見た断面では、外頴と内頴の境側である鉤合部がやや盛り上がる。全体的に縦溝は不明瞭。

(2) ササゲ属アズキ亜属

Vigna subgenus Ceratotropis sp.　種子　マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。小畑ほか（2007）に示されたアズキ亜属の特徴である、長楕円形の臍の内部の厚膜（Epihilum）は見えない。臍は全長の半分から 2/3 ほどの長さで、片側に寄る。臍の下には種瘤があるが、確認できない。臍側は平滑で、その反対側はやや稜がある。

表21　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの同定結果（法量の括弧は破片数を示す、単位mm）

試料番号	試料番号	登録番号	同定結果		法量			備考
			分類群	部位	長さ	幅	厚さ	
1	2818_1	735_1	イネ	籾	6.64	(3.44)		
2	2818_2	735_2	イネ	籾	7.04	3.45		
3	3126_1	863	イネ	穂子（頴果）	6.71	3.36		
4	3157_1	937	不明A	穂実	3.29	2.38		
5	3160_1	908	同定不能（穂実以外）	不明				
6	3178_1	996	不明B	穂実	7.59	3.86		
7	3180_1	914	ササゲ属アズキ亜属	穂子	3.67	2.52	(1.60)	
8	3237_1	994	イネ	穂子（頴果）	6.93	3.48		
9	3256_1	993	イネ	籾	7.12	3.73		
10	3262_1	995	マメ科	穂子	5.26	(3.28)		
11	3273_1	1002	同定不能（穂実以外）	不明				
12	3307_1	916	イネ	籾	(5.89)	3.44		護頴が残存
13	3439_1	845	不明	冬芽	6.70	3.82		円錐形、芽鱗あり
14	4007_1	484_1	イネ	籾	6.92	4.20		
15	4007_2	484_2	同定不能	不明	5.14	3.08		
16	4007_3	484_3	同定不能（穂実以外）	不明	4.10	2.90		
17	4606_1	453	イネ	穂子（頴果）	6.00	3.40		膨張している
18		422	カニモリガイ上科近似種	腹足綱	17.50	6.84		

(3) マメ科　Fabaceae sp.　種子

上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形で、臍は残存していない。臍側の側面は平坦で、背面側が湾曲するが、残存状態は良くない。表面は平滑。

(4) 不明A　Unknown A　種実

いびつな楕円形で、中央がやや隆起する。表面は凹凸が激しいが、識別できるような特徴がみえない。

(5) 不明B　Unknown B　種実

側面観は長楕円形。片側に流れるような毛がある。上面は2条の隆起がわずかに確認できる。

(6) 不明　Unknown　冬芽

円柱形で、うろこ状の芽鱗が緩やかな突起となって残る。

(7) カニモリガイ上科　Cerithioidea　腹足綱

塔形の巻貝。螺層は5層以上、3本の螺肋は縦肋で区切られ、顆粒が並ぶ。以上の特徴から、カニモリガイ上科（ウミニナ類）と同定される。

4. 考察　寄島遺跡の弥生土器と土師器で検出された種実などの圧痕を検討したところ、14点について同定され、弥生土器からはマメ科種子、土師器からはイネ籾・種子（頴果）と、不明A・B種実、不明冬芽、カニモリガイ上科腹足綱が得られた。土師器？からはササゲ属アズキ亜属種子が得られた。イネは1点を除き、全て底部外面から得られており、土器作りの際に周辺に存在したイネの籾や種子が故意または偶発的に底面に押し付けられた可能性がある。

土師器？の鉢の胴部内面から得られたアズキ亜属種子は、長さ3.67mmで野生種のヤブツルアズキに近い大きさであった。

（佐々木由香・米田恭子・
バンダリ スダルシャン・中村賢太郎）

引用文献

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培．植生史研究，15-2，97-114．

川添和暁・佐々木由香®・米田恭子®・バンダリ スダルシャン®・中村賢太郎®（®パレオ・ラボ）

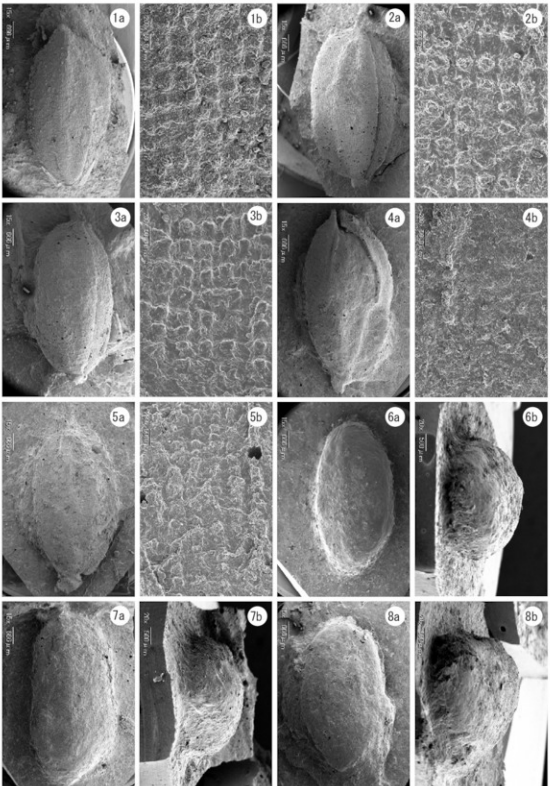


図 282　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（1）

1、イネ籾（No.916）、2、イネ籾（No.735_1）、3、イネ籾（No.735_2）、4、イネ籾（No.993）、5、イネ籾（No.484_1）、6、イネ種子（頴果）（No.863）、7、イネ種子（頴果）（No.994）、8、イネ種子（頴果）（No.453）

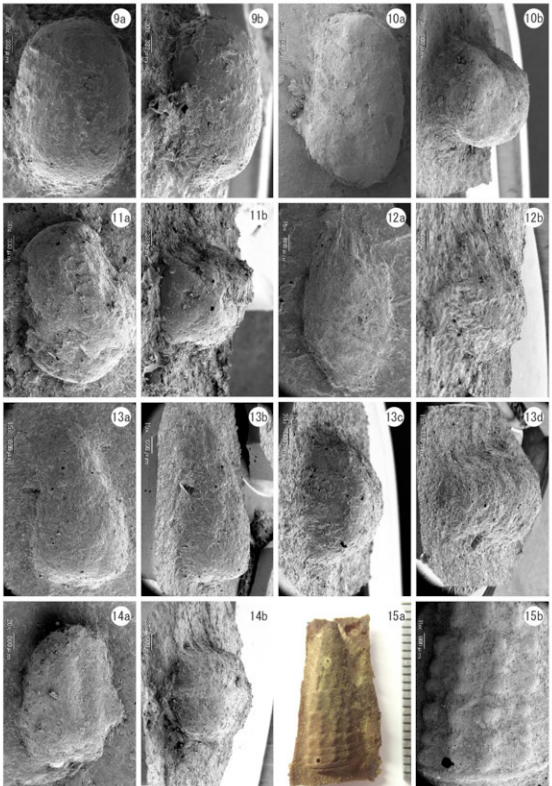


図 283　寄島遺跡の土器圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（2）

9．ササゲ属アズキ亜属種子（No.914）、10．マメ科種子（No.995）、11．不明 A 種実（No.937）、
12．不明 B 種実（No.996）、13．不明冬芽（No.845）、14．同定不能（種実以外）（No.484_3）、
15．カニモリガイ上科近似種巻貝（No.422）

第 7 節　土器付着物の放射性炭素年代測定

試料と方法　試料は、合計で 20 点の土器付着物である。測定試料の情報、測製データは表22のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果　表 22 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察　以下、2 σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林（2009）を、古墳時代の暦年代については赤塚（2009）を参照した。土器付着炭化物および塗膜の年代は、炭化物および塗膜が由来した有機物が生きていた頃の年代をおおまかに示している。今回の試料で、土器の推定時期である弥生時代末～古墳時代初頭に対しておおむね整合的な年代を示したのは、試料 No.6、9、11、17、19、20 の 6 点であり、他の試料は土器の推定時期よりもやや古い年代を示した。ただし、1 世紀から 3 世紀は日本産樹木が数十～ 100 14C yr ほど、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている（Sakamoto, 2003;尾嵜, 2009）。今回、IntCal13（欧米産樹木で作成）で較正した暦年代範囲は、実際の年代よりも数十～ 100 年程度古い可能性が考えられる。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセットで較正し直した場合、該当する時期の試料の暦年代範囲は、より新しい方に動く可能性がある。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克

引用・参考文献
赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代．日本文化財科学会第 26 回大会実行委員会編「日本文化財科学会第 26 回大会研究機発表要旨集」：14-20．日本文化財科学会．
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82．雄山閣.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」：3-20．日本第四紀学会.
尾嵜大真（2009）日本版較正曲線の作成と新たなる課題．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり　第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：4-8．雄山閣.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T. and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. Radiocarbon, 45, 81-89.

表 22　測定試料及び処理　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定試料および処理				放射性炭素年代測定および暦年較正の結果				
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
							1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-31643	試料No.6 遺物No.175 調査区：12A 遺構：034SP その他：1432	種類：土器付着炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-22.31±0.16	1725±18	1725±20	257-297 cal AD (39.3%) 321-346 cal AD (26.0%) 372-376 cal AD (2.9%)	252-384 cal AD (95.4%)
PLD-31645	試料No.8 遺物No.435 調査区：07C 遺構：307258X その他：1227	種類：土器付着炭化物 器種：甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-21.79±0.13	2058±18	2060±20	102- 42 cal BC (68.2%)	162-131 cal BC (9.7%) 118- 36 cal BC (79.4%) 31- 19 cal BC (2.9%) 12- 1 cal BC (3.4%)
PLD-31646	試料No.9 遺物No.603 調査区：13B 遺構：東望25柱 その他：2256	種類：炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部内面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-30.11±0.21	1723±18	1725±20	258-296 cal AD (34.1%) 321-349 cal AD (27.2%) 369-378 cal AD (7.0%)	252-385 cal AD (95.4%)
PLD-31647	試料No.10 遺物No.610 調査区：13B 遺構：東望25柱 その他：2260	種類：土器付着炭化物 器種：鉢 採取位置：側部内面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-27.30±0.17	1869±18	1870±20	84-141 cal AD (54.5%) 157-167 cal AD (5.6%) 196-208 cal AD (8.1%)	80-215 cal AD (95.4%)
PLD-31648	試料No.11 遺物No.929 調査区：11B 遺構：003NR下層 その他：3007	種類：土器付着炭化物 器種：ヒサゴ壺 採取位置：側下部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-20.54±0.16	1848±18	1850±20	130-176 cal AD (46.2%) 191-212 cal AD (22.0%)	90-100 cal AD (2.4%) 124-233 cal AD (93.0%)
PLD-31649	試料No.12 遺物No.781 調査区：11B 遺構：005SU その他：3384	種類：土器付着炭化物 器種：高坏 採取位置：口縁部内～外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-40.53±0.17	2250±22	2250±20	381-357 cal BC (25.6%) 285-235 cal BC (43.2%)	391-350 cal BC (33.4%) 306-209 cal BC (62.0%)
PLD-31650	試料No.13 遺物No.798 調査区：11B 遺構：005SU その他：3407	種類：土器付着炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-28.67±0.18	1926±18	1925±20	55- 87 cal AD (53.2%) 106-120 cal AD (15.0%)	29- 39 cal AD (5.0%) 50-126 cal AD (90.4%)
PLD-31651	試料No.14 遺物No.820 調査区：11B 遺構：007SU その他：3435	種類：土器付着炭化物 器種：鉢 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-27.03±0.14	1896±18	1895±20	84-125 cal AD (68.2%)	58-137 cal AD (95.4%)
PLD-31652	試料No.15 遺物No.1007 調査区：11B 遺構：003NR東壁 その他：3473	種類：土器付着炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-27.67±0.17	1996±19	1995±20	37-29 cal BC (10.2%) 22-10 cal BC (16.4%) 2 cal BC-25 cal AD (41.4%)	42 cal BC-53 cal AD (95.4%)
PLD-31653	試料No.16 遺物No.1032 調査区：11B 遺構：003NR その他：3244	種類：土器付着炭化物 器種：鉢 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-27.93±0.17	1908±18	1910±20	73- 90 cal AD (29.2%) 100-123 cal AD (39.0%)	58-130 cal AD (95.4%)
PLD-31654	試料No.17 遺物No.1052 調査区：11B 遺構：003NR～ベルト11間 その他：3023	種類：土器付着炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-28.33±0.17	1843±18	1845±20	133-178 cal AD (44.5%) 189-213 cal AD (23.7%)	126-236 cal AD (95.4%)
PLD-31655	試料No.18 遺物No.1059 調査区：11B 遺構：003NR下層 その他：3238	種類：土器付着炭化物 器種：受口甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：0.1N、 塩酸：1.2N）	-28.41±0.21	1913±19	1915±20	68- 90 cal AD (34.4%) 100-123 cal AD (33.8%)	53-130 cal AD (95.4%)
PLD-31656	試料No.19 遺物No.1061 調査区：11B 遺構：003NR～ベルト11間 その他：3210	種類：土器付着炭化物 器種：S字甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-27.55±0.20	1860±18	1860±20	92- 98 cal AD (3.9%) 125-176 cal AD (45.9%) 191-212 cal AD (18.3%)	86-221 cal AD (95.4%)
PLD-31657	試料No.20 遺物No.1063 調査区：11B 遺構：003NR(2) その他：3284	種類：土器付着炭化物 器種：台付甕 採取位置：側部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N、 水酸化ナトリウム：1.0N、 塩酸：1.2N）	-28.24±0.15	1844±19	1845±20	132-179 cal AD (43.9%) 188-213 cal AD (24.3%)	93- 97 cal AD (0.9%) 125-236 cal AD (94.5%)

第 5 章　考察と総括

第 1 節 鹿乗川流域遺跡群の弥生時代後期から古墳時代初頭の「平底甕」について

(1) はじめに

安城市の東部を南北に流れる鹿乗川流域の西岸には、弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺跡が立地し、寄島遺跡もその中に所在する。これらの遺跡群の特徴として、外来系土器が多いということと、線刻絵画土器も多く出土しているということがあげられる。特に前者の外来系土器ということでは、本神遺跡では「タタキ甕」が中狭間遺跡では「北陸系甕」がまとまって出土しており注目される。この両者とも共通点としてあげられるのが「平底甕」という形態をとるということである。伊勢湾岸地域では、弥生時代中期後半に台付甕が主流となって以降、凹線文土器の流入時に一時平底＋タタキ甕が作られるが、やがてその平底＋タタキ甕にも脚台を付ける在地品が出現し、中期の末から後期初頭には、多くが甕に脚台の付く「台付甕」となる。その後古墳時代初頭に至るまで伊勢湾岸域では台付甕が甕の主体であり続ける。

このように台付甕が在地にしっかりと定着している地域に現れた平底の「タタキ甕」と「北陸系甕」はかなり異質の存在と言える。後述するように、これら平底甕は在地土器群に直接的に与えた影響は少なく、土器組成の中に明瞭に組み込まれることはなかった。ただ廻間 III 式・布留式期以降の古墳時代前期に相当する時期、この地方でも平底・丸底甕が増加し、古墳時代中期には甕組成のかなりの割合を占めるようになる。廻間 III 式・布留式期以降の平底・丸底化に関しては、高坏の変化をみても畿内布留式土器群の影響が強いと考えられるが、それ以前の廻間 I ～ II 式・庄内式期にも鹿乗川流域「タタキ甕」・「北陸系甕」の他、惣作遺跡などで出土したハケ・ナデ調整された平底甕の一群がある。古墳時代初頭・早期と呼ばれる時期に、台付甕が主体の鹿乗川流域遺跡群においてこれらの平底甕がどのような存在であったのかみていきたい。

時期の呼称については各地域で用いられている呼称があるが、伊勢湾岸域全体を通して記述することを考え、尾張地域の編年である弥生時代後期の八王子古宮式期・山中式期、弥生時代終末期・古墳時代初頭の廻間式期で統一した。その場合廻間 I 式相当期とすべきであるが、煩雑になるので「相当」は割愛している。

(2) 各地の様相【図 284・285】

1. 西三河の様相　まず鹿乗川流域遺跡群が所在する安城市を中心に西三河の事例を取り上げてみたい。

1-A. 鹿乗川流域遺跡群（安城市）　本神遺跡では環濠と思われる溝状遺構を中心に、畿内 V 様式系タタキ甕がまとまって出土している（53 ～ 59）。時期はほぼ廻間 I 式期の中～後半期にあたる。大きさは口径 12 ～ 16cm・器高 24cm、口径 11 ～ 14cm・器高 12 ～ 17cm、口径不明・器高 10cm 以下に分類され、右上がりまたは平行で、密度が 3 ～ 3.5 本 /cm、または 1.5 ～ 2 本 /cm のタタキが施されている。口縁部はく字状に折れ曲がり、そのまま収束する。体部は縦長の楕円形を呈するもの、円形に近いもの、肩部が張る鉢状のものがある。底部は突出するものとそうでないものに分かれ、平底のもの・環状底のもの・わずかに上げ底状になるものに分かれる。また円形の体部をもち、環状底であるがハケ・ナデ調整される甕や、また採集品ではあるが縦長で楕円形の体部をもち、平底のハケ・ナデ調整甕も出土しており、タタキ平底甕の影響が指摘されている。畿内 V 様式系タタキ甕は本神遺跡だけではなく、中狭間遺跡（61）や釈迦山遺跡（63）・宮下遺跡・亀塚遺跡・下懸遺跡など多くの遺跡で出土しており、流域遺跡群内に広く分布していたことが分かる。ただタタキ技法は土器成形技法として定着することはなく、一部台付甕や製塩土器に取り入れられるのみである。

北陸系甕についても鹿乗川流域の遺跡群では、約 40 点出土している中狭間遺跡（64 ～ 67）だけではなく、彼岸田遺跡・宮下遺跡・亀塚遺跡・下懸遺跡（68）などいくつかの遺跡でも出土がみられる。底部の形状は下懸遺跡の 1 例を除きはっきりしないが、平底を呈すると思われる。中狭間遺跡出土例でみると、時期は廻間 I 式期末～ II 式期初めにかけてと考えられ、本神遺跡のタタキ甕の時期とほぼ同じか、わずかに新しくなる。

惣作遺跡の003NRではハケ調整された平底甕がまとまって出土している（72～75）。出土甕には平底甕と台付甕があり、平底甕は概ね大中小の大きさに分かれる。このうち大と中の平底甕は体部が円形を呈しており、よく似た形状をもつ。口縁部はく字状にそのまま折れ曲がるものと外彎するものがあり、端部もヨコナデによって面をもつものとそのまま収束するものがある。底部は環状底のものと平底のものがある。調整は体部外面が、下半が左右傾または上と不揃いであるが、上半は上か左傾のハケがなされる。内面も基本的にはハケまたはイタナデである。小型のものは縦長の楕円形を呈する体部をもつく字状口縁甕で、ハケ・ナデ調整を基本とする。上下がつまり鉢状を呈するものもみられる。時期は廻間Ⅱ式期と考えられる。また下懸遺跡（76）でも廻間Ⅰ式期後葉～Ⅱ式期の、く字状口縁をもち、体部が円形を呈する平底甕が出土している。

釈迦山遺跡では受口状口縁平底甕が1点出土している（69）。伊勢湾岸域では弥生時代後期以降、受口状を呈する口縁部をもつ甕が在地化して受口状口縁（台付）甕が成立し、土器組成の中に一定量組み入れられる。そのため口縁部のみでは平底か台付かの区別は難しいが、在地化した受口状口縁甕の口縁部の屈曲はゆるやかで、釈迦山遺跡出土のもののような明瞭な屈曲を示さない。逆に明瞭な屈曲部をもつものは平底甕の可能性があるわけであるが、鹿乗川流域の遺跡群ではそんなに多くないと思われる。釈迦山遺跡出土例は、縦長の楕円形の体部をもち、口縁部・体部とも無文である。口縁部は上げ底状の凹み底で、ハケ・ナデ調整が施されている。出土状況からの時期比定は難しいが、概ね廻間Ⅰ式期後半～Ⅱ式期であると考えられる。また同遺跡からは、タタキの後にハケを施すタタキ甕（62）も出土している。さらに彼岸田・上橋下遺跡でも環状底をもつ無文の受口状口縁平底甕が出土している。

姫下遺跡では布留系の土器群が出土している（78～81）。出土土器には布留甕をはじめ高坏・浅鉢・小型壺・直口壺など、畿内で出土する「布留式土器」と近い様相を示す一群と、その影響を受けて作られた在地土器の一群、さらに二次的に影響を受けた一群があり、これらを「姫下型土器群」と呼称した。その他在地土器であるハケ・ナデ平底甕と台付甕が認められる。時期は河道出土ものが多く比定が難しいが、概ね廻間Ⅲ式期中葉～後葉と考えられる。

1-B. その他の地域　矢作川中流域の豊田市伊保遺跡では畿内Ⅴ様式系タタキ甕が50点以上まとまって出土している（82～86）。大きさは口径17～18cm・器高26～27cm、口径14～16cm・器高22～23cm、口径13～15cm・器高14～16cm以下に分類され、右上がりまたは平行のタタキが施されている。タタキの密度は2～3本/cmで、体部も円みを帯びている。口縁部にはく字状に折れ曲がるものとゆるやかに外彎するものがあり、端面はそのまま丸く収束する。底部は突出するものとそうでないものに分かれ、平底のものと環状底のものがみられる。これらのタタキ甕の時期は、本神道跡よりやや遅れる廻間Ⅱ式期に比定される。

また豊田市高橋遺跡でも一定量の畿内Ⅴ様式系タタキ甕が出土しており、羽状のタタキをもつものやタタキが施された台付甕も出土している。また神明遺跡でも廻間Ⅰ式期後半～Ⅱ初頭のタタキ平底甕と廻間Ⅱ式期のタタキ台付甕（87）が出土しており、その他上万場遺跡（88）や新金山遺跡でも小型平底甕が出土している。

岡崎市の高木遺跡の土坑や方形周溝墓から、廻間Ⅰ式期後半～Ⅱと思われるタタキ平底甕やハケ・ナデ平底甕が出土している。また楼遺跡では廻間Ⅰ式期後半と思われるハケ・ナデ平底甕が出土している。八畝畑遺跡は廻間Ⅲ期に多量の土器廃棄がなされた遺跡であるが、丸底甕や平底甕が出土している。また体部下端にタタキが施された小型甕や台付甕も出土する。

知立市天神遺跡では平行タタキをもつ甕が、小針遺跡では右上がりと平行タタキが施された受口状口縁台付甕が出土している。前者の時期は不明であるが、後者は廻間Ⅱ式後半～Ⅲ式期に比定される。

西三河の平底甕の様相まとめると、タタキ甕は鹿乗川流域遺跡群の本神道跡やや豊田市伊保遺跡・高橋遺跡のようにまとまって出土する遺跡があり、少量ではあるが西三河全域に広がっていた可能性がある。北陸系甕については鹿乗川流域遺跡群に集中するようである。タタキ甕・北陸系甕とも廻間Ⅰ式期中頃～Ⅱ式期にかけて近接した時期に導入されるが、在地の土器組成の中に直接組み入れられることはない。また廻間Ⅱ式期ごろ、口縁部がく字状をなし、円形の体部をもつハケまたはナデ調整された平底甕が出現する。さらに廻間Ⅲ式期中～後半期には布留甕の影響を受けたハケ

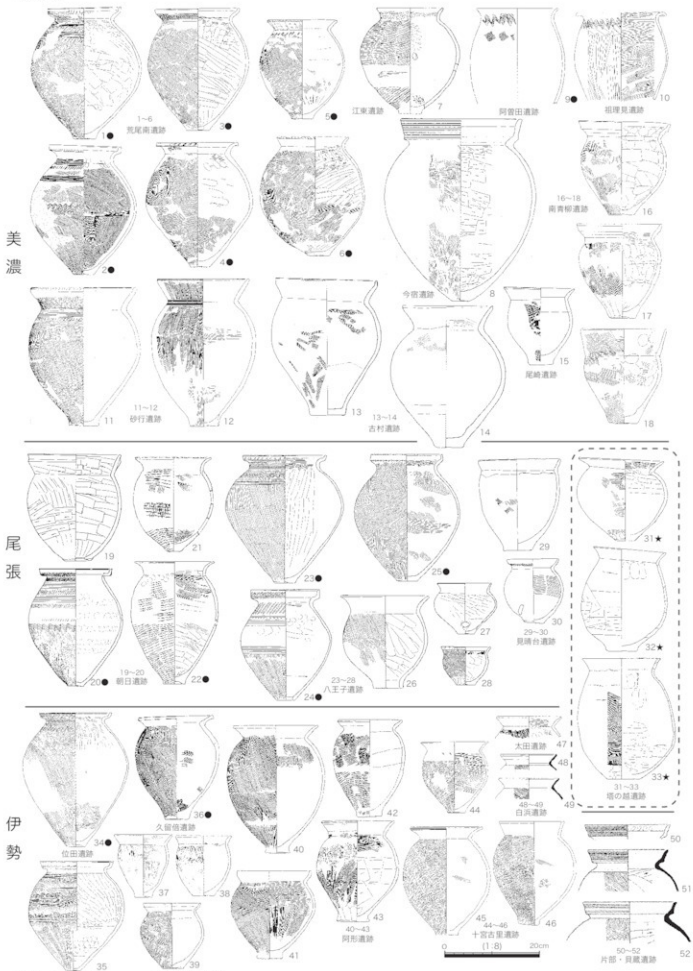


図284　伊勢湾岸域の平底甕（1）

※●は八王子古宮式期～山中式期、★は廻間Ⅲ式期中葉～後葉。その他は廻間Ⅰ式期～廻間Ⅲ式期前葉

53
54
55
56
53~59
本神遺跡
57
58
59
60
61
中狭間遺跡
62
63
釈迦山遺跡 60~63
64
65
66
67
中狭間遺跡 64~67
68
下懸遺跡
69
釈迦山遺跡
70
中狭間遺跡
71
塚下遺跡
72
73
74
75
72~75
恋作遺跡
76
下懸遺跡
77
本神遺跡
鹿乗川流域遺跡群
西三河
82
83
84
85
86
82~86
伊保遺跡
87
神明遺跡
88
上万場遺跡
89
高橋遺跡
78★
79★
80★
78~81
姫下遺跡
81★
90
91
90~96
石座神社遺跡
92
93
94
95
96
97
国分寺北遺跡
98
99
98~100
欠山遺跡
100
101
101~103
南貝津遺跡
102★
103★
0
(1:8)
20cm
東三河

図285　伊勢湾岸域の平底甕（2）

※●は八王子古宮式期～山中式期、★は廻間Ⅲ式期中葉～後葉。その他は廻間Ⅰ式期～廻間Ⅲ式期前葉

またはナデ調整丸底甕が見られるようになる。

2. 伊勢湾岸域の様相　次に西三河地域をとりまく伊勢湾岸域の様相を取り上げる。

2-A. 東三河　畿内Ⅴ様式系タタキ甕が新城市石座神社遺跡（90 ～ 91）や豊川市欠山遺跡（98）・篠東遺跡などで出土しているが、その中で石座神社遺跡から出土した廻間Ⅰ式期の平行タタキをもつもの（90）や、廻間Ⅱ～Ⅲ式に比定される左上がりのタタキをもつ甕（91）が特筆される。特に全形がわかる後者は、体部がやや肩が張る円形を呈し外面下半 1/3 程に右上がり、上半部に左上がりのタタキ、内面はイタナデがあり、底部わずかに環状底となる。

ハケ・ナデ平底甕では、小型の甕もみられるが、石座神社遺跡（92 ～ 93）や欠山遺跡（98 ～ 100）・豊橋市高井遺跡出土土器のように鉢状のものが目立つ。また新城市南貝津遺跡では、廻間Ⅲ式期になるが体部が円形をなし、く字状口縁をもつハケ・ナデ平底甕が２点（102・103）出土しており、この型式の平底甕が一定度定着していたと思われる。

2-B. 美濃　山中式期～廻間Ⅰ式期にかけて大垣市荒尾南遺跡（１～３）や今宿遺跡、岐阜市下西郷一本松遺跡など美濃西部で受口状口縁の平底甕が用いられる。これら受口状口縁平底甕は、体部が縦長の楕円形、もしくは肩部か体部中位に最大径がくる楕円形を呈する。これら受口状口縁甕は、在地土器に器形・文様とも取り入れられ、受口状口縁台付甕やく字状口縁甕が作られる。

また美濃東部において、口縁部が長く延び、体部が縦長の楕円形もしくは肩部か体部中位に最大径がくる楕円形を呈する平底甕が作られる。口縁部はわずかに受口状を呈するものもあり、体部には横直線文や列点文が施され、ハケ・ナデ調整の他に細い条痕調整が施されることもある。山中式期～廻間Ⅰ式期にかけて美濃市古村遺跡（13 ～ 14）や関市南青柳遺跡・砂行遺跡(11～12)、美濃加茂市野笹遺跡などで出土している。

北陸系甕は、西部・東部とも出土するが、東部域の南青柳遺跡では 30 点の北陸系甕が出土しており（16 ～ 17）、在地土器の中に北陸系土器の影響がみられるものもあり、特筆できる。

タタキ甕は岐阜市江東遺跡（７）より、体部が円く、平行かやや右上がりのタタキが施されたものや荒尾南遺跡などでわずか出土している程度で、少量である。

中津川市や恵那市が所在する東濃では、量は多くないが、長野県伊那地域の加飾平底甕が出土している(9・10)。

2-C. 尾張　平底甕が見られるようになるのは弥生時代後期の八王子古宮式期～山中式期前半で、受口状口縁の平底甕が清須市朝日遺跡（19）や一宮市八王子遺跡（23 ～ 25）で一定量出土している。この受口状口縁平底甕は、後期以降も受口状の口縁や一部の文様が続いていくが、平底甕としては定着しない。

タタキ甕は、朝日遺跡より縦に長い体部で、右上がりのタタキを有する山中式期前半の畿内Ⅴ様式系のタタキ平底甕が出土している（22）。また同じ朝日遺跡より廻間Ⅰ式期の平行タタキが施された、楕円形の体部を有する平底タタキ甕が出土している（21）。ただ破片資料も含めタタキ甕やタタキ技法については尾張地域では極めて稀であるといえる。

北陸系甕は一宮市西上免遺跡や朝日遺跡、名古屋市西区月縄手遺跡などでわずかに出土しているのみである。

ハケ・ナデ平底甕は、小型のもの、鉢状を呈するものがわずかに見られるのみである。平底甕が定着するのは廻間Ⅲ式期後半で、稲沢市塔の越遺跡 SX ０１出土資料があげられる（31 ～ 33）。平底甕は円形の体部をもつものもあるが、縦長な楕円形呈するものの２種がある。

2-D. 伊勢　山中式期～廻間式期にかけて台付甕とともにく字状口縁の平底甕が用いられている（36 ～ 38・42・43）。この平底甕は体部が縦長の楕円形もしくは肩部か体部中位に最大径がくる楕円形を呈しており、ハケまたはナデ調整されて、ケズリは見られない。また受口状口縁をもつ平底甕も一定量あり（34 ～ 35・39･41）、脚台が付くなど在地土器に影響を与えている。両者とも、山中式期に比べ廻間式期には数が減る傾向にある。

畿内Ⅴ様式系タタキ甕は伊勢全域で出土するが、土器の組成に組み入れられる程の一般性はなく、まとまって出土する例は鈴鹿市の十宮古里遺跡（44 ～ 46）のように、特異な事例となる。この十宮古里遺跡の平底のタタキ甕は、体部は縦長の楕円形を呈し、右上がりのタタキがなされている。またタタキのある台付甕も出土しており、時期は廻間Ⅰ式期の前半に比定される。さらに津市相川西方遺跡や松阪市村阿形遺跡（42）・竹コノ遺跡でも同様のタタキ平底甕が出土する。また庄

内甕系のタタキ甕が津市太田遺跡（47）や鳥羽市白浜遺跡（48～49）で出土している。

北陸系甕は松阪市の片部・貝蔵遺跡（50～52）でまとまって出土するが、それ以外は松阪市村竹コノ遺跡や鳥羽市白浜遺跡などでわずかに見られるのみで、片部・貝蔵遺跡が際立っている。

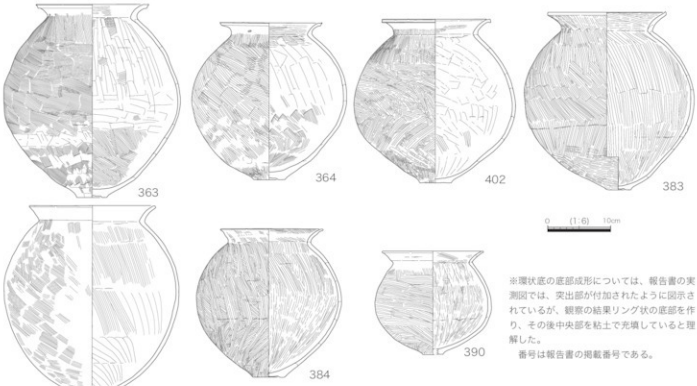
(3) まとめ

これまで、鹿乗川流域遺跡群のある西三河地域を中心に伊勢湾岸地域の平底甕の様相についてみてきた。平底甕の場合、小型品に多いが鉢との区別ができないものがある。また主に廻間Ⅲ式期前後に生ずる問題であるが、単純口縁壺との区別が難しく、それは器形だけではなく使用方法の問題も含まれている。今回は廻間Ⅱ式までを対象としたが、Ⅲ式期の布留式土器の影響を受けた可能性のあるものについても、必要に応じて取り上げている。

近江を故地とする受口状口縁甕は弥生時代中期以降、廻間Ⅰ式期まで伊勢湾岸域に搬入され影響を与えてきた。特に地形的な要因もあるが尾張北部・美濃西部から伊勢北部地域では後期を中心に搬入例が多く、受口状をした口縁は土器組成の中に組み込まれ、伊勢湾岸域全域に広まっていく。ただ文様様式や平底といった要素は取りこまれることはない。

畿内を故地とするタタキ甕や北陸系甕も平底となる甕である。タタキ甕は比較的広い範囲に分布しているが、ひとつの遺跡にはわずかしか出土せず、まとまって出土する本神遺跡や伊保遺跡・十宮古里遺跡のような例は特異な事例となる。またタタキ技法は台付甕や鉢などに用いられ、一定度定着するが土器組成に組み込まれるまでには至らない。ただこのような搬入模倣品といったものが周辺の遺跡に持ち込まれ、広い分布範囲をもつ要因のひとつになったと考えられる。北陸系甕は出土する遺跡や分布範囲がさらに限られており、模倣品の量も少ない。ただタタキ甕も北陸系甕も特定の遺跡にまとまって搬入され、そこから二次製作品を含め周囲に広がっていったと想定されることや、在地土器への影響が限定的であるという共通点がある。

ハケ・ナデ調整の平底甕では惣作遺跡出土のものが特徴的である。これはくの字状の口縁部と、円い体部、体部外面に左および上方向のハケ調整がなされるといった共通点をもち、いくつかの口縁端部には強いヨコナデによる面が作られている。本文では便宜的に「惣作型甕」【図286】と呼んでおくが、このタイプの甕はほぼ同時期の下懸遺跡や本神遺跡でも出土しており、鹿乗川流域遺跡群の中では一定度の広がりをもつ可能



※環状底の底部成形については、報告書の実測図では、突出部が付加されたように図示されているが、観察の結果リング状の底部を作り、その後中央部を粘土で充填していると理解した。
番号は報告書の掲載番号である。

図286　惣作型甕（愛知県埋蔵文化財センター2012bを改変）

性は考えられる。また土器の成立については、台付甕圏である西三河で自発的に成立したとは考えにくく、されど「惣作型甕」そのままのものを他の地域にもとめることは現状では難しい。そうすると搬入土器を変化させて西三河で成立したと見るのがもっとも考えやすい。「惣作型甕」の元となった搬入土器については、まずハケ・ナデ調整の平底甕をもつ伊勢があげられるが、伊勢では体部は縦長の楕円形を呈するものが多く、小型甕は伊勢湾東岸域に影響を与えた可能性はあるが、中・大型甕に関しては直接的な関連は求めにくい。北陸系甕については、特に「能登型」甕と呼称される一群の土器が、口縁部が外彎し端面が面をなす、球形の体部をもつということで類似しているが、底部が明瞭な平底にならないといった違いがある。受口状口縁甕も体部や底部の違いということで直接的な関連は窺えない。器形だけみるとタタキ甕が大いに影響していると考えたいところであるが、体部外面がハケ調整であることと口縁端面が明瞭な面をなすという相違点がある。成形・調整がタタキからハケに変化したと仮定すると、単純にタタキ工具からハケ工具に持ち替えただけでは、搬入された畿内Ⅴ様式系のタタキ方向とは合わず、出土していないが左上がりのタタキをもつ庄内系甕と考えても、内面ケズリの問題も残る。ただ中狭間遺跡の細いタタキをもつ61からハケ調整への変化は考えられるかもしれない。また畿内でもみられるように 1. タタキ　2. タタキ後下半部ハケ　3. ハケ　といった変化をたどることも想定できる。ただ2の段階にあたるものが58・62ぐらいしかなく、当地でタタキからハケへ変化したとは積極的に言うことはできない。畿内Ⅴ様式系タタキ甕も庄内式後半になると、下半部のハケ部分が上位にまで及ぶようになる。このような土器が、タタキ甕がまとまって出土した本神遺跡や伊保遺跡のように、一定量量鹿乗川流域遺跡群に持ち込まれ、その後在地土器の要素または受口状口縁甕・北陸系甕、さらに伊勢のハケ・ナデ平底甕などの要素が加わって「惣作型甕」が成立したと考えるのがもっとも妥当であると思われる。つまり姫下遺跡に布留系甕が搬入され、忠実な模倣品、やや崩れた模倣品などが作られたように【図 287】、廻間Ⅱ式期のどこかで惣作遺跡周辺に多くの土器が持ち込まれたことがあっ

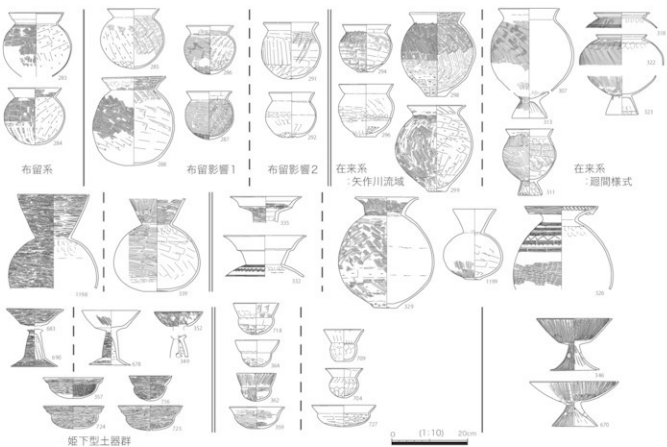


図 287　姫下遺跡における姫下型土器群と在来系土器群（愛知県埋蔵文化財センター 2012a を改変）

たと想定したい。そして「惣作型甕」もＳ字状口縁甕や柳ケ坪型土器のように、古墳時代初頭～前期に、各地の要素が複合されて生み出される土器のひとつであると考えられる。また最初にも述べたが、この形態の平底甕が古墳時代中期にいたるまでこの地域の土器組成のひとつの柱として続いていくことも重要な点としてあげておきたい。

今回平底甕というひとつの要素のみを取り上げたが、台付甕との関連も考えておくべきであろうし、今後壺・高坏など器種をこえた文様・技術の移動など、総合的にみていくことが必要となる。

（宮腰健司）

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 2012a『姫下遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集
愛知県埋蔵文化財センター 2012b『惣作遺跡 II』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 172 集
大手前大学史学研究所 2007『弥生土器集成と編年 - 播磨編 -』
大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター
研究報告第５号
石井智大 2014「伊勢湾岸地域の社会と地域間交流の様相」
『特別展 大交流時代―鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流』安城市歴史博物館
神谷真佐子 2015「第 VIII 章　第１節高橋遺跡出土の特徴的な土器について」『高橋遺跡中央区・南西区』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 66 集
川﨑みどり 1998「第５章考察　1. 出土土器の編年と特徴」
『本神遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第４集
川﨑みどり 1999「第５章考察　2. 中狭間遺跡出土土師器の位置付け」『中狭間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第６集
川﨑みどり 2013「鹿乗川流域遺跡群における外来系土器」
『変貌する弥生社会―安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム
北島大輔 1999「第５章考察　3. 中狭間遺跡出土の北陸系土器をめぐる諸問題」『中狭間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第６集
(財) 大阪府文化財センター 2006『古式土師器の年代学』
原田幹 1998「東海出土の北陸系土器―古墳時代初頭前後における広域土器交流の一様相―」『考古学フォーラム 10』
安英樹 2003「能登甕と千種甕」『庄内式土器研究 XXVII』

第２節　総括

(1) 寄島遺跡の規模

遺跡の開始　発掘調査の結果、寄島遺跡は沖積低地にある南北約 400m、最大幅約 100m の微高地上に立地する集落遺跡であることが明らかとなった。この微高地は、弥生時代中期までは水流のあった鹿乗川の旧河道によって形成されたもので、出土遺物の中で遺構に伴う最古のものは 12A 区 258SU などの中期の土器である。しかしこれらは土器棺あるいはそれが片付けられた状態のものと考えられることから、当該期の集落の存在は未確定である。その後、八王子古宮式～山中式期の土器も散見されるが、竪穴建物跡などの遺構が検出されるのは廻間Ⅱ式の終わり頃からで、この開始は北隣に位置する姫下遺跡と同じ頃である。この時期のまとまった土器は、実質的な姫下遺跡との境界に相当すると思われる、13B 区旧河道における土器群（東壁 25・29 層を中心とする）にみることができる。当該調査区における旧河道の左岸は姫下遺跡の集落域に位置づけるのが自然な見方で、したがってくり抜き井戸（13B 区 048SE）は姫下遺跡の集落で設置されたものと考えておくべきである。旧河道左岸の微高地は寄島遺跡より削平が進んでおり、建物遺構については若干の竪穴建物跡が検出されているのみで（寄島遺跡 14E 区）、不明な点が多い。また同右岸の遺構は、中世の溝や洪水による撹乱（13A 区）によってこれも不明である。したがって 13B 区旧河道出土土器がどちら側の集落に由来するものなのかは、現状では決しがたいが、この点は寄島遺跡における集落変遷を検討する中で徐々に位置付けを明確にしていくことができると考えられる。

下懸遺跡との関係　一方、今回の寄島遺跡南端の調査区 11B・C 区では 13 B 区から南東方向へ流下した旧河道が再び段丘崖に接近する状況が確認されている。埋没過程にある旧河道からは、欠山式の半ばあるいは廻間Ⅰ式期後半段階の土器が多量に出土し、それが旧河道左岸すなわち南側の微高地からの廃棄であることが明らかになった。その南側微高地に相当するのが 11C 区で、竪穴建物跡 127SI などからは同時期の土器が出土している。また、さらに南側の調査地点（下懸遺跡 00E 区など）もほぼ同じ状況が報告されている〔愛知県埋蔵文化財センター 2006『下懸遺跡』〕。したがって、11B 区の旧河道から南側は、実質的に下懸遺跡の集落域に相当すると考えられる。当該集落の形成は姫下遺跡や寄島遺跡よりさらに古く、上述の古墳時代初頭を中心とする時期と評価され、集落の終末に至るまでほとんど重なる時期が存在しない。したがってここは明確に分けられるといってよい。

古代・中世の寄島遺跡　以上のように土器の時期によって、古墳時代初頭の終わり～前期という姫下遺跡・寄島遺跡に対して、古墳時代初頭に限定的となる下懸遺跡という集落消長の時期差をみることができる。それでは姫下遺跡と寄島遺跡はその後も似た変遷をたどっていたのであろうか。古墳時代前期の集落に言及する前に、寄島遺跡の大まかな変遷を整理しておきたい。

古墳時代前期末、松河戸Ⅱ式併行期にほぼ集落が廃絶した後、次は７世紀後半の須恵器がわずかに出土するまで空白期間となる。その後８世紀代の須恵器杯が出土しているが、明確な遺構は不明である。なお 11C 区では７世紀後半～８世紀前半の瓦が散布しているので、須恵器などはないことも合わせると、特殊な施設を想定しておくべきだろう。そして、明らかに遺物量が増加するのは９世紀後半の灰釉陶器で、瓶類や土師器甕・鍋も伴っている。ただし当該期においても、建物遺構で確実視されるものはなく、下懸遺跡の集落に位置付けられる 11C 区で竪穴状遺構が検出されている程度である。その他には方墳の周溝上層（07C 区 3001SD）があり、ここは埋没しきれずに窪地となっていたものと思われる。したがって近辺に小規模な集落が散在し、まとまった土器群は形成されなかったとみられる。また灰釉陶器の時期もせいぜい折戸 53 号窯式期までであり、その居住も一時的なものであったと考えられる。

12 世紀代の山茶碗が出土しているのは 13B 区である。埋没した旧河道の堆積を横切るようにして掘られた 001SD では遺物が中世段階までにとどまるため、さほど時期が下るとは考えにくい。また当該遺構は南北に近い方位となっており、これと類似する方位の溝は 12A 区 001SD・022SD である【図 288】。ともに灰釉陶器以降までとしか時期が特定できないが、現在の鹿乗川河道とほぼ平行になるこれらの溝の時期は、鹿乗川現河道が形成される時期を推測する上で重要な位置付けになる

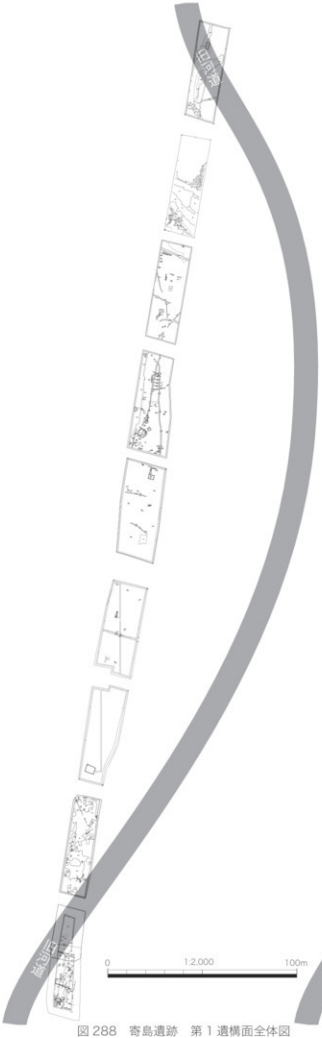


図288　寄島遺跡　第1遺構面全体図

図289　寄島遺跡　第2・3遺構面全体図

ものと思われる。そして古瀬戸以降の陶磁器も 11C 区で若干見られる程度である。おそらく当該地点が沖積低地内の微高地の中で安定的であったことを示している。ただしそれも近世以降は大半が耕作地となったらしく、わずかな陶磁器の出土となる。

(2)　古墳時代前期の集落

姫下遺跡 1 期　竪穴建物跡や掘立柱建物跡、その変遷過程に挟み込まれる区画溝 12B 区 033SD の時期は、12B 区～ 07A 区では姫下遺跡 1a 期の後半を若干含みつつも 1b 期を中心としている。これに対して 07B 区の竪穴建物跡（2214・2215SB など）からは 1a 期を若干遡るものがあり、寄島遺跡における古墳前期の集落は 07B 区やその東側の未調査区域あたりから始まったものと推測される。この地点は標高 7.0m 前後と 12A・B 区より 0.2 ～ 0.3m 低く、より水辺に近い位置が初期の集落立地だったのであろう。すると先に示した、13B 区旧河道出土土器群が古いという点にも通じると考えられる。

姫下遺跡 2 期　寄島遺跡では、姫下遺跡 2 期すなわち松河戸 I 式になると土器の量は減少する。07A 区 1056SB などが代表的な竪穴建物跡である。この時期の竪穴建物跡で注目されるのは壁溝が明瞭なことである。上述の姫下遺跡 1 期の竪穴建物跡は、幅 0.6 ～ 1.0m の幅広な周溝状床下施設が床面で検出されることが多い。もちろんそればかりではないのだが、寄島遺跡の当該期における竪穴建物構築の基本的な工法であった可能性が高い。それは沖積低地に居住する場合に必要な適応策だったのかもしれない。この点については類例を検討していく必要がある。

墓域　07C 区～ 11A 区はさらに低地となっているが、ここでは一辺約 20m の方墳の周溝 3001SD や方形周溝墓 3003SD・3004SD が確認されている。方墳は周溝掘削土のみでは高さ 1.7m ほどの低墳丘墓だったと推測される。3003SD からは副葬品の管玉が出土しているので比較的早くから削平を受けていたとみられるが、3001SD は墳丘盛土の流出も少なく、長らく周溝が残存する景観であったことは、灰釉陶器の出土などが物語っている。集落の変遷や墓域との関係については、あらためて論及する機会が必要であろう。

（永井邦仁）

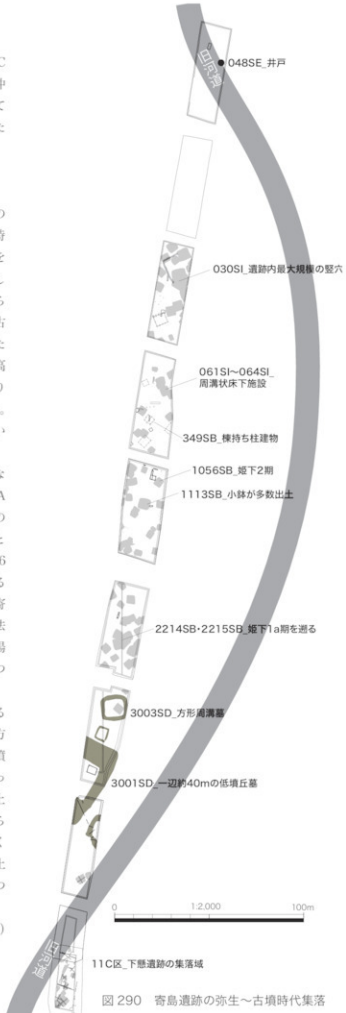


図 290　寄島遺跡の弥生～古墳時代集落